

コロニア文学・第九号

コロニア文学会

一九六九年七月



◆表紙

安芸正人

◆目次カット

高橋吉左エ門

◆扉

金子謙一

創作

土曜日のリカ (46枚)

醍醐麻沙夫 (6)

孤影 (こえい) (42枚)

星野良江 (34)

野たれ死 (58枚)

三瀬喜代志 (125)

コロニア・新刊・文芸誌・行事紹介

60

◆合同句集「旅人木」

60

◆ブラジル川柳特集号

61

◆火焰樹大会

116

◆月刊俳誌「新泉」

116

詩

63

旅 可児 三平

63

地 球 矢島 健介

か に 小野 政子

何を見つめて 真木 衿子

古 代 紫 佐藤 博三

か げ ろ う 鹿毛 至

影 辻尻 潤

胎 胚 藤田 勇

イタペテ村 横田 恭平

商法について 岡崎清一郎

作品批評

「ドン・ペドロ・二世ホテル」に就いて 薮崎正寿 (269)

北米の文芸誌・紹介と批評 (277)

「南加文芸」を読む 武本由来

「N・Y文芸」 作品を見る 薮崎正寿

随筆 ニューオリンズの朝 前山隆 86

第九号掲載作品選考経過 編集部 (281)

選考委員・鈴木悌一・薮崎正寿・妹尾三郎

特集

終戦の前後（私の終戦） 藤 源泉 (170)

戦時 回顧（私の終戦） まや・あきら (189)

〈わが住むまち・風物断章〉 ロンドリーナ市

・猿よ・アララよ・猪よ 風 早 南瓜 (249)

〈この人を忘れないください〉 薄幸の歌人

・高原に散った「中田武男君」 細 川 末 男 (260)

短歌・161 俳句・228 川柳・239

夜の渚 (30首) 陣内しのぶ

漂泊記 (30首) 川原比露思

バナナづくりの歌 (50句) 間島稻花水

毛糸編む (50句) 浦畑艶子

四十五年の春 (50句) 黒田不知火

郷愁の壺 (36句) 会田北海坊

歳月ありき 森山 三山

恙なき日 南条由喜夫

アサイ・少年少女作品

石に顕す 小野 浪人

「火焰樹」抄 殿岡 萩花

世間態 坪井柳念坊

行く雲と 水中 口十

小鳥の譜 水野 浩史

創作

哀れな自由主義者たち (作) アルトゥール・アゼベド (291)

(訳) 富山 南北

街路 (少品二篇) 伊那宏 (297)

辺境の漁人 (53枚) 務台一郎 (195)

果（かじつ）実（65枚）

福村 琳（304）

◆ 第五回・火焰樹賞発表

257

◆ 第八号の詩 スザノ詩話会

◆ 田宮虎彦氏を囲んで

342

◆ コロニア作品募集

349

◆ 雑記

◆ お知らせ

◆ 新入会員名簿

◆ 編集後記

武本生

351

コロニア文学

第 9 号

1969年・7月

Grêmio Literário “Colônia” São Paulo

コロニア文学

第 9 号

1969年・7月



Grêmio Literário “Colônia”

SÃO PAULO

〈創作〉

土曜日のリカ

(46枚)

醍醐麻沙夫



その日、男は早目に仕事から帰った。家のドアの内側には短かい廊下がある。廊下の右手は客間で、左側に階段があり、つきあたりは台所である。台所の扉が開いている。入口に立った人は台所の奥の奥光を正面に見る。向う側まで見送られてしまった家は、奥行きをなくして、横物をさかだしたように白々しい。台所の扉が開いていると、外光に照れた目に家の中奥奥にうす暗く、階段の踊り手間や廊下のワックスに光りがぶく反跳して、ドアに立った人の動作につれてちらちらと動くのである。その日は、台所の扉が開いていた。男はまっすぐに台所へ行った。

三枚の黒い実が混っている。皿に顔を寄せてその粒をはき出す。二切れ目を食べながら、彼は皿に落ちていた木の実の中に蠅の死骸が混っているのに気付いた。十粒ほどの実の一つが死んだ蠅なのである。色も大きさもよく見分けがつかないほど似ていた。蠅の死骸に顔をよせて実をはきだしていた。彼はいやな顔をして食欲をなくした。先刻、ケーキを食べたらしいリカは気付かなかった。それとも後で蠅がかつてに死んだのか。しかし、気付いたとしても片付ける女ではないことを彼は知っていた。

- 2 -

〈創作〉

土曜日のリカ (46枚)

醍醐麻沙夫

(1)

その日、男は早目に仕事から帰った。家のドアの内側には短かい廊下がある。廊下の右手は客間で、左側に階段があり、つきあたりは台所である。台所の扉が開いていると、入口に立った人は台所の奥の奥光を正面に見る。向う側まで見透かされてしまった家は、奥行きをな

くして、臍物をさらけだしたように白々しい。台所の扉が閉っていると、外光に馴れた日に家の中は適度にうす暗く、階段の飾り手摺りや廊下のワックスに光りかによく反映して、ドアに立った人の動作につれてちらちらと動くのである。

その日は、台所の戸が開いていた。男はまっすぐに台所へ行った。テーブルの上に切りかけのパウンド・ケーキがある。その横の皿には、ケーキに混ぜた香料の木の実がはきだされたままになっている。

彼はコーヒーをいれるつもりでポットをガスにかけてから、坐つて、ケーキを一切れ食べた。持った手がべたつくほどバターが使つてある。一切れに二、三粒の黒い実が混っている。皿に顔を寄せてその粒をはき出す。二切れ目を食べながら、彼は皿にころがつている木の实の中に蠅の死骸が混っているのに気付いた。十粒ほどの実の一つが死んだ蠅なのである。色も大きさもちよつと見分けがつかないほど似ていた。蠅の死骸に顔をよせて実をはきだしていたと思うと、彼はいやな気がして食欲をなくした。先刻、ケーキを食べたらしいリカは気付かなかったか、それとも後で蠅がかってに死んだのか。しかし、気付いたとしても片付ける女ではないことを彼は知っていた。

彼はケーキを二切れでよして、皿を片付けた。コーヒーをいれて、パンを切る。冷蔵庫をあけて、ガラスのバター入れを出す。中は空っぽである。彼は冷蔵庫や食器棚の中を探した。彼が昨夜買って帰ったバターの包みはどこにもない。ハナ紙とか歯磨きなどの細かい買物は、ほとんど彼がする。リカは目についた買物しかできない。彼が買わないと、一週間も石鹼がないことさえある。

「リカ！ リカ！」

彼は裏にいるらしいリカを呼んで大声をだした。

「バターをどこへ置いたんだ」

「知らないわ」

リカは不利なことや面倒なことらしいと、最初、知らないと言う。それが、反って彼をいらいらさせる。彼の不機嫌はリカにも伝わって、リカも意地をはる。彼は理詰めでリカの白ばつくれをあばこうとする。リカはますます意地になる。

「知らないことはないだろう、昨夜買って来たばかりだ」

「知らない」

「この家には他に誰もいないじゃないか。たしかに買って来た」

「使ったわ」

「使った？ 使ったって？ 何に使ったんだ」

「ケーキを作ったじゃないの」

「こんなに小さなケーキに全部入れる訳はないだろう。残りはどこにおいたんだ」

「残ってなんかいない」

「残ってないって？ そんなはずはない」

「残りなんかいないわよ。うるさい人ね」

「冗談じゃない。毎日バターを買わなければならないなんて。少しは経済のことも考えろ」

二世のリカは日本語を話せない。彼らはポルトガル語で話す。Economizarを彼は儉約という窮屈な意味で言ったのではないが、リカ

は“切りつめろ”という命令にとった。彼女は怒りだす。ケーキは彼を喜ばせようとして作ったのだ。しかし、そんな甘ったるい泣きごとを言うのは嫌いな性質だった。

「儉約しろ、儉約しろって言うけどね。あんたは。今まで私に何をしてくれたのよ。何にも買ってくれたことないわ！　その上、儉約しろ！　儉約だって？　命令しないでよ。私は女中じゃないのよ」

「女中のほうがもっとましだ。女中だったら、あれを買えとかこれが欲しいなんてうるさいこと言わないだろう。第一そんな事は関係ないじゃないか。俺はバターのことを言ってるんだ」

「関係あるわ。あんたはいつも言うだけよ。命令するだけよ。物識りそうな、えらそうな顔をして言うだけよ。何も為ないし何も出来ないのよ。オカマみたいだわ」

「何がオカマだ」

「そうよ。外の壁に石灰をぬったのは誰よ。私よ。だけどあれは男の仕事よ。あんたが為なくちゃいけない仕事だわ。」

「俺の知らない間に自分で勝手にやったんじゃないか」

「となりのジョゼだって、誰だって、みんな家の仕事を手伝うわ。その上、日曜には連れだって外出するじゃない」

「あいつらは動物園へ行くんだ」

「そうよ。その通りよ。動物園だって良いわ。あんたは何よ。今度、今度って、どこへも行かないじゃない。くだらない本を読んでるか居眠りしてる」

「読みたい本があるから、読むんだ」

「それが私にどう必要なの。一文の得にもならない。怠け者の口実よ。ああ！ 悲惨だわ。みじめだ！ こんな生活なんか望んでない。オカマ野郎なんかと住みたくないわ」

彼はブラジル人の男達のように女の相手になって論争したり、根氣よくなだめたりはとても出来ない。

機関銃のようなリカの悪口に、頭の芯がギリギリする怒りに駆られて、手許のバターケースを床に投げつけた。厚いガラスは快よいほどの音を立ててキラキラと光りながら床の上にくだけた。

「おまえこそ女郎だ！」

台所を乱暴されたリカは、客間に飾ってある彼の粘土細工を床に投げた。それを作ったときの粘土との親密感を思い出して、彼はカツとしてリカをつきたおす。リカは髪を乱して椅子を投げた。

「オカマ！ シリの穴！ 卑怯もの！」

「うるさい。うるさい。うるさい！」

彼は花瓶を掴んで、リカに向ってつき出す。花と水が飛び出して、リカめ顔をめちやくちやにする。

彼女は二階に駆け上った。そこからひどい音が聞こえる。彼がいちばんいやがること、本や机の引出しを部屋中に投げ出している。それを見た彼はリカを平手打ちにする。向って来たリカをもう一度打つ。彼の手をよけながら「マ・イ！」と呼ぶ。彼に押されてリカは尻もちをつく。開いた両足とパンティを彼は見る。

たった今でもその体を愛したい、と不意に、感傷的なまでに、彼は思う。

リカの手に、引出しからとったピストルがにぎられている。顔が涙と水で光っている。大きな目のまわりにアイラインがくずれている。

「弾は入っていない！」

と彼は言う。口惜しそうにリカはピストルを投げつける。それをよけて彼は部屋を飛びだす。ピストルは壁に当って床に落ちる。リカは引出しをタンスにぶつけた。姿見がひどい音をたてゝくだける。

「出て行け！」

「出て行くわよ。おまえなんか地獄へ行け！　だれがこんな処にいるもんか。出て行くわよ。女郎の子！　卑怯者！」

……男が再び家に帰ってきたのは、夜である。街路樹のかげに、窓は暗く静まっていた。ドアを開けて手さぐりでスイッチをひねる。客間の床に散乱している花や粘土細工を彼は見た。黄色い真鍮の花瓶が倒れている。水は床板に浸みて、生乾きの周囲にうすぐろい隅をえがいている。台所の扉は半開きで、ガラスの破片は廊下にまで飛びだしている。彼は二階へ登った。リカの部屋は乱れていない。箆笥を開けると、外出着は一着も掛っていなかった。肌着、靴、化粧用具もない。隅のカーテンをひらいて、男は彼の緑色のトランクとリカの赤いトランクがないのを確かめた。リカは緑と赤のトランクを両手にさげて出ていったのだ。目ばしいものは何も残っていなかった。

彼の部屋は、ほとんど足の踏み場がない。ベットのの上に散らかっているものを上布ごと丸めて床におくと、彼はベットにころがった。家の中にシンとした静かさが漂っていた。リカの去ったあとにその静か

さがおし込んで来たように、彼のまわりは荒れはて、いながらも重みのある静寂に満ちていた。（一人になった）と彼は痛切に感じた。安らぎと淋しさの混った気持だった。急に疲れがおしよせて、目をつぶる。しばらくそうしていた彼は、誰かに見詰められている気配に訝しんで、目をひらいた。……誰もない。じっと耳をすます……。家の中は完全に彼一人だった。彼は首をもたげて部屋を見廻し、机の上におかれたピストルに気付いた。リカがそこに投げだしていったにちがいない。銃口が真正面に彼を向いている。（弾は入っていないはずだ）と彼は思つて、そのまゝ目をつぶる。だが、どうしても寝つかれない。薄日をあけてピストルを見る。惑い銃口がぼんやりした視界に浮んでいる。彼は目を開いて、ピストルを見詰めた。

（あれだけを片付ける訳にはいかない）と思う。

へ今夜はこのまゝにしておこう。そのうち気にならなくなるゝだが彼は銃口を見詰める行為を中断することができない。そこに生きた蛇が動かずにいるように、彼はピストルをにらんでいた。そんな状態に長くは堪えられなかった。汗ばむようだった。疲れているからだ、と彼は思いながら、手をのばして床に転がつている雑誌を攫んだ。それをピストルに向つて抛つた時、彼は耳の奥でリカの笑い声をきいた。

スイッチをおすと、彼はまもなく眠りに引きずり込まれた。道を急ぐ旅人のように眠りのなかに進んで行く自分を感じながら、リカの笑い声が彼とちがう道を遠ざかつていくのを、幻聴のようにきいていた……。

墓地の門を入ると、今までずっと薄日とだったのに陽が陰って、霧雨のまじった冷たい雨風が吹きつけてきた。風に追いあげられるように、私たちは絲杉の並木道を登った。丘の頂上には告別室が建っている。強い風が渡る。私の薄いズボンがふくらむ。前をゆく遺族たちの黒いベールを風が吹きぬけると、黒い塊はよじれて、若い女や年老いた女の横顔が露わになった。含羞に包まれた乳房のように悲哀に包まれているべき顔を、私は剥きだしに見てしまう。ベールは黒い炎になって、風に吹かれて燃えさかった。

布地が風に吹き曝らされる風景は、私の裡のどこかで荒涼たる記憶につながっていた。人影もない荒蕪とした場所に、いつも一枚の布がはたはたと風になびいている。私の肉体はそこにいないのに、私はたえまなくその風景を凝視している自分を感じている。

その自分とは、現在の私・江藤信治ではない自分、例えば前世に生きていた自分とか、濃い夢の中をさまよっている自分とかいった存在であるらしかった。そして、その自分でない己れの存在の記憶が私を囚えるときは、常におそれに近いものの悲しさの感情を伴っていた。

私は風に押えつけられた喪服の小群を見つめながら歩いた。私はあのものの悲しさを感じていた。

寒さと布の記憶の象徴のように、告別室は空に浮んでいる。私がそれに向って進んでいるので、それにもかゝわらず少しも近付かないので、告別室は本当に象徴のように見える。影のない灰色の霧雨の中に続く坂道と告別室は、すっかり遠近を失って、正確な距離を目測しが

たい。私たちの小さな行列は、こゝでは全裸であることが望ましかった。前をゆく娘の白い体と黄色い毛髪と陰毛は、重く光る霧の微粒子を曇り硝子のようにまといつけて、黒い絲杉や灰色の空を背景に、どんなに寒そうに美しく見えることだろう。寒さに襲われた男たちは手足を硬ばらせ、そのセクスは悲しく哀れに萎縮しているに違いない。

―そんな行列こそが、この場にふさわしい光景だった。

空に浮ぶ告別室には、昨日息絶えた老人の屍体が私たちを待っている。私たち、と言ったが、私はその老人を生きているときに見た。記憶はない。はじめてその老人と（仰々しく）対面することに、私は一種の羞恥を感じていた。私も老人も晴れがましく礼装をして、私だけが特権的に相手を見るのだが、その特権は見るということのほかには何も伴わない。羞恥心から逃れるように、私は、この行列は全裸であることが望ましいと考えつつけながら歩いた。

坂の途中で私は振りむいた。なだらかに起伏したサンパウロの市街が、氷の息を吹きかけられたように、白くかすみながら揺れていた。遠い一個処にまだ薄日の名残りが落ちていて、そこだけが波に磨かれた骨片のように冷たく滑らかに光っていた。「寒い」と私は呟いた。風の当らない告別室にはやく入りたかった。私が歩調を速めると、先を行く人々も急ぎ足になっていた。

乾いたコンクリートの部屋に入って、私はほっと一息ついた。私の服はすこし湿っている。此处は暗い。中央に棺が安置してある。老人は棺の中で、グラジオラスの花に埋っている。人々は棺をかこんでいる。行列よりも人数が多くなっていた。私たちよりも先に待っていた

人がいたのだ。老人を囲んでいる人々の動きには、行事が始まったばかりの活気がある。それに私も染まって陽気になる。（陽気と呼ぶのは少し変だが）その活気は棺にそって渦巻きながら流れ、老人の頭部のところでせきとめられる。

流れは、そこで一人々々の人間に区切られ、立ちどまって死骸をみつめ別れを告げ、行列から押し出され、隅々へ散って行く。隅々に立ち止った人の態度からはもう活気が失せていて、再び次の出来事を待つ倦怠によりかゝって物憂げに立っているだけだ。それらの人々の表情は、こう言っているようだ。待つという事は何と退屈なことか。待つくらいなら死人を眺めていた方が気がまされるのだが――私は列のうしろについた。冷たい石の床を見ながら、少しづつ前へ進む。小さな貧しい行列は、たちまち私を棺の横へおいた。私は屍体を見下す。老人は新しい靴をはかされている。底革はつやゝかに光って、土踏まずに近い部分にサイズ番号が深く打ってある。鋭利な刃もので裁断された黄褐色の底革は、場違いなほど美しく見えた。他人の新しい靴を目の高さに近く眺めることが、視覚的に新鮮な衝撃力を持っていたのだろうか。厚く反った汚れのない革は、花の中に埋まりながら、死者がもう決して行列をする必要のない存在だということを、みじめたらしい行列を一生つづけている私たちに誇示しているように見える。

私は一歩すゝんだ。靴の表面が見えか。すぐさま私は、すごく安物の靴であることに気付く。繁華街の靴屋では手に入れることさえできない。黒革は厚紙にペンキを塗って日に乾したように硬ばっているのに、すでに無数の細かい亀裂に犯されている。亀裂の底に白っぽい革

の生地さえ走っている。それは底革の上等さに対する酷い裏切りだった。それは靴にはちがいないのだが、耐久性などみじんも感じられず、むしろ靴の模造品のようにさえ見える。模造品特有の雄弁さをそなえて、私に語りかける。じつと見ていると、靴の形をしていながら靴ではなく、まったく違った何かに見える。それを確かめようと凝視すると、それは只の靴になってしまふ。浅い水の表面と底を同時に見つめているような、焦点の定まらぬ不安定な映像の中にそのなにかは泛んでいる。水面に映る雲の影をみつめているような気がした。しかし、靴の表革から私の意識の底に反映して揺れているその影に、実体などあるのだろうか。老人でさえも、人間ではなくなかに見える。それを死と呼ぶのは簡単だが、そう呼んだところで何も説明されない。私は見ているものを見ているだけだ。

私は棺にそって少し動いた。胸の上に固く組み合わされた黄土色の大きな手がある。銀メッキのテルソがおかれている。その十字架は鈍色の重しになって、死者の心臓をおさえている。高く尖った鷲鼻がある。わずかに口をひらき、頬がこけているので、その横顔は鼻を頂点にした急斜面になっている。

やはり、私はこの老人を知らない。老人は死んでいる。その表情は、何も私に語らない。

私は彼を生前に見かけた記憶がないのである。三軒おいた隣りに住んでいるというだけで、その家族とともに挨拶をしあう程度のつき合いだった。墓地まで来たのも、車の数が少なかったので、会葬者を運ぶ手伝いという意味あいの方が多かった。

運転台に座った私のとなりには、十七、八になる少女が乗った。老人には孫にあたるが、長女なので母親と共に一ばん老人の看護をしたのにちがいない。私がいつもガラス玉のようだと思っていた灰色の目が、まっ赤に充血していた。稲妻のように細い血脈が、白眼をおおっている。それをぼかすように、たえまなく涙が滲みでている。普段行き合うと気取った様子を見せるのに、今日はうすく口を開いてぼんやり前を見ながら座っている。そのひどく無防備にみえる少女の横顔に、私はかすかな欲望を感じた。後部座席に黙って座っている三人の黒衣の女たちは、私の欲望の証人のように思える。顔色もさだかでない暗闇の底から、青白い六つの眼が私の行為を見守っている。…。

少女の横顔を見ている私の裡にあるのが、欲望そのものではなくて欲望の記憶のようなものだ、私は気付いた。まっさおに澄んで、それこそガラス玉のような目をした女のことを、私は想い出したのだ。

その女はしばらくの期間、私の女だった。純白のシーツに横たわった女に初めて体を近づけながら、女の髪をてのひらに包んだ時、私のてのひらの間から、二つのまっさおな目が、私に向いていた。女の瞳の底のほうでキラキラと光りが乱反射していて、窓からの午後の光線はそのまっ硬質の青い蛇になって、女の目にさっつた。それは見る機能をそなえたものには思えなかった。ものを映すだけの美しい水溜りのように存在していた。…私の手と女の髪は震えた。その手のふるえは、私の少年の日の心のたかまりと重なっていた。女の目を見ている私の心にギンヤンマを捕えた日の記憶が甦えったのだった。

隣りに座った少女の横顔は、閉じこめられたように無防備だった。

涙のにじんだ青い目のなかに二つに重なった私の記憶がうつつてい
る。

私の育った港町には堀り割があつた。夏の夕方になるとギンヤンマ
がそこに飛んだ。もちぎおがびっしりと並び、トンボが飛び抜ける
と、もちぎおも翻波のようにしなつた。その時刻のギンヤンマは水面
すれすれに飛んだから、長い竿でなければ堀り割の上から届かない。
幼ない私のこなせる竿の長さは、その半分もいかなかった。私より年
上の少年達でさえ速いギンヤンマを捕えるのは稀なことだったから、
私にその青緑色の大きなトンボがつかまるはずはなかった。それでも
私は毎夕、手許が暗くなるまで竿をふっていた。その時刻になると、
もうトンボの姿体を見定めることはできない。夕空の残照を映して、
うちすてられた鏡のように光っている河面をすぎるかすかな閃影と、
白金いろの水面に落ちてゆく波紋に向つて、たゞやみくもに竿を振る
のである。

あるまひるに、私は昼食にも帰らず一人になつてトンボをとつてい
た。虫籠には数匹のシオカラトンボとムギワラトンボが入っていた。
しかし、私はもうそんなトンボには飽きていたのだった。突然、鋭い
影が真昼の動かぬ空間をたちきりながら、私の上を過ぎようとした。
私は驚きのために夢中で竿をふり上げた。その一振りで、私は今迄ど
のトンボにも感じなかった確実な重さをもちぎおが捕えたことを知っ
た。

ギンヤンマだった。

私は鵜からトンボの翅をはずして、指にはさんだ。幼なかつた私は

呆然としていて、手はふるえていた。その掌からはみだす大きなトンボだった。全体に緑色をしていて、腹部はあざやかな青色だった。胸部の肉は広く張って強い翅を支えている。なかでも私を魅了したのは、みどり色のガラス玉のような複眼だった。見詰めていると、海や山や空などの夏のきらめきが映っていた。少年の私の憧れているものゝ一切をもつて、大きなトンボは悠々と空を飛翹していたのだ。

老人の横顔を眺めていると、死ということが身近かなものに見える。しかし、それは花に囲まれた昇天などではない。人間の模造品のようなものになること。土のようなものになること。靴と同じようなものになって存在すること。しかし、存在を意識せずに存在することがあり得るだろうか？ 死者は生きている者にのみ、つまり私にのみ存在するのだ。私は一方的に、老人を眺める……私の眼前にある屍は、私がそれを見ているということによって死者たり得ている。従って、私が楽しいと思つて見ればそれは楽しいし、悲しいと思えばそれは悲しいはずだ。だが、私は楽しいとも悲しいとも思わずに死者を眺めている。私はむさぼるように死人を眺めている。私自身がそう眺めることを自分に許容したのだ。そして、私はふかい羞恥を感じている。

そうやって眺める死人には、女の裸体写真を眺めるような一種の生々しさがあつた。むさぼるように見る行為には、すでに快樂が含まれているのだが、私の感じている生々しさは少しも対象には伝わらず、たゞ私自身の情念のなかに積み重なってゆく。私はその重みに堪えられなくなり、そこを立ち去ろうとした。

棺のはじに遺族が立っている。悔みの言葉を述べなければならぬ。老人の娘にあたる中年婦人と視線があつた。その夫は、いつものようにかすんでいて、何処にいるのか目立たない。私は婦人に向つて、ためらいながらメウス・ペザメスと発音した。それは悔みの言葉でありながら、私はまさしく発音したにすぎなかった。老人が亡くなったことを今朝知った私は、薄い日葡会話の手引きを開いて、悔みの言葉を探した。(この国に来て葬式に出るのは始めてだった) 簡単な手引きパンフレットである。冠婚葬祭は一ページに収められている。parabens (おめでとう) の次にMeus pesamesと書いてある。メウスは一人称の所有格として、ペザメスは何だろう。私は辞書をひらいた。pesame (複数に用うるを例とす) 悔み・弔意・弔詞、するとメウス・ペザメスでは、「御愁傷です」ぐらいになる。私は「この度はどうも御愁傷さまでした」ぐらいの挨拶をしたいのに、メウス・ペザメスだけでは短かすぎて心許ない。ぶっきらぼうすぎるように思える。私はパラベンスーおめでとーという言葉を眺める。その簡潔さは日本語と見合っている。ポルトガル語は、おめでとーと同じ簡明さで弔意を述べるのだ、と私は気付いた。

そう納得したところで、初めて発音する熟語に感情はこもらない。数字のように正確に言うだけである。

私がうしろめたい気持を感じながらメウス・ペザメスと発音すると、婦人は涙をのみ込むようにしてうなづいた。私の名と礼を言つたらしいが、はっきりした言葉にはならなかった。私は自分が何の感情も持てずに発音した言葉が、悲愴な反応を相手におこしたのを見た。

もっと慰めの言葉を求めるように二つの目が私にすがりついている。私はそうした彼女に向いあつて立っている。多少あらたまつて、しかも真情のあふれる慰めの言葉が必要なのだ。気がねのない隣人の優しい思いやりを婦人は求めている。

それなのに、私の頭の中は空っぽだ。メウス・ベザメスを言つてしまったから、残っているのはパラベンス（おめでとう）という言葉だけだ。それらは簡明な対句となつて、今朝、同じ本の同じページに並んでいたのだ。緊張しながら婦人と向い合っている私の頭の中で、不意に、パラベンスという言葉が大きく脹れあがつてぐるぐると廻りだした。片方の翅を失つた昆虫の方向の定まらないあがきのようなその言葉が、私の口にぶつかつてそこから飛び出しそうだった。私は軽い目まいを感じて、婦人が私にさし出した悲嘆をふり切るように目礼をするなり、そこから遠ざかった。

(3)

告別室から出た棺を先頭にして、人々は墓石の間を歩いてゆく。丘のこちら側の斜面は風があたりず、静まっていた。先刻まで薄日に暖められていた墓石の群からは、ほんのりとぬくみが立っていて、小径を行く私は視線のような微かな輻射熱を両頬に感じる。

私は立止つて、墓石の一つに触れてみた。それは冷えた掌よりもずっと暖かい。それはいかにも静謐なあたたかさだった。私はしばらく墓石に手をふれたまゝの姿勢で、離れてゆく行列を目で追つていった。

私の視線は、行列のまどろこしい歩みにたちまち飽きて、丘の斜面を気まゝに進み降りた。斜面が終ったところは赤煉瓦の塀が墓地を囲んでいる。その向う側には住宅が建ち並んでいる。閑静な住宅地の中から車のクラクションの音が二度響いた。塀の内側には火焰樹らしい並木が植っていて、赤い塀はその枝の陰になって湿っているように見える。枝の下に二つの人影がある。着ているものゝ色彩から、男女らしかった。二人は黙ずんだ塀に向ってうづくまっている。よく見ると、塀のその部分の一带は、枅目のように区切られていた。あれは、柵とかロッカーのようになった、簡易な墓なのだ。

歩き始めていた私は、思わず立ち止って、その遠い男女の姿を眺めた。

自分に思い出すことを禁じていた、とも云える男女の姿が、そこにあつた。

男は私自身であり、女はリカである。

男は女と一緒に、あのような墓に参ったことがある。私はリカと一緒に、あのような墓に参ったことがある。リカの母親の墓だった。

塀の枅目の一つの前に私とリカは立った。四角い扉がついている。扉の中央に撮め込まれた楕円型の陶板に、細おもての日本人の女の顔が焼きつけられている。丸顔で目の大きなリカとは、あまり似ていない。古い写真技術のせいか、その婦人の臉がひどくはれぼったく写っていて実際の表情を隠していたから、陶板の婦人は実在した年月よりも遙かにへだたった昔に生きていた人のように見えた。現存する人々の記憶では再現しようもないほどの昔に生きていた人のものであつ

た。雨曝しの女の顔は、打ち棄てられた想い出のように、痛々しい。じっさいリカにしても、その婦人について何一つ想い出を持っているはずはなかった。二つのとき、その婦人は死に、数年たつてリオ・デ・ジャネイロで父が死んで、そこで孤児として育てられたのだから。リカは花束を置くと、陶板を見詰めていたが「ママイ」と言って涙ぐんだ。

その頃、二人はよく諍いをするようになっていた。

行列は停っている。私が近付いてゆくと、丁度、棺が穴に下されるところだった。三人の墓掘り人夫が働いている。私は人垣のうしろに立った。お祈りが済むと、土がかぶせられる。私は棺に投げられる最初の土の音を聞いてみようとして聴耳をたてた。

映画ではひどく非情な響きをたてる。登場人物の心理や劇の進展に重要な役割りを持つ響きをたてる。

……人々の肩越しに見える人夫の上体の動きからは、明らかに土が投げ込まれたのにもかゝらず、土の音は聞えなかった。シャベルですくった土を棺の上にそつと置く、という風なやり方で埋めるらしかった。私は少々拍子抜けしたが、それで当り前だとも思う。宗教は、少くともカトリックは、そんな表面的な浅はかな非情さなどは持っていない。神と人は国際親善のように仲が良いのだ。だが、本当の深みにおりて行ったら、神と人は異人種ではなからうか。

土が大方かぶせられると、人垣は崩れはじめた。波が砂の城をくずして浚うように、人々は小径に流れだす。遺族たちが崩れきらない砦の跡のように、まだらに残っている。私はさっきの少女に近よって、

帰りはどうするかと訊ねた。

「帰りも私の車で帰りますか」

「まだ分らないの」

「すぐ帰るのですか」

「えゝ、もうじき。自分たちの家へそのまゝ帰る人がほとんどだから、空いた車があると思うんですけど、車の数も減るからみんなが乗ってみないと分らない」

「乗れないようだったら、私の車のそばで待っていてください。私はぶらぶら行きますから」

「はい、どうもありがとうございます。そうします」

私は遺族たちに、別れをつげた。時計を見ると、午後二時だった。今日は土曜日である。一段さがった小径に入って、帰りを急ぐ人の動きから離れると、私はゆっくり歩きだした。約束もなかったし、行きたい処もべつにない。

この辺は墓地全体からいえば裏手にあたるから、区割りも小さく、簡素な新墓が並んでいる。木の墓標を建てた丈の墓もあるし、空いている区割りもある。しかし、ほとんどの墓には庭園の模型のように草花が植えられていて、数歩ごとに変わる瀟洒な眺めは目を楽しませた。冬の終りなのに、それらの草花はたっぷりとした縁を、市松模様や敷きつめている。そういう種類が、選んである。霊廟のような大理石や銅鎖がおしあっている表側の墓地にはない明るさが、平面的に広がっていた。それは新開地の住宅群の眺めと同じだった。（自分もこういう場所に、埋められるのだろうか）と私は思った。私は江藤家先

祖代々之墓を思いだした。椿におおわれ、苔むした、先祖からの万年床のようなあの墓に、少年の頃は怖れを多く感じ、今は懐しさを感じている。あの墓は、父から弟へと引き継がれるだろうと思う。私は草花しか植っていない新らしい墓に入るだろう。サンパウロという大都会で、日本の都会と大差ない生活を送っていても、私はやはり移民なのだ。日々の生活はどうあろうとも、死んだ時に私は移民一代目だということを示すだろう。墓石にはFamília（江藤家）と彫られるだろうか。しかし、一人で住んでいる私にはFamíliaという言葉に実感はない。私は妻になる女を探そうという意欲はない。まわりで私生活を心配してくれる人もいない。私は将来の計画を持たずに、その日その日を送っている。日を送るというより、日のほうで過ぎてゆくという感じだった。それは放蕩とか自堕落などではなく、自分自身の将来に対する冷淡さの故だった。さつき老人の死体を見たように、私は絶えず冷たく自分を眺めていた。親しい人々と別れて一人で外国に住む生活が、私の裡に冷淡さを育てたのではないか。私の住む外国は、私にとって外国であったことの意味を裏って、凡庸な日常と化して私を取巻いている。私はそのことに倦んでいるが、先へ進むことはできない。

娘が恋をするように、私は外国に憧れたのだ。娘たちが数百ものきらびやかな夢をそこにかけてながら結婚式をあげ、あげくのはてには平凡な結婚生活を送るように、私も胸を躍らせて船出をしたことがあったのだ。そう。あれは確かに私と外国との結婚式だった。・・・私は顔をあげて丘の項きの告別室を見た。

それはギリシャ建築を模したコンクリートの建物である。セメントで石の荘厳を模倣することを、遺族の悲しみが赦している。(もしくは、赦されるだろうと建築家が思っている)表から眺めるように設計してあって、丘の陵線を走る絲杉の並木が建物の裏手で林のようなかたまりになっていて、建物をあらかた隠蔽している。

絲杉の並木は、ゴッホの絵のように奇妙に曲って立っていた。一本一本は勝手にくねっていながら、並ぶと、個性的なくねり方ゆえにかえってリズムカルな秩序が感じられた。空に浮ぶ黒い律動は、視覚に快かった。ほとんど黒く見える濃密な緑色のかげんが、本当にゴッホの絵具だった。ゴッホの絵のように、ゴッホの絵のように、と私は口にした。ゴッホは幸福な画家だ。誰でもゴッホの絵のように、と言う。この墓地には私の知っていた老画家が埋葬されているはずだ。面白い老人だったが、もう誰も。あの人の絵のことを言わない。死んでも言われるゴッホとは比べものにならない。いや、あの人が生きていた時だって、面と向って絵を見せられた場合以外には、あの人の作品の話など誰もしなかった。と私は気付いた。私は一人で笑った。それは老画家を懐しんで笑ったのだった。ブラジルで結婚した娘のあとを追って老人は来たが、娘は夫と別れてしまい、老人と二人暮しだった。娘は気さくな人だったので、老人の死後秘密のコレクションを発見した、と私に語ってくれた。それはエロ写真の勉大なコレクションで、いっおじいちゃんあんなもの集めたのかしら？ と娘は不思議がっていた。納棺の折、彼女は老人が着ていたものゝあらゆるポケットに、その勉大なコレクションをすっきり詰め込んだのである。私は

老画家の死を知らなかったので、その話を聞いたのは老人が死んでから三ヶ月ほど経ってからである。

日本の写真？ 外国の？ と私がたずねると、そうねえ、ほとんど日本のだったわ、と娘は答えた。

この墓地のどこか、おそらくはこちら側の斜面のどこかに老画家は膨大なコレクションと共に埋葬さされてるのだ。数百の女の白い裸体が蛆のように老人の屍にまといついているにちがいない。それはいかにも虚しい美しさだった。

私が見たかぎりでは、日本のエロ写真は申し合わせたように安宿の一室とおぼしい処で撮影されている。大急ぎで目的を遂げようとする娼婦にも似て、味気のないものばかりだった。写真の芸術的效果とまと言わないにしても、多少は漂っていてよかりそうなエロティックな雰囲気、といったものまでが引き潮のように失せていた。エロ写真を眺めると、女たちの作り笑いには、モデルになって金儲けをしたいという気持が、引き潮のあとの岩礁のように露骨にむき出していた。だから何枚ものエロ写真を繰っていると、私はちぐはぐな感動をいつも与えられた。働いている女達の誠実な写真集のような印象をうけるのである。（何事によらず、日本人は真面目なのではないか）と、私は、遠い国の人々のことを思う。あの老画家は、エロ写真の持つなにに愛著したのだろう、と私は思った。老人になって衰えてしまったものに対する愛惜だろうか。そう考えるのがいちばん妥当だった。私はその推量に満足したわけではないが、それ以上の推察をくだせるほど老人を知らない。キリストの手足が額縁からはみ出している絵を、老

人は私に見せたことがある。はみ出た手足の裏は、ベニヤ板で苦心の細工がしてあった。それからやはり、躍り上った虎が額縁からはみ出ている油絵を見せてもらった。“勢い”を表現して必然的にこうなったのだ、と老画家は説明したが、私には、あまり下手に描かれた虎が恥しさのあまり何処かへ行ってしまうたがっているように見えた。死ぬ頃の老画家は、そんな技法上の工夫に熱中していた。

私は縁石に腰をかけた。私は塀の墓の方向に向って座っている。二人の男女は、まだ同じ処にいる。

私は老画家のことを想い出しながら、同時にずっと、リカのことを想い出していたのだ。老画家のアパートへも、いつもリカと行ったり老人はリカを見ると、かならず初対面のような顔をして「オヤオヤ、綺麗な娘さんだな」と言った。そばから老人の娘が「娘さんじゃないわよ！　奥さんよ！」と老人の耳に口をあてるように言う。「そうかい」と老人は言って詰らなそうな顔をした。

今になって思うと、私とリカはいつも激しく愛していたか、憎み合っていた。あまりに二人だけの世界に住んでいた為だと思う。私は小さな時からだんだんと身につけた習慣や考え方を持っている。それはリカにしても同じことだと思う。ところが、二人はサンパウロという都会で、過去を持たない漂流者のようにめぐり合ったのだ。リカは目の前にいる私しか理解しなかったし、私もリカに対してそうだったと思う。

私の持っている数々の思い出の断片の中では、リカに関するものが一番、鮮やかで時間的にも身近かである。猫のように丸まって寝る癖

があつて、小さな物音にも敏感だった。私は彼女が戻ってくるのを待っているのかも知れない。しかし、決して彼女を探しには行かないだろう。私がリカを欲する気持が、彼女を本当に愛しているからなのか、馴れた女で済ませたいものぐさにすぎないのか、分らないのである。孤独な生活によつて私の精神は澄んだ部分を得ながらも、一方では、そういう種類の判断力に対して全く自信を失っていた。淡いなら淡いなりに、濃いなら濃いなりに、触れあつた人々の影像は私の意識の裡で安定していた。それなのにリカの想い出だけがばらばらで不安定なまゝ私の心をみだした。それが何故なのか、私には分らない。私には分らないが、しかし、心の深みに降りて行つてその理由を探してみようとはしなかった。無駄なことに思える。それでいながら、その不安定さは、やはり私を苦しめる。

私は廻り道をしながら丘の陵線にでた。陽こそさしていけないが、霧雨はすでに止んでいて、空は明るくなっている。

迷路のような墓石の間に私は入った。近くの墓の上に青銅の聖女が立っている。私の眼の高さに青銅の足がある。その足を小さく見せるほどゆたかに盈溢した衣服の襞は、そのまゝ青銅の豊饒と化している。その美しさが、私の歩みを妨げた。私は像の頭部を仰ぎ見た。厚いかぶりもの、中に若い女の無垢な微笑が刻まれている。灰色の模糊とした光のなかに立つ聖女は、顔を伏せて私を直視している。淡い逆光のなかに女の目を探しあてた時、私は思わずうなづいた。人に会つたような気がしたのだ。青銅に移されて実在となつた粘土の肌の感じそのものゝ塊でありながら、そのなかに若い女の体があつた。澄んだ

精神が存在した。

墓地には墓石に付随して、無数の彫刻がある。ほとんどは型からぬただけのもので、鈍い感じを持っている。需要の多いキリストや天使は特にそうだった。しかし、この聖女像は少ない例外の一つだ。一品制作か、ごく大ざっぱな型をとってから、改めて土付けしなおしたに違いない。この墓地で一番優れた彫刻ではないか、と私は感じた。吸いよせられるような感じをもっていて、それは優れた芸術品が共有する深みと迫力のせいなのだ。

出会いのようにこの像に逢って、私の心は満足してなごんだ。満足している心確かめるように、私は手をのばして立像の足に触れる。私はしばらくこの像のところにいようと思った。それから帰ろう。門までの最短距離の径をたどって、私は視線を表側の斜面に放ち遣った。黒い墓石の上に林立する彫刻は、北国の街の屋根屋根に立ち並ぶ煙突のように鳥瞰される。その殷賑はしかし、暗鬱で、ものかなしい。それはまことに北国の風景であった。私はなんの関連もなしに、汽車の窓からみた冬の日本海を想い出した。なにかを蹂躪するように暗澹と苛立つ海は、黒大理石の墓石の群であった。聳然と高上る激浪は大小さまざまの彫刻であり、波頭の白い飛沫は立像の載く銀色の十字架であった。

あの暗い海を眺めながら、私は茹でた蟹を食べた。それから、一人の娘と知り合った。学生だった私は裏日本に住むその娘を三度訪ねるのに、二年を費した。二人だけの密かな付き合いだったから、三度目に娘が死んでいたのを知らずに訪ねた。帰りの汽車で再び海を見た

時、暗い不可解な海が剥きたての桃のようだった娘の裸身を私から奪い去ったように思われた。私は絶望的な嫉妬と際限のない寂寥を感じながら、スチームで曇る窓ガラスを拭きながら海を眺めた。

私は後になって、その時のことを若さの感傷だったと思っていた。しかし、私がいま眺めている墓場の風景は、一枚の絵の陰画と陽画のように、あの海の風景と動しがたく対応していた。海を眺めてあの感想を得たとき、私は今日のことを予感していたのではなかったか。十年を経て、娘の想い出は私の裡に初めて完成されたのではないか……。

私は墓地を眺めている。一つの想い出の再生と完成が、私に感動を与えたし私は立像が、私を見ているのを知っている。微笑を浮べた聖女の唇は、半月に反っている。私は一人の尼僧を仕事のつながりで知っているが、唇だけが似ていない。そのために、全体が似ていない。硬い微笑は謎のように見える。中世からの時間の重みがそこにはある。生きている尼僧には、そんな重みはない。明るく笑う。しかし、私はいつもその尼僧のなかに澄んだ精神を感じた。

身動きできない行列の雑沓にまき込まれて、その尼僧と体を密着させた時でさえ、その感じは崩れなかった。私は清浄さをむやみに崇めるほど若くはないし、清浄さの中に淫蕩を見つけださねば気が済まぬほど年寄りでもないが、その時の印象はやはり快かった。

私は絲杉の坂道をくだって、門をでた。石畳の舗道に、私の車が一台だけ停っている。遺族の少女の姿はなかった。

車のドアを開け、座って、キーを差してエンジンをかけようとした

私は、フロント・ガラスの前の花びらに気付いた。さっきの風が街路樹の花を一斉に散らして過ぎたらしく、道にも車の上にも、うすむらさきの花が敷いていた。それは小さなスカートのような吊鐘型をしていて、黒塗りの車体に散った花は、鏡に写ったように二つづつ重なって見えた。枝についていた部分がつぼまっていて、すぐに腰のようにふくらんでいたから、それは細っそりしたウエストのスカートに見えた。

私はそのスカートの薄紫の色と型に見覚えがあった。

「リカ！」

私は呟いた。

隣りの座席に、いつの間にか、むらさきのスカートをはいたリカが座っていた。私は驚いたことを示さないように、いかにもリカの出現を予期していたように、前を向いたまゝ会話のつゞきのように言った。 ” *Hoje estamos em sabado. aonde vamos* ” (今日は土曜日だな。何処へ行こうか) リカは私のとぼけ方を面白がって、あごをつきだすようにして笑った。それは機嫌の良いときの癖なのだ。私も一緒になって笑った。旨く行っている時の私たちは、いつもこんな風なのだ。

私は車をゆつくりとスタートさせた。車体の花びらが、透明なほうきで掃いたように軽やかに流れた。車中においては風が当たったとも思われないほどの微速なのに、花はこぼれ落ちた。……リカも、もういなかった。車のなかには、私の言葉だけが残っていた。「何処へ行こうか」……何処へ。一人になってみると、それはあてのない言葉だった。

それはあてのない言葉だったが、それを聞いた私には、悲しみよりも、甘ずっぱい感じが身にしみた。それは、これから先、どこかでリカと係わるという予感のようだった。

（終）

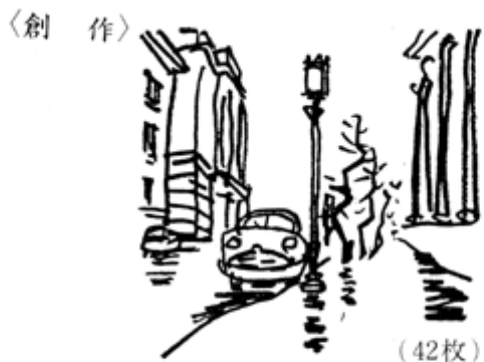
遅刊のおわび

第九号の発行が、ひどく遅れてしまった。まことに申しわけない。台所のぐあいの、苦しいことは事実だが、これは、会員諸氏が、会費を順調に納入されれば解決すること。その他に、実は、事務や編集を担当する武本が、二月末、全治二カ月を要する怪我で、三月と四月をまるまる欠勤したことに原因がある。五月半頃から、武本も週間二回位出勤が可能になり、連日出勤するようになったのは六月に入ってからのことである。こんな状態で、「コロニア文学」第九号発行が、おくれた。編集部としては、鋭意遅刊の回復に努め、既に第十号発行準備を進めている。期待ありたい。

（編集部）

孤 こ え い 影

星野良江



電車を降りた芳子は車の流れを縫いながら広場を横切る雑沓の中にいた。芳子の前を歩く若者の頭髮のポマードがとけて流れるのではないかと思われるほど強烈な暑さである。サングラスをかけ洒落た軽快な服装の女性達を、身嗜の好い街の紳士は暑さにくらりながら流し眼をくれて通り過ぎてゆく。芳子は流行おくれの粗末な自分の服装を気にしながら歩いた。東洋ホテルの看板、中央のショーウィンドのガラスが強い陽光を反映させていた。商店の軒や屋上に電流の通っていない広告燈の文字や絵が、寝起きの朝陽のように味気なく白々しかった。芳子はタバチングエーラ街の角にある時計店に眼を移すと、一週間程前のことが思い出され、かあっと、体が熱くなるような恥しさが蘇ってきた。あのような恥しい思いは一生忘れられないであろう、と芳子は思った。

東京で生まれ東京で育った芳子であったが、十一才頃日本を離れブラジルの山奥に入植し、十幾年、何の刺激も受けないともものんびりと青春時代を過ごしてしまった。そして、いいかげんブラジル呆けた頭で最近サンパウロ市に移転して来た。終戦から二年たっており、コロナヤ社会は一見平靜になっ

〈創作〉

孤 こ え い 影 (42枚)

星野良江

電車を降りた芳子は車の流れを縫いながら広場を横切る雑沓の中にいた。芳子の前を歩く若者の頭髮のポマードがとけて流れるのではないかと思われるほど強烈な暑さである。サングラスをかけ洒落た軽快な服装の女性達を、身嗜の好い街の紳士は暑さにくらりながら流し眼をくれて通り過ぎてゆく。芳子は流行おくれの粗末な自分の服装を気にしながら歩いた。東洋ホテルの看板、中央のショーウィンドのガラ

スが強い陽光を反映させていた。商店の軒や屋上に電流の通っていない広告燈の文字や絵が、寝起きの娼婦のように味気なく白々しかった。芳子はタバチングエーラ街の角にある時計店に眼を移すと、一週間程前のことが思い出され、かあつと、体が熱くなるような恥しさが蘇ってきた。あのような恥しい思いは一生忘れられないであろう、と芳子は思った。

東京で生まれ東京で育った芳子であつたが、十一才頃日本を離れブラジルの山奥に入植し、十幾年、何の刺激も受けずいともものんびりと青春時代を過ごしてしまった。そして、いいかげんブラジル呆けした頭で最近サンパウロ市に移転して来た。終戦から二ヶ年たっており、コロニヤ社会は一見平靜になっているようにも見えたが、人々の心は巢を破壊された蟻のように乱れており、まだまだ血生臭い噂や、勝組と称する人達が南洋再移住を信じて期待していた。

住んで見ると芳子が想像していた以上に、都会生活はきびしく、世智辛かった。もって来た金も底をつき、急場しのぎに芳子の時計や、芳子の母が大切にしまっていた亡父の形見の金時計、母の部厚い金指輪、どれもこれも亡父の生涯の全盛期の記念であつたが、生きていくために金に替えなければならなかった。老母は涙を流しながら芳子の手で父の形見を渡した。

「こんなはずではなかった。」

と芳子は悔んだが、今更どうなるものでもなかった。将来性のない山奥の田舎町に見切りを付けて出て来たのであるから、芳子は口が腐つても愚痴は言えないのだ。何とかして切り抜けねばならなかつ

た。

老母の愚痴と夫の癩癩に追われる様にその時計をもって家を出た。何軒か中心地の貴金属店を素通りし、客のいない様な店に盗みでもする様な思いで入った。

「時計を買って下さい。」と言う言葉が喉につかえて声にならなかった。

額の禿上った店主は胡散臭さそうな表情をして芳子を不遠慮に眺め「ケエ、デゼジャア」と不愛想に言った。『高級品店には不似合な客だ。』とあきらかに感じられ、芳子は顔から火が出る思いであった。時計類をガラスのケースの上に置き、

「これを買って欲しいのだけど」

「ほう、これは日本物ですな。型は古いがなかなか面白いデザインだ。」

店主はもったい振った様子で仔細に時計を調べた。

結局値打ちのあるのは指輪と金時計で、芳子の腕時計はたゞみたかった。渡伯の祈、シンガポールの支那人から父が買ってくれたものだった。店主が金庫から出してくれた金額は、夫の月給の半分にも満たない額で芳子は果然とした。

「たったこれだけ」

「おいやでしたら、品物をお持ちかえり下さい。これ以上気張っては買えません。」

人の弱味につけ込む悪辣な商人根性に憎悪を感じながら、店を出たのだった。そんな侘しい思いを抱き乍らコンセリエイロ街を下り、俗

に言うコンデ街を曲る。ごつごつした石畳の車道に幅狭い歩道、古風な邸宅や、丸瓦でふいた家並は地方の古い街を思い起こさせた。少し行くと道は急な坂になり、家並は階段のように一段づつ低くなって、その向う低地は草の生えた空地になっていた。転がしてある大きな土管の周囲に棒を持った子供達が走りまわっているのが眺められた。家の番号をたどり乍ら付くと、半地下室の小窓から陽気な口笛を吹き、靴底を叩いている靴職人や、アイロンをせかせかと忙しそうにかけている日本人の、洗濯屋の姿などが足元からのぞかれた。

芳子の探している家が見つかった。

「？」

看板もなにもない高い窓のついた普通の住宅である。はたして此处が職業紹介所であろうか、想像して来た所とは、およそ違っていたので芳子は不安を感じた。念のために誰かに尋ねてみようと思った。すると都合よく下から日本人らしい中年の男が登ってきた。芳子が尋ねると「さあ、知りませんなあ、こんな所に職業紹介所なんてものがあつたろうか」

男は首をかしげながら、行ってしまった。

芳子は不安と期待に胸が高鳴り、ふるえる指で呼鈴を押した。しかし中はひっそりとして何の応えもなかった。空家であろうか、もう一度強くさつきより長く押してみた。すると慌てたようなシネラの音がし、若い男が戸を開け顔をのぞかせた。

「あつ、お客さん」

芳子はここが職業紹介所であるかどうかを尋ねると、「エ、シン、

此処です。中に入って待っていて下さい」アクセントの悪い日本語で言い。芳子を請じ入れた。驚いたことに男はまだ寝間着姿であった。睡眠不足らしい瞳れぼったい瞼を照れくさそうに芳子に向け、頭髪をかき上げながら次の部屋に入ってしまった。湿気臭い部屋に事務机が一つと椅子が三脚ほどあるだけで、殺風景な汚れた壁に、山を描いた様に湿気がにじみ出ていた。住宅の一部屋を事務所にしたらしい。ちっと椅子に腰かけていると、床下から金属のふれ合う音や、機械の廻転するらしい鈍い唸りが芳子の足に伝って来る。あたかもモーターボートの上にいるような感じで落ちつかなかった。

芳子は眼を閉じこの半月ほどのめぐるましい生活の変化を思い返していた。子供の教育のためにサンパウロに出て来たのではあるが、その中には、娘の頃果されなかった自分の絵の勉強ができるという希望が多分にふくまれていた。しかし都会に来て生活してみると、少ない夫の月給では生活が苦しく家賃さえ払いかねていた。芳子の希望を聴いた夫は、「馬鹿な夢など見るな」とせせら笑い、相手にしてくれなかった。良書も碌に読めぬ芳子の心は水を持たずに砂漠を渡る旅人のように飢え渴いていた。

この空虚さを充すのに何か欲しくキリスト教の信者になった。しかし、そこも偽善とみだりに神の名を口にする人達で満ちていた。教会に行くより独り静かに聖書を読んでいた方がまだ心が安まった。

「お待たせしました」

男はすっきりした表情をし、小ざっぱりした服装で現われた。机をはさんで向き合ってみると芳子と同じ年くらいで、まだ独身らしく

両手の指に何の指輪もはめていなかった。

「小母さん、どんな仕事がいゝかね、女中のくちなら沢山ある」

「小母さん」と呼ばれた芳子はいさゝか驚いたが、人並より眼のくぼんだ西洋人くさい自分の容貌を思い、年寄りに見られたのを苦笑にまぎらせた。

「女中？ 女中の仕事しかお宅はあつかわないのですか」 芳子はいきなり女中あつかいにされたことにむっとして聞き返した。

「いや、他にも色々ありますがね、」

男は引き出しから書類の綴りを取り出すとばらばらとめくった。学歴のない芳子には女中以外には裁縫の仕事しかなかった。ブラジル語も満足に話せぬ芳子は、日本人のカッパ屋が縫娘を募集している所へ行つて見ることにきめた。男は中山というカッパ屋の住所を紙に書いて渡し、手数料は一週間後に雇主と芳子から貰うようになると言つた。一週間は試験的に働いてみて両方で気に入ったら契約したらよい、と言うのである。パトロンが七％で芳子が三％支払う様になると言つた。とにかく職を得られることに芳子は安堵した。

玉葱をむいたような色の白い二人の娘は芳子のミシンの音を聴いては、けらけらと笑う。芳子は自分の縫い方がのろいので娘が笑うのかと、赤くなりながら、懸命にミシンを踏んでみると、二人は仕事を止めて腹をおさえて笑うのである。芳子はたまりかねて尋ねた。すると娘は「だって、小母さんのミシンの音を聴いていると、ノロエステの薪をたいて走っている汽車の様な音がするんですもの」

と更に声を合わせて笑いくずれるのである。職業紹介所からすぐに仕事貰えると思って来たカップ屋は、一通り種々の型のカップが縫えるまでは、芳子がミシンをもつて来て、此処で習得しなければ仕事を家庭に出さないと言う。他に仕事を見つけて歩くのもおっくうな芳子は、翌日小型のカミニオンを雇いミシンを運んだ。田舎からサンパウロ、又こゝへ運んだミシンは、ペダルのどこかのねじがゆるんだらしく、ごつとん、ごつとんと妙な音がするので娘達が笑ったのだが、その底にノロエステから出て来た芳子の田舎者臭さを笑う意味が、あきらかに受けとれた。戦前は領事館に勤めていたという中山氏は、半白の髪をきれいに分け、細い眼をした口数の少ない人物で、福々しく肥えていた。突き出た腹に白い前かけをした彼は縫い上ったカップにアイロンをかけ、最後にボタンをつけるのが仕事であった。カップと言っても、雨ガッパのようなゴムやナイロン製ではなく、シャンツンとかガバルジーネの生地に防水剤を塗った服地だ。裏も表も両面着られる重宝なものだが縫い上げるのに手間がかかった。魅力的な大きな瞳をした丸顔の妻君は、勝気な気性を言葉の端々にあらわし、ずるけようとする二人の娘達を叱ったり、学校から帰って来た子供達に食事の仕度を言いつけたり、八方に気を配りながらミシンを踏んでいた。しかし、根は善人らしく芳子には親切に縫い方を教えたり、かたくなっている芳子の気をほごすように冗談を言つて笑わせた。陽気に歌を唄いミシンを踏んでいる姉妹の娘は時々、芳子のプライドを傷つけるような言葉を浴びせるのが憂うつであった。しかし、もつと憂うつなのは朝晩の殺人的な電車に乗って通うことである。朝はルイ

ス・ゴイス晩はサン・ジョアキンと途中から超満員の電車に割り込むのは必死の作業でまごまごしていれば何台か電車をやり過ぎさねば容易に乗ることはできなかった。それに増して暑い日の夕方のすしづめの車内は黒人特有の体臭と汗やワキガの悪臭、安香水の匂いが人のいきれと共にむんむんと鼻を突き、芳子は気が遠くなりそうであった。酒気をおびた男の息や電車の動揺を利用して体を押しつけて来る男、みだらな雑談が芳子を悩ませた。「あゝいやだ」何回やめようかと思つたろう。しかし生活の鞭はいつも背後できびしい音を立てて芳子を怯やかしていた。

見習期間の縫い賃は一枚十六ミルで、一日一枚半は縫えた。この分で上達すればらくに二枚は縫えるし縫い賃も上げてくれるという。そうすれば決して悪い仕事ではなかった。明るい見とうしがつき、芳子は嬉しかった。これから頑張つて家具や食器類を買いととのえたかった。

芳子は縫い上がったカップを家にもち帰り、ボタンの穴かがりを夜の十二時頃までかゝつて仕上げた。

三週間はまたゝくうちに過ぎたが、職業紹介所の男は集金にカップ屋へは現われなかった。「そのうち取りに来る」とカップ屋は一向気にならぬらしく、そのまゝにしてあった。芳子は仕事の切りをつけ、自分の支払い分だけでも渡そうと思ひコンデ街に行った。

運よくいゝ仕事を紹介してもらつたのであるから、セルページヤ代くらいよけいにあげよう、と思ひながら呼鈴を押すと、見知らぬ金齒を光らせた主婦が顔をのぞかせた。

「山田さんいらっしやるでしうか」

芳子が尋ねると、女はけげんな表情をし、

「そんな人、うち知りまへんで、わては一週間ほど前に引越して来たばかりやでね」

取りつくしまもなく、主婦は戸を閉めてしまった。

急に何処へ引越したのであろう、それにしても、一言の伝言も置かず行ってしまった呑気な青年の、あの青ぶくれた容貌を思い出していた。坂を登り切り突きあたりの羽瀬の店に芳子は味噌と鰯ぶしを買うために入った。

明るい店内に入ると黒い運動帽子を被った見るからに百姓らしい日焼けした男が細い体をよじらせて手製と一目で解る尺八を懸命に吹いていた。だぶだぶのカキ色のズボンに汚れた紺の上着、埃を被った茶の労働靴をはいた足元は、そうとうに醜陋しているらしく、心もなにくらついていた。頬骨の出た頬をふくらませ息苦しうであつた。曲は追分けらしく、田舎の結婚式の折に父が親しく交際していた炭坑夫あがりの林という人が自満の尺八で吹奏していた曲である。

「ふん、こんなのは姉ちゃん達には解るめえ、もっとハイカラな奴をやるうか」

男は唇を舌先でしめすと、尺八を持ち直し、コロニヤ間で流行している「流転」を腰で調子を取りながら吹き出した。芳子は暫く呆つ氣に取られ眺めていたが、傍に寄つて来た女店員に氣が狂った人かたらずねた。

女店員は眉に立てしわを作り、男が二時間もこうしてねばっている

ことを告げた。

「パトロンが、あまりあの男がうるさく言うので、尺八を二本買ったのです、そしたらすっかり喜んで、どこかで酒を飲み、あゝして御機げんで吹奏しているの。お客さんが驚いて入りかけては帰ってしまうのです。営業妨害だわ」 若い女店員はこましゃくれたことを芳子に言った。無我の境地にいるらしい男は遠い瞳をし、頭を振りながら吹き続ける。少し放れた所に彼の物らしい何かつまったメリケン袋が、美しく飾りつけた店内に場ちがいな対照を見せて置いてあった。二本の粗末な尺八をこの有名店で買って貰ったのがよほど嬉しいのであろう。このうらぶれた老移民の姿に、芳子は胸がうずくような悲しみが湧いた。神戸の港を旅立つ時、誰がこんな姿を想像したであろうか、おそらく本人の彼さえ夢にも想像出来なかったであろう。我が身の変転に芳子は無関心でいらぬ胸の痛みを感じるのであった。

芳子が家に帰えると、表の部屋から華やかなあや子の笑い声がもれていた。「今時分、何の用事で来たのであろうか」 芳子は不思議に思いつながら勝手口から入ると、食事の仕度をしていた母が眉をひそめ、あや子にジャンタを出したのかどうかと芳子に問うた。

「裕福なあや子さんには家の食事など口に合わないから、かえって失礼よ」「そうだね、また後で蔭口を言われるよりか、いつそうのことおさぬ方がいいだろよ」 母は子供達に狭いお勝手で先に食事をさせた。

「母さん、あやさんは何しに来たのかしら」

「何かしらないが、時夫が帰る前から来ていてね、時夫が帰ってく

ると盛に喋っていたが私は御飯ごしらえをしていたからよく知らないよ。ちやらちやらとよく喋る女だね」 芳子達が田舎から聖市に着いた頃は、何くれとなく親切にしてくれたあや子であったが、物質的に不自由勝ちな芳子には充分な返礼が出来かねた。寝具類と当座の着物とミシンしかもって来なかった芳子には、あや子から贈られた紅茶セットやお勝手道具は身にしみる程うれしかった。しかし時がたつにつれ知人や友人などと交際を始めると、彼等の口から、あや子が芳子のよからぬ噂を流しているのが耳に入るようになった。

「貧乏人のくせに気位ばかり高く、親切にしてやっても有難がらず、態度が非礼的だ」 こう言うことが芳子の耳に人らねば今でも芳子はあや子を尊敬していたろう。充分な返礼をあてにした押しつけがましい此の頃のあや子の親切は、芳子にとって、一つ一つが借金を負わされるような苦痛に感じる。度の過ぎた親切はかえって相手に負たんをあたえることがあや子には解らないのであろうか、あや子の度々の来訪は芳子をゆううつにさせた。

昔は同じ植民地にいたという気安さから、芳子達より一ヶ年先に出聖した夫の時夫があや子の家に下宿をしていた。あや子の夫はビヤジャンテでサンパウロ州内は勿論のこと他州まで旅行するので、何時も留守勝ちで、二ヶ月に一回とか三ヶ月も帰えらぬ時もあった。年寄り夫婦と女の子四人のあや子の家庭に下宿した時夫は好遇をうけていた。居心地のよかった下宿住いを時夫は忘れられないのか、何かにつけあや子と比較しては芳子の野暮ったさをけなしたり、鈍感だと言って罵った。同情もいたわりもない、冷たい夫の言葉に芳子は深く傷つ

けられ悲しかった。一年間夫と離れて暮した間に時夫の心は芳子からこんなにも距りができてしまったことがくやしかった。夫から実き放された淋しさに、芳子は常より寡黙になった。芳子の母は口数の少くなくなった芳子を心配し、

「此頃顔色もよくないし、病気になったのではないかい」

と言った。芳子はこの眼に見えないいらだちを母に告げたところで、それは家庭を更に紛糾に落とし入れるばかりであることは解っていたので、仕事に疲れたのだ、と言訳をしていた。実際に身心共に疲れていた。

芳子が紅茶を入れてもってゆくと、談笑していた二人は、一瞬興味をそがれたように白々しい表情になった。時夫より三、四才も年上のあや子は、栄養のいきとどいた肉感的な肢体を惜しみなくひけらかし、安定した生活にどつしりと腰をすえた女の、傲慢さと優越感を優美な会話の端々に乗せていた。軽く見開かれた瞳は笑顔と反対に同性に対する憎しみが光っていた。芳子は胃のあたりに冷たい物をあてがった思いか走った。「この人は時夫を愛している」しかし、芳子はさり気ない笑顔をもって屈辱に耐えた。刃物をもってじりじりと自分に立ち向かって来るようなあや子に対しどう処してゆけばいいのだろうか、人と争うことの嫌いな芳子は、夫ともことを荒立てずごく自然に解決してゆきたいものだ、と、静かに考えをめぐらせた。

二日ほどしたある日、時夫はあや子から芳子に渡してほしいと言われた、と言ひ紙包を芳子に渡した。

「何かしら」

「いいから開けて見ろよ」

芳子が紙を開いて見ると細かい花模様の紅茶用の茶碗であった。一つだけ、どういう意味だろう、芳子は理解できなかった。

「？」

「それはね、此の間あや子さんが来た折、君が紅茶を出したね。あの時君があや子さんに出した茶碗が非道くいびつで、模様もずれてとてもみにくかったと言うのだ。君があてつけにあんな茶碗を出したのだと言って、これを僕の仕事場まで、わざわざもって来たんだ。君は随分失礼なことを、平気でやってのける女だね」

芳子は自分のうかつさを悔いたが、

「ですけど、あのセットはあや子さんが贈って下さったものでしょう。何も感情を悪くする理由はないと思うけれど」

「何もお客さんにデフエイトを選んで出さなくともいいではないか」

「デフエイト？ あや子さんは全部デフエイトを下さったのよ。私の家にはお客様用の紅茶碗はあれ以外にありませんのよ。デフエイトを下さる人が失礼なのか、それとも出す者が悪いのか考えて下されば解ることだわ」

芳子は怒をおさえて答えた。あや子が芳子達の出聖してきた記念にとくれたセットで、よく見ると花模様がちぐはぐであったり、茶碗のふちの金条がひどくゆがんで太くなったり細くなったりしていた。敷皿も同様であった。それはあきらかに二等品の安物だと解っていたが、芳子は人の好意を無にすることなく喜んでいたのだった。

「私、貰うすじ合いでないから受け取れないわ」

芳子はむかむかしながら、あや子が時夫にだけ見せる媚た表情を思いうかべていた。

「いらなければ、謝ってこれを返して来たらどうだ」

「謝るのですって、私は何も悪いことしたおぼえはないととよ」

「あやさんが気を悪くしているじゃないか」

「馬鹿らしい、そんな自分勝手な話があるもんですか、私、これ以上あの人に馬鹿にされたくないわ、私にだってプライドはあるのよ」

芳子は怒にふるえる手を、穴かがりをしているカップの下にかくした。子供達は驚いた瞳を互いに交し机に向って宿題を始めた。重苦しい沈黙の空気をゆるするように、隣で皮の財布を作る内職の鎚音がとんととひびいてくる。のりをつけた皮を折り曲げ、金鎚で叩いてくせをつける仕事を、若い妻君が夜おそくまでしているのだ。マリリヤから出て来たという亭主は、まんじゅう売りであつた。彼は陽気に浪曲をうなりながら、妻君の傍に腰かけ仕事を手伝っている姿がガラスの窓越しに眺められた。芳子は睦まじい若い夫婦の姿をいつまでも眺めていた。四月に入ると、もう何処の店頭にも、美しく銀紙で包装されたとりどりのリボンで結ばれたオーボ・デ・パスコアが、並べられていった。雀の卵ほどの可愛いらしい型から、果ては三、四キロはあるうと思われる物まで、人々の購買欲をそゝる様に飾りたてゝあつた。人目を引くオーボ・デ・パスコアを見る度に、一番小さいのすら買つて、子供達を復活祭に喜ばす余裕のない自分を悲しく思った。こんな罪なことを、誰が発明したのだろう。芳子は商魂たくましい商人をうらんだ。「あゝ、何もかもいやなことばかりだ。このまゝ独りでどこ

か遠く旅に出てしまいたい」芳子はみじめな思いを抱きながら街を歩いた。

ある日、カップ屋の主人が外出から帰ってくると、嬉しそうな表情で言った。

「あの職業紹介所の男は、交通事故で死んでいたのだ。芳子さんが家に来て一週間程のちだと言っていた。三百五十ミル儲かったな。芳子さんも百五十助かったね。ハハハハハ」

「まあ、お気の毒、私ちつとも知らなかった」

芳子がふと言った言葉に彼等は声を上げて笑った。そして、姉娘がおどけた表情をし、

「私ちつとも知らなかった」

芳子を真似て、更に彼等を笑わせた。人の命より、彼等は三百五十ミル儲けた方が嬉しかったのであろう。芳子は、人情の薄さに笑えなかった。仕事を終え、外に出ると小雨が降っていた。霧のような細かい雨は、都心のネオンの色をロマンチックに滲ませ、アスファルトの道をすっかりぬらしていた。芳子は朝から曇っていた空を気にしながらも、傘を持ってこなかったことを後悔しながら電車を待った。車道と車道の中にはさまれた乗場は、雨のよけようもなく多くの人達は新聞や上着を頭から被って立っていた。芳子もハンカチを出し頭に被った。事故でもあるのか一台の電車も来なかった。

「困ったですな、デザストレでもあったのでしよう」

ふいに背後で男の声がし、芳子に傘をさしかけてくれた人があった。芳子はふと赤くなり乍ら礼を言った。

「お勤めですか？」

「えゝ」

「大変ですな」

「はあ」

芳子は身嗜みの好い男の渋い香料の匂いを臭ぎながら体を固くし、ぎごちない返事を繰り返した。芳子は気のきかない答えしか言えない自分が恥かしかった。男は明るい調子で毎朝電車の中で芳子を見かけることや、同じ所で下車することまで知っていた。芳子は尋ねられるまゝに、最近田舎から移って来て、都会生活にまだ馴れぬことを話した。

「いや全く街の生活は大変ですよ」

男は芳子の夫より多少年輩らしかった。こうして一つの傘に見知らぬ男と体を寄せ合っていることに面映ゆうろめたい息苦しさを芳子は感じた。こうして夫以外の男性と寄りそっている所を、夫が見たら何と言うだろう。

「しかし、貴女はお元気で働けるから結構ですよ。僕の家内など六年もカンポスのサナトリオに入っています。今だに良くもならずにいる。主婦は丈夫でないといけませんな」

「まあ、お気の毒に……」 芳子は背の高い男の顔を見上げた。

「子供は家内の実家にあずけていますが、母親が傍にいないことは、子供にとって一番不幸です。悪い時には悪いことが重なるもので、家内の弟が最近交通事故で死亡しましてね」

芳子はなぜか、はっと胸をつかれる思いがした。

今カップ屋を出る時、聞された職業紹介所の青年の事故死、この人の義弟の死、芳子は山田という職業紹介所の青年と、同一人の人ではなからうかとさえ思えるのであった。しかしこの広い都会には一日に幾人ともなく事故で死亡すると聞く。必らずしも彼とは決っていない。偶然の一致はないとは限らぬが、手数料を払っていないことを思うと、この人の義弟の経歴を聴きただすのもためられた。

雨は次第に強さを増して降り出した。

○

復活祭も過ぎこの月も終る頃、カップ縫いの見習期間も終了した。縫賃も一枚二十ミル貰えるようになり、芳子は嬉しかった。もう電車で通勤しなくともいゝと思うと、通い馴れた街並が妙に名残り惜しかった。傘をさしかけてくれたあの親切な人とも、顔を合わすことがなくなる。名も住所も知らぬ人であったが、孤独な芳子の裡に灯をつけてくれたような温さの残る人で懐しかった。「さようなら、もう二度とお目にかゝることもないでしょう」芳子は車窓から街路樹の青葉を眼で追いながらセンチメンタルになっていた。

家で縫うようになると、思わぬ雑用や来客にわずらわされて、芳子が計算を立てた通り一日二枚きっちり仕上げることは六ヶ敷かった。それに、雨にぬれて帰ってから風邪が永引き、空咳が容易に抜けない。悪いことに以前患った肋膜炎さえ痛み出し、再発するのではないかと秘かな恐れを抱いていた。しかし生活にかゝすことのできない自分の収入を思うと、ゆっくり体を休めることすらできないのだ。

ともすれば、くじけそうになる気持を引き立てゝミシンを踏みつづ

けた。

あや子の寄こした紅茶用の茶碗は紙に包まれたまま食器棚にのつていた。芳子も時夫と意地になりそれを返しに行こうとはしなかった。先に手を出した者が負けだ、と芳子はあや子の高慢な美しい顔を思い浮かべていた。時夫の内部まで支配しようとするあや子の自信たっぷりの態度に、芳子は防ぎようのない重圧を感じていた。「夫があや子のような年増女に魅力を感じるのは何故だろう。甘い軽薄な饒舌がいというのか。いやいやもつとその奥に秘密がありそうだが、それ以上深く想像することは辛かった。泣いたりわめいたり、他人に己の忿懣をぶちまけて、気分を晴らすこともできぬ性質の芳子は、自棄的に肉体を痛めつけ、へとへとに疲れて何も考えたくなかった。天気の良い日曜日は子供達をつれて、近くの野原に行き写生をし、ともすると暗くなり勝ちな気持をそらせようと努めた。

○

聖徒祭の沢山続く六月に入ると、遠近に急ごしらえの花火の売店ができ、種々様々な花火や、聖徒の肖像を描いた布などが並べられ、子供達を集めていた。サン・ジョン祭が待ち切れぬと見え、青い澄んだ空に美しく色紙を貼り合せたバロンが、風の吹く方向へ揺れながら流れていった。紙風船の中に火を燃やして空に流す風習に、どんなわれがあるのか知らぬが、芳子には珍らしかった。奥地の植民地では山火事を防ぐため禁止されていて、見られなかったものだ。道では、男の子供達が音だけする花火を破裂させ、破壊的な音に喚声を上げ打興じていた。家々の庭や垣根には炎を吹き上げているようなスイナン

が咲いていたり、火焰樹が真紅に燃え人の眼を引いている。

ブラジルでは冬に赤い花が多いことも街へ来てからの新しい発見であった。

夜となれば澄んだ空に南十字星が真近に輝き、遠い星くずは愛のさ、やきのように瞬いている。がけ下に住む黒人の家から陽気なサンバの唄声と共にパンデイロを打ち鳴らす鈴の音やアコデオンがきこえる。

サンバに明けサンバに暮れあ貧しい黒人の労働者彼等は、サンバに寄って打挫がれた生活の憂さを忘れようとしているように感じられた。まだ彼等は唄を唄うだけ、気持に余裕のあることを、芳子はうらやましいとさえ思ふた。何の潤いもなく、せかせかと働くばかりの無味乾燥な日々を重ねていくことは、自分の貴重なものをすり減らしてゆくようであつた。焦燥を感じる。このまゝの生活が続くとすれば、自分というもののまで見失つてしまふさうだ。一冊の書籍すら買えぬ自分を芳子は哀れに思った。

ある日芳子はカップを届けに出たついでに、医者を訪ね、診察を受けた。その日本人の老医は、こともなげに唯気管を少しいためているだけであると言ひ、咳止めの注射薬を処方箋に書いてくれただけであつた。しかし芳子には、それだけではないような予感がしていた。重労働をした後のような疲労感の脱けぬことや、山登りをした後のような膝の気だるさは、何を意味しているのだろうか、芳子は老医の診察が頼りなかった。肺専門の医者に行つて見ようかと思つたが、肺病だと診断されたらどうしよう、死刑を宣告されるように恐ろしくて芳子

は容易に決心がつかなかった。自分が今倒れたら、家族はどうなるであろう。母を悲しませることは身を切られるように辛い。・もう少し咳止めの注射を受つて様子を見てみよう。芳子は、ひと月延しに延してミシンを踏みつづけた。

寒い冬も過ぎ、裸木に柔かい新芽が吹く季節になつても、咳は止まらず、食慾さえ減退しだした。これではいけない。肺のレントゲンを撮つてこよう、と芳子は夫にも母にも告げず糸を買いに行く風を装つて家を出た。

暖くなつた明かるい軒並を歩いていても、自分独りがこの陽気な明るさから取り残され、暗い沼に引き込まれてゆくような淋しさを感じた。コンソラソン通りのジスペンサーリオに行きX光線の透視をして貰うと、あきらかに肺を犯されていることが證明された。

「肺浸潤です。まあ二ヶ年程養生することですな、サナトリオに入った方がいゝ」ドイツ系らしい若い医者はこともなげに言う。次の患者を診ていた。芳子は全身の血が一度に引いてゆくのが解り、頭がくらくらして倒れそうな眩暈を感じた。二ヶ年もサナトリオ生活をするなど、夢にも考えていないことであつた。「ああこんなことを、どうして母に告げられよう。夫は何と言うであろう。かえつて自分のいないことを喜ぶであらうか。」

芳子の心は黒いペンキで塗りつぶされたように、何の考えもまとまらず、ふらふらとした足どりで歩いた。見開かれている眼は何も見えていなかった。

「やあ、お久しぶりですな。」

向うから来る男に声をかけられ、芳子は我に返った。男は白い齒を見せにこやかに立ち止った。

「まあ、こんな所でお目にかゝるなんて、お勤めはお休みですよ。」
「いや、勤めていた会社が破産したものですから　・・・、それに家内が一ヶ月前に亡くなりましてね。」

僕は都会生活にいや気がさしました。それで家内の実家には子供がいるし、実家の商売の手伝でもして暮そうと、思っているのですよ、偶然こんな所で会えるのも何かの縁でしょう。そこらでガラナでも飲みませんか都会ともお別れですから」

その男は芳子がカップ屋に通っていた頃、雨の日に傘をさしかけてくれた人であった。

「まあ、奥様、お亡くなりになったのですかー」

芳子は後の言葉が続かず、カンポスの高原のサナトリオで独り淋しく死んでいった彼の細君のことが他人事でない程強く芳子の胸にひびいた。

「お加減でもお悪いのじゃないですか、顔色がよくないですよ。」

男はバールの腰高の椅戸にすわると芳子を見て言った。

「えゝ、ちよつと風邪をこじらしたものですから」

芳子は自分の蒼ざめた容貌を想像して、うつむき、淋しく微笑した。なぜこの人はわざわざ自分を呼び止めたりしたのであるうか、そのまゝ素知ぬ顔をして通りすぎてくれた方がよかったのではないか、男は芳子のコップにガラナを注いでくれながら、

「全く今年はついていませんよ。会社はつぶれる、義弟はデザスト

レで死ぬ。家内は死ぬ。碌なこと一つありません。僕はつくづく都会の生活が厭になった。これで貴女とも永久に会えないでしょう。僕は家内にどこか似ていらつしやる貴女に心魅かれて、どうしてむ黙って通りすぎるのができなかったのです。御迷惑でしょうが、ほんの少しつき合つて下さい」

きれいに散髪された彼の横顔は憂愁に沈んでいた。

私が彼の奥さんに似ていると言うのであろうか、電車の中で会った彼の熱い視線を想い出し、芳子の顔に血がのぼった。男のしめすほのかな感情が柔かく芳子を包み、芳子は優しくうなづいた。男は落着いた口調で準二世の立場の悪さ、ブラジル入社会に進出して行く六ヶ敷さを言い、高等教育を受けブラジル社会に堂々と割り込んでゆく二世達のことを羨望をもって話した。一世とも二世ともつかぬ分の悪い境遇に育ったことに、劣等感を抱いているらしいことが芳子にも理解された。同じような立像に育った芳子にも彼のことばに共感がもつことができた。

「全く一点半という割切れぬ立場の我々はあらゆる面で損な立場ですよ」

彼は金を儲けて日本に帰ることしか考えなかった父母のことを悲しみを混えて話した。

「戦争が終つて、敗戦の日本に帰れないと知った今、息子にブラジルの教育を受けさせなかったことに、気がついたのですよ。僕達は運がなかったのですな。今頃こんな愚痴を言っても仕方ありませんがね。日本のことも解らなければ、ブラジルのこともはつきりしない。

日本人でありながら純粹の日本人にはなり切れない。かと言ってブラジル人でもないのですからね。コロニヤ社会という溜池みたいな所で、ごちゃごちゃと動いているうじ虫的存在ですよ」

芳子は彼の言葉を聞き乍ら、実際自分達準二世の立場の分の悪さを思わずにはいられなかった。更に男は臣遺連盟とか特攻隊とか称する血迷った一世の集団と、それに踊らされている哀れな木偶人形的な一部の二世青年のことを腹立たし気にしゃべった。

「こんなこと、今更僕が腹を立てても何にもなりません、ブラジル人に随分悪印象をあたえたと思うのです。彼等はコロニヤ社会に汚点を残し、何時までも物笑いの種になることでしょう。いやどうも貴女にこんな話をしてしまって……」

何の共通の話題もない二人はこんなことでも話さねば話のつぎ穂がなかったのだ。パラナの田舎町で静かに暮したいと言い、男は立ち上って芳子と別れの握手をした。必要以上に強く握られた芳子の細い手はくだけるかと思う程痛かった。ある感情を秘めた男の強い瞳を受けて芳子は俯向いた。

「さようなら、お元氣でお暮し下さい」

芳子はコンコラソンの寺院の塔を仰ぎ、右左に別れた。都落ちをして行く男とサナトリオに行かねばならない肺を病んだ女との出会、芳子はやり切れない佗びしさにおそわれた。

○

「お前が勝手に病氣になったのだ。俺は知るもんか」
時夫は呶鳴った。

あれから幾ヶ月か芳子はぐずぐずと自分の病気を母や夫に告げるこ
とができなかったが、十二月に入ると、起きていられぬ程悪化してし
まった。芳子は夕食後サナトリオに行くことを決心し、夫に救済会に
お願いして施料サナトリオに入れてくれるよう頼んだのだ。

「そう、私が勝手に病気になったのね。家賃を稼ごうと思って一生
懸命に働いたことは無益だったのね。ブラジル人の主婦のように何も
しないで遊んでいた方がよかったのね、勝手に病気などして悪かった
わ、貴方には迷惑はかけないわ、施料病院でそつと死んでいくから」
芳子は夫の非情な言葉に涙も出なかった。母は涙を浮かべ、家で養
生するよう、強くすすめたが、芳子は子供達に感染することを恐れ
て、決意をひるがえさなかった。とにかく芳子は夫をときつけてサナ
トリオへ行く手続をしてもらった。

ある夜、突然あや子が訪れて来た。いつもきれいに長い髪を結って
いたあや子は、耳のあたりからおかっぱに切っていた。

「あゝ、高山さんに会いたかった。内の人が四ヶ月も帰って来ない
の、私心配で夜も眠られないのよ、今夜お宅に泊ってもいいでしょ
う。あら、芳子さん御病気？ どうなさったの、私が来たからって、
仮病つかうことないでしょう」

あや子は芳子の寝ている寝台の床にべったり足をなげ出して横座り
になった。芳子はいつもの上品振ったあや子らしくないのに奇異を感
じ、黙っていた。

「ねえー何とか返事なさいよ、私貴女の旦那さん大好きよ。いい
でしょ好きになっても、共有しようよ。ホッホホホ、あら怒ってん

の、いやだわ。ヤキモチなど焼いて、私ね日本で女学校の頃、不良の仲間に行ったことあるの。学校へ行くふりして麻雀をやったりね。ダンス・ホールに行つて見たりしたわ。牧師の父母は何もしらず、毎日神様神様といつて祈り、娘の私をかまってくれなかったの。私とても淋しかったのよ。人をみちびくことにばかり夢中になって、自分の子供をかえり見ない親に反抗していたのだわ、ねえ、どうしてうちの人が帰つて来ないか、貴女知らない？ 知っていたら教えて頂だい」

あや子の支離滅裂な言葉に、芳子は呆氣に取られていた。氣が狂つたのではないかと、芳子はあや子の言動に氣をつけて見ていると、口から上の義齒をはずし床におろすと、おはじきでもする様に、指ではじいて弄んでいた。

「私、貴女が大嫌いだわ。ちつとも高山さんを大切にあつかわないのですってね。冷たい人ですってね。女は全身全霊をもつて亭主を愛さなければいけないのよ、貴女など女房の落第生だわよ。ねえ高山さん」

そう言うときサーラに居る時夫の方へ行ってしまった。夫があや子に何を言っていたか解つた氣がした。

男の身勝手さに芳子は受身がふるえる程怒りを感じた。かん高いあや子の話声がつつぬけに病室まで聴える。きくともなしに聞いていると、あや子の夫がビアジャに出た切り帰らず心配のあまり、神経衰弱になっているのが理解できた。それから何時間かすぎたのか、眠っていた芳子は多勢の人声に眼が覺めた。

「さあ、帰りましたよ。あんたの御主人が帰つて来ましたよ。お

母さんが心配しているから僕達と帰りましょう」

知らぬ男の声がしていた。

「いやだ、そんなこと嘘だわ。いつもその手で私をだますのね。私家には帰らないわ。今夜は高山さんと寝るの。帰らないといったら帰らない。」

「御主人が帰っているのなら早く帰って上げなさい。又明日でも僕の所へ来たらいいでしょう。なああや子さん、迎えに来てくれた人に悪いではないか」

時夫のなだめる声がしていた。二三の男達の声が交る交るし、漸くあや子が帰る気になったらしい。

「もし嘘でしたら又来るわ。今夜は高山さんの顔を立てゝ帰るのよ、いいこと。」

芳子は、半ば気がおかしくなっているあや子に何故かほっとした。全身をしばられていた眼に見えぬつなが解けていったような、気楽な解放感を味わった。今まで苦しみ、悲しんでいた自分が馬鹿氣ていた。おかしさが突き上げてきた。声を上げて笑いたい衝動にかられ、外の石段を登って帰っていくあや子達の靴音を、芳子はきいていた。寝返えりうち寝台の下の床に眼を落すと、そこにあや子の置き忘れられた義歯が、暗い燈りに鈍く光っていた。芳子はいつまでもその醜い義歯を見ていた。

(おわり)

コロニア・新刊紹介 ①

合同句集『旅人木』

これは、明治百年と日本移民渡伯六十年とを記念して、サンパウロ市在住「木蔭」所属句作者三十一人が出版した合同句集である。「あとかぎ」に”刊行上の手配は、星野立子氏及び玉藻発行所にみて頂いた”とあるから、印刷刊行は日本であろう。また刊行月日は、一九六八年末と想像される。体裁は四六判、本文三七二頁、箱入りという豪華版である。

題字は林貞逸、扉絵は増田恒河、見返しは岡本久江と、この句集に名を連ねている人々の手になるものである。巻頭に佐藤念腹氏の序を掲げ、続いて、三十一氏の自選五十句が、一頁五句組みで収めてあり、巻末に、斉藤信山氏のあとがきがある。

次に、各作者名と題名を掲げておく。

・南十字星Ⅱ宮坂幾別春、・女王花Ⅱ斉藤信山、・昼蛙Ⅱ林貞逸、・茶の花Ⅱ岡本久江、・春眠Ⅱ中村とし子、・身のまわりⅡ林伊勢、・移住Ⅱ目黒白水、・秋晴Ⅱ亀井杜雁、・春の山Ⅱ斉藤錦子、・踏青Ⅱ千本木渟子、・春景色Ⅱ今出均、・稽古始Ⅱ吉間大志、・訪日Ⅱ目黒はるえ、・掛乞Ⅱ坂倉けん六、・花野Ⅱ羽瀨記代、・春夏秋冬Ⅱ梶本北眠、・草笛Ⅱ内山春一、・草紅葉Ⅱ井上蒼崖、・コスモスⅡ今出富代、・空中根Ⅱ増田恒河、・パイネーラⅡ大熊星子、・惜春Ⅱ石塚冬鳥、・夜の墾家Ⅱ千本木早苗、・浜椰子Ⅱ上村静香、・椰子の影Ⅱ吉間かなえ、・サビアⅡ坂倉きみ子、・春の猯Ⅱ星野瞳、・ユダを焼くⅡ和山素描、・パモンニヤⅡ牛田幸良、・煙曇Ⅱ西方耕一步、・白サビアⅡ大熊秋楓子 これら作

者の年齢層は三五、六才から八〇才の高齢者を含む。また作句歴も十〇年から三〇年に及ぶ人々であるという。念腹氏の序によると、この句集は『輸出向き俳句』に瞞着されぬためにも広く読んで貰いたい』とある。コロニア文芸愛好者には是非一読をすすめたい。

(A)

コロニア・新刊紹介 ②

第七回全伯川柳大会特集号

ブラジル川柳社では、明治百年、移民六上年記念として、一九六八年十一月「全伯川柳大会特集号」通巻第四十九号を発行、この程各方面に配布した。

本書は、菊判、本文はタブロイド版八十四ページとなっている。巻頭に、安藤魔門氏の発刊の辞があり、続いて、日本、ペルー、北米の川柳社代表祝辞が載せてある。内容は、第七回全伯大会、汎米誌上大会応募作品の成績発表を主とし、在伯各川柳吟社、新聞柳壇などの紹介、主宰者、選者のことば、その外、「ブラジル川柳の行方」などの論文もあつて内容はすこぶる豊富である。

第七回川柳大会作品は本誌前号で紹介したので、茲では省略し、「ブラジル川柳社」について、書いてみる。

本書、五十一頁、川下白舟氏筆「川柳社創立の頃によれば、ブラジル川柳社は、一九四九年に結成され、一九五〇年に「ブラジル川柳」

第一号を発刊、一九六八年末、第四十九号に達している。全伯柳人を糾合して結成した結社であるが、今日までのブラジル川柳界の起伏に従い、その消長はかなり激しいものがあつたようにうかゞえる。

最初の意気ごみは相当なものようであるが、やがて退潮期を迎え、そして、近年また勢力を盛りかえして来たように思える。その間、一貫して、堀田栄光花、安藤魔門、川下白舟氏らが中心となり、押し進めて来たようである。最近勢力の挽回を見るに至った原因は、日本及び南北米各地の川柳結社との連絡が緊密化したこと、新興川柳派の内部に、思想派、新感覚派とも見られる革新的なものが派生し、コロニア川柳の進展に刺激が与えられたことなどを数えることができる。コロニアの川柳も、ようやくブラジルという風土に根を広げ、特色ある作風を見せてきた様子、まことに慶賀にたえない。

（紫）

旅

可児 三平

一泊旅行に出る

連休に混み合うバス

隣りの席に話しかけ ナイフを貸し

新聞を拾ってやる よろこび

見知らぬ町に降りる

誰れ彼れをつかまえて

牛の話 棉の相場 景気の噂

ペンソンに泊まる

フエジョン アロス ビッフエ

街燈のポツンポツンとある夜 埃り道

適度によごれた敷布

暗い裸か電燈

昨日にも明日へも 繁りのない

夜

めすかまきりの立場

雄人間は

雌人間に食い殺されまいと

せつせと、えきを運ぶではないか

雌人間は 満腹すると

手足の指関節一個毎に指輪を

と搾取しつづけるではないか

雄人間は

しかも やがて

精根を使い果たし

雌人間を残こし

ただただ 死んで行くではないか

かに

小野政子

真直に歩きなさいって。……・

だって

私は真直に歩いて居るつもり。

横向きに歩いている

ように見えても仕方がない。

それが世間の目と、言うもの。

私は真直に歩いている。

胸一杯の呼吸で

ひたすら

泡を吹きながら……。……。

古代紫

佐藤 博三

幻影のひとが現われる

宝石のような夕暮

永遠にふれたと思った

あの淋しい光りのなかで

蒼ぎめた白百合がおもてをあげる

マベの絵がかかっている壁に

古代紫の哀しみがにじむとき

アンドロメダの脳髓に咲いている

病める白百合の

尖端に走る光芒を見た

詩二篇

〃
握手〃

江
尻

潤

君の掌は

やわらかく

吸盤を持てるごとく

いつまでも

わたしの掌から

取れにくかったつけ

君の掌は

ごつごつと

石片に掴まえられるように

がっしりとわたしの掌を

揉み砕くばかりだった

君の掌は

さらさらと

砂が零れるように

非常に

わたしの掌より

離れ去って行ったのだ

君の掌は

意気込んで

炎が噴き出すように

あつあつと

わたしの掌と

たたかっていたのか

〃 影 〃

白日の下では

あなたの足許に蹲まり

黄昏になれば

長々と背伸びをする

明るい月の夜は

あなたと共に散歩する

何か事ある時には

あなたの心の襞に忍び込み

その思案の厚さを計量する

悲しいことには

暗闇の中に居る時だけ

あなたと断絶させられる

もしも

燦々と輝やく真昼の道で

わたしを見失ったとするならば

あなた自身が

そこに実在していないことになる

あなたが地上に在る限り

切っても切れない因縁に繋がれていても

一度だって

あなたに迷惑を掛けたことはない

ただ あなたの人間像を

わたしは いつも側面から証明するだけだ

いやいや そんなに不思議がる事はない

わたしは あなたのもつとも親しい友として

いつでも 従いて歩いている「影」に過ぎないのだから

地球を枕に

親父が逝って二十年過ぎた

親父を悼んだあの頃の壮者も土に帰し

俗名を刻んだ石塔が鬱然ど林立した。

私は花を捧（ささ）げながら

親父から折檻された思出を

あの頃の自分の年齢の吾娘に話し

「おぢいちゃんに花を捧げよう」

と言った。

これから二十年、或は三十年過ぎたら

私もここに眠れるだろう私の娘は子供をつれて

「おぢいちゃんに花を捧げよう」と言うだろう。

故郷に錦を飾った人

貧困に過ぎた人

詩人も政治家も

同じく地球を枕に眠っている。

「生きていてもいいことはない」
と誰かが言った。

「待ってなさい　いましばらくしたら貴方もここに来る資格が
得られるでしょう。」

矢　島　健　介

地球はうめいている

わからない短歌を創る奴

わからない詩を創る奴

わからない絵を描く奴

解らないのは凡夫だと、言うが

解った顔をする奴の

解説もあてすっぽうだ。

解っているのは作者と狂人だけ

狂人と凡夫を双肩に負って

地球は日毎うめいている。

何を視つめて

お前は何を視つめて生きているのだ
生きながらの廃人のように

臥ているお前は

冷風におびやかされて 蒼い吐息に
うずくまり

へうへようと鳴る木枯しに

身を晒し いつしか

重い霧の中に お前を閉ざす

お前は 何を視つめて 生きているのか

日の昏れの沼のように 蒼い顔して

裡にたざらす 腐敗物

おびただしい悪臭の中で

お前の精神（こころ）は 蝕ばまれてゆく

お前は 何を視つめて―

真 木 衿 子

鶏糞と男たち

土にまみれ 鶏糞に汚れ

汗で全身をぬらし

午前十時の太陽にさらされ

何等かえりみない男たち

太陽の下で働くものだけが持ち得る

汗と油に満ちみちたあの臭い！

男たちは どんな夢に己れをたくして
生きているのか

あたしの知らない素敵な森が

その陽焼けした頬と

白い歯の奥に輝いていた。

か げ ろ う

鹿
毛

至

微風に頬をなでられながら
しっかりと大地を行く

牧や畑の草も青み

森の木々も若葉がいっぱい

耕された赤土のしめったうねり

彼方、村落の光る赤屋根

それらをやわらかにおしつつんで

ゆらゆらとたちのぼるかげろう

遠くかすむ地平の彼方へ

見果てぬ視線をなげて

まづしい心がうづく

一つの孤独の象（すがた）を

いのちのかぎり

このかげろうのうづをつくる

空の下で燃やしたいのだ

ミシリッカード

山川百合子

暑い日向で何時間も働く

それは都会の人にはわからないこと

とりたてのリモンの香りを味うのも

都会の人にはわからないこと

ミシリッカード

それは子供のみつけた言葉

とてもおいしいよミシリッカード

子供は巧まずして素敵な言葉をみつける

暑い暑いどうにもならないときは

リモンはあまり強すぎる

ミシリッカードを飲めば

生返ったようになる

私はこれを飲むたびたのしくなる

そして田舎に住むことの幸を思う

(旧作より)

胎 胚

藤
田
勇

猜疑の

醸す

平安

捧げもつ

磁の器

ひたひた

とよぎり

たたずむ

影

ささやき

映す

罨

の目の

炎

の回帰

近作二篇

横 田 恭 平

イタペチ村

糞尿のいっぱいつまっている自分は
それゆえに
はるかな秀麗な山嶺にあこがれる
イタペチの嶺、スザノの野に仰ぐ嶺
だがあの秀麗な山も
近寄ってみれば
糞尿の気が漂うているかも知れない
ある日、自分はあこがれにのって
その嶺を越えて行った
新しい村がそこにひらけていた
鉄道線路がひとすじ
懈怠の思いに光っている
いやとり付けない信念のようにのびている
小さい停車場がある
小学校がある
村はあかるく、ひろく
いろいろのくだものが植えてある
イタペチ村

なんといい名前の村

なんと素晴らしい村

まだ未開拓の山野がみえる

そこには柳子の樹が林立している

鹿も棲んでいるという

村人はみな再移住の人たち

その荒れはてた掌は

あまたたびの挫折をものがたり

それゆえにこそ何人の掌をも

濶然と握る

書かない小説家たち

うたわない詩人たち

自然が矛盾だらけであろうと

人生が無意味であろうと

無限の前で背伸びをする

樹木の呼吸を呼吸して生きるからに

人と人とのおのづから寄り合う魂があつて

洞察と企画と真剣な、ややばげしい労働の日常に

なにか充溢するものをまさぐるのだろう

久しく自分にくすぶっていた

衰弱と散漫は

乾いた道路の上で蒸発した

長く忘れていた何を

自分は思いだしたというのだろう

イタペチの村は白く光っている

あの空の高さに

人々は自分たちとその集りの

可能を信じている

冒険者たちにそれはゆるされることだ

そして自分になしみはあった

一つの小説、一つの詩を書こうと

意欲するときの

あの抑えがたい、新鮮な

ゆえ知らぬかなしみがあった

註・イタペチ村は、私の詩の中の村として

だけでいいのだが、実在する。サンパ

ウロ市から四十五キロ、ヅトラ公道の

右側、イタペチ山脈の麓にひらかれつ

つある村、モジ郡管内。

分身説

曖昧なもの同志

欲望の腹をせり出して

大男が突立っており

糞尿のつまった自分が並んで立つ

月があがりかけ

畑の苗物共は蒼く沈みこんで了った

大男は不機嫌にまた軽蔑するように

じろじろ畑をながめ回す

大男の意中を忖度する必要がどこにあるろう

なんで二人がこんな微妙な位置にあるかも

いらぬ詮議だ

極めて自然に自分は考えた

こんな曖昧無類の大男の終焉は

樹木も土壌もゆらぐ

大擾乱をまきおこすのではないかと

もちろん才物は関わり合っており

それに悪意に盈ちている

腐敗の中の一匹の蛆といえども

静謐な死などのぞめないのだ

好きな詩の一つ　― 横田恭平

商法について

岡崎清一郎

物の形や大きさは

繊維のようでもあり

黄銅のようでもあった

昨日わしは此処にきた

なにを設計しようときたのではない

バラやバラのような美しい魂を

みつけにきたのでもない

あゝ疾く疾く風はゆく水色の條…

夕陽にうらぶれ

金羊毛のような枯野山

紛糾の迂路をたどって

昨日こういう城下の景色の

なかにきた

わしはここで柔らかい口を

利きたいと思う

異様な少しばかりの土くれを手に

のせ

心秘かに何かにつかまり

からだをゆすぶっていたいと思う

しかし此処でも

魂消た顔

押戯れているような顔

苦痛や煩悶が手に取るごとく目に

よく見える

就中、商法は随分わしを

惹きつけて

舗道ではいまや蛇腹を伸び縮み

させて

取引が活発に行われていた

詩 欄を 評 す

スザノ詩話会

第八号詩欄に日を通して、先ず使用された活字に優美なやわらかな感じを受けた。作品はみな充実してきた（水野）

もつと余白の余裕をひろくとらなければならない。狭苦しくおしこめられている作品もある（大浦）

作者がいろいろの立場に於て、いろいろな方向にむかって、それぞれがったスタイルで書いているが、みな立派な詩である。愁い、風、枯野、さようなら、哀れな女、などは一般の共感をよぶ詩である。自分の観念詩などは、わからないとして投げすてられるのではないか。

（横田）

終焉 素材は日常的なものだが、表現の面白さがある。（水野）
なにものかが終焉し、心中に大きな傷が口を開いたということだが、最後の二行が語呂がよすぎ、かつ感傷的である。しかし前半の堅さをむしろ救っている。（横田）

枯野 内奥地の冬枯れの風景と、それに立向う青年の内部をよく描いている。油草はガソリンのようによく燃えることは、誰でも知っているだろう。

最後の三行はいゝ感覚である。モジアナで育った青年だけが描ける感覚。（横田）

心象叙景 内部に出没する雑多なイメージを並べたものだ。(水野)

作者は作者だけの詩の世界を設定して快とするだろうが、読む人は情意を傾けてその美学に参加できない憾みがある。しかし、「白い脚をかきいだくように記憶にすがりつく若者」は惚れ々れする言葉だ。最初の性に関係ありそうなイメージもいゝ。だが最後の六行は、急に語感のちがったものになった。(横田)

作者としても快心の作ではあるまい。(藤田)

烈風 耕玄氏の作は芳賀氏の作と共に境涯の詩である。(横田)

この詩は、文明あるいは政治批判の意を含むと思う。(藤田)

男 可児氏はいつでも冒険家である。人生の探求、詩の探究もまた冒険である。敢然として書かれたこの詩に、よむ人は快心の笑みをもらす。(横田)

大いなるもの、惑わしい礼節 こういう観念的な詩はどうかと思つたが、自己証明の意味で提出してみた。私のうたう歓喜の詩は、みな悲哀の基盤をもつものだ。(横田)

上村作品 このシニカルな態度は現代詩に必要なものである。

(横田)

愁い、四十代 二篇とも整っている。しかし四十代は展開がない。

(水野)

短歌でも表現できるかも知れない。

しかし作者は詩意識の昂ぶるまゝにこの詩形で表現し、そのことによって、たとえ展開がなくとも自己摘発による衝撃を与えた。(横田)

其他真木氏、蓼科氏、山川氏、いずれもいゝ詩である。更に勉強を祈る。

時代は変貌し、個もまた変貌する。詩も変貌しなければならぬ。作詩するものは、その内容といわず、形式といわず、不断に新鮮な詩境を追求してもらいたい。(水野)

第九号詩欄について

(スザノ詩話会)

ベテラン江尻氏の寄稿を得たことはいれしい。氏は川柳も短歌も作られるが、本領は詩にある筈。

ニュー・オーリンズの朝

私は、一年間の南部におけるアメリカ生活から白人と

黒人との間に横たわる激しい憎しみを肌で味わった。

前山 降

「やはり、来なかった。」

腹はたゞずに、むしろおかしかった。

ぶよぶよした大きな白い腹をむき出しにしてすわり、ビールの大ジョッキを乱雑な事務机の上に握ったま、ひとつうなづくだけで朝起こすことを引受けた大男の宿番を頭に浮べた。斜めに昇っていくペンキのはげた階段の下に、掃除道具でも蔵っておくために作られた三角の小部屋がある。そこを事務室として窮屈に納まった彼は、おなかの重心を椅子にしばりつけられでもしたように、身動きもしなかった。じろりと一瞥をくれただけで、金と交換に部屋の鍵をくれた。あの大男の宿番には、一年間のアメリカ生活であまり見かけることのなかった空気があって、ラテン・アメリカに、永く馴染んだ私には好感がもてた。そして、時間起こしには来ないかも知れないとふつうのアメリカ人にたいしては考えてもみない疑いを抱かせたのであった。

六時四五分。夜半二時すぎまでニュー・オーリンズの歓楽街を歩き、それから四時間の安眠ののちに、予定よりすこし遅れただけで目覚めたことに、軽い満足を感じていた。そして、あの宿番のものうげな不愛想と約束不履行とがおかしかった。

「安すぎる」

四方ベニヤ板で囲まれた、一坪ほどの息のつまりそうな部屋である。粗末ながら洋服箆笥と机が据えられているのも、むしろそぐわない感じであった。

ブラジル東北部の街で、果物の腐った臭いのする安宿にでも目覚めたような、軽い錯覚まで湧いてくる。この中心街で、二ドルの木賃にはいろいろとは思ってもいなかった。昨日暗くなってから街に入り、悪名高いフレンチ・クォーターのストリップでも眺めようと裏街を歩いていると、「一ドル三〇セントから」というあやしげな安宿が目にはいった。好奇心で、ふとはいってしまったのである。

ベニヤ板で仕切られた狭い廊下をくぐり、洗面所に出る。前屈みになって水を使っていると、ふいに後ろから声がかかった。あわてて顔をぬぐって振り向くと、よたよたのレイン・コートを着流た髭面の男が愛想笑いをして、こちらを覗き込んでいる。五十がらみの瘦せたみすばらしいおやじである。

「なにか……？」

と問いかける私に、彼は目を二つ三つしばたいて言った。

「えらく、また、早起きじゃないか。」緊張がしだいに緩み去っていく。そこにいるのは、同宿者に朝の声をかけようとしている愛嬌のいい老人である。

ただ私には、隣人というものをまだ忘れないアメリカ人に一ホテルで会うのが、新しい経験だったのである。

「朝早くから、なにか、うまい商用でもあるんかね。 道路工夫と

いったあんばいの髭に包まれた老顔には、あるあどけなさがあつた。
「ところで、何時かね」

そして返事も聞かないうちに、袖をまくりあげ、無造作に顔を洗いはじめた。そこには、永く貧困に親しんだ者の磊落と、老いた独身男の醜さがあつた。その人懐っこさは無類で、私に日本の軽口な職人やブラジルの口重のカボクロなどを想起させた。そして、たしかにこのホテルには、もうひとつのアメリカがある、とそんな気持がした。

この一劃はけっして黒人ブロックではない。このホテルにも、昨日から黒人は見かけなかった。ホテルのなかで見た人々は、外国やアメリカ生活で片鱗を眺めた「ヤンキー」達ではなく、一九三〇年代の映画でふかく馴染んだ、大都市の抱えこんでいるコーカソイドの貧乏人に似通った人々であつた。十年前、「祐かな社会」というテーゼがアメリカ社会学界を賑わした。今、アメリカにおける「貧困」ということがひとつの流行の社会的トピックスとなっていることを、今更ながらに頭の中で反芻するのであつた。アメリカのプア・ホワイト――そんな言葉が、おしやられていた記憶の片隅から、おぼろげな輪かくをとりながら甦ってくる。

一年間住んだテキサス州のオースチンという街で、私は毎週のように、メキシコ人街や黒人街にビールを飲みに出かけた。白人ブロック、メキシコ人ブロック、黒人ブロックが中心街の一劃で相接している。ひとつの大通りを距て、街の内部でかなりきっぱりと分離しているのが、初めはひどく奇異な感じであつた。黒人の盛り場は、黒人ブロックのなかに自己完結的な姿をとって、別にある。すべてが

フォームもなしに雑居しているのが一般であるブラジルという国からやって来た私には、連続している街のなかで、ひとつの道をよぎると、黒人だけの住む、白人のひとりも通らない別世界へのめり込むということが、初めてカフカの小説を読んだ時のように幻夢的でさえあった。しかし、メキシコ人の一杯屋には、ある種の白人たちがかなりやってくる。

古着屋の古着の山のなかから七五セントで買いこんだ疲れた学働ズボンははいて飲みに行く貧乏書生の私は、それでもきまって、白人の酔漢や老いた娼婦にビール二本やクォーター（二五セント）をたかられるのであった。そこでは私は、メキシコ人にみられることがしばしばで、むかしお前とはよくのみ歩いたなどとスペイン語でやられたたりした。メキシコ移民はテキサス州の南部に多いが、社会的には黒人より低いと見られることが多い。テキサス大学の学生の生活費が合衆国の全大学のなかで一番安くあがっていると最近の調査が証明したが、それは物価が安いからであり、物価が安いのはメキシコ人の提供する安い労働力のためである。そのメキシコ人を粧って飲み歩く労働ズボンの私に、毎回たかりに来る白いアメリカ人たちがいるということが、私の新しい発見であった。

私はビールを飲みすぎて、たびたび小用に出掛ける。飲み屋のどんずまりにある便所には、白タイルの便器がひとつだけある。その便器をまるく囲んで、三人、ときには五人のメキシコ人やアメリカ人が、ほのかに上気した微笑をもつて、のうのうと用を足しながら、世間話に余念がない。私もそこに割り込んで、アメリカ人の混っているとき

には英語で、メキシコ人だけのときにはスペイン語めかしたポルトガル語で、仲間入りをする。このウィーク・エンドの小便をみなと馴染んで足しながら、私はいつも酔い気味の頭でいぶかるのであった。「メキシコ人はともかく、この白人たちの間に通いあう共感は、いったいなにものだろうか。」それと同じようなものに、このニュー・オーリンズの安ホテルでふと邂り合ったのである。

「バス便などありやせんよ。ラマズイーンで行くんだ。シェレイトン・チャールス・ホテルを知つとるかね。四つのブロックを占領している大ホテルさ。ラマズイーンはみんなそのホテルの地階を通つてから、飛行場へ行くんだ。バス便などは、ありやせんよ。」昨夜から頑張っている大男の宿番は、睡気を払うためにか、いくどもくりかえして説明してくれた。国際空港までは三〇キロばかりある。街と空港とをつなぐのがラマズイーンで、四〇分ほどで着くだろう。……しかし私には、ラマズイーンが何物であるかも、よくのみこめなかったし、ホテルの名もあやふやにしか頭に残らなかった。私は別のことを考えていた。そして、気軽にホテルを出た。

古いフランス式の町並である。ニュー・オーリンズは、フランス人の建てた街である。二〇年この街に住む中華料理店の主人が、まだフランス語を話す人々がかなりいるといったが、ほんとうであろうか。二千人の中国人が居住しているという。骨董屋がおおい。

あたりにときどきスペイン語が聞こえるのは、キューバからの移住者であろうか、テキサスから流れて来るメキシコ人であろうか。それとも、ニュー・ヨークにおおいプエルト・リコ人であろうか。キューバ

からの亡命者はフロリダ州におおぜい住んでいて、いい葉巻を作っている。政治的關係から、ハバナの葉巻は吸えないが、フロリダ産のものがなかなかいい。ニュー・オーリンズはフロリダとテキサス州の中間に位置するが、一体だれがここへ移って来て、スペイン語を話しているのだろうか。旅をすると、目に見えない人々の移動の気配が肌を感じられ、予期しなかった出来事から、人間のことを考えさせられる。

昨夜、嫖客で雑沓をきわめていたバーボン横丁を横切る。夜どおしの盛り場であるこの横丁では、ストリップ小舎の客引きが、遊客にこんな言葉を投げていた。

It, s New Orleans ! You might be free !

(ニュー・オーリンズですぜ。旦那、無礼講でいきましようや)

カナル大通りに出た。さっぱりした黒人女学生などが登校している。宿番の指示した大ホテルは見当ついたが、足はそれをやりすごして先に進んだ。

そして、昨夜黒人に道をたずねた街角まできた。数人の黒人がバスを待っている。私もその仲間にはいる。

飛行機が朝早いので、昨夜、この街でバス待ち顔の黒人青年に、空港への便をたずねてみた。

バスを待つ人には黒人がおおい。青年はうさんくさそうに首をまわして私を一瞥したが、またそっぽを向いて返事をしなかった。

「空港へのバスは、ここをとおりますか？」 私の英語がまずかったかと思い、もう一度はつきり言いなおした。またゆっくり首をまわした彼は、両手をジャンパーのポケットに突っこんだまゝ、壁にもたれかかり、無言で私をじいっと見つめている。夜燈はとおく、青く、彼の表情は、相対していながらよく見えなかった。彼が私を観察していることはわかった。ニュー・オーリンズは、アメリカでも黒人問題のもっとも激烈なルイジアナ州の中心都市である。その街における黒人たちの反応や表情には、私は大いに関心をもっていた。

しかし、青年がうさんくさげに無言をおしとおすまでは、旅行者であり、日本人の顔をもっている私にたいして、黒人がある種の抵抗をしめすということは予期していなかった。

日本からの留学生たちは、黒人が怠け者で、無知で、なにをするかわからないという。

私は、黒人労働者の怠けぶりは、彼らの白人へのレジスタンスのひとつの姿だと思っている。それは彼らのモラルに準じた行動なのである。

白人、メステイーズ、インディオというカースト的差別の強いスペイン系アメリカでは、インディオの女中が抱え主に反抗するときと手段は、あやまったふりをしてだいじな食器を割ったり、空巢が入りやすいように鍵を閉めずに外出したりすることだという、こういった上と下との間に流れあう深い憎しみの感情は、永く住みついてみないとのみこめないことだろう。

アメリカへ来たてのころ、テキサスにいた急進的運動家の友人

に、黒人ブロックへ連れていってくれと数度頼んだことがある。彼は生返事をするだけで、ついに何事をもしてくれなかった。最後に、おまえは日本人の顔をしているから、まだ行きやすいだろう、といった。リオの貧民窟に住み込んで調査を行なったアメリカ人の人類学学徒が、自分の街の黒人ブロックに入ることさえできないということだが、私には大きな発見であった。

こう考えているうちに、無知な黒人青年が外来者の質問にどぎまぎしているといった姿から、しだいに、青年の無言の情報拒否の姿勢が浮き出てくるのであった。

バスが来た。人々が乗り始める。

青年も動き出す。私はもう一度たずねた。

「このバスは空港へ行きますか？」

私にはバスのことはどうでもよかった。ただ黒人青年の反応がみえた。青年は、かすかにひとつうなずいた。そして、トントンとバスのなかに消えていった。あのかすかなうなずきは、他処者への寛容であろろうか。

はたして、このバスは空港へ行くだろうか。

私は、翌朝ぜひここでこのバスに乗ろうと考えた。

朝、私はバスに乗った。入口で、黒人運転手に私はたずねた。

「このバスは空港へ行きますか？」 運転手はむずかしい顔をした。それから、乗れ、と頭で合図をして、

「十セント」

と言った。三〇キロの国際空港まで十セントはおかしいと思ったが、

私は乗った。運転手のすぐ後ろにこしかけ、着いたらおしえてくれと依頼した。不安はあった。飛行機に乗りおくれるわけにはいかない。フロリダの友人が、空港まで百キロの道を出迎えに来るはずである。私は、昨夜の青年のあのかすかなうなずきを想い浮べていた。

バスは大きな街角ごとに停った。吊りずぼんの労働者や、カバンをもった女学生、買い者姿の黒人主婦などが乗り降りした。みな日常の姿であり、旅行者とおぼしき者はひとりも見あたらない。運転手は、乗客が硬貨を採銭箱にほうり込むのをたしかめ、小銭に換金してやる。その間、バスは降りつづける。私はすこしいらいらしてきた。これで三〇キロ行くのでは、おくれるかもしれないと思った。

しかし、やがて街を出るであろうし、たしかに空港の方角に走っているので、運転手の合図をまつことに肚をきめた。

私は何気なく、この若い黒人運転手を観察していた。フランスとブラジルの合作映画「黒いオルフェ」に出てくる電車の運転手に似ていて、赤みがかった肌の好男子である。運転しながら、左手でハンドルをリズムカルに小さく叩いているのも、アメリカ人らしくない風情であつた。乗客の若い黒人娘と、ごくしたしげにお喋りをたのしみながら、車を走らせる。その娘が車を降りるときには、ふたりは恋人同志のように手を肩のところで振り合つた。ふたたび車が動き出して、その娘をやりすごす際には、彼はブザーを短かく鳴らして合図した。女は振り向き、齒をみせて笑つた。

運転手は、左右の舗道にしきりに目をやりながら、車を走らせた。バス・ストップに立つ若い黒人娘の姿が目につくと、彼はすぐさまブ

ザーを短かく鳴らした。女はひよいと目をよこす。

彼は、ハンドルを胸に抱えこむようにして前にのり出し、左掌を突き出して伊達男の合図を送る。バスは待つ者のサインがないと停まらない。女の反応がたしかめられないままに、バスは走り去ろうとする。運転手は、スピードをゆるめずに、伸びあがって振り向き、女の反応を掴もうとする。おおくの女は、笑って愛橋を送ってよこす。

運転手はえたりとハンドルを叩き、またつぎの女を物色するのであった。それは黒人娘でなければならない。私ははじめ、顔見知りに合図を送っているものかと思った。しかし、ニュー・オーリンズは大都市であり、黒人の密集地帯である。彼がそれほどおおくの黒人娘を識りようがない。しだいに私は注意を集中させていった。彼は、すべての可能な黒人娘に合図を送っている。それ位のことであれば、リオのカリオツカもやるであろう。だが、ほとんどの娘が、親しげな、温い愛嬌を送りかえしてくることをみて、私はいたくおどろいた。そして、ふしぎな感慨におそわれた。あのテキサスのウィーク・エンドの小用を想いおこす。

赤信号で、バスは停る。数人が車の前を横切る。黒人娘が下を見ておりかかる。彼はブザーを鳴らす。娘はびっくりしてこちらを見上げる。そこに、同じ黒い肌の伊達男が茶目な秋波を送っている姿を見出す。瞬間、女は歯を見せて笑う。そして、片手をひよいと振ってみせる。女は活き活きと走り去る。運転手は、もう一度ブザーを鳴らす。

私は一年間の南部におけるアメリカ生活から、白人と黒人とのあいだに横わる激しい憎しみを肌で味わった。それは個人と個人との関係

ではない。あたかもそれは、二つの陣営に分れての戦いのようにみえる。黒人用の大学は別にある。テキサス大学にも、僅少の黒人は入学している。禁じているわけではないことの証左のために用意されているかにみえる。その学生らは、学生食堂でもまとまってテーブルを占領する。黒人学生用の寮がある。もちろん、みながそこに入っているわけではない。学生新聞下宿広告欄の冒頭には、人種的なことから拒否された場合は、今後その家に学生を斡旋しないから申し出よ。と注意書きがある。アメリカで二番目に金持ちの大学といわれ、みずから油田経営をして大きな利潤をあげているテキサス大学は、十年前に五千人、四年前に二万人、現在三万人の学生を擁し、急激にふくれあがっている。構内の随所で工事が進行中である。

工事現場を注意ぶかく眺めていると、監督とごく少数のアルバイト学生をのぞけば、あとはメキシコ人と黒人であることが判る。

この人々は混って立ち働いているが、昼休みであたりに腰かける際には、黒人だけをひとつのグループとしてきれいに析出させる。

「インプレッショナント！」

私の口からは、ついポルトガル語の感嘆詞が洩れる。ブラジルに人種差別がないというのは、イデオローギッシュにつくられた神話にすぎなく、ブラジルの黒人もおおくの偏見にさらされているが、すくなくとも彼らは、黒人としてのグループを形成してはいない。

これはアメリカの黒人とブラジルの黒人との根本的な相異のひとつであると思う。私は、ブラジルでおおくの黒人と親しんだが、黒人と黒人とのあいだだけに通い合う、あの無条件の共感というものに

は、とくに注意をひかれたことはなかった。

グループ内のこの共感の強さは、グループが他グループから峻別されるメカニズムに関係する。運転手と道端の娘とのあいだに生じる共感、あたかも戦時キャンプにおける戦友間や看護婦とのものに類似している。あの憎しみの放つエネルギーが、内にこの共感をぬくぬくと培養している。人間が編み出すグループというものは、いったいなにものであろうか。そのグループを支えるものはなんであらうか。

ブラジルに着いて三カ月目に、私は四カ月にわたるアマゾン地帯への大旅に出た。マラニョン州に近いゴヤス奥地のある集落でわれわれのトラックが停車していると、その噂をきいてひとりの日本人が、蒼白な表情をこわばらして、素足のまま駆けて来た。それはあたかも変事に襲われたかのような姿であった。

そして語ることをもたず、ある感動に顔は青ざめ、ただじっとわれわれを凝視していた。彼は、十数年ぶりに日本人を見たと答えた。

私が彼の心をいくぶんかでも了解するまでには、年目を要した。

ブラジルの日本人は、むかし、土地を借りたり購ったりして植民地を形成する際に、同県人同志、日本人同志でグループをつくり、ともに「視察」をし、入植し、「親類づきあい」をした。

日本人であることが、仲間であることの充分な条件であったりした。日本では決して起りえないことである。黒人であることが、なぜ仲間であることの充分な理由となるのであろうか。ブラジルの黒人のあいだでは、それは一般には起りえない。人間のグループとはなにか。どこで人はグループ員のけじめをつけるのか。

ある夜、私はひとりでニュー・ヨーク市の一大黒人集団地ハーレムを飲み歩いていた。有名なジャズ・バンドのあるバーには、白人も数人ずつ仲間になってやってくる。ひとりではこない。

そして彼らはバーの入口からいきなり車に乗って、まっしぐらに帰って行く。私は深夜の一時すぎ、第七アヴェニュー、百二〇番のあたりを、酔ってキョロキョロしながら歩いていた。そして、とある家の扉に張られた紙に目をとめて、立ちどまった。ある黒人結社の綱領であるようだ。それを読んでいくうちに、こんな言葉が目にはいった。

「われわれ黒人は、他の黒人から物を盗ったり、彼らを傷つけたりしてはいけない。」 私はじつとその二行の文字をみつめた。読みちがいではないか。 と、いくども読みなおした。結社の名称をもとしかめた。そして、ふと、また哲学の本を読むようにしようか、と思った。私は大学で哲学を専攻した。卒業後別のはたけにはいり、哲学からは意識的に離れようとしていた。元来さして好きでもなかった。そして七、八年経った。時折、ああいうものを読みたいと思う。その貼り紙に、「他の黒人から物を盗ってはいけない」という部分を読むにいたり、強くそう思った。結社名と文句をノートしたいと思ったが、私は思いとどまった。酔っているから、正確な記憶がのこらないことはわかっていた。しかし、私はすでに、その紙の前に長く立ちすぎている。ふたつ前のバー以来、私には黒人の尾行者がついている。彼を刺激するのは得策ではないと思った。白人から物を盗ったり、彼を傷つけたりすることは、このかぎりにあらず。 — あの綱領は言外に公然とこう唱っている。それはむしろ彼らのモラルに発する使命であるかにみ

える。最近頻発する都市の黒人暴動は、その外貌から、日本近世の「うちこわし」に酷似している。彼らは分捕り品を手押し車などに盛りあげて引きあげていく。

私は不手際な尾行者を、地下鉄から自動ドアの閉まる寸前に不意に下車することで、なんなくまくことができたが、そのゲームに夢中になって、結社名や文を正確には憶い出せなくなった。

一九三〇年、W・D・ファードと称する行商人がデトロイトの黒人ゲットウで開始した黒人イスラム教徒の運動は、それ以前にマルクス・ガーヴェイの興した「アフリカに還れ」の運動や、その後オスカー・ブラウンが始めた黒人に独立州を要求する「第四九州設置国民運動」などとならんで、白人憎悪の一般感情を激しいイデオロギーとして析出せしめた。彼らは一般に「黒いイスラム教徒」と呼ばれるが、みずからは「イスラム国」と称している。イデオロギーからいえば、それは独立国である。

アメリカに在住する黒人はメッカにおいて失われた民シャバツ族の子孫であり、聖都メッカに還ることによって救われると説かれた。そのためには、各人が四人の「白人という悪魔」をいけにえに供すべしといわれ、実行者を産んで社会問題となった。

その教えによると、人間の真の姿、つまり「オリジナルな人間」は黒人である。黒人の歴史は天地の創造とともにあるが、白人は六千年の歴史しかもたない。白人は「オリジナルな人間」としての黒人から、故意に創り出された変種でしかない。すなわち、ヤクブという科学者が、六百年に亘る厳格かつ綿密な特殊産児調節を行なった結果、よう

やく創りあげたものであるという。

白人はグレイ（灰色）と呼ばれ、完全な白ではなく、黒色をほとんど抜き去られた状態の人間である。白人は、その黒色を抜かれた程度に応じて、虚弱であり、ヒューマニティーにとぼしいという。そこでは、白人以外のすべての人種は黒人の範疇にふくまれる。日本ファシズムの特務機関に働く高橋という日本人が、アメリカ黒人をアメリカ打倒の力に組織しようとして、この「イスラム国」に働きかけた。（以上「黒いイスラム教徒」に関する記述は、C・E・リンカーン、ジェームス・ロー工、およびE・D・ベンシヨンの研究に拠った。）シカゴの黒人タクシー運転手が、私の友人に、「あなたは日本人ですか。いや、この間の戦争では、日本はよく頑張ってくれました。」といったというが、決してありえないことではない。

永年「黒いイスラム教徒」のなかで指導的な幹部としてハーレムを中心に活躍したマルカム・Xは、そのセクシヨナリズムにあきたらず、全米的黒人共闘の運動にはいるうとして、一九六四年三月それより脱退し、「アフロ・アメリカン統一組織」というものを結成した。翌年彼は、みずから予言したとおりに暗殺されてしまうが、その「統一組織」の基本線と趣旨について彼が起草したもののなかに、つぎのような箇所がある。

「合衆国憲法は、すべてのアメリカ市民が武器を携行するの権利を保有することを明白に確認している。

しかしてわれわれは、アメリカ人として、憲法によって保障されたこのかけがえのない権利を放棄しようとするものではない。わが同胞

にたいして加えられ、かつ法の制裁を免れた暴力の歴史は、あきらかにつぎのことをわれわれに教えている。すなわち、われわれはみずからの力でその自衛に備えなければならない。さもなくば、われわれは今まで同様、残忍かつ暴力的な人種狂信者の暴徒の群の前で、なすことをしらない無防禦な衆徒重ありつづけねばならないだろう。(中略) ライフル銃と棍棒をもった者は、ただ、みずからライフル銃と棍棒をたずさえた者によつてのみ阻止されうるのである。」

(Statement of Basic Aims and Objectives of the Organization of Afro-American Unity, 1964)

なんという挑発であろう。白人は「グレイ(灰色)」で、黒人の一変種にすぎないといった、いじけた黒人優越主義の空威張りにくらべて、堂々とした挑戦である。彼はたちまち暗殺されてしまうが、その後継者たちは、一九六八年春、ミシガン州デトロイト市に結集して、「新アフリカ共和国」の成立を宣言、独立宣言に署名し、内閣を組織し、合衆国政府にたいして、損害賠償と人種別比率にもとづく領土の割譲かたを申し入れた。その「初代大統領」は亡命中である。

このような極端な運動が二千二百万人のアメリカ黒人のあいだで獲得した信者や会員の数は、全体からみるならば些細なものである。「黒いイスラム教徒」は一九五〇年代にはいつて急激に膨張したが、数万を超える数にはなったことがない。

アメリカ共産党は、黒人の差別問題をその最大のテーマとする方針を持してきたし、党勢拡張のために全力をあげて黒人に求愛をつづけ

てきたが、芳しい成果をあげたためしがない。一九二八年にはわずかに一五〇〇二〇〇人、大恐慌下の一九三〇年にも瞭らかに一〇〇〇人以下しか黨員をもてなかったし、かつて（ただし一九五〇年ごろの研究による）八〇〇〇人を超える黒人黨員をえたことはないという。

一方では「ブラック・ブルジョアジー」が成長し、他方では無自覚な農村賃金労働者があり、また都市にはさらに窮乏を加えつつある黒人ゲットウの居住者がある。彼らのおおくは、アメリカ人としての意識をもち、メッカやアフリカには関心なく、現政体のなかでの完全平等、即時差別撤廃を希っている。これらの一連の過激な運動が実際に獲得した同志の数はしれたものであるが、重要なことは、その道の研究家がいうように、そのような運動、たとえば「黒いイスラム教徒」などの存在することを、大部分の黒人がひじょうにこころよく感じているということである。例外的な動きではあっても、一般的な共感のうえに成立しているのである。

伊達男の運転手の指示にしたがい、バスを降りる。街のはずれである。そこで別のバスに乗り換えると、バスはたちまち郊外に飛び出し、ハイウェイを一直線に突っ走った。

採銭箱に二〇セント放りこむと、私は座席をもとめて身をまわした。すると、大型バスの乗客の顔がぜんぶ私の目にはいり、全体が私と相対した。

「ほお、やっとなる、やっとなる」

私は自分のちいさなもうひとつの発見に、内心感嘆の声をあげた。それはしかし、異和感のギシギシする感嘆であった。人は裏切られた

ときに、ある喜びを味わう。その異和感に幻夢的なユーモアをみる。了解と哀しみはあとからしだいにやってくる。私は、ブラジルと日本とを背負って、ニュー・オーリンズへやってきた。私はニュー・オーリンズのバスに関する予備知識をたずさえてやってきたが、やはり裏切られた。アメリカに来て最初に私が読んだ本は、ジョン・グリフィンの『私めいた黒人』というドキュメンタリーであつた。グリフィンはアメリカの作家であり、白人である。一九五九年十一月、彼は医学的处理を全身の皮膚にはどこし、「黒人」となつてこのニュー・オーリンズの街を徘徊した。そのときの体験を詳細につづつたのがこの本である。

医者处理が完了し、黒人になりすましてから、彼は鏡をのぞく。そこに現われるのは、未知の、縁もゆかりも感じられない「くろんぼ」であつた。

そして世の中が彼にたいして一変する。彼は自分の一挙一動のためにいちいち人にものを訊ねなければならない。さもなくば、かならず一悶着おこるのである。歩きつかれて、彼は公園のベンチにかける。そして追われる。ある黒人が、休憩したかったらバスに乗れと教えてくれる。彼は乗る。現在は、白人も黒人も同じバスに乗る。内部で黒人はだいたい中央から後方にかける。混んできても、白人は黒人のとなりにはかけない。グリフィンのとなりの空席のまえに、中年の白人婦人が疲れきつたように立っている。バスが揺れるたびに、よろめく。グリフィンは席をゆずろうかと彼女の顔をなんどもみる。

「なんで人の顔をじろじろみるんかね。」

とどやされる。白人たちはとなり同志話しはじめ、非難の目を向ける。後方の黒人のあいだにはひとつの連帯感が漂う。

私はその描写を鮮明に記憶している。テキサスの街でいくどか乗ったバスで注意してみると、だいぶくずれた形ではあるが、多少その傾向をみることもできた。老人などはきまって後方まで歩いていく。この空港行きのバスに乗って、グリフィンの図式があまりに鮮明に具体化しているので、おもわず、やっとなる、やっとなると感嘆したのであった。黒人たちが、後方に立て籠ったという雰囲気がある。歴史的には、後ろにおしこめられたという方が正しいであろう。私は、意識的にやや黒人側にかけていた。境界があるわけではなく、多少は混る。すぐ降りる者のなかには、入口のあたりで停ってしまう黒人もある。最後列にずらりと並んだ黒人労働者風の男たちの間には、なごやかな空気が感じられる。そこには親密感と連帯感がみなぎり、あたかもひとつのコミュニティを形成しているかのごとくである。そこでは、未知の老同志でも、いきなり、お前はなぜ髭を剃らんのかといったことから話が始められるであろう。彼らも一団となって、ウィーク・エンドの小用をするにちがいない、と思った。ブラジルに永く住んだ私には、白人が白人同志、黒人が黒人同志あい寄り合って固まっているという風景が、あつけにとられるように珍らしいのである。日本人だけが群をなして歩いているのを見ると、差別問題とは無縁なところで、私はあるグロテスクな感を受ける。裏切られたような異和感をうける。これが文化であろうか、人間のグループであろうか、と老える。雑然とおおくの文化的人種的要素が入り混っている方が、自然で、安心な感

じをうける。ブラジルの土着宗教を習合した大本教や観音教などの日本移民の姿も、至極く当然な人間の営みのようにみえる。人が人と共感を分かちあうメカニズムはなんであろうか「われわれ黒人は他の黒人から物を盗ってはいけない。」私は、この言葉をもっとよく理解したいと思う。

客はしだいに減っていく。これは朝の通勤バスなのであろう。出口はやや後方のあたりにもうひとつある。黒人たちはそこから降りていく。中央あたりに掛けた人々は、フラスコにおけるイオンの電気分解のように、白人は前のドアへ、黒人は後方のドアへ立っていく。ペンキのついた作業服の者、吊りずぼんの労働者、通勤者などばかりである。空港で働く者がおおいようである。みな空港入口あたりで降りてしまい、飛行機乗り場の地階のくらがりへバスがすべり込んだときは、制帽をかぶった謹厳な白人運転手をのぞけば、私ひとりになっていた。

『石狩川』に寄せて

開 沼 貴 代

ある日、何気なく古い新潮誌を読んでいて「オヤッ」と思う記事に出会った。

一九六六年五月号に載っている高見順日記（八）であつた。私の心をとらえたのは、その中の次の三行である。

　北海道の藤沢君、当別町長や、本庄陸男の文学碑の設計者山内壮夫と共にくる。文学碑の字の執筆を頼まれる。

　思わぬところに郷里の町の名と本庄陸男の名を見出した私は関心をそられて、他の新潮誌の同日記をも調べてみた。すると、同年八月号の日記に「昭和三九年六月十七日、文学碑「石狩川」揮毫。書く気力なく一日のばしにしていたが、山内さん（注―山内壮夫氏：碑の設計者）が明日北海道に行くと云うので、もうどうにもいたし方なく―原寸でという依頼のため幅七・八センチ縦五・六十センチの和紙に二十枚余り書く。」同十二月号日記（十四）に、「昭和三十九年十月四日、「石狩川」碑の礼に北海道の藤沢君来る。シシャモ、すばらしいスジコ、ウニ等おみやげ」と何回も「石狩川」に関する事柄が書き留められているのを知った。「石狩川」の作者本庄陸男は、私の郷里当別町出身の作家なのである。年若くして文学を志し上京した。昭和九年に彼の短編「白い壁」が「改造」五月号に発表されている。その後、十一年から十三年にかけて高見順らが出していた「人民文

庫」の編集者でもあった。

十四年五目に、名作と云われる「石狩川」を刊行している。洋々たる未来を持ちながらこの作家は、惜しいことに、第二次大戦中にまだ三十代の若さで亡くなったと云う。「石狩川」文学碑の揮毫を高見順が書いたのは、生前の親交に依るものと思われる。

高見順日記に出ている藤沢君と云うのは、当別郵便局前の旧藤沢旅館の息子にちがいない。その姉も文学少女であつたし、その息子がグループを作り文学勉強をしていたことは、嫁いで町を離れた私の耳にも噂は伝わっていたが、そのグループの中に本庄陸男も含まれていたのであつたらうか。

去る六三年に、私が郷里を訪問した時、当別町役場の職員である甥より来年は当別町開拓百年祭です。明治百年、北海道百年祭よりこちらがひと足早いですよ。多彩な記念行事が企画されていますが、その中のひとつに、本庄陸男の文学碑を建立する計画があり、今準備中です。また、その全集も刊行の予定です」と聞いた。

碑の建立地が町中ではなく、町から十何K米もある石狩川河畔の彼の生家の庭に建てるとのことであつた。観光ルートをはずれた河べりのさびしい部落に、町立の文学碑とはなんとも不似合な話だが、私はピンとくるものがあつた。

「石狩川」は、北海道一の大河石狩川の興亡と、その流域に繰り展げられた北海道開発史の一端と、石狩平野の穀倉と云われる当別町管内地方の開拓苦闘の歴史をつづつたものである。

戦後七、八年頃に「石狩川」が映画になった。戦争物ブームの最中

であった昭和十四、五年の頃でさえ、その評価の高かった「石狩川」である。映画になった「石狩川」も大好評で迎えられた結果、当別町の存在を広く道内外に示したことは想像にかたくない。

開町百年祭に当り町立の文学碑建立となったのも当然のことと思う。

当時のシネマ雑誌に掲載された映画「石狩川」は、チョンマゲ頭の破衣の武士達が、ある組は原始林の樹を切り倒し、一方では、倒した木の枝を焼き払いなどして、斧や鍬をふりあげて開墾にとり組んでいる場面があった。今より百余年前の当別村開拓の苦闘の状況が生まなましく示されている映画であった。

明治初年、まだ未開の原始林地帯であった北海道に、維新政府の開墾方針にしたがって本土各県より、いくつもの開拓団が渡道して来たのであったが、「石狩川」に描かれている移住団は、普通の百姓、商人などの集団ではなかったのである。

明治維新の政争に巻き込まれた結果、朝敵となり家禄を没収されて、生活の道を絶たれた一国の城主と、その家臣達が、生きんがための道を求めて、未開の原野を開拓するという特異な材料をあつかったものである。

会津を授けて賊軍となった伊達家の支藩、岩手山城主伊達邦直公が、家老祐筆その他の家臣を引き連れて、路なき原始林の中を、苦労を重ねた末に、ようやくたどりついたところは、当の開拓目標地のはずれである花畔（ハンナグロ、アイヌ語）であった。

そこに本庄陸男の生家がある訳である。当別町には遠く、むしろ石

狩町に近い。一行はそこより拓き進んで中心地を流れる当別川を挟んで市街地を建設したのであった。トラピストで知られている函館の当別と間違われ易いので石狩当別ともいわれる。

このように伊達家支藩の主従によって開拓された当別は、私の子供の頃は殿様と云う言葉が一般に使われていた。伊達家は二代目で男爵を授かっており、村長は家老の二代目であった。村政の要職には開拓先駆者の二代三代目が就いていたようであった。本庄陸男の祖父も実際にこれら先駆者の中心に立ち苦闘を重ねた中の一人と思われる。

開祖である邦直公は歿後、旧主を慕う家臣達によって町の氏神様として当別神社に祀られている。六四年元旦に姪に誘われて、私は後にも先にも只一度の初参りをしてきたが、午前0時という時刻の上に、折から降りしきる雪の中を、老若男女の参詣者が、文字通り参道にギッシリつまって身動きも出来ず、人波に押されて移動するばかりであった。大多数の者は社前の鈴に近寄る事ができなくて、遠くより小さい銭を投げて拝むありさまであった。昔は信心の厚い人ばかりのように聞いていたが、これも復古調ブームの表れの一つかと驚いたのであった。

「石狩川」にその興亡を綴られた石狩川は大河としてばかりでなく石狩新巻鮭の供給源として、昔から広く知られていた。しかし近年はこの鮭漁も減る一方とのことである。私の訪問中は特別ヒドイ不漁つぶきて、石狩鍋の本場の石狩町でさえ、北洋の冷凍鮭を使用していた程であった。原因はいづこも同じ鉋毒流出のせいである。昔は産卵のため遡江する鮭群の銀鱗が河面に光り輝いて見えたそうだが、今は、

夏は濁流、冬は黒褐色の不気味な流れと変貌していた。

映画になった「石狩川」を知ってより、原作を読みたいと思うねがいは強まるばかりであった。文協図書館をはじめ、聖市の本屋を折りある毎に探しまわったが見当らないままに幾年か過ぎた。郷里訪問の折は求めたいものの筆頭にメモし札幌の富貴堂をはじめ何軒もの書店を探し廻ったが残念ながら、入手することができなかった。

昨年、思いがけなく、文協の古書即売会で只一編ながら本庄陸男の作品を読むチャンスにであった。多年求めつづけていた「石狩川」ではなかったが、「現代日本小説大系」五五巻で、昭和十年代の作品を収めた一巻であった。

宮本百合子、壺井栄、和田伝などの中に交り、本庄作品「白い壁」が載っていた。

それは、東京下町の良心的な一小学教師とその受持クラスの貧しい児童達を中心に、彼らを幾重にも取り巻く重苦しい壁について描かれたものであった。この内容にしては何か批判の足りない手ぬるさを感じさせる作品だと思ったが、同じ北海道出身の「蟹工船」の作者である小林多喜二が、警察で虐殺されたという翌年頃の作なので、作品発表に当っては、本庄にも枷や壁がとりまいていて、言いたいことを充分に表現しきれない時代であったのだろうと思われる。

彼が「人民文庫」の編集をしていたことは先に書いたが、その時の仲間の中には、高見順をはじめとして、円地文子、新田潤、武田麟太郎、田宮虎彦、大谷藤子、渋川驍らがいたという。もし彼が今日まで、いや戦後まで生きていて作品を書いていたとしたならば、当然これら

の一流作家の中の一人として、広く名を成したであろうにと、その早逝が惜しまれてならない。

「石狩川」文学碑は、予定通り建立されたことは、新潮語に載った北海道文学の木原直彦なる人の文章で知った。その除幕式には伊藤整、八木義徳、船山馨、小田切進の諸氏も遠くより参列し盛大に取り行なわれたという。

日本ではこのところ観光ブームで、コースの至る所に〇〇碑が乱立される傾向だそうだが、「石狩川」碑は、それらとは異っているのである。周囲は荒蕪たる泥炭地帯の河べりに、わずかの人家があるばかりで、観光には何のゆかりもない場所である。当別駅の次の小駅で降りて、線路に沿う道を徒歩で四〇分ばかりの距離に「石狩川」はあるという。まことに不便な場所にかかわらず、札幌のみならず外よりも文学同好者のグループが度々訪れるということを婦人公論誌は伝えている。

そのような辺地に立ちながらも、「石狩川」碑が人々をひきつけるのは、その作品の文学的価値と早逝した作者の文才を、人々は惜しみ、また尊敬する故であることを思わせられるのである。

「石狩川」に寄せる私の熱心は消えることなく年を経る毎に深まるばかりである。手のとどかぬ花はより美しく見えるように、未だ手にできぬ幻の「石狩川」は、古今の名作でもあるかのように、私の胸の一隅にドツカと座り込んで動きそうにもない。

追記　ここまで書いてそのまま何カ月か経った。十二月になって幸運にも「石狩川」を読むチャンスに恵れた。偶然に郷里にゆかりの

あるF・T氏が「石狩川」を持っておられることが分り氏のご好意によつて長年の渴望を充すことが出来たのである。六百頁に近いそれを、再読三読してなお感動はうすれることがなかった。しかし、この大冊も前編であり、開拓団の主従が、当別のはずれによおやくたどりついたところで終っている。

あとがきによると、つづいてこれら移住士族のその後の過程を書き進めるとあるし、映画の石狩川は完成された作品であつたから、後編も完成された筈である。奥付によつて前編の石狩川は昭和十四年五月に発行し、十五年一月には二十二版が出されたのを知つたあの戦記物一辺倒の時期にかかわらずこの地味な開拓物語りが好評で迎えられたことが知られる。時局に媚びぬ傑れた作品であればこそ広く読まれたものと思われる。

作中の人物の個性が実に生き生きと描き分けられており、ことに、明治初年の時代転換期の武士気質がよく書き表わされていて感動させられた。

今年は明治百年と云うので種々催しごとがあつたし、北海道百年祭に多数の道人が団体で訪日したが、このような年の終りに、長年渴望していた「石狩川」に出会うことができ私の感慨はふかい。思いがけなく前編にであえた如く、「石狩川」後編にもその中巡り会える機会があるように思われるし、またそうあるようにと願っている。

二度の訪問

折井嘉英

一九三六年の暮、十三年振りで故国の土を踏んだ私は、氣に掛けて居り乍ら、台湾の会社への赴任が急に早くなったため、台湾航路と東海道線との接続時間の余裕が見出せぬまゝ呉市は素通りの形になってしまった。

一九四〇年台湾引揚げの時は、連絡船を下関で下棧呉市上平原町の義弟の両親に對面することが出来た。ブラジル生れで五才になった長男と、台湾生れの長女と四人であった。

松村君の父親は海軍生活が長く、潮焼けした偉丈夫で、海軍将校の倅をとどめている。反面、子供好きの好々爺であった。母堂はこれ又長年教員生活を送った人で、乃木大将の夫人もこんなタイプではなかったか、と思われる程慈悲深い夫人であった。私夫妻が現われたことは、私の家内が松村君の妻の姉であるということ、いたく親近感を持って呉れた。息子と嫁が来た程、又私の二人の子供を遠いブラジルの孫達に逢ったように、涙を流して喜んで呉れた。

一人息子の松村君は京都の同志社大学へ入学したが、一人息子に有り勝ちな腕白老で、彼には日本での生活が物足らなく、事毎に反抗の氣配があるのに危惧を抱いた軍人の父親は、彼のブラジル渡航に賛成して、外国で鍛練するため送ったものゝ、一人息子と別れた淋しさは覆い匿せぬものがあつた様だ。

上平原町の邸宅の後方には、住宅が並び、その上の方は段だらな畑が山の峰の方まで続いていた。こゝへ登ると呉軍港は一望の中にはいり、軍艦、潜水艦などの碇泊しているのが、一つづつ数えられる絶佳な山の中腹に位していた。香港の記憶のある私は、呉の高台はよく似ているなあ、と思った。

翌朝になって、呉に軍艦扶桑が碇泊している筈だから見学しようと云うことになった。

「女乗せない軍艦」ナツチヨラン節にあるが、そうした理由からではなく、松村君の母親と未だ話し残りがある様なので、家内と三つになる長女は遠慮して、私達三人だけ見学することになった。呉軍港では松村君の父は顔がきいていた。

軍艦へはいる迄の道すがら、歩哨の態度、当直士官の応対は慇懃なもので、私まで一躍偉い人になった様な気がした。軍艦の中は、顔が写る程ピカへに磨かれて塵一つない清潔さで、大砲や機関銃などカバーで覆われて居り、威容の中に静あり、一度事あれば砲身が真ッ赤になる程撃ちまくるんです。

と説明して呉れた。私は旧海軍と先般親善訪問に来伯した自衛艦を見たとき、時代の変遷を強く感じた。

私が渡鮮前、川崎の会社の近くに新築家屋ができたので、信州から家族を呼んで住うことになった。会社から自転車で三分程の近距離だったので八畳四畳半の家は窮屈であつたが、住宅難の折から勝手なことも云えず、東京の下宿を引き払って家族と一緒に住める様になつて、間もなく松村君の父親が訪ねて来てくれた。戦争が激しくなるに

つれて、平和産業の工場は軍需工場に看板を塗り替え、各工場は徴用工で一杯になり、都会を問わず農村青年は殆ど全部徴用工に狩り出され、男は作業と半分軍事教練を義務づけられた。

老人海軍将校の肩書を持つ松村老は青年学級の舎監を拝命したので、全国でも有名な川崎の工場地帯の青年学校見学に来たのであった。一晚泊って長男と二人で川崎大師へお詣りもした。

日本の終戦に傷く落略した松村君の父親は、自刃こそしなかったが軍人であっただけに精神的な打撃をうけ健康を害ね、後輩の英霊の跡を追うが如く地上から姿を消してしまった。

一九五二年漸く海外渡航の許可が下り、渡伯ができる様になった。甥の嫁の仲人をしかかった時ではあり、勤務先の荻原製作所が、天下の東芝の下請工場になって、扇風機のモーター製作のため工場拡張、珪素鋼板の打抜機増設などで目に見えて金がいる様になった。銀行貸出は短期であり、而も東芝と言わず大資本の工場の支払の悪いことは天下一品で、下請工場泣かせが多い。中小企業が大資本に振り廻され、うだつは挙らなかった。闇米で小金を残した兄貴から融資を受けた残額三万円程あったが、兄貴の融資で急場の難関は切り抜け一息ついた処へ私の渡伯問題が持ち上った。残額は確りした証書にしていくからと言ったが『お前がいたから金を出したんだ。お前がブラジルへ行って後、借金取り立を俺がやるなんて困る。全部精算してから行って呉れ』兄貴の云うことは勿もな理である。このためにみすみす二ヶ月程遅れてしまった。

『私の渡伯が意外に延びのびになって、ブラジルへ行く前にお逢い

する機会が、危れますので松村君の注文の品は、私の郷里へ送って下さい。』オランダ船の二等切符を送って貰っていたのに、横浜で乗船する段になってから、英国の進駐軍がダーバンへ移動することになって、二等室は満員で貴方の船室がないから三等に替って下さい。という事務長と二十分程激論したものゝ、戦争敗者の言は、螳螂の斧に向うに等しく泣き寝入りして悶々の中に神戸へ着いた。神戸で二等の部屋の融通がついたから替って下さい。と云うことで替った相部屋の人は、北パのローランジャ行の青年であつた。当時オランダ船は貨物が主で、船客は従であつた。従って寄港すると荷役で一週間位港へ碇泊することが多かつた。神戸港へ一週間碇泊することになったので、急に呉市行を決心して、三宮駅から電報すると同時に車中の人となった。半ば諦めてた、松村君の母親、妹に逢えることになったことは拾いものでもあり、こよないお土産ともなった。

母親は、逢えぬものと決めていただけに、いたく喜んでくれた。『呉駅着の汽車の時間が、わからなかつたもので、美代子は二回も駅へ行ったが、姿が見えぬので失望して、来ないかも知れないと、悲観しながら、バイオリンの家庭教師の仕事で出掛けました』という。

配給状態は少しは緩和されたとは云つても一九五二年頃は、戦中、戦後と余り変りはなかつた。息子が帰つた程喜んだ松村君の母親はお風呂の用意、配給の酒の仕入などと、化しく歓待の用意をして呉れた。亡き父親の仏壇に焼香合掌した。台湾の帰り寄つた家と変りはないが、女ばかりの家は何やら物淋しく、額の軍人姿の顔は、私を相手に何か喋り掛けたい様であつた。

夕方僅かの時間を惜み後ろの高台へ登った。あれから十数年経つて軍港には、巡洋艦らしいものが二隻程碇泊しているのが眼にはいつたが、アメリカのものであると思うと私の感情は沈み勝であつた。

夕飯の仕度が整つて、四品、五品と食卓に並べられ、年老いた母親の真心が偲ばれて、胸がしめつけられた。

『私の処は女世帯で、お酒なんか買ったことないんですが、ブラジルへ行く俊明の義兄が見えた、と云つて酒屋さんに無理云つて分けて貰つて来ました。』戦争末期から後に至つても酒類の払底は、アルコール党を悩ませ、メチール禍で死んだり、盲になった時代である。『そうそうもうお欄がついたでしょうから持つて来ます。』『主人が死んでから長いことお爛したことがないので、お爛がつき過ぎた様ですが、どうぞ。』山吹色というには少し濃い様だが、呉地方産の合成酒の色だろう。と口元へ盃を持つて行つた処プーンと鼻を刺戟するものがある。十五、六才の頃、蓄膿、鼻茸、などの手術をしたので、私の嗅覚神経は頓に鈍り、都合のいゝ時も、不便な場合もある。日本酒が古くなると、ヒが来て酸っぱくなる。朝鮮の鉾山に居た時、配給で来た四斗樽の合成酒が酸っぱくなり、ある時私の家で鮮人の嘱託医と、重曹を入れて呑んだことがある。ヒの来た酒にしては酸味が強く、鼻につんと来る。『お母さん、この酒、えらい酸っぱいですね。』あらあら、と驚いて立上つたお母さんは、お勝手から二本の瓶を持つて来て『年寄りのとんだ粗そう。お酒とお酢の瓶を間違えて、すみませんすみません。』おかしいやら、恐縮するやら……。

こんな珍談を残して別れた松村君の老母は、ブラジルの一人息子

に逢って、あの年になっても孫の世話ができたらと口癖の様に云っていた。

その母親の念願が叶えられ、僅かの年月ながら、ブラジルの土になるため来た様なものであったが、戦争の前後の苦しみ、海軍軍人の主人を亡くした悲しみも、子や孫に囲まれてとても楽しい日々であったが、病魔の肝臓癌には抗し切れず、八十余才の高齢を以て、レヂストロの墓地に眠っている。

拙い私の駄文に『年寄りに恥をかかせた』などと立腹はしないであろう。

☆

☆

猫とわたし

竹内志茂子

先日ある邦字新聞の片隅にこんな記事を拝見しました。「お茶の水橋の公園に養なわれている猫族共が不愛想な顔で日向ぼっこなぞしてゐる姿を見ると実に腹立たしくなってくる。これが鳩でもあるのならかあいらしいが、猫をあのまま丸々と太らして飼っているのは附近に迷惑する人もいるだろう。あの猫族共を何とか処置出来ないものだろうか」とだが、私はここで猫族共に代って一言申し上げたいのです。

さてあの記事のようにお茶の水橋の下に鳩の家でも作って猫と置き代えたとしましょう。その結果どれ程の美觀的效果があがるでしょうか。少なくともあの公園を通る度に猫の頭を撫でて行く善良な人もいるのですから、その人達が落胆するのは明らかです。鳩群は、

だんだん繁殖してその内に鳩の撒き散らす汚物や羽毛でその附近のビル窓はくもり、甚大な迷惑が及ぶのではないかと思います。現在ブラジリアでも多くなり過ぎた鳩の為に悩んでいるとのことですし諸外国の公園に於いても同様な結果を招いて鳩の処分に困っている国もあるのですから、一概に鳩が良いの猫が悪いのとは云いきれないと思います。お茶の水橋の下へいってはあの猫族共を愛しつつづけて奉仕している市民もいることです。或る日あの橋を通りました時に猫の食事を運んでいた四十才前後の夫婦者らしき人を見かけたことがありましたが、それはそれは涙ぐましい風景でした。その人が呼びますと彼方から此方からさまざまな毛色の猫が、集って来るのです。早速大きなお鍋に入れて来た食物を分け与えています。所々に置いてある水入れの空缶を洗ったり足なぞケガしている猫には手当をしてほうたいをしている。その真剣な姿に私は強く打たれました。猫に対して純真な愛情がなければ出来ないことだと思いました。猫嫌いな人間には物好きとは思えないでしょうが、犬でも熊でも動物を愛する心に変りはないのです。猫、こんな可愛い者はおりません。性質は鋭敏で利巧でちよつとお澄し屋で威厳もあります。

私が愉快に思いますのは、芸術家と云われる人に猫好きな人が多い

ということです。フランスの或る作家は百二十四の猫の住家を建ててその飼育を夫人に託しますと安心して亡くなられたということですし、またある未亡人は三四の猫に何百万という財産を残し、その財産は最後の猫が死んでから猫の後見者の手に渡るように手続をして亡くなっております。猫への愛情のなんと行き届いたことでしょう。日本では「吾輩は猫である」と言った人もいましたし、女優の轟夕起子さんは昨年亡くなれましたが、この方の御主人の映画監督さんみたいなへんな猫好きです。以前雑誌のグラフに炬燵に向い合ったお二人の写真が載っておりますが、御主人の肩の上や腕の中、炬燵の上にと五、六匹の猫の姿も写っております。そして監督さんがこう云っておられるのです。「猫がいるから僕は無上にたのしくなるんだ。猫を想うときこの人生に悦びがあるんだと、僕は妻に語り、妻も至極満足して猫といるこの幸せを悦び合っている」と何んとも円満なお二人のお顔でした。

こうしてみますと猫が人間に与える美德も買ってやらねばなりません。私の家の猫はタマと申しますが、生れてようやく親の乳を離れた頃に、小さな紙袋の中に入れられて、アベニーダ、サンジョンから夫の腕に抱かれてその頃私達の住んでいた、ビラソーニャの家に貰われて来ました。焦茶色の三毛で中高な鼻の頭の可愛いらしい美人猫です。この猫の尻尾の先の毛だけがぼつりとつまんだように真白いのです。近所の子供たちが遊びに来てはよく聞いたものです。「おばさんこの猫のしっぽの先だけが白いのね、どうしてなの」と近頃仲間に入ってきた新来の子エ子ちゃんがたづねますので、私は話して聞かせまし

た。

「このタマはチエ子ちゃんのようにとてもお利巧だからねずみの出て来そうな穴の口の所へ、しつぽの先の白いところをすーっと伸ばして置いて知らん顔をして寝そべっています。すると、ねずみが穴から覗いて言うのです。

「おやおやわたしの大好物のお餅が落ちているぞ、早くご馳走になろうエへへへ」とたいへん喜んでパクリと口の中え入れます。この時を待っていたタマが両手でねずみの首をさっと押えます。ねずみは魔術に掛ったように身動きも出来ません。

このようにしてタマは白い尻尾のおかげでいくらでもねずみを取る事が出来るのです。終り。』

幼い子供たちはそれで得心して一そうタマを可愛いがりました。このタマと私のつきあいも丸十二年になります。

今では前歯が落ちてあの頃のように敏捷な身体の動きも見られなくなりましたが、それでもまだまだ闘志は充分にあつて家の庭に犬など入って来たものなら全部の毛を逆立てて向つていくのを止めません。眼の当りをしたたか打たれた犬がキャンキャンと悲鳴を上げて逃げ出して行くと、怒りでふくれ上っているタマを私は抱き上げます。するとタマはゴロゴロとのどを鳴らしてちよつと私の頬をなめます。

こうして私とタマは一緒に暮して来ました。この先もう何年この平和な生活があるのやら、私とタマはこの次に生まれて来ても、またその次に生れ変つて来ても何処かで今のようにたのしく、一緒に暮しているような気がしてならないのです。

☆

ホトトギス考

八卷耕土

俳誌ホトトギスの命名由来に就いて一般には、野鳥の時鳥だけを想起されています。

木蔭八月号閑話として、自分の卵を人の巢に生みつける、狡い鳥の名を思い出すとある。

近着の「農業及園芸」季刊特集号ガーデン・ライフの春号に秋の銘花ホトトギスとして特別寄稿を鈴木吉五郎氏がされています。

曰く、徳川時代より、粹好みの文人墨客に愛好され作られて来たが、その独特の風格は今も尚、現代人を魅了する新鮮さを持っている。従って全国各地には、沢山の原種や変種や改良種や外国種もあるだろうとあり、重にホトトギス草の専門研究家、名古屋の村野時哉氏の自筆原図を紹介、種類の由来や台湾種などの栽培技術を指導しています。先輩である村野氏（昭和十六年歿六七才）の遺稿「村野花譜」より写生原図を十六枚写真数葉を、載せて約廿八種類の特性を詳細に説明されている。

主なる種類として、黄花ホトトギス、は前に熊野、伊勢の産は誤りで名古屋で作出された種類であろうとし、その花種でも数種があり、

産地が詳かでない様だ。チャボホトトギスは鉢植用によく、紀州産ならん、としてある。

台湾ホトトギスは、文久元年の「草本図説」（巻七）飯沼慾斎著、油点草とある。フウトウホトトギスと云われてるのは、台湾ホトトギスの変種と推測すとある。タマガワホトトギスは、元禄七年「花壇地錦抄」にすでに載っている相だ。紫黒ホトトギスは文久年間に知られたが、今は絶種になった様だとある。純白ホトトギス亦是、白花ホトトギスは古代、山郭公と呼んだのも面白い。ヤマホトトギスは、文化六年小原良貴著「本草余纂」に既に記載されており、亦ヤマジノホトトギスは栃木県の産とあり、ニオイホトトギスは台湾種と内地産の交配種だったが、これも爆災で、存在が不明とのこと。いずれも日本で、九月、十月頃の花李で花卉の内面に紫色か赭紫の斑点があり、その風姿が、益鳥のホトトギスの羽根の斑点と似たるを古人の、命名の由縁だろうと思う。ジウロウホトトギスは、土佐、日向の産であり、サガミノホトトギスは、相模の国の山間部に産し、スルガジウロウホトトギスは駿河の産、キバナノツキヌキホトトギスは、九州尾鈴山の稀品であり、タカクマホトトギスは、高隈山の産、チャボホトトギスは静岡県西部の産とある。

現在栽培種は大方常緑性で、多湿を好み、半蔭地が、発育が良い相だ。他にヒマラヤには芳香種があり、まだ内地にはない様子です。

手元の「全植物図鑑」には、ホトトギス草は、单子葉類、百合科として、三種の図解と種類の説明あり、本邦にては山間陰湿の地に自生し、又観賞栽培もするとある。茎の高さ一尺から二尺になり、中には

蔓性のもある。どの種も花後葫果を生ず。花色は主に淡紫、晴紫、黄色及白色で、内面に斑点を鮮明に生ずるとあります。孝名はホトトギス (Tricyrtis Hirata) 黄花ホトトギスは (Tricyrtis Flava) ヤマホトトギスは (Tricyrtis Macrodonta) であり、いずれも多年性宿根草で種子蒔で繁殖出来るとあり、私は日本から種子か苗を持参して貰いたく、訪日の友人に依頼しましたが如何になりますか、このブラジルで文人が、彼の鈴虫の様に愛育したいと思います。

因に、虚子の歳時記には例句として時鳥は子規の二句が載って、ホトトギス草は花の説明丈けで、例句が一句もなく、季題として折角採用し乍ら閑散に取扱ってあります。果してホトトギス草例句が過去現在まで、秀句がなかったかと疑問を抱くものであります。

曾て子規は自らの号をほととぎすと読ませたる事に憶い当る時、植物の藤の短歌や柿の句を遣されている本人が、文人として花ホトトギスにもかなり関心を持ったのではないかと、想起するものであります。

☆

《創作》

野たれ死 （58枚）

三瀬 喜代志

一年ぶりに、家族と共に正月を楽しもうと思つて家に帰つて来たものの、原田牧夫は生れて始めての屈辱と怒りで家を飛び出さねばならなかった。彼は、心で泣いていた。心残りなのは、牧夫の八十才になる母鶴をどうしようかということであつた。

「お母さんー済みません」

牧夫は血の出るような思いで叫んだ。その後から

「お母さん、貴方も悪いのだー」

と叫ばずにいられなかった。そして

「近子の馬鹿やろう」

牧夫は、オニブスの座席で、頬を窓硝子に押しあててホロホロと涙を流した。妻の近子に教えこまれた五人の子供も遂に父に背いてしまった。

昨日からの雨がまだ続いている。広々とした南マットグロッソの高原牧場は、しつとりと雨を吸って若芽が萌えている。これが、楽しい旅だったら、と牧夫は悲しかった。

牧夫は、都市周辺だけで仕事を探して歩く無免許の歯医者である。自分を入れて八人の口を養うためには、家を空けて旅から旅へ油断なく収入を追わねばならない。月月欠かさぬ送金で、家族は不安なく生きてゆける。しかし、と牧夫は頭を左右に振った。

仲の悪い姑と嫁、中を採るべき立場にある夫の永い出稼ぎによる不在。それだけで充分爆発する条件を備えている。その上に、他人が告げる夫の品行の噂。若い時から神経質な近子のどうにもならない錯乱。

「貴方が憎いわ。貴方は、妾を苦しめるためにわざと出稼ぎをして
いるんだわ。別れて、別れて、妾、辛抱 出来ない。お母さんを看る
のも御免だわ」 そう喚く近子の側に、五人の子供は一固りになって
父親を睨み続けた。

長女のマルガリイダだけは、と思ったが、

「ママエが可哀そう。わたし裁縫をしてみんなを看るわ。」

そう言うのと、誰よりも激しく、憎悪に充ちた眼で父を拒否した。

牧夫は信じられなかった。起きて来ない母の鶴の枕辺に近附いた牧
夫は、老いて痩せ細ってはいるが、強い自尊心に、傷いた反抗を昂ら
せている母の眼を見た。

「牧夫よ、わたしは近子といっしよに暮らすはいやぢや。わたしは
殺される。何とかしておくれ」 そう言うのと、萎びた手で眼を覆った。
牧夫の胸ははげしく痛んだ。絶望感に打ち拉かれて何うしてよいかさ
え目途が立たなかった。老いて尚、若い者に負けまいとする気強い母
に怒りさえ覚えた。

「お母さん。僕は、今迄何べんも言ってるじゃないか。年をとった
ら子供と同じになりなさいと。見て貰おうと思ったら余り気強いこと
を言っちゃ駄目ぢや。嫌われないようにせんと損ぢやないか―」

此の年になっても、凡帳面で厳格な女らしさに乏しい母が憎かつ

た。

「牧夫よ、わたしはお前の所で暮したい」

「お母さん―僕がどんな仕事をしているか知っておる筈ぢや。一所に二ヶ月三ヶ月、何時も新しい仕事場を探して歩いているのを知らん事はないぢやろう。」

そう言つて、母一人さえ連れて暮らせない自分が情なかつた。不自然な家庭生活を、敢て食うがためだと言訳しようとする己に腹が立つた。そして、妹の、中本健一の妻になっているしのぶを思い浮べた。

「お母さん―しのぶの所へ行きなさい。僕が落付くようになったら引き取るから、それ迄世話になるように。僕が相談して来る」母は返事をしなかつた。でも、此処まで来てしまったのは最後を意味する。外に方法はない。長年、争い続けて来た姑と嫁とは決定的な爆発をしてしまった。今更、近子を宥めてみても何にもならない。近子は、繰り返えし繰り返えし夫婦の離別を喚き立てているのだ。子供等も全部牧夫に背を向けている。もう決心すべき段階に来ているのだ。然し、これは永久にというわけではなからう。何時か近子も気が付くだろう。たとえ、妻は、復縁を望まないとしても、子供は、たとい一人の子でも、父に対してとつた態度を反省する時が来るかも知れない。現在の手段として、こうなつてしまった以上、母は妹のしのぶに頼む以外に方法がない。

雨は、カンポ・グランデに近付くにつれて小降りになった。でも、青空は見えず、地平線も灰色の雲に融け込んで、一層陰鬱な空模様だった。

牧夫は、オニブスから汽車に乗換えて、妹の住むバウルー迄行かなければならない。

正月分の生活費として持ってきた金は、荒れに荒れた近子に手渡すことはできず、その必要も無さそうな妻の態度でもあったので、そのまま牧夫のバウルー行きの旅費に切り代えることになった。近所の人のお話では、牧夫が送金する金は大分銀行に蓄め込んで、一寸した額の張る買物なんか小切手でしていたということだ。マルガリーダが、縫物で稼ぐので結構一家は食えるだろう、とも聞いた。夫婦とは言っても、ここ数年も夫婦関係と言えば、正月の帰省した時以外は全然なかった。変則した別居生活が姑との不和に拍車をかけたのだろうか。原因が、この自分にある、と考えたくない牧夫だった。生活する、食うことに、あれ程真剣になって働いた自分の言い分に正しさを認めたかった。それを、妻としての近子に認めさせようとして激突した。非は近子の愛情欠乏にあると思った。歯科医として持っている技術も、無資格の故に、色々な仕事をしてきた。野菜作りもした。然しそれでは子供の教育迄出来る暮しが出来なかった。食う為には、子供を育てるためには、止むを得ぬ歯科医としての復活だったのだ。そうした家庭の事情に理解のない妻を、お前は馬鹿だ、と罵った。姑の鶴も、息子に同調して近子を蔑った。

遂には一家は真二つに割れてしまった。牧夫は、何故、母が近子の味方になって呉れなかったかと母に対しての怒りがこみ上げた。救いがない破局に陥ちてしまった。牧夫は、自分が憫れだった。涙は、自分が可愛相だと思いう自己弁護の涙だった。牧夫自身では、母の性格に

似て口喧しい人間であることに気付いていながら、家庭破壊の原因の一つであることを認めようとしなかった。それは男のエゴイズムではなからうか。感情に脆い、涙脆いという性質が常にそのような責任廻避への理由となるように。

○

○

しのぶの夫健一は歯科医である。健一は日本からの歯科医で、牧夫は妹輦の彼から技術を習ったのである。その当時はまだ、うまく手を廻せば歯科大学を卒業しなくても免許証を手に入れる事が出来た。その方法で、歯科医の看板を懸けて営業している邦人一世も可成りあった。所が、牧夫の場合は順調に免状を入手することが出来なかった。リオの弁護士に依頼してあったが、金ばかり要求されて実現しなかった。揚句の果は、入手の資金に詰まって運動を放棄したので、田舎の、偽医者摘発の怖れのない所を転々としなければならなくなったのである。勿論、現今では、法律上歯科医大を卒業しない限り、歯医者と名乗ることは許されない。牧夫も、職業として公言出来ない暗さに生きねばならない悲しい移民の姿であった。

しのぶ達夫婦には四人の子があった。上の二人はもう大学に入っている。家庭は平和で希望に満ちた幸福な一家であった。だが、どうしてか、母の鶴は此の娘の所を嫌って、滅多に寄らない。そして仲の悪い近子の世話を受けて来た。母としては跡取り息子の所で世話になるのは当然だと言うのである。明治の封建思想をそっくり持っている母である。嫁に対して優しいことばをかけるなんて、親の権威にかかわ

るとさえ思っているらしいのである。言葉のはしばしにそれが現われる。実の我が子に両手をついて詫びをさす程の母であってみれば、そう思うのも仕方がないというより外にない。牧夫は、その母の躰けに染って成人した。母への孝養が先に立って、妻を労わることの出来ない男であつた。そのような孝養は外見だけで、心から母を慕うということになれなかつた。牧夫は、知らず知らず母への反抗が自分の妻や子に対する口やかましきという形をとって現れたことには気がつかなかつた。しのぶは、牧夫の素直なのと違って、よく母に喰つてかかつた。何うしても負けてはいなかつた。母がしのぶの婚家を避けるのもそこに原因があるのかもしれない。鶴は、強い者には弱くなるという封建思想の悪い一面がたしかにあつた。

妹夫婦と、その夜は晩くまで語り合つた。

しのぶは言つた。

「お母さんは、妾がみます。兄さんはかわいそうな人ね。いいでしょー」

そして夫の顔をうかがうように見た。

「いいとも。僕等がみて上げるよ。牧さん、連れて来なさい」

健一も快く引き受けた。そして訊ねた。

「歯医者を一度中断して、また始めて何年になるかね。つまり家を出るようになってー」

「八年になる!」

「兄さん」

しのぶが声をはずませて

「近姉さんは、あたしと同じ齡よ。八年前からと 言えば幾つ？
あたし四十五だから！ 三十七よ。三十七から未亡人みたいに。呆れ
たわね兄さん。年に何回位、嫂さんの所へ還るの？」

牧夫の眼を見詰めて言った。

「正月に帰るきりさー」

「まあー」

しのぶは夫と顔を見合せた。健一は、黙ったまま 肯いた。

「兄さん。兄さんそれ平氣なの？ まあ男はいいわ、ね。女を買お
うと思えば買えるんだもの。それぢや、あんまりだわ。近姉さんでな
くたって、誰だって頭に来るわよ。呆れてものが言えないわ。家庭を
こわしたのは兄さんよー」

牧夫は、妹のはげしい言葉に返事も出来ず眼をパチクリさせてい
た。

「いくら生活の為だからだったって、一年中家を空けるなんて。それ
も一年間の海外出張ってのはよくあることだわ。八年間もー」

そこで、しのぶは言葉を切ったが、続けて言った。

もう大きな声ではなかった。

「兄さん1家庭を破壊して迄暮しのため、なんて理由は通用しない
わ。食べてゆくのも家庭があつてこそぢやないの。商売でも、百姓で
もいいぢやないの。家内一つになつて働くことの方がどんなに幸福
か。家庭がこわれる位なら、お金なんて儲けなくていいわ。兄さん

ー そんなにお金欲しかったの？ 家族を犠牲にしてまで。おか
しいわーねえあなたー」

温和な健一は「そうだな」と言つて妻に肯いた。

「兄さんー兄さんは、家庭から逃げ出したかったのぢやないの？」

お母さんと近姉さんからーそれなら卑怯よ。男の恥よ。」

妹の指摘は間違つていゝとは言えない。牧夫は、返答も出来ないでいた。鋭い妹の思考力には、子供の頃から感心していた。パウルーを訪ねるのにも、ひそかに、妹の判断を怖れてはいたものの、斯うまでやられるとは思わなかつた。

「近姉さんは、どうしても別れると言うの？ 兄さん」

「そうだ。」

「仕方ないわね。お母さんは妾が引き取つてお世話するわ。それで？ 兄さんは？」

「俺は、働いただけ全部近子に送つてー俺は一文もない。これから、自分の金を作るより外ない」

「大変ねー 兄さん。かわいそうよ。でも、頑張つてーね兄さん」
健一は、シガーロを口に銜え、牧夫にも推めて言つた。

「牧さんー確かに、夫婦が別に暮らすのは好くない。一緒に暮らしても、喧嘩ばかりしている夫婦もあるけど、離婚の比率としては性の不満が大きな原因を占める場合が多いんじゃないか。その上に姑との不和があれば、もう助からんのぢやないかな」

「失敗だつた。俺にも責任はあるだろう。が然し、今更こんな事言いたくないが、近子は全く悪妻ぢやー」

「兄さんーやつぱり、本心ね。家庭から離れたかつたのね」

「しのぶーそう兄を責めてはいかん。仮りにそうした原因があつた

としても、もう、来る所へ来て了った事ぢやないか。近姉さんは子供等と生活して行く自信があるだろうし、おばあさんは自分等の所へ来て貰う。残る問題は牧さんの今後の事だ。どうかね？ 牧さん。頑張れるかね。何だったら僕が更生資金を出してもいいよ」

「いやーその気持だけで充分。有難い。でも、俺の仕事は相当の収入もあるし、自分の処置は自分でやるよ。しのぶーおばあさんは頼む」

深夜になっても、話は同じことの繰り返しになるばかりだった。久しぶりの顔合わせであつてみても、楽しい話題が出る筈もなかった。さつそく、牧夫は母を連れて来る事に決めて、その夜は妹の所に泊った。牧夫は、精神的な疲労で頭が痛んで寝付かれず、煙草ばかり吹くので余計疲れた。また近子の所へ行かねばならない事が苦になった。もう一回近子を説得してみようか、とも考えた。しかし、近子の錯乱状態を思えば、それも不可能だろう。夫を打ち見る眼は、ぞつとする程憎しみに充ちている。今にも発狂するのではないか、と思う程だ。再び顔を合わすのが恐ろしかった。出来れば、このまま、家へは寄らず、今仕事をしている田舎町のジャトバへ帰って行きたかった。でも母の事がある。放っておくわけには行かない。あ、そうだ。牧夫は、ふと、この迎えに行く仕事を健一氏に頼めないものだろうかとか考えた。でも、それでは余り卑怯ぢやないか。男として、あんまり虫がよ過ぎはしないか。実の我が母ぢやないか。この弱虫奴。心の底から吹き上げる声に驚ろいて反省の鞭をふり上げた。牧夫は嘗てない苦しい夜を輾転とした。

ジャトバの町は、町という程体裁の整った町ではない。クヤバ行き
のオニブスが、カンポグランデを出て、はじめて一休みする所という
位で、家は二十軒位しかない。それでも、教会と小学校があり、ちや
んと、プレフエイツラがある。オニブスの停まる所だけ十軒位の家
が町並らしく集って、小学生や教会詣りの人々が歩く時間になると、
幾らかの人達にとっては、なつかしい故里を眺めることが出来るであ
ろう。四軒位離れた所に、日本人が集団しているボンフキンという植
民地がある。その植民地の中心地がちよつとした町になっていて、買
物なども、ジャトバまで出て来る必要がないので、ジャトバは、一日
の大半がひっそりと山の中に沈んだような静けさだった。家を持って
いる人の多くは、近くに牧場や耕地を持っている地主で、ボールや雑
貨店はこのような人が経営していた。オニブスが停って、客がレイチ
を飲んだり、ポーロやパステスを摘む時間になると、ミルトンと妻の
アンナの店は忙しかった。

牧夫は、一部屋を借りているので、そんな時は店に出て、客の応待を
手伝った。牧夫は最初、日系人の多いボンフキンの町に住んで仕事を
する積りであったが、ミルトンが強引に自分の家へ引張って来たので
ある。それで牧夫は、ミルトンの家と、ボンフキンの町の二ヶ所で患
者を診ることにしている。週の内、金曜から日曜にかけてをボンフキ
ン出張に当てて、かけ持ちの暮しをしている。牧夫は、伯人間に頗る
好評であった。それは、歯医者としての技術より誠実を買われている
ようだ。特に、独りで暮らす男として特に不安がられる女の患者から
信用されて、その点で男達の警戒を受けないためであるようだ。ミル

トンなどは牧夫を絶対信用して、妻のアンナと兄妹のように親しくするのを微笑で眺める程である。

ボンフエン植民地に住む武仲松雄は、牧夫とは特別親しくしている。或る時、牧夫は武仲に語ったことがある。

「私だって男なんです。しかも家族と離れて独りです。時には、女
の患者に変な気を持つこともあります。でも私は、仕事が可愛い
のです。一度、変な噂が立ったら、もうおしまいです。だから、今迄
一度も悪戯をしたことなんかありません」

さもあるう。牧夫は邦人植民地でも、多数の女性患者に接している
が、安心して治療を受けに通って来る。月月の、家族の生活費を確保
するための張り詰めた自制心で今日迄送った月日である。近子に中傷
した人が誰か判らないが、牧夫の女性関係は至って明朗であつたので
ある。年一回の夫婦顔合せでは妻はノイローゼにもなるう。しかも八
年も続いているのである。牧夫が、どのように説明しても近子とし
てはもう何うにもならないのであろう。

老母をしのぶの所へ連れて行って、ジャトバに帰るなり牧夫は武仲家
を訪れた。

「帰ったかーゆっくりだったな。奥さんに一年分のサービスをして
来たなー」

武仲はいつものように明るい顔で牧夫を迎えた。

夫人の文子も、

「原田さんーお元気で。奥さんも喜ばれたでしょー」

「丁度いい。ゆっくりジャンタでもして行けよー 何んだ、元気な

いじゃないか――」牧夫は笑顔こそしているが、言葉が少ないのを武仲はとがめたのであろう。

「何うかあったのか？ 子供達は？」

武仲は重ねて追求した。牧夫は我知らず顔が頑になるのを覚えた。

「実は――」

そう言いかけて言葉を切った。

「うん――何かあったな――」

「実は武仲さん――私は、家族から捨てられました」

「なに――」

「家内からも、子供からも、――」

「そんな馬鹿な――」

「いえ――ほんとうです。とうとう爆発したんです。」

牧夫は、我が家の今度の事情を話した。

「まあ――」

夫人の文子は、あり得からざる事の様に呆れて言葉もなかった。武仲は何も言わなかった。暫くして、

「世の中には、とんでもない事もあり得るからな――」

と言って沈痛な顔をした。

「私は、家内に言いました。最後のことばとして 俺は言っておく。五人の子は俺の子だ。きっちり一年間だけ余裕をおこう。一年間が前の反省の期間だ。若し、一年過ぎても、お前が俺に詫びがない時は、俺もお前を諦める。それから俺は、俺自身のために生きねばならん。もう取り返しは附かんものと思え――」

「うんーそうしたら奥さんは？」

「あ奴は横を向いてー絶対に、と言ったきりです」

「縮望だなーそこ迄采たら」

その夜は武仲家に泊った。牧夫は、武仲から、色々と、批判されたり、激励されたりして夜中迄昂奮して語り合った。だが、最早や解決の可能性のない話であってみれば、しよせん、無駄話になってしまったのであった。

翌朝、牧夫が辞して帰る時も、武仲は昨夜の結論を繰り返した。

「子供への希望は捨てるな。それから、君の人生のやり直しに元氣を出せ。いい相手があれば結婚するのもいい」

牧夫は、この実直な年上の友人に心から感謝した。

身上の相談相手になって呉れるだろう夫妻に、涙をためて礼を言ってお家を出た。

ジャトバの町筋の下を流れる溪川の音が聞える。

牧夫は、患者用の椅子にぼう然と腰を下して考えまいと務めながら、風に吹き流される雲のように湧いてくる思いに身を沈めていた。

妹のしのぶから指摘された自己逃避が、卑怯な狡さとなって身を噛む。結果的には、一人の母さえ看れない親不孝につながる。今更ら、妻を責めることさえ責任転嫁の狡猾さが自身を嘲笑するかのように思える。ほんとうは、俺自身の馬鹿から生じた悲劇なんだ、と思われずにいられなかった。自分で、自分を孤独に陥しているのぢやないか。阿呆だ、俺は、牧夫はこの忌わしい反省を打ちなぐるように大きく手を振り下した。

アンナが扉口に立った。

「何うしたの？ マキー 独りで何をつぶやいてるの？」

牧夫は、背中からの声に驚いてふり向き、無理な笑顔をした。

「どうかしてるのね。マキは。変だわ。今度帰って来てからのマキは違ってるわ。」

アンナはそう言つて牧夫の寝台に腰を下した。主人のミルトンは朝からフアゼンダへ出かけていた。

「何んでもないよードナアンナ。ちよつとばかりー」

「ちよつと、何うしたのよ？」

少し黒い血が混っているらしい健康で朗らかなアンナは白い綺麗な歯を見せて牧夫をのぞき込むように見た。

牧夫は、未だ一家の出来事については、何一つミルトン夫妻に話してはいなかった。相談相手として訊いて貰いたい武仲氏以外には誰にも洩してはなかった。こんな話を聞かされた者は、誰でも男としての牧夫を喘うだろう。妻子に捨てられた男として軽蔑するだろう。こんな恥かしい事って世間にあるだろうか。特に、外人に話したくはなかった。でも外人はどう解釈するだろうか。牧夫はふとそんな風に、アンナの顔を見て思った。アンナは田舎の無智な女ではない。カトリック系のデナジオも卒業している。

主人のミルトン氏も中学を出ている。夫妻の年齢差はちよつと異常と思われるが、此の事に関しては、夫妻から何も聞いていない。アンナはまだ三十にもならないが、ミルトン氏は五十に近いだろう。子供を生んだ事のないアンナは、若くて発刺としている。

ミルトン氏の家庭事情については牧夫は何も知らない。アンナは、家庭とか、結婚とかについてどんな考えを持っているだろうか。仮りに、アンナが、そうした問題に深い理解があるとしても、日本人の考え方とは比較になる筈がない。けれども、牧夫はちよつとした好奇の心を抱いた。

「ドナアンナ　―　貴方はミルトン氏と結婚して何年になるの？」

「あら　―　わたし、マキのこと聞いてあげようとしたのに、わたしの事を聞くの？　それと何か関係あるの？」

「そう―結婚生活というものは、誰にとつても　興味がある筈だから　―」

アンナは、大きな目玉をクルリと動かして言った。

「あ　―　わかったわ。マキの憂鬱の原因が。奥さんと何かあったのね―」

「えらいなあ、ドナアンナは。とても理解が早い―」

「やっぱり　―　そう？」

「ず星―」

「マキ　―　若し、そうだったら、マキの方が悪いんじゃない？」

「どうして―」

アンナは、当たり前だと謂わんばかりに語勢を強めて言った。

「マキは、奥さんを放ったらかしてるぢやないの。誰だって、そんな亭主を持ったら、女は心棒出来ないわ。わたし―奥さんに同情するわ―」

「ドナアンナ―あなたはまだ若いからそう思うのも無理ない。僕達

には子供が五人もあるよ。結婚生活も永い。食うがために、僕は、うして出稼ぎして生活費は、一ヶ月もハイヤせずに送金している。妻は、その五人の子供のために、夫と協力すべきぢやないだろうか――

ドナアンナ、貴女は、そうした問題をどう考える？」

アンナは、眼を細めたり、大きく見開いたりしていた。明らかに、焦躁を感じている様子である。

「夫婦が別れて暮らして、子供のために協力するの？」

「僕には、歯医者ドクメントが無い――」

「アラ――それが理由になるの？　わたし、判らないわ――ねえ、マキ。ドクメントが無いから夫婦生活をギセイにしろって言うの、わからないわ、わたし――」

無理もない、と牧夫は思った。家庭中心に考えたがる日本人の行動が、夫婦を主体として出来る家庭への考え方が根本的に違うのであるから、これは論争以前の問題である。牧夫は、言葉を一步進めてみようと思った。

「ドナアンナ――僕は君の主張通りにする。つまり別れる。僕はこれからソルテイロになるよ――」

「奥さんには好い人が出来たの？」

「いや――それは違う。子供と暮らすことになるんだ。妻は四十五にもなるんだよ――アンナ」

「でも――」

アンナは頸を傾げて一寸考える風をして

「マキと別れたら男が出来るわ――」

と言った。

牧夫としてはそれは考えてもみた事がなかった。

「妻は、そんな魅力的な女じゃない　―」

アンナは性急に抗議した。

「マキが、魅力がないと言うだけよ―」

「あつ、それは妻の自由だ。」

牧夫は、やる瀬ない気持ちが出た。男女が結び合つてその基盤の上に築かれる生活という観念からすれば、牧夫は完全に失敗者であると認めぬわけにゆかなかった。

突然、牧夫は話題を代えた。

「若くて美しい奥さん―」

「アラ　― 嫌だわ、マキ」

「貴方はミルトン氏と、とても幸福そうですね」

アンナは頬を紅潮させて、ドスンと、腰を上げて寝台に打ちつけた。そして、声を少し落して言った。

「そう見える？　マキ」

「ミルトン氏はやさしいし、貴女は大変朗らかだ。幸福だと思わずにいられませんよ」

「そうね　― 人間は余り欲張つちや駄目ね。マキ　― わたし達六十点よ―」

「おや　― 何の事だろう　―」

「説明は出来ないわ。六十点で満足よ。わたし」

牧夫は、顔を天井に向けて、独り言のようにつぶやいた。

「お金に不自由はない。男らしい夫、やさしい夫――アンナ夫人は幸福に包まれて夜を迎える――」

アンナは声を立てて笑った。

「アラ――小説にありそうだわ――そして夫は不能者――」

「えっ――なんだって？」

「小説よ、これ、マキ――」

「そうですね――ドナアンナ。人間は面白いですね――」

「そうよ――マキ、人間は誰だって、何かを背負っていない人なんか居ないのぢやない。その背負ってる重みで人間は前に歩めるとちがうかしら。」

牧夫は、チラリとアンナ夫人の生活の内側を覗き見た思いがした。その時、店番の雇っている子供が、お客が呼んでいると言ったのでアンナは立って出て行った。

牧夫は、永い間の職業的神聖が身につき、男と女が常に卑猥な関係のあるものとして見られる世の慣しには遠ざかっていたようである。これは、牧夫が持つ特異性と言えるものかも知れないが、兎に角、性的に溺れるような苦しみを経験したことがなかった。職業柄女の顔は隅々まで観察することが出来る。

アツと驚く程女の耳たぶの美しい艶と造形に感嘆させられる時がある。首筋の肌の色が綺麗だな、と思う女の身近かに自分が居ると感ずる時もあるにはある。けれども、それが牧夫の性感情を揺ぶるという迄には至らない。むしろ、女の美しさより、余り接近するため、その女が発散する体臭に面喰らう時がある位である。牧夫は、自分でこれ

を職業の秘密と呼んでいる。

牧夫は、妻の近子と別れ離れ住んでいて、彼女の肉体を恋い慕うことのなかった自分を発見して呆れることがあった。夫婦の絆は既に切れているとでもいうのだろうか。先程アンナがふと洩らした、不能者、という言葉が妙に気に懸った。だが、牧夫は自分は不能者でないことを知っている。然し、男性としての旺盛な欲望にも欠けているのかも知れないと思った。女を楽しむ形が職業の陰にかくれていることには気が附かなかった。その証拠に、牧夫は五十才にもなりながら夢精を楽しむ習性を持っていたからである。此の事は、牧夫が変態性欲者だと言えないだろうか。美しい女の患者に対して愛想のよい反面で、精神的にはシニカルな冷笑を浮べているのではないだろうか。牧夫は、子供達が離れ去った事には耐え難いほど悲しかった。然し妻を失ったことで内心にはほのかな明るさを感じていることに戸惑いを感じるのだった。

ジャトバの夜は、街道を走る自動車の音がひっきりなしに続いている。車の音の切れ目には溪流の音がひびいて来る。ミルトンの店も九時には閉める。

それ迄に通る車の運転手達は殆ど一杯のカフェを呑むために立ち寄って来る。その応対で結構忙しい。

牧夫も暇な時は必ず店に出て手伝う。そうした小まめな彼からはミルトン氏は月月の部屋代と食事費を取ろうとはしない。でも牧夫はミルトン氏が見ている前でアンナの手にその代金を手渡すのである。牧夫のそうした凡帳面さがミルトン氏の激賞となり、伝え聞く伯人達の尊

敬の標になっているらしいのである。

その日は土曜日であつた。近くでバイレがあるのか、陽気なパン
ドーラが響いて来る。

「マキ　ー　もう店を閉めよう。ジョンの家のバイレに行かないか
い」

ミルトン氏が牧夫を誘つた。

「駄目だよ今日は。ミルトン、僕は今からシャツパ造りだ」

「おやー仕事かい。俺は行つて来るぜ、アンナの奴はバイレ嫌いだ
から俺は一人で行くよ」

そう言つて彼は出かけて行つた。出かける前にミルトンはコニヤツ
キをグツと煽つた。

店閉まいは牧夫とアンナと子供のジョゼと三人ですますと、ジョゼ
は自分の家へ歸つて行つた。

「嫌ねえ　ー　バイレなんてー」

アンナはそう言つと、牧夫に眼顔で何か合図してジエラデイラから
セルベジャを一本掴んでバルコンに置いた。

「マキ　ー　今夜はいっしょに一本飲もうよ」

牧夫は呆れたように女を見ていた。

「バーム　ー　マキ」

アンナはそう言つと二つのコップに注ぎ、一つを持って手を差し伸
べた。牧夫も無言でコップを握ると、二つはカチツと音を立てて接触
した。

「サウーデ」

アンナは低声でそう言うとニツと笑った。

「二度も見たことがない　―　こんな事」

牧夫は不思議なこともあるものだ、と言い度げな顔をしてそう言った。アンナは、不意に厳粛な面持ちでつぶやいた。

「静かになさい―マキ。マキと妾のため。貴男は先つきミルトンに今夜は仕事をすると言ったわね。いい！　後で、マキはシャツパ作りをなさいね。妾は寝るわよ　―」

「えっ！」

牧夫は驚いた。彼は狼狽した。アンナは、それを眼でぐっと押えた。

「酔ったわ」

アンナは眼をとろつかせて少し身体をふらつかせた。

「アラ　―　酔ったわ。マキ、何してるのよ。貴男は妾をゼグーラするのよ。そして　―」　牧夫はアンナのリードに誘われて女の腕を握った。

「さ　―　早く、妾を連れて行くのよ。そして明日は、すっかり今夜の事を忘れるのよ」

「でも、ミルトンが　―」

「アラ　―　彼の人は知る筈がないぢやない。」

牧夫の血管は急激に音を立てて騒いだ。嘗てない嵐に巻き込まれた男の官能は極度に疼いた。牧夫は赤裸々な女の性に圧倒されて、はげしくそれに抵抗する男を自覚した。

滑らかなアコーデオンの流れと、狂気のようなパンドーラが混り合ったやる瀬ない音楽が、牧夫を一瞬別な男にしてしまった。

しばらく休んでいたボンフキンの植民地に出張した牧夫は武仲氏の家を訪れた。

武仲氏は豪放な楽天家であるが、家庭的には完全な幸福者ではない。武仲家の長男は夭逝し、二男はサンパウロに遊学。一人娘は近くに嫁に行っているから武仲老夫妻だけの生活である。土地の多く分益農に委せてあるので暮しに困る事はないが、寂しい家庭ではある。纏った仕事という程の事は手掛けていないが、家の周囲を弄ったり読書をしたりして日を送っている。丁度、近くの人だという一人の女性が訪ねて来ていたが、武仲氏は牧夫に紹介した。その女性は古屋八重という四十才位の未亡人であった。彼女は、齒の治療をしたいと思いますと思っていると言った。そして、可成り話好きらしく自分の家の事情まで聞かせるのだった。主人に死なれて三年になるが、総領が十七で大変な苦勞をしたが、やっと今は息がつけるのです。と語った。八重の喉の部分に、直ぐ人眼につく程の花弁形の紅色の痣があった。彼女は別に気に懸けている風でもなく、顔を仰向気味によくしゃべった。武仲家には非常にお世話になっています。此の方が居られなかったら妾達は何うなったか判りませんとも言った。武仲夫妻は終始ニコニコと八重のおしゃべりに相槌を打っていた。此の憐れな女性に充分しゃべらせているのが如何にも楽しいという風であった。癪れてはいるが、齢相応の明るさもあって、悪い感じの女ではない。と牧夫は思った。特にという訳でもない細面の鼻の高い、可成り品の備った顔から受ける印象は、卑しい家庭に育った女ではないように思われた。

武仲夫人の文子の機転でアルモツサをよばれることになった。

「アラ　―　妾は、子供達に叱られますわ。どうも　大変お尻が永くなって、では原田さん、お伺いしますから齒の方お願申します。」

「はい　―　いらつしやい。お安くして上げますよ」

八重はいそいそと帰って行つた。

「何うかい　―　今の女は」

武仲氏は、妻女の文子を見て、笑顔で牧夫に言つた。

「そうねえ　―　いい女ですわ。丁度いいんじゃないかねえ」

文子も牧夫に向つてそんな事を言つた。

「僕に　―　ですか」

牧夫は冗談ぢやない、という風に言つた。

「いや、君が奥さんと完全に切れた場合の話だが」

「家内とは絶望です。でも、今更再婚なんておかしくつて　―」

「そうでもないぜ。まだまだ君、人生は永いぞ。いわゆる　―

茶飲友達。これは必要だ。まあ、それも二人の意志の合致があつ上でなきやいかんが、な。しやつて結婚の手續きをして法的に夫婦になれという意味ぢやないんだ。あの女は、な君。まだ若後家で、独りでは無理ぢや。前に、一度いい人があつたら再婚したい風なこと言つておつたんだ。」

「そうですわ　―　原田さん。付き合つてご覧なさいよ。充分性格を見た上で、この女の人となら幸福になれると思つたら―」

「一緒になれ、と仰言るんですか？」

文子夫人の助言もあつて、どうやら、此の夫妻は真剣に考えているらしいと牧夫は感じた。近頃、とくにひしひしと迫ってくる孤独感に

悩む目のある牧夫として、無下に拒むことも出来ない問題でもあった。そうした切迫した気持が、アンナとの情事以来度が強くなっている。アンナとの関係は、それらしい素振りを髯程も見せない二人の行動で、誰にも気付かれてはいないが、情交は頻度を層してきているし、その内、誰からも、特に夫のミルトンが感附くのも日時の問題であろう。し、若し姦通が明るみに出た場合は何うなるか、伯人社会の習慣を知っている牧夫は怖ろしい期待に戦く時もあるのである。仕事が出来なくなる処ではなく生命も賭けなければならぬだろう。ピカピカと黒光りのする拳銃スミツテをミルトン氏が持っているのも知っている。フアゼンデイロは市以外の処へ出て行く時は必ずピストルは携帯する。それは、アクセサリイでもあるが、彼等の指は素早く引き金にもかかるのである。

アンナとの事を未然に防ぐ為にも、此の話は本気で考えた方がよいのではないか、と牧夫は覚った。だから、と言って何時お父さんと呼びかけて現れるが知れない子供の事を思うと再婚に踏み切るのも躊躇されるのだった。

「武仲さんは、僕という男も、今の女の人の事もよく知っておられるんですから、その上でそう仰言って下さる御親切は嬉しいと思います。まず附きき合って見て、いいと思ったらその時更めて考えたいと思います」

牧夫はそう言って付け加えて言った。

「僕は家内に一ケ年の猶余期間を置きました。考え直すなら一年以内だと、はつきり申し渡しました。ですから、僕としては一年は責任

を持ちたいと思います。その後、結婚するか所謂ブラジルのアミガ―ダにするかは、その時の都合で―」

「それがいい― 俺は、ほんとうは、結婚よりアミガ―ダがいいと思う。どちらも責任を持たない友達―ほんとうの愛情が湧いて、結婚しようというのは二人の自由だ。若い者ぢやないし、合意でアミガ―ダの交際が出来たら一番いいと思う。君のように、家庭的に不和な失意に陥ちた者の甦生のために、これは必要なことぢやないかと思う」

「そうです。あの女の方には子供さんもあることだし、親子の問題もありますからね。」

「うん、これが肝要ぢや、その点、君等二人でよく相談する必要がある」

「でも武仲さん。果してあの女の方が、僕をどう思うかも判っていないのに―」

「ハハ―これは早まった。」

文子夫人も、パ・パイは氣が早い、と言って皆笑い合った。

「見えられましたね。八重さん、と申しましたね」

「ハイ、先日は大変―」

「いや、こちらこそ、さあ、何うぞ」

八重は約束通り治療のため診療所を訪ねて来た。

牧夫は、事務的に彼女を迎え、直ぐ患者用椅子へ八重を導いた。プンと香水が匂う 「おや ―」

牧夫は、八重が頭を椅子の皮枕につけ顔を上向きになった時、頸の喉の部分に痣が無いのに氣が附いて声を立てたのである。

八重は訝し気に頭を枕から立てた。

「奥さん　―　先日お会いした時、こここの所に痣が―いや、有るには有りますな。でも、色が濃ゆかった、と思いますが　―」

「ハイ」　彼女は瞬間頬を紅潮させた。恥かしそうに眼をしばたいた。

「あの　―　そうですよ。これは―」

「色が濃ゆくなったり淡くなったりするんですか？」

「ハイ、そうなんですの　―」

「へえ、七面鳥だな」

「ホホーほんと七面鳥、ホホー」

八重は、此の比喩が余程面白かったらしく笑っては、何か言おうとして又笑った。

「僕は、まだそんな色が変わる痣は見たことがありませんよ。面白いな！」

「あの、これですね。妾も不思議なんですのよ。　月のものが始まる前、とても色が濃ゆくなるんですの。そして始まったら段々淡くなって、おしまいには気が附かない位に無くなるんですの　―」

「ほほーそして月経の前になると又色が附いて来るの？」

「ハイ、そうなんです」

「へえー、はじめてですね。妙ですね。やはり、医学的に理由があるのでしょうか。ね。ホルモンか何かの関係で　―」

「そうなんでしょうね。妾、気味が悪かったですわ。でも近頃は平気になりましたけど」

「若い時からですか？　娘時代から、そうなんですか？」

「いえーそれが此の一二年前からですわ。」

「不思議ですね。奥さん、これは信号燈ですね。荻野式――」

「まあ――ホホ――」

「いや、冗談です。けれど、ほんとだ。信号だ。危険と安全の――」

「まあ――いやですわ。そんな事仰言つて。わたし恥しい――」

「いや失礼。さあ仕事始めましょう」

牧夫は、それ以上立ち入って八重が困惑するのを避けた。淡々と治療を形付けた。

八重を送り出して、後口の好さを感じた。

次の日も八重は治療に来た。牧夫は、少しからかってみたくなつてこんなことを言つた。

「奥さん、この痣のこと子供さんに話しました？」

「いいえ！ まさか子供に――」

「あそう、ぢや誰も知らないんですね。この症の秘密――」

「まあ秘密なんて――そうすわ、誰も知りませんわ。妾話さな
いから――」

「そう、他人に話しちやいけませんよ。僕だけが知つてる――」

「まあ――どうでしょう――」

「冗談のようで、冗談ぢやないですよ、奥さん。これ、色が淡い時は妊娠のおそれがありますからね――荻野式、御存じでしょう？」

「はあ――雑誌で。でも、そうなんでしょうね」

八重の眼元は恥しきで真紅になっていた。

牧夫は、八重が可愛相になつてきた。女の生理が痣に現れる。それ

は男を対照にした場合、惨酷でさえあり得る現象である、すべての女性がそうではなからう。牧夫は嘗てそのような女性を知らない。知らないだけで、案外そうした女性が多いのではなからうか。これは大きな疑問であつた。

「奥さん、御心配は無用、女性の身体の生理は厳肅です。僕は冗談を言っただけです。済みません」

牧夫は、そうして快活に笑つた。しんみりしていた八重の顔も明るい表情に變つた。彼女は、少し自分の家庭の事のおしゃべりで時間を過して歸つて行つた。次の土曜迄、ジャトバの診療所の方へ歸ると告げた。すると、八重は、一瞬緊張した顔になつて、

「そちらへお伺いしますわ」

と、言つた。その上、何か物足りない様子を示し、

「二度、妾の家へお招きしたかつたんですけれどー」

八重が歸つた後、牧夫は今迄になく胸が騒いだ。明らかに、牧夫の人生觀が變貌しつつあつた。近子に背を向けられ、彼が築いて来た人生に叛かれた反動であらうか。性の歡喜が堰の切れた水の溢れるように襲う。牧夫の表情に苦い笑いが浮ぶのを自覺した。それと同時に、深刻で複雑な人生に突入しそうな自分が不安であつた。偶然が幸いするよりも、不幸への導きになる方が多い世を更めて見直さずにはいられなかつた。八重が亡くなつた夫の母を抱えているという話は衝撃であつた。「いや、まだ何でもないんだ。八重と愛をふくんだ話を交したわけではない。武仲氏の示唆があつて、その積りで八重に接したとはいえ、何も、一緒になり度いと告白したわけではない。今なら、何

でも無いんだ」と、自分自身に言い聞かせるように呟いた。だが八重は、どんな積りで自分に対して考えているのだろうか。やはり、自分と同じように、武仲氏から言いふくめられての上ではなからうか。愛の対照として自分の可能性を探っているのではなからうか。これは、武仲氏から聞き出せる事ではあるが、そこ迄、自分を押して行くには何か抵抗を感じた。それにしても、八重が、次の出張を待たずに、ジヤトバの診療所迄伺うと言った言葉が、牧夫の胸にグサツと突き当たった矢のように痛んだ。まさか、と否定も出来ない八重の表情が強く浮き彫りになって迫って来る。女の痣のことを言ったのもちと立ち入り過ぎたのではないだろうか。あれは、普通の痣ではなく俗にほやけという血痣で、珍らしく眼についただけだったのだが、等と、とりとめもなく拘った。

ミルトン氏は、牧夫の顔を見るなり

「昨日、日本人のデンチスタが、此の辺で仕事がないかと言って訪ねて来た。やはり、牧と同じドクメントの無いデンチスタだ」と告げた。

「そうかねー」

牧夫は競争相手が多いことをよく知っていた。田舎を歩き歩く此の種類の業者は随分多いのだ。気に掛けることもない、と思っている。

「ボンフエンに行つて見ると言つてたぜ」

「いいよー」

牧夫は、自分と同じ立場の歯医者や、浮き草稼業の己れの立場で考えた。コロニアの過渡期を痛感するのだった。

アンナは、隙を見て牧夫にささやいた。

「待ち遠しかったわー マキ」

彼女の露骨な視線が牧夫の身体を這った。

「いい加減にしろよ、アンーお前は」

みなまで言わせず、アンナが言った。

「マキも同じでしょ！」

「お前はミルトンの妻だ。姦通は罪悪なんだぜアンナー」

「知ってるわ。マキがいやだと言えはやめるつもり、よ。」

そう言いながら、二人は素早い接吻をしているのだった。その間にも、アンナは甘い喘ぎに耐えられぬ風で、身をすり寄せ下半身を揉みに揉んだ。

「マキー 二人で逃げよう」 と囁いた。

引き込まれそうになる情慾と激しく闘いながら牧夫はアンナを突き放した。

「アンナーあちらへ行きなさい。余り大膽過ぎる」

そして女を睨みつけた。急激に冷めて来るアンナの表情に鋭い影が走った。一瞬牧夫はぞつとする思いがした。混血女の逞しい執念に恐怖を感じた。どういう意味か、アンナは片手でスカートをひらりと捲り上げ、手を放すと、その手を牧夫の下腹部に当てた。そして急いで背を向けて去った。多分に、肉慾の昂奮を表示したのであろう。

牧夫は、此の土地を離れる時機が来たことを覺って心が暗くなった。

「マキー」

そう声をかけて、ミルトンが牧夫の部屋へ来たのはその翌日のもう陽が落ちてからであつた。牧夫は義歯作りをしていた。

「マキー マーラも持たないで奥さんが訪ねて来てるぜ。店に――」

牧夫は、奥さんと聞いて飛び上る程驚き、

「奥さん！」

「そうだ出て来なよ」

近子が来る――そんな筈がない。でも、という事もある。牧夫は、近子を愛しいと思う心はないが、何といつても五人の我が子の母である。何となく心が揆んだ。それと同時に家庭が鮮やかに浮び上つて来た。許す、という納入れ方に心を決めて店に出て行つた。

店に立っていた女は、古屋八重だつた。

「おや――」

牧夫は、おや、貴女は、と言い掛けて、ミルトン夫妻の手前、ただ、おや、とだけで止めた。軽い失望と、これは困つた、という気持ちで苦がい笑いを浮べた。牧夫は、日本語で八重に訊ねた。

「今頃――何うしたの？」

「あたし、貴君の妻です、とこの方に言つては入つて来たの――」
八重は逡巡もせずそう言つた。

これは、容易ならざる事だ、と牧夫は思った。複雑な気持ちが入り乱れて、何と言つてよいか判らなかつた。怪訝そうな面持ちで、二人のやり取りを眺めているミルトンとアンナの眼差しが眩しかった。仕方なく、牧夫は八重に、こちらに来るようにと、自分の部屋に伴つた。

「あたしー 悪かった、かしら。でもー いいです。妾の気持ち
は、こうなのだから。」

八重は、下唇を嚙んで、上限使いに牧夫を仰いだ。

「どうもおかしいと思った。貴女だとは露思われなかったし。然し
ー」

牧夫は考えをまとめる事も出来なかった。

「妾ー押しかけて来ましたのよ。武仲のおち様からも言われて、
すつかり貴男に頼る気になったのですわ。妾しー」

「で、今晚僕の所に泊る決心でー」

「ええー そうですわ。斯うまでの妾の気持お判りでしょう!」

「貴女は決断力がある。男の僕でさえ出来ん事をやってのける女だ。
いいんですか?」

「ねえ原田さん。今夜は、ゆっくりお話ししましょうね。だって、妾、
とうとう踏み切ったんですもの。もう取り返えしがつかないわ」

「そうか。貴女には負けた。完全に負けた。」

牧夫は、妻の近子に明言した、一年の期間の猶余も捨て去ろうと
思った。それと共に、黒々とアンナの影のしかかって来るのであつ
た。始末におえない泥沼を連想した。家庭を喪ったというだけで、こ
んなにも運命が変転するものか。牧夫は官能が荒れ狂えば狂う程それ
に比例して、絶望的な危倶に戦くのであつた。すつかり、泥んこに
なった自分の姿に呆れ乍ら、そこから引き返すことも出来ないので
あつた。自分は放浪者だ。いざとなったら逃亡出来る、と迄焼腹にな
るのだった。

このまま、八重が名乗った通り、ミルトン氏にもアンナに対しても不貞腐ってやれ、という氣にもなった。何うせ、妻や子に捨てられた男の屑ぢやないか。汚れて泥んこになった処で、何うという事もないのだと思った。

その夜、牧夫は八重の頸筋で囁いた。

「あんたはまだ若い。妊娠しはしないだろうか」

「そうーね」

「用心するさー」

牧夫は、小高い丘を連想するアンナの肉体を思った。

八重の家では、リウマチで身体の不自由な姑の里子が寝ていた。八重の要請で訪ねた牧夫に向って、丁寧に挨拶して言った。

「八重から、よく伺いました。よう来てお呉れでした。貴即、お酒もお飲みにならない方だそうで、ようそんな真面目な方を見捨てるご家内なんて、世の中は奇態なものでございますのう。妾の家ものう。八重からお聞き及びでございましょうが、倅が、貴郎、雷さまに打たれて死にましてのう。嫁女は、私にもようにして呉れますでも、何しろ貴郎、ご覧の通りの暮らして、あれも可哀そうで、孫どんはやっと十七になりましたども、畑仕事に嫁女は出にやなりもせんし、若し、酒どん飲んで錢使うばかりの男なら女子も苦しむで、どむなりもせんけどもな、貴郎のような方がお助け下さるちうて、へい、ほんとに八重のために宜しうお願い申しまするので」

牧夫は、七十才の老婆から、懇々と口説かれたり頼まれたりした。それは、同じ姑ながら自分の母の鶴とは又性格の違った人だと思っ

た。気性の強い鶴の口からこのような言葉など出ないだろう。実の母を看れないで、偶然結ばれた女の母を看ねばならないのも何とした逆縁かと思った。それにしても、始めての情婦の家を訪ねる磨ぎすまされた牧夫の神経にグサリと突き刺さったのは、八重の長男のエミリオの態度だった。エミリオだけは、母が牧夫と結ぶことに反対だが、除々にそれは宥和されるだろうという八重の見透しは甘い、と思った。エミリオは、牧夫をちらりと見ただけで、挨拶はおろか、姿をかくしてしまったのである。下の二人の子供も、牧夫に笑顔一つしなかった。何とか言葉をかけてあやそうとした試みも失敗であった。エミリオに吹き込まれたらしいと思われた。そうした八重の目算を踏みにじった空気の中での対面だった。牧夫は居辛いので早く家を出ようとした。

「原田さん　一寸そこまで」

八重も附いて出て、裏のマンガの木の下へ牧夫の足を停めさせた。

「すみません　―　貴郎」

「弱ったぜ、こんな経験はじめてだ」

「でも、段々馴れると思いますわ。子供等も妾の立場は判っているんですもの。父ちゃんが無いからママエ辛いねえ、なんて言ってくれているんです。その内に―」

「だがな―　八重さん。子供は、僕に母を盗まれる、と思うんだよ。無理はないさ。理解はしても、心から喜ぶなんて無いぜ。」

八重は打ち萎れた顔になったが、何としても、この空気を好転さそうと眼が躍起になっていた。そして顔も紅潮していた。

「でも、妾の細腕では家族を養えないんですもの。お姑さんなんか、お前にばかり苦勞かけて、役立たん妾は死にたい、なんてー」

「兎に角、八重さんー貴女の心が僕に對してー」

「ええ、それはもう。妾ー 貴郎を諦められませんか」

八重は泣いた。四十才になつても、女は恋に弱いのであろう。

牧夫とアンナの関係も以前の通り続いていた。彼女も、八重を牧夫の奥さんなどと信じてはいなかった。他に情婦があろうが、無かろうがアンナはただ自分の恋にのみ生きる女だった。アンナには人妻としての落着きがある故かも知れなかった。

所が、それから一ヶ月程して、ジャトバとボンフエンの中間のクヤバ街道わきの疎林の中で、牧夫は屍体となつて発見された。明らかに射殺されたのである。頬に弾を受けた痕があつた。この様な都市から遠い田舎での出来事なので、警察は犯人の捜査に力を尽くすということもなく、簡単な取り調べの後、家を貸しているミルトン氏に埋葬を依頼したのみで済ませた。牧夫はあつけなく世を去つた。のである。

その夜である。

「貴郎が殺つたんじゃない！」

アンナは訝しそうな眼を夫に向けた。

「馬鹿なー 俺の知つたことぢやない。」

「昨夜ー マキがボンフエンに行くと云つて家を出たあと、貴郎は家に居なかつたわ」

「偶然だー アンナ、こんな事は詮議しても無駄なことぢや。俺は、

マキがお前と特別な関係だった事は勿論知っていた。だが、俺は黙ってお前を許していたんだ。俺の男は役立たんのでお前が可哀想だったからだ。お前」

ミルトンはアンナの腹を指さし、

「お前―妊娠してるだろう、俺は――」

「何うして――」

「マキとお前が内密の話をしているのを聞いていたんだ。そうだろうアンナ――」

「……………」

「だがいい。俺はお前に子供を生ませる力がない。だから――俺は、お前の腹の子を俺の子として育てる。それには、マキが丁度死んでくれて好かったんだ。俺は偶然に感謝してるんだ」

「まあ――」

「アンナ――それだけぢやないぞ。ボンフキンのあのジャボネ―ザも妊娠している」

「えっ――」

「マキが俺に言ったよ――」

そう言うと、ミルトンは、俺は祝い酒を呑むんだと言って、ウキスキ―の瓶を棚から下ろすのであった。

（おわり）

〈短歌〉

夜の渚（30首）

陣内　しのぶ

おぼろなる灯の下に外れし眼迫う宴の中の青き真空

束の間を宴離れてゆくこころ黄の彩沈む孤独となりて

言葉とはならぬ一途の眼に逢いて掌の中のコップ少し傾むく

覆うとも包むとも来る或るときは無形の影を脱るとせず

さばかりのことと捨てたる暁の夢が痛みの刹那ひらめく

禁猟の鳥撃ちて来し戦きに歪める夢の途何処まで（ママ）

生きの音脹み迫る暁の空も巡りも薄色の紺

ひたすらに拒みし夢の明るめばはや薄雲の如き朝月

自らも青みていたれ一片の朝月よりもやがて果敢なし

鳴らざりし鐘の余韻を聴くときに薄きガラスの如き自ら

象形を外れて紡ぎし色盲のわれの未来の綾鈍く光（て）る

紡錘の糸細りつつ織られゆくすでにけじめのなきアラベスク

限界は知らず逝く日々没り陽に熟るる石榴の粒のかがやき

剥ぎ捨てし日曆背後に乾きつつ掌中に発火待てるライター

忽ちに冷ゆる潮風指抜けて真昼の海に指輪失う

歓楽の中のひそかな悔に似て陽の照る海の指輪喪失

自責とも悔ともつかず渚ゆく裸となりし薬指（ゆび）さすりつつ

失いし指輪一つにこだわって夜の渚に子等と出で来つ

夜の渚長々歩み溜めて来し年月崩るる淋しさに逢う

失いし指輪とわれと被りいる砂の湿りが夢寝に重たし

生物を飼う性持たぬわが巡り憎み合うなき植物の声

植物のそれぞれ声のやさしくて常に一つの体温保つ

生血よりなお鮮烈の地ブドウの酸味強きを舌にしませつ

撓うごと心傾きいる夕をきらめきて来る夏の雨脚

雨季に逢う地ブドウの熟れ斑にて体にかすかなる獣性を聴く

一生（ひとよ）堪えてゆく可き業（ごう）を問う眼にしたたるばかり

青き庭樹々

〈短歌〉

漂泊記（30首）

川原 比露思

絢爛とわれを満たしめみずうみを染めしあかねも亡びゆくなり
燃えしぶる決意が白く透りゆく落葉のやくる匂いのなかに
身の秘密ひそかに匂う昼さがり解体ビルの崩るる音す
くらみくる目眩のなかにしびれるわれの奥処の剥落仏陀
われに結ぶ化石のおもての彩ふかく石は古代の音に鳴るなり
草原にわが得しまぼろし褐色のシレーマとおとづれし酵母の族と
遠き世の原図描けるわがうちに古代詞章の声起るべし
古びたるわが胸奥にひらく地図鮮明となりてきたる平安
水中花あざやかに赤き影のこすうつつに賭けるものなどはなく
わが思念遠き地平に凝らせていま集結を終えし雲あり
電気計算器の音耳底に張りつきて夜という海にただようひとり
標本の蝶うつくしく保ちいる残照のごとき終焉はなきか
暴力の如き波いくたび潜り来てわが内にあらしが渦巻きいたり
美しく保たむ過去かガラス器の影に日の透く明るさに居て

椰子の葉に荒く走りて来し時雨無頼の眼をもつ分身があり

わがうちの不随意筋とつながりて苦悶のごと鳴る夜のアンテナ
土ふかく潜みいし根が萌芽する炎天の野に両手が重し

肩胛帯やや疲れいるめざめよりたたかいに似たる一日おもえり
いくばくかわれの生をば彩らむものあくまでも曳きずりてゆく
脱出口もとめてやまぬわがめぐり夏の新樹は鳴りやまぬなり

棉殻焼く火に喚び合える夢のなか軋みつつ裡を行く荷馬車あり
入植地帯くぎられしなかに貧しくて手製の草履をはける郷愁

銀いろに塗られし蔓が活けらるる苦しみてよじれしごとき象に
インジョ住みし跡茫々と風立ちてうずたかさを踏めばもろし貝殻
たそがれを太鼓うつごとき音ひびくマクンバの生態妖しく曳きて

葉の蔭にみのりゆたけきぶどう園と廻りいる無頼フィルムと共に初夏
雲しろきこの夜あがれる風が見え光の国フォルドの水のまぼろし

夏の雨くらき路面を流れきてわが沈澱の悪も流せよ

柵のうえキリンの首が伸び上り見る遠き砂漠に燃ゆる火焰を
移り来てここにいのちは終らむかふかき樹海を遠景に見て

（短 歌）

歳 月 あ り き

森 元 三 山

陸稲作ることが生活の業なりき子は切株につながれている
甦る故郷えの思慕断ち切りて樹海に斧を振ればこだます
赤黝く日焼けて野良に鋤を執る移民の妻ら諦念に馴る
一筋の希望も萎えてひたすらにその日の糧を追える移民ら
覇気などは既にかかわりなき如く失意の底に彷徨いき我等
味噌も醤油も造りて彩を喜こべどただそれだけの塩辛きもの
戦勝ニュースきけば若きら気負いいしその単純を我ら愛せり
開拓の貧苦も何時か戦勝のニュースに覆わる日もありたりき
炊餐の煙が樹海に棚引けば山野に戦かう兵を想いき

恙なき日々

南条由喜夫

ひとさまに新樹となりし木葡萄等青実もつ木と熟れ実もつ木と
争いもなく鷹揚に小鳥らが畑にこぼれし糲ひろい食う

恙なき日々の翳りに目つむれば白く明るきこの幻視境

信じねばゆだねて居ねばならぬ日々踊場にさす明るみに立つ

彫像は見おろしており未熟なる現身（うつそみ）の中に居る青き果も
人間と関わりのなき神のこと病めば関わりある思いこそする

病葉も青き落葉も散り混りけものらの径つい見失う

伐り口にねっとり樹脂（きやに）にじまする傷みは脆し陽に光るとも
腹一杯唯食いしのみ移民とは寂しき如く清（すが）しきごとく

生活の灯のこぼれているビルの間の雨を都会の雨とおもいし

(短歌)

〈アサイ〉 少年少女の作品

北パ・トレスバラス移住地のアモレラ日語校の生徒は、穂島千代先生の指導で、三年程前から短歌を作っている。その作品は同地アサイの月刊短歌誌「朝日短歌（山室新太郎主宰）」に掲載されている。次に、その作品若干を紹介しておく。（編）

○ 清水 直行（14才）

母と二人で地面をはつてゐるえんどうのくき折らね様に実をもちでゆく
かばんの底のやぶれを気にしつつ今日レーグアもなくしてしまった
親鳩に追われながら妹は巣を落した子をかかえて走る

○ 麻生 恒（13才）

葉の色のこいくなつて来たさるすべりの枝が初夏の風にゆれてる
ちぎれ雲がうらの庭からおとなりの屋根へとかげをうつして去った
タやみのせまるアサイの停車場でバス待ちで立つ一時間は長し

○ 鶴田久仁子（13才）

子どもの日に生まれた私の妹は元気にあばれて湯に入ってる
叱られて私がまどべで泣いてるとイグレイジャのムジカがひびく

きのうあらった窓ガラスをくもらせて静かに春の雨がふってる

○ 水元 則夫 (12才)

弟のてるてるぼうずは木に下げられさかさまになってぼくを見ている
ボリンニヤの遊びで負けた弟はおこって玉を拾ってにげた
おそくまで作歌してればいつの間にか弟も妹もねいき立ててる

○ 麻生 吉枝 (11才)

学校のコスモスの花が朝の日にてらされて庭にかげをうつす
おとなりの窓のカーテンに風ふけば赤い花がゆれているようだ
時々マンガの花の散る下でままごとで遊ぶ妹達は

○ 東親田亜希子 (12才)

ふる里の日本に帰ったお父さんを思い出せばなつかしくなる
まどから見える庭のコスモスが雨をかぶってたおれそうだ
夏めけば暑く見えるとねえちゃんは私の長いかみの毛を切った

○ 尾関 良子 (12才)

学校の前のカンポでゆらゆらとかげろうが空に向っておよぐ
みかん色のアマリリスが三つさいて緑の葉がすつとのびてる
ポプラは三角の葉をゆりながら雨のしずくをボタボタ落す

○ 川井 与一（二才）

十分に雨がふるのを待ち切れず農家はセツカまきを始める
イスチリングを持って出かけた弟は何も取れずにしよげて帰った
今日も夕方となってプレイジョからボンボンと蛙の鳴声がたつ

○ 東親田善勇（一〇才）

ぼくはベネーノのにおいに弱いので大きくなったら町で働く
ぶたの子がやせているのでシケールから出せばとなりの犬に迫られる
指おって短歌していると夜の庭のどこかで虫がジイと鳴き出す

○ 山本 米子（一二才）

春の庭へガドールから出る水が七色に日がうつって落ちる
ねえさんが作った犬のやわらかい毛に弟は顔をつける
かみの毛を短く切ったらおばさんに男の子かとまちがえられた

特集

終戦の前後

戦時回顧 第七回

ブラジルに住む日本人が、祖国の敗戦をどう受け取ったか、私たちだけが知る特殊な心情なのだ。それを今こそ、当時のそれぞれの立場を顧みて冷静に書き残したい。

私の終戦

藤源泉

左の日記は今より三十年前、私の居住していたノロエステ線G町―植民地日本入会々誌より抜粋したもので前記二三記の外は私が記録したものである。

一九三九年一月一九日木曜日晴

愈々本日より巡回教授（日本語）開始す。部落内を三区に分ち、第一区を遠藤氏宅に第二区は品川氏宅に、第三区は桧延氏宅に夫々授業をやる事に成った。一区一週間に二回教授となす。然し授業時間其の他学校教授に比して至って成績は良好の感がある。

全七月九日 日曜日晴

今まで三ヶ所に分けて教授していた日語学校も此の度の植民者の移動に伴い旧児童の激減を見るに至ったので一ヶ所に集団する事になり、石川氏所有のランショを借るを得たので本日役員一同参集、屋根の葺き替えメーザ作成、庭前のリンパ等をやって準備を整えた。如何に他国に居住するとは言いながら祖先伝来の言語教育を其の子弟に施すのに陰に隠れて教えなければならぬ程惨めな事はあるまい。我々は二世教育の為総べてを犠牲にして建設した立派な校舎があり乍ら逃げ隠れして教えるとは情けない事である。日本人は矢張り日の丸の旗の下が恋しく成る。

全八月一日 火曜日 晴

在サンパウロ帝国総領事坂根準三氏は、マ州カンポグランデ市地方視察の途上の町下車当町管内四植民地を巡察せられた。我植民地は午后五時頃で植民者一同小学校校庭にて歓迎す。総領事の訓話あり、植民地日会代表の歓迎と成謝の辞あり、女子青年会員の茶菓の饗応に坂根氏は甚だ満足の態にて陽が西山に没してから退植せられたり。

(以上は日語教師×先生記)

千九百四十一年四月二十九日

火曜日 晴 以下源泉記

天皇陛下には本日をもて四十一才の天長節を御迎え遊ばされ、王体益々お健やかに亘らせられし事誠にかしこき極みである。

此の日午前十時小学校に植民者一同参集して遥かに皇居を拝し聖寿の

万歳を視し奉り奉祝茶話会を開催非常に盛会であつた。

一九四一年一二月二五日木曜日晴

午后三時頃より遠藤会長宅に於いて総会を開き前二回の中央委員会に於ける経過を報告す。金策の件については≒氏丁氏の氏は郡役所に出頭請願せしも成果を得る事が出来なかつた。正月を目前に控えて在の町日本人植民村の大部分の人達は金融杜絶の為、実に困難を極め、正月用品の一品だに買う事も出来ぬ有様である。

「本日午后五時三十五分香港政庁陥落！ 万才「ラジオ」

全十二月三十日火曜日曇後雨

≒氏のカミニオンで植民者一同所用を兼ねて正月買物に≒町に出る。≒氏の御配慮と≒氏及び遠藤の保証により、コルデイロ商店より正月買物が出来て午后四時帰植する。

全十二月三十一日水曜日雨

去る十二月八日祖国日本が英米に対して宣戦布告以来皇軍は有史以来の大戦果を収めつつ昭和十六年も暮れていく。我々在伯同胞にとつては物心共に実に苦難の多い年ではあつたが今や世界大戦の真只中にあつてさしたる大事件も起こらず此の年を送る事の出来るのはまずは幸甚と言わねばなるまい。

『感慨最も深き千九百四十一年よ、左様なら！』

一九四一年・昭和十七年元日木曜日曇

薄雲空を掩うていたが初日の出を拝する事が出来た。世界大動乱の只中に昭和十七年の新年を迎えた。其の筋の達しに依り定例の拝賀式は行わず遥拝のみに止めた。児童にはドーセを分配して散会せしめ、家長は役員の改選に移ったが、全員の要望により前役員留任と決定し、祝賀宴会となった。粗酒粗肴ながら和氣霽々の内に午后四時すぎ散会した。

二月二日 目曜日 雨

去る一月二十五日リオに於ける汎米外務大臣會議に採択された勧告に基き伯国政府は日本独逸伊太利亜三国に対して、国交断絶を通告したので在伯帝国大使館及び領事館はいずれも閉鎖の止むなきに至った。石射大使及び原領事より、それぞれ在伯同胞の今後の採るべき覚悟と心構えについて書面にて通達があった。本日午后三時よりの氏宅に総会を開く事にして村内に通達した。

定刻までに集った者は遠藤会長の委員他三名のみで五時六時になっても集まる者無く遂に陽が暮れて九時過ぎようやく集会した次第であった。従来当植民地は時間の励行に就いては甚だ無関心な者が多い。而し乍ら如何に大雨だからとは云え定刻より六時間も遅れ

るとは、前代未聞の事で全く沙汰の限りと言わねばなるまい。

仮令、直接利害が伴わなくても日本同胞として斯くも重大な場合の相談にかくも無責任な植民者が多くては植民地の発展など望むべくもなからう。実に慨嘆の至りである。従って確かりした方針などまとま

らずに十一時半散会す。

○

私は左に当時の記憶を辿って記して見たい。前記石射大使原領事の名に於いて通達された書面は全伯日系人団 体の総べてに配布せられたものと思うから、当時その責任者やあるいは役員の人達は良く御存じの事と思う。従つて其の通達書も当時私は保存してあつたのだが十九年前に「植民地を移転する際に後継責任者に渡した後も転々としたため遂に紛失して仕舞っている。私は当時渡伯八年目位であつたが私個人としても又植民地日会としても大使館や領事館のお世話になることは殆ど無かつたのである。而し「大使、総領事あるいは領事が祖国の代表として又同胞保護の為厳然と控えているんだ」と言う只其れ丈で安心して生活が出来たのである。恰も母親が何時も家に居る事に安心して幼児が遊び廻る様な気持であつたのだらう。其れが覚悟していたとは言い乍ら例の通達である。其の内容は既に忘れたが大体次の様なものであつた。前記日記の「通りであるから在伯同胞諸君は当国の法律を遵守して輕挙盲動を憤しみ静かに平和の回復を待つ様に」と云う事であつたと記憶する。私は此の通達を読んで、全身の力が抜けて行く様な愕然とした感じであつた事を覚えてゐる。そしてつくずくと覺つた事は我々は最早天涯孤独であると言う事だつた。彼等大使、領事を初め外交官は一片の書面を配布した丈で三十万？ 同胞を置きざりにした倅迎えの船で帰国して仕舞つたのだ。我々日本人はこれから先敵国人の中にどうして生きて行くべきだろうか？ と言ひ様のない不安と心細さを感じると同時に母同官憲の無責任さを真実怨めしく

思った者は私丈では無く在伯同胞大部分の感情だったのではなかろう？「今にして思えば止むを得ぬ事であり、私共の感情は甚だ虫の良い考えであつたと思うが」

二月十三日 金曜日 晴後曇

中央日会に於いて討議せられた金融機関設置の件に付いて尚各植民地に於いて協議する事に成り、午后九時遠藤宅に集合十一時五十分まで協議の結果、大体に賛成の事に意見一致して散会す。

二月十四日 土曜日 曇

東山事務所に於いて正午より中央委員会を開催再び前記の事項に就いて協議せしも各植民地の意見一致を見ず午后六時閉会す。

一九四二年二月十五日 日曜 雨

シンガポール大要塞遂に陥落す午后七時五十分（ラジオ） 万歳々々

全八月二十四日 日曜 曇夜大雨

洩れ聞くとおろに依れば去る七月二十九日、ブラジル政府は独伊に対して戦宣布告せりと。

一九四三年・昭和二十年一月元旦 日曜 曇夜大雨

初日は雲間より光りを放ち元旦らしいすがすがしい朝である。本年も亦戦渦の中に新年を迎えた。非常時局下の例にならない簡単乍らいと厳

肅に遙拝式を挙行す。中略宴会后父兄対青年の野球試合あり盛大であつた。

全九月七日 金曜 晴

先日八月中旬頃より祖国日本は大勝して連合軍は全面的降伏の情報伝わるかと思えば日本の無条件降伏を称える者あり其の真相は判明せず、一喜一憂しつつあつたが最近に至りようやく日本大勝確実の情報来たり欣喜例えんもの無し、本日は又ブラジル独立記念日であり当植民地の入植記念日でもあるので大勝祝いを兼ねて当青年会と植民地青年との野球試合大会を開催、婦人連は米野菜鶏などを持ち寄り握り飯を拵らえ来会者に振舞つた。家長はビンガを飲み乍ら応援し非常な盛会であつた。」

一九四五年九月十二日 水曜晴

本日はG町に於いて中央日会委員会が有つた由なるも我が植民地には通知なく不出席なりしも、其の後の通達に依れば愈々祖国は連合軍に大勝して有田八郎氏（元外務大臣）を主席とせる二百名の使節団が近日来伯するに依りG町でも歓迎準備をする事に決定せり。尚歓迎用日章旗の作製は連合青年会に一任せりと。後報によれば日本大勝は事実なるらしきも確実なる情報なし。使節来伯は然然無根のデマなりき。『此の頃の前後であつたと思うが全伯 各地の日本人集団地に祖国の勝利を 信ずる人達に依つて臣道連盟なるも のがぞくぞくと組織された。当G町 を中心とする各植民地でも連盟組織 の議が台頭

しはじめて或る日の町^ニ 氏宅に於いて委員会が開催せられた。当日の委員は大別して二派があつた。つまり強硬派と穏健派である。強硬派は元軍人が多く祖国の勝利を信じ疑わず、敗戦を宣伝或いは誹謗しあまつさえ皇室を侮辱するに至つては許す事はできない。と言うのであつた。もう一派は「前記の事は全部もつともであるが而し吾々はブラジルに居住し、此の国の保護の下に生きて行かねばならんのだから、軽挙盲動を慎しみ、静かにして祖国からの快報を待とう。」と言うのであつた。議論百出したが兎に角祖国を憶い祖国の勝利を信ずる事には変りない事は一致したので臣道連盟の支部組織結成を決議したのであつた。

役員は左記の通りである。

支部長 ^ニ氏・元東山の町支配人で親分肌の人

副支部長丁氏：連合日会長、の町一の珈琲園主

会計 遠藤

書記 ^ニ氏 以下略

前記の次第で私も役員の一人に押された。此の臣道連盟支部はの町内及び近郊日本人の八十%は入会して居たと思う。会の申合せは大体次の様なものであつた。

一、我々は日本精神を忘れず祖国の戦勝を信ずる。

一、我々は祖国の敗戦を（一）宣伝（二）誹謗しあまつさえ（三）皇室を侮辱する者、特に（二）（三）の非国民は赦す事は出来ない。

一、而し我々は伯国に在住して居るのだから徒らに軽挙盲動は絶対に慎しむべき事。

尚私の役は会計であるが此の会は会費を徴収する事がなかった。つまり会費を必要とする催事は一つも無かったので会計は名目だけであった。此の頃或る日であった。

自宅に見知らぬ二人の人達が見えて申さるるには『下条さんが「カデイヤ」に入れられているので奥さんが一人で非常に困って、お宅に報らせて呉れと頼まれたので参いました』との事である。下条は私共の構成家族として連れて来た従弟であるが其の後音信不通に成っていたのである。

両氏の語るところに依れば、彼はポンペイヤ郊外に両氏や他の日本人と共に棉作をやっていた。此の度の勝組敗組が血で血を洗う大混乱の最中、使用中のカマラダとの一寸した言い争いがもとで「あのジャポネースは戦勝組で、レボルベや日の丸旗・裕仁の写真もある」と訴えたと言う事である。忽ち三人の警官に踏み込まれてレボルベは基より両陛下お写真・日章旗・日本語書籍をどを押収され、本人はウムを言わず連行され、現在はポンペイアのカデイヤに収監されているとの事である。私は早速隣りに住んでいる従兄（下条同様母方の従兄）のAと鳩首相談の結果翌朝Aと両氏共々ポンペイヤへ出発下条宅に着いて見ると、此処数日間の驚怖と不安で血の気の無い若い妻のムツ子は泣き乍ら語るところに依ると、昨日はポンペイヤに出て町の有力者Bさんに彼の釈放方を依頼した。との事である。又ムツ子も警察に泣き込んで面会は赦されたが、釈放は何時のことやら解らん。との事である。其の当時の事を彼女は語る。入監の日に何の尋問もせずにパンツ一つの丸裸にされて木製の長椅子に押し倒され馬車馬を打つ為に使

用する牛皮で編んだシコツテをもつて仁王立ちになったデレガードが「このジャボネースが！」とひと声吠えようと、力いっぱい背と言わず腹と言わず頭や顔といわず滅多打ちに打ち始めたと言う。十数回までは覚えていたが其の後は意識朦朧として仕舞い夢中であつたと云う事。そして彼女が面会した時は顔も手足も体も赤黒く腫れ上つて二目と見られない姿であつた。と語り乍ら泣き悲しむのであつた。

なんの罪科もない善良な働者の一農民を日本人であるが故に一カマラダの密告だけで惨酷非常な体罰を加えるとは！「私は腹の底から込みあげて来る憤怒の情を禁ずる事が出来なかつた。其の翌日私共は彼に面会を求めたが許されず一両日中にマリリア市の刑務所に送られるのだと聞かされた。仕方がないので、ひとまず帰宅する事にして近所の人達や△さんにも呉れぐれも依頼してムツ子を勇気付けて帰宅したのであつた。其の後間もなく、再び△と共にマリリアのカディアに（彼はマリリアに移された。）様子を見に行ったら下条と同じ様な理由で収監された日本人はカディア一杯である。それで家族の責任者等は々相談の上弁護士を依頼したり、食事の差し入れを、当時の酒井食堂の主人に頼んで快諾してもらい、ひと安心した次第であつた。

又弁護士の注意で、一般日本人はカディアの附近をうろつかぬ様にとの事であつた。さて帰宅する段になって、従兄の△が言うには「お前は先に帰ってくれんか、俺はもうひと晩いて様子を確めてから帰る」と云う。私は「家の者が心配するからひとまず帰ろう」と、すすめても聞かぬので、私がさきに帰つたのであつたが、翌日戻る筈の彼は二日経つても三日しても戻らず、妻子はもとより私共も愈々心配に

成つて再びマリリア市に出て見ると、カデイヤ入りをしているのである。周囲の人達に聞いて見ると弁当運びをしていたら、看守に捉らえられ「オセも勝組だろう」と、突然胸倉を取られて両頬を赤黒くなるまで平手打ちを喰つた上にぶち込まれたと言う次第である。なんとも、開いた口が塞がらないとは此の事か？ さて愈々私も困却してしまつた。ボルトゲースは然々話せない私、それにマリリアには一人の知人もないのだ。困り果てて『ホテル主人に尋ねたら安田君と云う弁護士やサルジュントともアミイゴの人がいる事を教えられて早速頼んだら快く引き受けて呉れたのは有難かつた。安田君は弁護士を頼んだりデレガシアの方も何かと熱心に運動を続けて呉れたのであつた。安田君の言うには「ブラジルには、泣き落とし戦術があるから奥さんや小さな子どもを連れて来た方がよろしい」との事。早速シツチオに帰り前記の次第を報らせたところ、妻子七人の驚きは非常なもので天地がひっくり返つた様な悲しみ振りである。明くる日はとりあえず妻君と乳呑児と姉妹の三人を連れて三度マリリア出市安田弁護士君共々警察に出頭すると、日本の敗戦を認めた書類に署名をすれば釈放するとの事である。だが頑固一徹な彼は仮令殺され様とも敗戦を認めるアシナは出来んと頑強に拒否する仕末である。其の晩『ホテルの一室で安田君妻君と三人で鳩首相談の結果、一人男の働き手がカデイヤに入っていたのでは春の蒔き付けに大支障を来すのだから兎に角精神は絶対に戦勝であろうとも何うしてもアシナはさせて釈放する事に仕様と一決した。翌々日三人で彼に面会して、安田君と交々説得これつとめた訳であつた。「あんたの精神は誰も良く認めているが妻子の

為、家のためを思つてアシナ丈はするやうにと無理に納得させてやうやく釈放してもらい、ホツとした事であつた。だが、これは後日談になるが、其の後、永い間私と安田君が△に余計なお折介をしたと、植民者の集会の時などにも怨まれて本当に砂をかむ様な遣り切れない嫌な気持が永く続いたものである。従弟も其の後暫らくして釈放されたが、私の一生を通じて此の時程心労したのは始めてである。此の頃猶左記の事件が起つた。私には直接には関係なかつたが身ぢかに起きた事だから記す。私の常に買物に行くジュリオス・メスキッタ町で當時時計修繕や写真屋をやっていた△さんが私の行きつけの齒医者の方の△さん方の玄関で写真の出来が悪いと云う只それだけの理由で十七、八の半黒の少年に胸をフアツカで刺されたのである。△さんは刺さつたフアツカその△さんの屋内を裏口まで走り出てばつたりと仆れたのだ。半黒はその△さん逃げる。△さんは驚いて仆れている△さんの胸からフアツカを抜いたのだがこのフアツカが背を貫ぬいて切先が背後に出て居たと云うから物凄い話である。犯人は間もなく捕つたが未青年で三日目に釈放されたと云う事だ。△さんは幸いにも急所をはずれていた為生命は取り止めたが全快後は奥地は恐ろしくて到底居られんと間もなくサンパウロ市に移転されたと聞いた。兎に角当時の奥地に住む日本人に取つては殆ど無警察状態と言うよりもむしろ敵同志の様な反目を経て居た様である。

一九四五年一月十三日 日曜日 午后大雨

待望の母国映画が町東山倉庫に於いて上映せられるので植民地一同

ニ氏のカミニオンで出町した。折悪しく映画班の方で事故あり、夜の十一時頃漸やく開始したが暫らく振りで母国情緒を味う事が出来た。猶主催者の青年等は警察の許可を得ずにやったためカデイヤ入りと成ったがニ氏の取り為に依り間もなく釈放せられた。

一九四六年二月十日 日曜 晴曇

町事務所に於いて在郷軍人会結成に関する相談ありたるも決定せず。

全二月十四日 木曜日

前記事務所にて再び在郷軍人全組織の協議ありしも議論百出して決せず最後に希望者のみ結成する事になった。『此の前後の頃であつたと思うが時日は、はっきり記憶して居ない。もつとも強硬だと言われたニ市の臣道連盟の尖鋭分子である特攻隊青年達が 敗組の大物と目されていたニ氏を殺傷した事件が起こった。そして他の二三の敗組の巨頭にも天誅を加えると言う事で大騒動が惹起したのである。外にもバストス・マリリアなど全伯各地同胞相喰む、血で血を洗う大混乱が勃発したのであつた。』

全四月十四日 金曜 晴

昨年の八月中頃より（註Ⅱ日本無条件降伏前後）在伯同胞間に於いて祖国の勝利を信ずる者と日本敗戦を称えこれを宣伝する者との間に激しい論争を展開勝組の結社臣道連盟の尖鋭特攻隊の若者等は、養蚕、ハツカ栽培者を敵性産業とみなし遂に殺人放火等の非常手段に訴える

に到り、敗組一派は官憲と協力して自己防衛と臣道特攻隊の撲滅に乗り出したので、両派は愈々祖国の勝敗そのものを離れて仇敵として対峙抗争する事になったのだ。この為に戦勝派の主体臣道連盟本部の理事役員は投獄せらる。老全伯に於いて六百余名に及ぶという事である。町臣連支部長≡氏及び令弟の二人は一週間以前にサンパウロ刑務所に収監せられたりと本日知らせあり。この頃の町警察は管内の暴動を恐れ日本人植民地内のピストル其の他の凶器押収しつつありとの事であつたが、本日正午頃当植民地にも警官三名押しかけ部分的なりしも家宅搜索をなし、ピストル・日章旗・陛下のお写真などを押収して引き上げたり。 (以上日記)

『当日は私宅にも警官三人が押し入ったので記憶を辿り左に記す。家の附近で仕事をして居た私は警察の車の入って来るのをいち早く見付けて帰宅すると三人の巡査がおりて 来て二人は表から一人は裏からやって来る。

「オセはこの家のドノか」

「ハイそうです」

「オセは臣道連盟か」

「ハイそうです」

「オセを連行するぞ」

忽ち踏み込んで家宅搜索をする。捜し出したのは奥地に住む日本人の三種の神器とも言うべき、ピストル 両陛下のお写真日の丸の旗である。

それにブラジル国旗まで押収した。私がそれはブラジル国旗だから

よからうと言ったがいやこれも持つて行くと云う次第である。長男十七才と次男十五才が何よりも大切にしていた日本語読本と当時講談社から発行していた絵本雑誌など石油箱に入れたのをあわてて持ち出そうとした所を裏から這入って来た巡査に押えられて仕舞ったのは真実哀れに思われてならなかった。

「オセの事は又後に連行するからな」

と捨てゼリフを残して引き上げて行つた。前記日誌の通り≒氏兄弟は既にサンパウロに収監されて居り、私は臣連員であり而かも役員でもあるので早晩のカデイヤ行は覚悟して、妻と指を並べた様な七人の子供等に悲凄な気持ちで遺言めいたことを言い渡したものであった。それと言うのも私共は従兄と二家族だけ本村から二キロ米の距離の所にあり裏はコーヒー園を境にして矢張りフアゼンダのコロニヤまで二キロ程ある野中の二軒家である。

当時の我々に取つては殆ど無警察状態ところか警官はむしろ敵の様な存在であつたのだがそれから三日経つても十日過ぎてもカデイヤに入れられる事もなくてすぎた。後に聞くとところに依れば≒氏は「町臣連の全責任は自分一人にある」と頑強に主張して他の役員の名を口外しなかつたのである。≒氏は遂にニケ年間？ のアンシエッタの遠島となり帰郷後も又≒市に収監せられし事半ケ年以上に及んだ様に記憶している。私は今も猶氏の俠気を徳としている。≒市敗組主唱者の殺傷事件直後の頃であつた。ある日の暮方≒植民地→さんが一人の青年を伴つてやって来て言うには

「この若者は≒市の特攻隊員で他の二人と共に敗組の巨頭の一人であ

る王氏に天誅を加えるために狙っていたが現在のところ警戒が厳重でその機会が無いのでひとまず遠方に落ちのびる積りだが夜半までかくまって呉れないか」

との事である。

「さんの帰った後若者に色々と尋ねて見ると」植民地出身で歳はわずかに十七才、紅顔の美少年で私の長男と同年である。私は少年の顔をつくずくと見つめ乍ら思った。斯うした純真な前途ある若者を救わねばならんと！

「君の精神は良く解る。而し人を殺すと言う事は重大な問題である。今は其の時期では無い。奥地に親戚があるなら其処に身を置いて平穩になるまで待つ様に」

と懇々とさとし妻は握り飯を作り私は僅少乍ら旅費をあたえて早朝の二時頃であつたと思うが宅から野中の細道トッパン行のオニブスのポント迄七キロの夜道を長男を道案内に付けて送り出したのであつた。」

一九四八年一月元旦木曜日快晴

降り続いた雨も数日前より晴れ上り近来にない快晴である。輝かしい初旭は珈琲園の彼方より差し昇り戦后二ヶ年有余低迷している暗雲も次第に晴れて行くのではあるまいか。恒例に依り小学校に於いて遙拝式を挙行（以下略）

○

『私は其の頃僅かのコーヒー園と雑作をやっていたのだが、子供の教育は満足に出来ぬ俣に次女がもう年頃に成って仕舞った。（長女

は幼逝)村内の奥さんに裁縫の手ほどきをしてもらって居たのだが、せめてサンパウロ市に出して裁縫の外に日本式の礼儀作法や言葉使いなども習わせたいと思って娘を伴いサンパウロ女学院(赤間みちへ校長)裁縫部に入学させたのであった。其の時赤間先生諸先生方とも親しく面会し如何にも伸び々とした校内の雰囲気と生徒たちの正しい言葉使いや礼儀正しさなど恰かも母国の一部でもあるかの様な感じである。すっかり嬉しく成り安心して娘を依頼したのであった。其の帰途ノロエステ線の汽車の中でチエテ移住地の主任である三宅氏と同席して親しく成り、「今尚日本の敗戦は信じる事は出来ない」と言う私に対して熱心に祖国降伏を懇々と説くのであった。私は終戦后二ヶ年以上経っても以前懇意であった人達でも敗組の人とは戦争の事は決して話し合おうとはしなかったのだ。

敗戦の話など聞くのは身を切られる程嫌だった。若し敗戦したらいや無条件降伏したのなら我々日本人はどうなるのか? 祖国が無くなるのだ。思うだけでも堪えられん位遣切れない事である。私は三宅氏の乗車以来随分と長時間に亘る敗戦談議を聞き乍ら私も今まで疑問に思っていた事を突込んで質問して見たが要領を得られず(其の頃の私の片寄った思想では)納得のゆかぬ俣で、一駅で氏と別れたのであった。徳川幕府の初期の頃蔓延した切支丹宗を弾圧する為に使用したと伝えらる、踏絵と同様な事が此の臣連事件でも行われたと聞いたものだ。投獄せられた人達に天皇の御写真や日の丸の旗を踏ませたと言うのである。現在の若い人達の感情から考えればそれ程の事ではないかも知れんが当時の狂信的な戦勝者には堪えられぬ屈辱であった事は想

像に難くない。斯うした事も皆敗戦派の密告に依るものと憾んだものだ。明治開国以来大正昭和に至る約八十年親子三代に亘る日本独特の明治教育を受けた大部分の在伯日本人達謂うならば神国不敗の日本教の信者達は（私もこめて）戦勝を信じて疑わず真実の戦況など知る由も無く、否知ろうとはしなかったのである。当時日本の代理機関よりの報道を聞く事の出来た上層指導的立場にあった少数の人達やラジオ其の他のニウスで日本降伏を悟り又これを伝えきいて冷静な気持で受入れる事の出来た人々、そして祖国の不幸を慨き悲しんだ人達も又戦勝を信じて疑がわなかった人達も共に祖国を憶う真情には変わりはない筈である。只此の大騒動を引起した直接の原動力と成ったのは行きすぎた国粹主義者や特攻隊の若者達であるがこの運動を益々拡大混乱せしめた原因は行き過ぎた認識運動と此の先棒をかついだ半インテリーの軽薄な輩の運動がわざわいした事はたしかであろう。そして愈よく両派は勝敗を越えて仇敵として相争う事に成って仕まったのだ。その為に前記指導的立場に在った人達がその責任者と目されて殺傷せられたり又怨恨の中心人物にせられていたのは実に気の毒な事であつた。もう一つもつとも憎むべき原因は此の勝敗の紛争を利用して何か事にせんが為に事実無根の大デマを飛ばしたり祖国大勝の勅語を偽作して戦勝ニウスと共に謄写印刷にして配布して一層人心を混乱せしめたり偽宮様が現われて帰国切望の盲信者から白紙委任状を取って全財産を横領したりした罪悪は後世までも許す事は出来ないであろう。明治維新前後の一連の血なまぐさい事件といい太平洋戦争に突入する原動力となつた五・一五事件や二・二六事件其の他古今東西を通

じて革命や過渡期に勃発する数々の事件と同様に海外遠く離れて「束ね」をうしなった同胞達が起るべくして起きた混乱であつたと言えない事はないのだが？ 終戦后既に二十三年と言う永い歳月が流れ去つた。回顧して実に今昔の感に堪えざるものがある。私は一九五七年の秋空路で一回滞日三ヶ月と一昨年四月観桜船で妻と共に滞日五ヶ月の二回訪日しているが祖国の発展振りは目覚しくここに私が禿筆を以つて綴る必要もなく読者の皆様が先刻御承知の通りである。敗戦の灰燼の中から魂の抜けた様な気持で立ち上つた日本がマックアーサーの骨抜き政策にもかかわらず僅か二十数年の間に世界の文化国家として立ち上り米・西独に続いて自由世界第三位経済的大国に躍進しつつある祖国。三千年來培かれた伝統的な精神は敗戦に依つて亡びはしなかつたのだ。日本精神と言つては語弊があるかも知れない民族的精神が、藤猛が言う「大和魂があつたればこそ」と、私は確信する。終戦前後日系人間に勃発した一連の事件も事の善悪はさて置き祖国を敬愛する精神的な現われであつたと言えよう。」

戦時回顧

まや あきら

帝国海空軍の真珠湾奇襲の報道を、私は、その当時、日系人では私たち夫婦と長男の三人きり住んでいなかった、リオ州のアルト・デ・テレゾポリスで聞きました。その衝撃は、数日間を呆然と過したほどでした。

明けて一月二九日、ラジオは日伯国交断絶を報じました。この日から、枢軸国人の資産は凍結、預金は国家管理に移され、不動産の移譲売買は禁止されました。

私は、大財閥ギンレ家の荘園で、使用人二十数人の蔬菜花卉部の主任をしていましたが、一人の黒人が、何となく反抗的な態度をとるように思われた外は、誰もが、敵愾心どころか、むしろ同情の色さえ見せていました。主任会の時、一老人が、日本は三ヶ月もたないだろうと、白い眼を見せました。私は反射的に、三年は大丈夫。と答えましたが、それは、日本の敗戦を前提としての返答のようで、いつまでも気が滅入ったことでした。老人が、日本軍は、病院を爆撃し、女子供を殺した。と捨台詞を残して立去りますと、支配人は、気にするな。と慰めてくれるのでした。他の百余人の同僚達は、私の前では、戦争話はタブーとしていたようですし、平常よりもいたわり、親切に接してくれました。伯国人の度量の寛さには感謝したことでした。

その年四二年七月七日、伯団近海で、伯船三隻、米船二隻が、国籍不明の潜水艦らしいものによって撃沈されますと、即日、法令第四一

六六号が發布されて、閉鎖されていた枢軸国人の銀行頭金の一〇%が差引かれて、被害船舶の賠償金にあてられました。翌八日には、海岸地帯の枢軸国人は、立退きを命じられました。

それからは、日本軍の戦果があがる程、我々に対する圧力が加えられていったようでした。同年八月二十三日には、主要地帯の枢軸国人立退、枢軸国人の雇用禁止令が布告されまして、私も、この二法令に該当して、即日、休職させられました。それから、通行許可証の下付があるまでの二ヶ月半の間、主家の庇護の下に逼塞していました。

それまでに、この地方の枢軸国人の成年男子は、すべて拘禁されまし、留守宅は、暴民の土足で荒すにまかされていました。隣駅の唯一人の邦人〇氏宅にも、或日突然、警兵数名が、トラックで現れて、家宅搜索をし、書籍類、写真類などの紙類を一切、白紙にいたるまで車に積み込み、夫人と子供だけを残して、主人を拉致したと聞きました。私は早速、紙類の整理にかかりました。それだけが私の移民荷物であった、行李二はいの書籍の焼却を初めました。昭和初期発行された、あの豪華な詩集や全集物は、甚く燃え難いものであることを経験しました。庭先で、薪木をくべ添えて焼くのですが、何とも、煙が眼にしみるのです。全部を焼き終るのに、三日もかかりました。

十一月二十日に、警察署から突然の呼出しを受けました。いよいよおいでなすったと思いました。投獄されるものと覚悟しまして、後事を支配人に依頼しますと、彼は、君達が、次の落着く地に着くまでは、私の責任である。決して心配しないようにと、励ましてくれました。署長室で、君は何処へ行きたいのか？ 私は何処へも行きたくはない

が、どうしてもこの地を出なければならぬなら、サンパウロ州リベロン・プレットの妻の家族を頼って行く外はありません。と答えますと、ハタハタとタイプを叩いて、この紙をもつて、三日以内に、そこへ出発するように、と通行許可証を手渡されました。

それから四十時間後には、親子三人着のみ着のまま旅立ちました。しかし、途中のリオ市とサンパウロ市で、更に通行許可証を取得しなければ、目的地までは行きつけませんでした。当時、親子三人の旅費（汽車、タクシー）が三三〇ミル、ホテル、食費（車中二泊、ホテル一泊）二二五ミル、通行許可証一四ミルなどと記帖しております。そんな時代だったのです。

日本人は総て、カンポ・デ・コンセントラソンにでも収容されているのかと想像していましたので、妻の実家が、戦前通りの生活を送っていたのが、不思議でさえありました。その地方で、二年程百姓などして英気を養ってから、その当時、草木も靡くといわれた北パラナへの転出を思い立ちました。先輩△氏を頼って、アラポнгаへ移ったのは、四四年十一月でした。その日の二十四日に、試みに、日本の兄宛に手紙を出してみました。これは後日、一年半の後、四六年四月十九日に、無事に届いたことがわかりました。

四五年五月六日、独逸敗戦の報が入ますと、その頃、塩、砂糖、小麦粉、肉類、石油などの欠乏で、戦争に飽きあきしていた、この国の民衆は、狂喜乱舞して、爆竹をあげて、戦争が終った。戦争が終った。と叫びまわりました。私は、肩身のせまい思いで、それを聞いていました。暗雲は飛散して、枢軸国人に対する偏見も明朗になったのです。

けれども、私は、次に来るべき日本の悲運への不安に、暗膽たらざるを得ませんでした。

東南アジアの戦果も、刻々、我に利あらず、切迫した報道が、伯字紙に、日日のせられました。その頃、どこからともなく、突拍子もない日本戦勝のニュースが、口伝てに、或いは紙片れに走り書きされて、流布されてくるようになりました。

陛下の詔勅が翻訳されて、全文掲載された、八月十六日付のオ・エスタード紙を、友人山路冬彦が私の手にのせて、黙って帰って行きました。私は、来るべきものが来たと思いました。が矢張り、つまらねえことになりやがったと思いました。それは、五年程前に、日本から父の死亡通知を受けた時に似た、何とも憂鬱な気分でした。と同時に、兵役にあるものと思われる日本の兄弟や甥たちのために、ホッとしたことでした。開戦当時、不用意に予言した三年を越えること八ヶ月余りでした。金儲けの下手な私には、錦衣帰郷などは考えられもしないことでしたが、ここに至って初めて、この子供達の国に永住しなければならぬという、漠然とした決心が、日毎に確立してくるのでした。

そんな折、詔勅はデマだ。騙されるな。という声を聞いて、私は愕然としました。『忍び難きを忍び耐え難きを耐え。』といったような、東洋的な言いまわしが、敵側のデマであろうとは思われませんでした。その間にも、荒唐無稽な戦勝ニュースというものが、ガリ版刷りで廻ってきました。『我無敵陸戦隊は、大西・太平両洋岸より、北米大陸に敵前上陸を敢行したり。大陸横断鉄道は、己に我軍の手中に帰

したり。』とか、『パナマ運河は、我軍の管理下にあり。』といったたぐいで、輦蹙をかう以外の何物でもありませんでした。

当局の統制や圧迫は、一斉に解かれた感がありました。しかし三年余りの間、隠忍に隠忍し、鬱屈していた一般邦人のやり場のない忿懣は、なかば自棄的に爆発しました。精神的な支柱を急に失って、邦人同士が、お互いに懷疑的になり、同胞相剋という意外な屈折をもった、殺伐なエネルギーとなつて迸りました。それが、四六年三月四日バストスで溝部氏狙撃のテロ行為に端を発した、臣道連盟事件でありました。この連盟の他にも、大日本国民前衛隊、桜組挺身隊、愛国同志会、血盟団というような、右翼めいた名称の、所謂勝ち組の団体が、各地に発生しまして、次々に、意想外の行動をおこして、コロニアは、日本移民史上初めてみる、混沌とした時代に突入していきました。それは、人間の弱さ、醜さをさらけ出した絶望的な愚行の連鎖をみるような、悲しいできごとでした。私は、戦時中より以上の暗い谷間に追込められたような嵐の中で、悪夢よ、はやく覚めよ。と、ひたすら祈りたい気持でした。

四六年十月、待望久しかった日本の肉身や友達からの通信が入り初めました。U. S. ARMY EXAMINERと、検閲済みの印があるものでした。

四七年四月からは、北米を経て、救援小包を送ることができましたし、救援金の月掛けも初められました。

五四年一月、DOSPが、偽朝香宮のキヨ農場に手入れしました。その後、佐藤、川崎などこの一味の逮捕を最後にして、さしもの永い悪

夢の時代は終わりました。終戦から実に、八年四ヶ月が経っていました。

その間、私は、黙々として、農村の二世達に日本語を教えるということより外に、何もできませんでした。

○

(遙かなる思い出)

辺境の漁夫

務台一郎

禁断の秘境に入る辺境人には漁獲物への執着はない。「魚漁天国」という言葉に言い知れぬ魅力を感じる。密漁の危険もあえて問うところではない。

ミナス州ジュイス・デ・フォーラ附近の山地に発祥するリオ・グラнде(大河)はその延長一三三三キロの中流以下はサンパウロ州との州境を形成し、アパレッシーダ・デ・タボアードに於て、ゴヤス州の紛糾せる水源地を、サン・フランシスコ河及びアラグアイア河と共有し全長九五七キロの大部分はミナス、ゴヤス両州の境を流下するパラナイーバ河と合流しパラナ河となる。

パラナの呼称はトウピー語のパラナンに由来し、海、洋々たる大河の義である。

○

その第一段階に於て、パライーバ流域及びモジアナ鉄道沿線の開発をなしとげた聖州人は第二段階の進路をマツト・グロッソ州州境に向けた。ノロエステ、ソロカバナ両地帯の開拓がそれである。

彼等はマリリアその他の瘴疫、幾多の天災、父祖伝来の国土に侵冠する異人種の開拓民を撃退せんと、執拗、勇敢なるカインガンギ土人の襲撃などをものともせず、中途にたおれた犠牲者の死骸をふみこえふみこえ、幾多の悲劇と対決しながらパラナ河へと進んで行つた。

洋々たる大河パラナ河はその上流に於てサン・パウロ、マツト・グロッソ両州の州境を形成し、瀑布界の王者セテ・ケードス以下に於てはブラジル、パラグアイ、アルゼンチンの三国の沃野を潤し延々四千有余キロ、ついにラプラタ河となつて大西洋に注ぐが、大河のほとりに展開される人類社会の消長には、何の興味も関心も示さないかの様に、その創成以来の悠久の流れを無心につづけて居る。

○

日系コロニアの先駆者、初期の日本移民たちはこの聖川開発の内奥地大行進に相当大きな役割をはたしたが、中にはこの地味な艱苦にみちた開発事業からこぼれ落ちて、当時の絶域であつたパラナ河に住みついて、漁猟の道に衣食の資をもとめたものもわずかながら居た。

○

グツと突込んだレモ（櫂）は深く斜に水中に入り込み、殆ど手が水にふれる位の所で水平に力強くかかれ、引上げられる直前に一寸右にピツとはねる。

新吉は額ににじみ出した油汗をぬぐう暇もなく、そのリズムカルな運動を調子をくずさない様につづけた。

エピタシオの町で買入れた食料品の重さを十分考量に入れて相当上流まで、流速の少い河岸をこぎ上ってから中流にのり出したのだが、もう四辺を立ち込めだした夜霧のために、彼等の住んでいる島の位置の目測を誤り、少し流され過ぎたので、表面は機械的に漕ぎつづけているが内心は少しあわて出した。

長さ一キロ位の島ではあるが、今のカノアの位置は、もう五百メートル位の所まで流されて居り、そしてこの辺が流れも一番強く、彼の懸命の努力にもかかわらずカノアはどんどん流される。

この五百米の間にどうしても島に漕ぎつけてしまわないとそこからまだ一キロ以上もあるマツトグロッソ側まで舟を漕ぎ寄せ、その間に流される距離を勘定に入れば、五、六キロも上流にこぎ上って、又島を目掛けて漕ぎよせねばならぬ。まだかけ出しのペスカドール（漁夫）の彼にとつては夜の仕事としては大分荷が勝ちすぎる。

ことに昨年（一九二九年）の世界的大恐慌のあおりを受けて、コーヒーを初め全ての農作物は暴落し、都市といわず、農村と言わず深刻な不況にあえぎ、今までポンポンモーターの音を景気よく立てて居た魚問屋の船も見えなくなり、マテラランジェイラ会社の定期航路もここから上流は中断され、このマツトグロッソ境いのパラナ河一帯は太古ながらの静けさをとりかえしつつあり、夜間にはオンサ（豹）の跳梁も激しくなったので、途中行きくれて、マ州側の河岸で一夜を明すのは、故国に於ては單身山に野宿する事になれて居た彼にとつても余り有難い事ではなかった。

あたりをとぎした夜霧のために島も両岸も全然視界の外だ。ただ流向によつて上流と下流が想像されるだけだ。と力一ばいにかいて右にはねたレモに異状な手ごたえが感ぜられ、引上げたレモの先に一株の浮草がへばりついて居る。左手でしっかりと櫂の柄を舟ばたに押えつけ右手でむしりとる。

レモの先端のうすい所に二、三日前から出来て居た割目に細根が食

い込んだと見え一度にはとれない。全てが彼の思考から遊離した反射的な動作であつたが、その間十秒か二十秒の間にカノアはどんどん流され左斜上に向いて居た舟の舳先は殆ど流れと直角になつてしまつた。無我夢中で舳先を立て直す彼の混乱した頭の中を、チラと島の小屋の焚火の前で、好物のピンターダ（なまずの類）の血合の燻製で残り少くなつたピング（火酒）をチビチビやっている白髪童顔の本間老人のすがたや、彼と余り仲のよくなかつた、東京に居る兄貴や父親の顔が馬鹿になつかしく通りすぎていく。

僅の間に二、三十米も流されたのだろうか、ようやく舳先を立て直した頃には、全身にビッシヨリかいた汗があるか無きかの河風にひんやりとつめたたかつた。

彼は只無我夢中でこぎつづけた。末だ島は見えない。夜霧の中をすかして島を探して見る元氣も失せ、只レモを動かす機械的な動作だけが彼を支配して居た。

暗黒の大河を流されて行くと云う現実感もなく、何ものかに憑かれ、駆り立てられて居る様な氣持で、然し不安定なカノアの座板の上で、視覚禁絶の状態にありながら、奇跡的に身体の重心だけはくずれずに居たが、彼の感覚は、がぼりがぼりと言う、秒を刻むレモの立てる水音を捕える聴覚の中で生きて居る丈けであつた。

突然ぐつと突込んだレモにゴツンと抵抗を感じた。

反射的に顔をあげて見たが前面には何も見えない。只暗一色の夜霧である。水中の流れ木にでもあたつたのかと、又一掻き漕ぐと今度は確にガリツと小砂利をかい手ごたえである。

ようやく自己をとりもどすと、すぎ去った今までの死闘の瞬間が現時点の彼にとっては、異なった次元の事象の様に感じられた。

今度はゆっくりとあたりを見廻すと、十米ほど上手にぼんやりと島の岸が見えた。

危い所で丁度島の下手に漕ぎついたのであった。もう二度とレモをとる元気もなく、ズボンの裾もまくりあげず、そのまま水中にジャブジャブ下り立って、とも綱を肩にかけて、上流に向って舟を引き出した。三百米ほど上って、大きな岩の突き出した岬を廻るともう小屋の火がチラチラ見える。

そこから僅に百米ほど上手にある彼等の小屋の前の船着場までカノアを引いて行く事もせずに、最後の努力でぐっと勢いをつけて二米ばかり舟の舳先を岸の砂の上に乗り上げさせると、そのまま後もふり向かず、フラフラと小屋の方に歩いて行った。

サクサクと裸足で砂をふむ大地の感じが、最初の間は何か人ごとの様であったが、次第に力強く感じられ、喜悦の情がこみ上げて来た。無言でノタリ込む様に小屋の空き袋のたれを分けて中に入ると、彼が危機の間に脳裏に浮べた本間老人の晩酌の姿をそのままそこに見た。

ボリビアで女の事から仲間の日本人を殺し、アマゾン伝いにこの聖州のどん詰りまで逃げて来たと言う噂のあるこの本間老人も、もうよる年浪にすっかりおとなしくなり、そう言う激しい性情を現す事も無く、一九二四年のイジドロ革命の頃からこの島に住みついて、淡々とした世捨人の様な生活を送っているのであった。

十一月雨期に入る前に最後の遠漁を終えるとその獲物、乾魚、はら

らこの塩から、毛皮などをたずさえて奥ソロカバナの邦人集団地を売って歩く。その間に居心地のよい所を見付けると、翌年の五、六月頃までそこで雨期ごもりをする。もう激しい労働は出来ないので、軽い雑用などをして、晩酌のピンガを少し相伴させてもらう程度の事だ。時たま新吉の様な風来坊が彼の生活の中に入ってくる事があるが、この時期に別れてしまおうともう二度と彼等が会う事はなかった。

老人も農家に住みこんだ最初の間は、他人の作って呉れる三度三度の規則正しい食事、赤ん坊の泣き声、鬼針金につるされた洗濯もの、女の下着、赤いもの、おむつなどに、遠い日本において来た家庭生活への郷愁をなぐさめるのであるが、三月の末になりポツポツ雨が遠のくと、無性に島の小屋が恋しくなってくる。

母なる大河の魅力が又彼を引きよせるのだ。ギラギラと陽光に反射する自浄々の砂浜、空か水か見はてぬあたりに浮ぶ白雲、マ州側の沼地を我もの顔に飛び廻る水鳥の群。

もう赤ん坊の泣き声もうるさくなり、日本人会長、日本語学校、棉花の値段、稲の出来工合、全てがおぞましくなってくる。

四月、五月は収穫時期で忙しいので何とか引きとめられて働いて居るが、六月になるとその家の主人も出て行くのを笑って許してくれる。

「もう、じいさんの頭は島の方へ行ってるだから、ここに居ても仕事にならねえ、又来年やって来なせえ」

サント・アナスタシオの町あたりで、食糧・漁具・弾薬などを仕入れて猫一匹待って居無い島の小屋に帰って行くのであった。

○

「どうしたえらく遅かったではないか、それに顔色が十分悪いぞ」
「うん、少し流された。あの岩の所にカノアを引き上げてあるから、マンチメント（食糧）を運んでおいて呉れよ。俺は一寸休む」

と言いつてると、濡れたズボンのまま足を焚火の方に差し出し、あり合せた空き袋を土間に敷くとゴロリとそこに横になった。

ノツソリと立ち上って小屋の戸口から外をのぞいた老人は

「えらい霧だ、おめえが流されるのも無理はねえ、そんな不精をせずに 早く着物をきかえてカマ（寝台）に入れよ、それで千葉たちはどうした」

「うん、明日昼までにここに来るって、伝馬で行くそうだよ」

それだけを夢心地で答えると、そのまま彼は寝込んでしまった。次第に不況が深刻になるに連れ、魚の値も安くなり、この川すじの生活もむずかしくなって来て、一人去り二人去り又元の地道な百姓の生活の中に逃げ込んで行った。日本人漁師の最後の二組であった彼等が、明日は遠漁に出発する日であった。

もう一度小屋の出口で、正体なく寝込んでしまった青年の上にチラと痛ましそうな視線を投げると、この男も東京の親の所に居れば、何の苦労もなく暮して行けるのに、好きこのんでこんな所に来て、インディオ（土人）同様の、なれない生活をして苦労をする物好きな奴だ、老人はこんな事を思いながら、スタスタと暗の砂浜をカノアの方に歩いて行った。

○

何であつたか忘れてしまつたが、新吉は楽しい夢を見つづけて居た。ふと目がさめると隙間だらけの小屋の中には、朝のすずやかな光りが、あちらこちらから差し込んで居た。裏の深林から、又小屋の上面一ばいに張つたファイゲイラの大木の枝から小鳥らの朝の楽しい合唱がきこえてくる。この小鳥の声で目をさます瞬間が彼の一日中の一番楽しい時である。

何事にも無器用な彼はまだサビアとクルイーラの轉りを聞き分けることが出来ず、後は皆「名も知れぬ」小鳥の鳴き声であるが、ゆつくり後味を楽しんでから起き出す。

夢うつつにカマにかつき込んで呉れたのは、おぼえがあるが、ズボンもはき替えさせてくれてある。

もう日も大分高いらしい。若者の健康体は一夜の熟睡ですっかり前夜の疲労をとり返す。彼は満ち足りた気分でカマから下り立った。朝の早い老人はもう朝釣りに出かけたらしく、そこらに姿は見えないが、焚火の灰の中には煤けた瀬戸引きのブルーレ（コーヒーポット）が突込んであり、甘い香ばしいコーヒーの香りが小屋一ぱいにただよって居る。

小屋の外に出ると、対岸の聖州側の森林は牛乳色の朝霧につつまれて、わずかにその小高い所だけがポツンポツンと大洋に浮ぶ小島の如く見え、又エピタシオの町は岡の上のマテ、ラランジエイラ会社の倉庫だけが水上の城郭の如く、見える。マトグロッソ側の方からは遠く河千鳥の鳴き声が風に送られて、時々ピーピー聞えてくる。何に驚かされてか河岸の沼沢地から水鳥がパツと群れ立つ。

鶴の大群がそのまっ白な両翼を朝日に反映させながら、クワックワツと言う鳴声を立てて、飛び廻るのは見事なものである。

大河の日々の静かな朝の美しい景色であつた。舟着場のあたりは彼らの料理する魚の残骸が水そこに沈んで見えるので、まだ老人はど無雑作の生活に慣れない新吉は十米ほと土手の浅瀬の中にズボンをまくり上げるとジャブジャブ入って行つた。この大河の岸べの水は朝でも案外暖かい。

河砂が崩れる感触が足の裏をムズムズとくすぐる。小魚がよつて来て脛をつつく。一年の大半は滔々たる濁流であるが、九月頃からはすっかり澄み切つて減水し、河床が表れ、あちこちに美しい白砂の浜が見られる。

それから雨期の始まる迄の二、三月はこの河に生活するものにとつては一年中の一番楽しい季節であり、又一年分の生活費をかせぐ忙しい時期でもある。

ザブザブと気持よく顔を洗つて居る彼の眼の前を老人がカノアで下つて行つた。

島の上手の方で釣つて来たのであろう舟の中で魚のバタバタあばれまわる音がきこえる。

舟着場に上手にピタリとカノアをつけると、手早く杭に綱をむすびつけまだ顔をふいている新吉に声をかけた。

「どうしたゆうべは大分やられたな」

「うん向う岸まで、ぶん流されるかと思つたよ」

「なーに、そんなのはまだ何でもねえ、俺なんかはマードレ・デ・

デウスで流れ木にカノアを突かけて引くり返した時なぞは、三日も中流の岩にしがみついて居て助かったもんだ」

「あほ！、じいさんと俺とじゃあ身体の出来がちがうよ」

「若いものが何を意気地のない事を言う」

これが彼等の朝の挨拶であつた。

やがて立ち上つた老人の手には二キロ以上もある美事なパクーと小枝にさされた三、四匹のピラカンジューバがパタパタともがいて、ぶら下げられて居た。

そのまま老人は小屋にかえらず、踏板の上を形式的に水をかけて洗うとそれをまな板にしてパクーを料理はじめた。

朝のすがすがしい空氣に昨夜夕食をしなかつた事を思い出し、急に空腹を感じた新吉は、小屋にかえると、ブルーレにぐらぐら煮えたつて居るコーヒーをカネコン（手付きコップ）に一ぱいつぐと、フーフー吹きながら、うまそうに一滴も残さずにすすり込んだ。

小屋の隅の台の上には彼が昨夜苦勞して運んだ食糧品が堆く積んである。

米の袋をあけて、入り用分だけをカルデロン（釜）に量り入れると、二、三枚のアルミの皿をつかんで水ばたに出た。

魚を料理している老人のそばに皿をカタンとおくと、自分も少し上手にしゃがんで米を洗い出した。

ミルクのような米のとき汁が流されると、小魚が一せいによって来て水中に落ちこぼれる小米をつつつく。

なれた手付きでパクーの刺身を作っている老人は

「おい昨日買って来たセボーラ（玉葱）を入れて味噌汁を作れや」と言う。同じ事を考えて居た新吉は只単に

「うん」

と返事をして、久しぶりに青物を入れたピラカンジューバの味噌汁の味を思い浮べて、思わずゴクリとのどを鳴らした。

市場に出してはドラードが味もよく形が立派なのでもてはやされるが、この川筋に住む者は何よりもピラカンジューバを珍重する。

新吉が初めて老人の所でこの魚の塩焼きにしたのを味わった時にはそのうす桃色の身と言い小骨が無ければ海老の肉かと思うほどであった。

腹一ばいに朝食をつめ込んで、食後のコーヒーと煙草に安息の一時を過して居ると、「エイエイ」と言うかけ声とキイカタンキイカタンと言う櫓の音がきこえて来た。千葉たちが伝馬船でやって来たらしい。やがて小屋の前あたりで、その音は止み、

「お早うござんす」

と物固く朝の挨拶をして千葉老人が小屋に入って来た。

○

郷里の千葉県の水産試験場に働いて居た事があるとか言うこの老人は、好んで会話に生硬な漢語を交え、政治の話が好きで、仙人の様な本間老人や、辺境にあこがれる新吉などとは、違った肌合を持っているが、只それだけの事で、唯一の隣人、同業者としては、可もなく不可もないと言う所であった。

二、三年前の好況時代に、伯人の大地主をときつけて、このプレシ

デンテエピタシオ港で「大規模な水産事業」を計画し、何人か邦人青年を集めて、仕事にとりかかったとたんに、このパニックで資本家は手を引き「事志と違い事業は一頓挫の形」で、その時作った伝馬船や魚網などをそのまま貰って、集った青年の中で一番実直そうな、又頑健な山田君と言うのを、この附近でも評判な美人の一人娘の婿にして、エピタシオの町外れの、好況時代には分譲住宅地であったが、今は住む人も無い草深い空き地の中の一軒家に住み込んで、働きものの山田をたよりに、細々と川漁師のくらしを立てて居るのであった。

○

つづいて山田が、これは無言でノッソリ入って来た。背のひくい頑丈な男だが船あしの重い伝馬に重荷をつんで二キロ近くの川瀬をおしわたって来たのでピッシヨリ汗になって居る。

これから一月以上も小屋を留守にするのだが、別に何も心配する事も無く、ただ焚火の残り火をすっきり外に放り出し、食糧その他の荷物をカノアと伝馬に分けて積み込み、ポルトン（戸）代りの空き袋を針金で柱に結びつけると、それですっきり出発の用意が出来た。

伝馬の方が荷も多いし、船足もはるかに重いので、屈強な山田と川なれた本間老人が乗り込み、体力には余り自信のない新吉と口の方がたしやの千葉とが、カノアを漕いで行く事になった。

彼らの目的地は六十キロほど上流にある島であった。

現在ではその島の対岸にパウリセイア市が建設されている筈だが、その頃はあたりは一面の原始林で、勿論その島も無住であった。当時の奥ソロカバナ線の人間居住の限界であったリオ・デ・ペイシ（うお

の川）をはるかにこしたジャングルを切り開いて、ある山師的な大地主が、日本移民を入れて大がかりな米作を初めたが、猖獗を極めた悪性のマラリアと二九年のパニックのために失敗に終り、日本人たちは集団逃亡をくわだて、屈強な男たちが、每晚河岸までこつそり忍び出て、何隻かの筏を組んで、ついにある夜老若男女一人も残さず、月明のパラナ河を下って、ソロカバナ線最奥の邦人集団地であった、プレジデンテ・ヴェンセスラウの町に逃げ込んで来たのもその頃の事であった。

伝馬の荷物を少しカノアにとって船足がいくらか軽くなった上に、本間の方が千葉よりも、勢を出して櫓をこぐので、大体カノアに雁行して伝馬も進み、朝霧はすっかり晴れわたったが、まだ川面をなでる午前のそよ風に大して汗をかく事もなく、マ州側に漕ぎつく事が出来た。

この内奥地は一面のカンポ（原野）であるが、水辺四、五キロ位の間は、沼沢地か原始林で、その間を縫って有名、無名のあまたの支流が流れ込んで居る。

なんと言ってもこんな小舟で相当の荷をつんでこの大河を横断するのは彼ら四人にとっては重い仕事である。まず一安心という所で適当な入江に船をこぎ入れ、対岸を見はらす砂丘に腰を下して一休みする。

入江の奥は次第に細まって、せまい支流となって背後の密林の中に吸い込まれて行くが、その入口に立って奥をのぞき込んでも白昼の陽光になれた眼には何も定かには見えわめる事が困難なほどですぐら

く、目がなれてくるとまず、樹冠をぬってチラチラさし込む日の光が黄金の矢の如くくらい冷い水面に光るのが見える。

何物とも知れない水音が時々パチャリと大きくあたりのしじまを破る。

何とも言えず不気味な感じだ。

人をおびやかすこの非情の闇の世界に対比して、前面のサンサンたる春の陽光にかがやく大河の風景は明るく、温かく人の心を和げる。もう聖州側は四キロ近くへだてて、彼らの小屋のある島のかなたにエピタシオの町も遠くかすんで見え、彼らはじっと身動きもせず、この自然のたたずまいをおのの身にこたえて眺めて居るのであった。本間老人は彼の半生を過したアマゾン奥の原始境や、ゴム採取地の激しい生活と思いくらべ、何よりも自然の美しさに強い感興をおぼえる新吉は只ウツトリと夢心地であたりの景觀に溶け込んだ様な気持ちになる。

神経の粗雑な何事にも余り感動しない山田はこの優麗な景色にも余り関心をおぼえず只今度の遠漁の成績だけを気にかけて居るし、世俗的な千葉は、何と野蛮な所まで流れこんだものだ、早く小金を作ってヴェンセスラウあたりで、よろず屋か宿屋でもあけたいものなどと柄相応な夢をえがいて居る。

「さあ行くかな」

皆の夢を破って本間老人が立ち上った。

ここからカンタガールの大曲りまでは、マ州側の岸にそって淀み淀みを求めてこぎ上る。時々本流からそれて水路や湖のような所に分け

入って行く事もある。

彼らの船が入って行くと、水鳥の群がパツと一せいに飛び立つが、何の危害も加える様子がないと見てとると、又すぐ何事もなかった様に元の所に下り立って、無心に餌を探したり泳ぎまわったりする。

急に河筋が曲る角の土手の上からカピバラ（水豚）が午寝の夢を破られてドブンと水に飛び込んだりする。

こうしたおだやかな舟路をたどる事約三時間やがてカンタガールの瀬音がきこえ出した。しばらく行くと純白の砂丘が現われる、強い午後の日光に反射してキラキラと光り、やわらかい水の色や、草木の緑になれた目を激しく射る。

白浜の上手は奇岩怪石の間を淀み又流れる浅瀬となって居り、そのもつとも広い淀みの中で十キロ近くもある様なドーラードが何十何百となく狂気したかの如く相きそって、水面から跳ね上って居る。

この激しい乱舞のひと時を新吉等は只呆然と眺めて居るのみであったが、辺境人本間老人は愛用のウインチェスターを握むと、浅瀬に飛び下り、魚の群れに近ずくとパンパン乱射したが何の成果もなかった。

このウインチェスター銃は二十四年のイジドロ革命の際、サンパウロ州を追いつめられてエピタシオに屯して居た革命軍の兵士たちがマットグロッソ州に逃げ込む時に、日頃魚を提供して呉れたお札に多量の実弾と共に老人において行ったものだが、当時老人は走って居るモーターランチの上から飛ぶ鴨を打ち落すと言う伝説がある位の銃の名手であったが、よる年波か、飛ぶ魚はむずかしいのか、すごすご老

人は空手で舟へかえって来た。

ふと足をとどめると浅瀬の大きい岩のうしろをのぞき込んで居るの
で、新吉らも腰を下して居た熱い砂の上から立ち上って、そばによつ
て見ると、けばけばしく彩色した六十センチ位のひとがたが流れよつ
て石にへばりついて居る。老人の話では何かマクンバ（呪術）につ
かったものらしいと言う。

新吉が珍らしいから持つて行こうと言うと、ふだんは無口の山田が
むきになって、飛んでもないこんな縁起の悪いものと、気味悪そ
うに棒ぎれで水流におし流してしまった。

パラナ河はここで大きくㄣ字形に曲り、外側のマ州岸は浅瀬や激流
であるが、聖州側は深く淀んで居るのでここから対岸にわたる事にな
る。

もう午餐の時間は大分すぎて居るが、まず難事を先に片付けてから
休息と言うのが、辺境のくらしの鉄則で、しばらくぶりで緊張した気
分で河心をめがけて「えいえい」と漕ぎ出す。緑のじゅうたんの様に
見えていた対岸の森林が、次第に大きくのし上って来るに連れ、流れ
もおだやかになってきて、もう余り流されない。

やがてとある岬のかげの淀みに大きく枝を張ったファイゲイラの下に
船はつながれた。

一刻も早く食事の支度をと新吉と山田は森の中の枯枝をガサガサ集
める。

千葉は用意して来たマンジョカ粉のねり餌をつけて、適当な淀みに
釣り針をなげる。こんな所にはファイゲイラの実を食べに沢山魚が集

まってるのだ。

カルデロンの蓋を飯の湯気がプープー吹き上げる頃には、千葉老人が得意そうに、四、五匹の小さいマンジーと一キロ位のパクーを二枚ぶら下げてやって来た。マンジーは塩をふり小枝にさして焚火の廻りに立てられ、パクーは相変らず刺身に作られる。

巨木の根方に腰を下して、ぼんやり煙草を吹かしながら、河面を眺めて居た本間老人も呼び迎えられて昼食が初まる。

「刺身にするには小骨が少くて、こいつが一番いいなあ」

「うん、このパクーと言う魚は何だかビッシヨ（けだもの）の肉のような味がする」

こんな会話が交される頃には昼食もすみ、各々木かげを求めてゴロリと横になり煙草をふかし、雑談にふける。

その頃（一九三〇年）彼らの背後に横たわる森林はリオ・デ・ペイシに沿ってずっと聖州の中心近くマリリア、バストスのあたりまで続いて居り、サン・パウロ側の牧場から、又マツトグロッソからボアデイロ（牛追い）に追われてくる途中逃げ出した多数の牛がこの附近の森に半ば野性にかえってかくれ住んで居た。

一度カラビーナ（騎兵銃）を持って入って、うまそうな奴をしとめて、シユラスコ（焼き肉）をやって見たいなどと言う他愛もない話が出ると今まで黙然と煙草をふかして居た本間が

「いや牛も居るが魚も沢山居るぞ、くさるほど居るぞ」

口をはさんだ。

「あんたは何時かあすこへ入って行った事があったねえ」

と千葉老人。

こんな話に目のない新吉が何気なく

「それは一体何時頃のこつたい」

と誘導戦術に出る。

○

一九二八年のコーヒー好況時代の事であつたがコーヒーのコッコ（皮つき実）は一俵五十ミルにも暴騰するし、棉を植えても米を作つても、みな金となる木の様な気がして、奥地の農村は湧きかえる様な景氣であつた。

その頃ヴェンセスラウ町から一駅奥のカユアーと言う所に奥ソロカバナでも有数の製材所があつた。

附近の開拓地や、自己所有の森林から原木を切り出し、製材したり或はそのままで各地に送り出して居たが、いくら稼業しても品が間に合わないと言う繁昂ぶりに持主のガブリエルは至極満足の状態であつた。

この男はマ州で相当の牧場を経営して居るのだが、ソロカバナ鉄道開発当時にこの附近に膨大な土地を、何如なる手段によつたものか、手に入れ、無尽蔵にある森林資源をあてにこの仕事を初めたのであつた。

彼の所有地内にサンパウロ湖と言う長さ十キロ位の湖水があり、それはパラナ河大氾濫の際の水路変更によつて生じた河成湖の如きもの

であり、彼はそこを禁漁地域とし、何人も立ち入る事を許さなかったので、魚族の豊富な事は沿岸の漁師たちの垂涎の的であった。ガブリエルは一族、友人、町の有力者たちなどを招待して時々そこで漁獵の幾日かをすごすために、湖畔に一軒の別荘を持って居り、屈強のカマラーダ（労働者）を、見張り兼留守番においてあった。

ある日カユアーの呑み屋でその男と一緒にになった本間老人が丁度魚の売上げでふところが暖たたかかったのでしたか吞まして、そこに密漁に入り込む手引きをさせる話をつけた。たいして魚獲物に執着はないが、辺境人のさがとしてそんな魚漁天国にはなはだしく心を引かれるのであった。

陸路は目につくし、魚具、食糧その他の荷物が大変なのでパラナ河から水路を伝って入って行く事にした。

その入口は彼らが今休んで居る所から一キロ位下流にあたり、そのカマラーダからよく路の様子を聞いておいて、ある日朝早く島を出発した。

禁断の秘境に入る辺境人の心境、老人はそんな言いまわしは知らなかったが、心はずみ張り切った気持ちで力強くレモをかいだ。郷里の新潟の小学生の頃、母親の作って呉れた弁当を持って、教師にひきいられ乾いた、県道に一ばい土壌を立てて行った遠足の日、そんな追想がふっと老人の頭をかすめる。

十時頃には教えられた水路の入口についた。そこは一面の砂地の浅瀬であしの様な草が密生して居り、余程注意して居ないと見逃してしまふ様な所だ。

目あての大きな枯れた立木を目がけて舟を進めて行くが、浅いので時々舟ぞこが砂に食い込む。レモを竿の様にして砂を押して行くうちに次第に深くなり水路の形をととのえて来た。枯木の丘の下まで来て一服すると、草の葉で切ったと見えて手やほほがヒリヒリする。此所から先は生い茂った密林の中を行く。

流速は殆ど無いが、せまく深い堀り割りの様な水路の水は黒々としてつめたく、壁の如く立ちふさがった木木の樹冠にま昼の明るい日ざしはさえぎられてあたりは夕ぐれの如くうすぐらい。

両岸が次第にせまって来るに連れトランケイラ（倒木）の障碍がはなはだしくなつて来た。まれには誰か通ると見えてカノアの通り抜けられる程度に切り払つてあるのもあるが、その後倒れた所はどうしても通れない所がある。

昨夜よく研いでおいたマツシャード（大斧）をとり出してじやまな枝を切り払つて通つて行くが、グラグラ不安定なカノアや、すべりがちな樹幹の上で斧をふるうのは非常に困難な仕事でもあるし、禁漁区域でカンカンマツシャードの音を立てるのはいくら物に無頓着な老人でもいささか気が引けるので、可能な限りはカノアにあおむけに寝て両手でトランケイラをささえ、背中で舟を水に押し込む様な姿勢で通り抜けて行つた。

そのうちに水路が少し広くなり、倒木の難も少なくなつて来たので、少しのんびりした気持ちでカノアをやつて行くうちに、左手の土手から、ヒラリと何か黄色いものがひらめいたと思つたら、ドシンと舟に衝撃をあたえ、見定める暇もなく右手の藪が一寸ゆれ、そのまま音も

なくもとの静寂をとりもどした。

その出来事の痕跡はただカノアが少し横ゆれしているだけである。

○

「いや驚いたの何のつて、いや驚いたのはしばらくたってからで、初めは何のことか解らずぼんやりして居たが、そのうちにビツシヨ（けだもの）の臭いに気がついて、ああオンサがカノアを飛び台に使いやがったと思いついたがさあそれからはおっかなくておっかなくて」

○

老人は鉄砲を膝にだく様にしておき、一心にカノアをこいだ。

そのうちに前方が明るくなって来ると、水鳥の鳴き声がやかましく聞え出し、小高い土手のかげを廻るとポツカリと湖面にすべり出た。番人の住んで居る別荘は対岸にあり二キロ近くの距離と聞いて来たが、まだ日が高いのに立入り禁止の湖面を堂々と横切って行くのは気がひけたので、右手の岸ぞいに岬々のかげにかくれる様にして舟を進めて行った。

目的の家の近くまで漕ぎついた時はも早日も西に入りかけて居た。少し手前の土手のかげに舟をかくして、そこによじ上って木のかげから少し様子を見て居ると、夕餉の支度でもするのか、番人の大きな黒人がバケツを下げて家から出て来た。

家は小高い丘の上にあるので老人の所からは、夕日の逆光線に黒々と大きくそのかが水面に落ちて見える。

どうもパトロンたちが来て居る様子も見えないので舟をよせて行く

と、レモの水音に気がついた番人はギョツとした様子であつたが、落日の最後の光線を満面に浴びたしらが頭の老人の顔を認めると、ニツコリして、

「おう、ジャボネースよく来たなあ、道はよく解ったか？」

と舟の方に手をさしのべ、舟つき場の杭にもやうと荷を下すのを手伝い出した。

約束のピングのガラホン（大ぴん）が何本かあるのを見て至極満足の様子であつた。

人こいしさの折から好物を多量に持参した泊り客が来たのだから、番人にとつても相当危険な仕事であつたが、そんな事は忘れて何かともてなしの言葉をかけるのであつた。

わずかな荷ではあつたがすっかり片付け、又老人の寢床を作つたりして居るうちに日はトツプリ暮れた。

今までギヤーギヤーやかましく鳴いて居た水鳥の声もしづまり、時々梟、猿などの声がきこえまれにはオンサのものすごい吠声もまじる。彼らはかまどのそばのテーブルに座をしめると、小びんに移したピングを中にさしつさされつ彼等のさかもりを始めた。

この黒人はまだ独身だが仲々の甲斐性もので多数の豚を飼育して居る。

彼自身も確然とした数は知らないが、三、四百は居るらしい。

毎日何もする事もないので、暇にまかせて、素性のよい木を切り倒し二米位の長さに切り揃えると、鉄の太いやを打ち込んで適當の太さ

に割り、数がたまると今度は溝をはってその割り木を一本ならべにならべて行く。一寸したすき間があるとそこから豚が頭をつつ込んで垣を破るので出来るだけ密にうめる。中央に小流をはさんだ肥沃の粘質な土地をえらんでこう言う柵でかこみ、中に豚を放し飼にするのだが、適地でゆつくりした広さがあれば、このマンゲロンと言う囲の中で、豚は一日一回給食されるだけでよく太り、又繁殖して行く。

こう言う所ではミイリヨ（とうもろこし）は切角まいても鳥獣の害をうけよく育たないが、マンジョカ芋はよく太る。

そのマンジョカを夕方一定の場所に放り込んでやるわけだが、その時彼は自分の全財産に對面するわけだ。

コーヒー園では広大な共有のマンゲロンに各移民家族の豚が混育されて居るが、毎日夕方になると主としてその家の娘などが、自分らの場所からチアウチアウと言うよび声を聞かせながら餌を放り込む。その家族の豚だけが集って、ひしめき合って食べるが、他家の豚は決してその群の中には入って来ない。

せせこましい島国から逃れ出て来た日本移民が当伯国のコーヒー園生活でまず最初に驚異の目をみはる美事な大陸的光景の一つであった。

かまどの上の大鍋にはその豚の片股が丸ごとぐつぐつにられてあり、豚のまわりには人間の腕位の太さのマンジョカが何本かつつ込んでいる。

呑むほどに食うほどに二人はすっかり御機嫌になってしまった。老人のあやしげなポルトガル語、番人のアゴストも頭の単純な黒人

で話す事と言えば、森に住むけどもの、湖に見られる魚鳥の如きものだが、しばらく人に会わないので非常に鰻舌になって居て、同じ事を何度も繰り返して話すが、老人もあきもせずそれに相づちを打って居る。

いつカマにころげ込んだとおぼえて居無いが、老人の事で朝は早くめざめる。

対岸は朝もやにかすみ湖面は鏡の如静かだが水ぎわの草むらからは水鳥の動きがきこえる。

早速一綱引いて見ようと小さな地引網を支度して居るとアゴストも起きて来た。

カフェー前に一仕事して見ようと、前の小さな砂浜に網を入れて見ると禁漁区域だけの事はあって、クリンバター・バクー、マンジー、ビラカンジューバ、その他名も知れぬ魚が綱一ぱいにかかった。それだけの魚を浜に引き上げれば網が破れる恐れがあるので、網の内側を長い棒でパチャパチャたたいて魚をおどかすと、主としてクリンバターが朝日にキラキラ銀鱗をひらめかしてドンドン綱の外に飛び出す。

こうして大部分のクリンバタを追いついて、網を引き上げたが、それでもおびただしい魚の量で、老人一人ではとても今日中に始末出来そうも無いが、面白半分のアゴストにも手伝わせる事にして、マンジョカとコーヒーの朝飯を手早くすませると早速仕事にかかった。頭を落し、腹を割って内臓を出し魚卵があれば、塩からにするために石

油かんの中に放り込む、開いた魚には塩をなすりつけて、用意の板の上に平に積み重ねて行く。適当な高さになると上に一枚の板をのせ重しの石をいくつかのせる。

こんな山が三つほど出来た時には二人ともヘトヘトに疲れてしまつて魚は見るのもいやになった。

こうして塩づけにした魚は一晩おいて、翌朝木の枝に張った針金につるして三、四日風をあて日に乾すと乾物が出来上る。

これの生乾きのものを、特に血合の所を火にあぶって食べると仲々美味で、まだこんな味を知らなかったアゴストは、うまそうな魚をえらんでは、焼いてピングのさかなにしていた。こうして毎日網を引いたり、魚を割いたり乾したりして居るうちに相当製品がたまつたのでカユアーの町にかつぎ出す事になった。

アゴストは軽々と背中中に二俵しぼりつけたが老人はようやく一俵だ。

朝暗いうちに出たのだが十五キロの道をカユアーの町についたのは、午近くであつた。

番人のアゴストは魚をかついで町の中を、今頃歩いている訳には行かないので森の出口にかくれて居て、老人が一俵づつ駅まで運んでサントアナスタシオの取引のある日本人商店に鉄道便で送りつけると大急ぎでアゴストの所にかえつて来た。

こうして二人はおびただしい魚獲量に追い立てられて毎日働いて居たが、時々老人が取引先の店まで金をとりに行く。その時には切れて居た日用品、ふだんはすわない高価なシガーロ、コンニャッキ、サラ

ミーなどを仕入てかえる。こうして順調に一月ほど過ぎたが遂に彼等の最後の日がやって来た。

鉄道の係員がこの附近には漁場がないのにこの日本人はどこからこんなに魚を持って来るのだろうかと思ひ屋で話して居たのが、次第に製材場主の耳に入った。

或る日彼ら二人が浜辺で夢中になって魚を開いて居る所えカッパンガ（用心棒、殺し屋）を二、三名引き連れたパトロンが馬で乗りつけて来て、有無を言わせず老人はカエアーまで引き立てられて行つた。ウインチェスターの照準のもとに馬の前を早足で歩かせられて行く老人の思考のなかで、今しがた目の前で底に穴をあけ沈められたカノアとずたずたにカッパンガのフアコン（蛮刀）に切りさいなまれた網とが業火となって燃え狂つた。

老人は製材所の事務所でさんざ油をしぼられて放されたがホツと一息すると今度はムラムラと怒がこみ上げて来た。どうせいい加減な手段で手に入れた土地なのに禁漁などと、俺の唯一の財産のカノアと網を駄目にしてしまった。このままではすまされない。

よる年波にこの頃はおだやかになって居たが昔アマゾン三界をのし歩いて居た頃のあれくれの血が、又よみがえって来た。

幸い駅附近の植民者に懇意な人があつたのでその黒杉と言う家に泊り込んで、毎日事務所に通つて何とか損害を補償して呉れとかけ合い始めた。

ガブリエルも初めのうちは余りの図々しさにあきれて相手にもしなかつたが、男は男を知る、カッパンガを何人も使つて居る彼の所に平

気でかけ合いに来るこの小さな老人の勇氣に感心し、又うるさくもなつたのだらういくらかの金をやり穴をあけたカノアと切った網を持ち去る事も許した。

「それで大もうけよ。カノアの穴をふさいで松脂を流しこみ切られた網をつんで又大河へ出て島の小屋にけえつてきたが、綱もよく調べて見りやたいした事も無かった。ぬれたまま砂の上に丸めてあつたのを、ファツコンで派手に切っぱらったがいくら糸は切れてやしねえ。一日つづくろつたらそれで元通り、ガブリエルが呉れた一コント（米貨百五〇ドル）は丸残りさ」

老人の無軌道人生の世界に陶醉して居た新吉がホツとため息をついて目ざしを上げると日は西にかたむきかけて居た。

「おめえがあんまり夢中になつて聞いてるもんだでえらい長話をしてしまった。さあ出かけるぞ」

然し今宵の泊りはもう遠くないので誰もあわてる様子もなく、それぞれ舟を漕ぎ出した。頭上においかぶさる様に一ばい枝を張った巨樹のつづく岸にそつて三十分ばかり廻り、最後に篠竹の一面に茂った土手をこすと急にあたりの景色は開け兩岸は広々と見わたされ、強い午後の日ざしを一ばいに浴びて河中所々に横たわる島々はその陰をトロンと油を流した様な静かな水面にくつきりとうつし、樹々の緑と砂洲の白とそれぞれの美しさである。彼等の今日の宿とする島もまだ二キロ位はあるのだが手にとる様に近く見える。

やがてめざす島の白砂の清らかな入江に舟はこぎ入れられ、千葉は

例の如く釣竿をかついで何か夕食の料にと入江の奥に向い山田と新吉は水辺近く砂のやわらかそうな所にテントを張り晩食の用意を手早くすますと後の番を本間老人に任せ、二人連れ立って、島のまん中に横たわる丘の方にスタスタ歩き出した。その岡の向側の水辺にはよく鶴が群れて居るのでそれを見に行こうと言うのである。あるとも無しのだらだらの傾斜面を登りつめたあたりには幾叢かの落木が生い茂って居る。一番水際に近い藪の下に這いよってそつと下の方をのぞいて見ると運よく今日も鶴は群れて居た。百米位はその灌木の所からある様だが、水の中に下り立って居るもの、浜の方に上って居るものみなで四、五十羽位の白色の鳥がその辺一帯に群れ動いている。

そして彼らのかくれて居る藪と水際の丁度中央位の所に二羽の鶴が長い脚をがっしりとふまえ、厳然とかまえ、しなやかな首をせい一ばいに伸してあちこちを眺めまわし哨兵の役をつとめている。

水の中に立って居るものは時々その境を水中につっ込んで何か餌でも探して居る様である。突然一羽がパツとその白い大きい翼をひろげ、飛び立つのかと見るとそのままくるくる歩き廻る、この運動に興を引かれてか後について同じ様を運動をつづけるものが三羽五羽とふえて行く。

本で続んでは居たが目あたりにこの野鳥の妖しき習性を目前にして新吉は只息をこらして只じつとその奇妙な踊を眺めて居た。

只案内丈に此処について来た山田もこの妖しき踊には気をうばわれてか、しばらくは熱心に見入って居たが、急に何かに憑かれた様にスツと立ち上ると鶴の群に向ってスタスタ歩き出した。

無意識の動作で新吉もこれに続いて五、六歩みみ出した。じつと彼らの方を注視して居た哨兵の二羽が何か警告の叫び声らしくクワックワツと鳴き立てる、すると踊の一群も餌をあさって居たものも皆一せいに飛び立って空中三、四十米位の所を飛び廻って居る。

然しそれ以上飛び去って行く様子もなく、第二の警告を待つて居るらしい。

我にかえった二人はそのままそこにベタリと腰を下し、地平線上附近に集結した積乱雲の間から斜にもれる夕陽の残光をその真白の両翼に受けて悠々と飛び廻る鶴の大群に見入って居た。

その翌日は又マ州側にこぎ返って遡行をつづけしばらく上った所でリオ・デ・ペイシェの河口を対岸に見ると又左岸にもどった。

ここらの風景は一寸松島に似て居り面白い枝ぶりの木の生い茂った岩の小島が点在して居る。この小島の群を抜け出た所の河岸にリトアニア人の漁小屋が見える。

彼等はそこに上る煙を見て立ちよって見るとガツシリした体格のリトアニア青年が二人丁度午飯をたべて居る所であった。

その頃この河筋に漁をして居るものは、日本人かリトアニア人で、判を押した様にきまつて居た。

日本人の集団植民地の最大なものの一つにバストス移住地と言うのがあり、リオ・デ・ペイシェの上流に位置して居た。

そのバストスの近くにリトアニア人のヴァルサ植民地と言うのがあつて、教会を中心に神を信ずるものの集団で、異教徒との接触を禁

じ禁欲のきびしい戒律を守り自給自足の理想生活をうたって居たが、北欧の林地に、極海に、残酷な自然と戦いながら自由奔放な漁獵生活になれてきたこの国の若者たちの中には共產村と言われるこの社会の規則づくめの単調な生活に耐えきれずに逃げ出すものが相当ある。

この川筋に生活して居るリトアニア人は殆どこの植民地から飛び出して来たものであった。何人か同志が集まると、リオ・デ・ペイシェの川岸の森中にセードロカペローバの適当なものを見付け、その附近に小屋がけをしてそれを倒して、数日を費してカノアを作る。

舟が出来上ると手に入る丈の食糧を用意して漁をしながら川を下る。その頃のこの川はバストスから下流は人跡も少く、漁獵ともに獲物には事がかかなかった。そして幾日かして大河まで下り切ると適当な所に小屋を作って漁師の生活を初める。

一ヶ所に定住して毎日エンシアード（鋏）をふるよりはこの大河のほとりを転々として川漁をして歩くのが彼等には板についた生活らしい。

そして大部分の日本人漁師の様に棉作りも余りもうからないから、魚でもとって見ようかと言うのと違ってそこに辺境人としての自意識や、氣どりも多分に見られた。

一緒に飯をすませた彼等は、食後の一休みをむさくるしい小屋の中をさけて木蔭を求めてうらに廻ると巨木の枝から枝に七米以上もあるスクリュー（大水蛇）の皮が干してあった。この近くの岩の上に、カピバラを吞んで、ぐうぐう午寝をして居る所を丸太で頭をくらわせて殺したので、よくなめして故郷の町の博物館に贈るつもりであった。

その夜もマ州側の砂浜に一夜をあかし、めざす漁場の島については出発してから三日目の午後であった。

島に近づくにつれ下手の森蔭に水際近く赤いテントが見える。これもリトアニア人の組である。テントの前をこぎ過ぎると中から三、四人若者たちが飛び出して来て「オウオウ」と簡単な然し熱意のこもった歓迎のさけびを上げる。

再会を約して新吉らの一行は島の中頃まで、もう五百米ほど漕ぎ上ってそこに小屋がけを初めた。

彼らの帰りは出水期にかかるかも知れないので、島の最高地点の疎林の中に地をトし、立木を切って埋めたて、柱とし、屋根は持参のトタン板をかぶせ、裏手の砂洲に沢山茂って居るサツペー（あし）を刈って来て木の枝で押えて壁にしたり、中にしいたりした。

減水期の今はサツペーをとって来た砂洲でマ州側とこの島は接続して居るが増水期には、この砂洲は水におおわれて完全なはなれ小島となってしまう。

工兵の下士官だったと言う千葉老人は川から小屋まで上って来る二、三十米の道を丹念に作って居る。此所から毎日重い魚をかついでかつぎ上るので、勾配を少くした歩きよい道が必要なので、流石は職業がら二米幅位の綺麗な道が出来上った頃には小屋の前にドンドン焚火も燃え盛り飯の支度も出来て居た。

夕食のすんだ頃にはトツプリと日もくれた。

下手のリトアニア人の住居の方から盛んな歓声がきこえる。

本間と千葉は明日の漁の支度を始めたが、下の騒ぎに気を引かれた

新吉は山田をそそのかして一寸のぞいて見る事にした。

大きな焚火をしているらしくここから火の手は見えないが、赤い煙が夜目にしろく立のぼり火の粉が綺麗に中天に消えて行くのが新吉の心をそそる。

清らかな砂地に流れ木の太いのを山と積んで燃やし、ピンガを呑んで居た彼らは

「オー、ジャボネース」

と歓迎の声をあげ焚火のまわりに座を作って呉れた。

呑めない新吉も無理にカーリスを持たされた。そして何か歌いつづけて居たらしい歌を合唱し終わると新吉らにも何か歌えと言う。

一口のんだピンガとその雰囲気につきり気の軽くなった新吉は、今宵にこそふさわしい、ルビインスタインの「シベリア放浪者」の歌を歌う。

この異国人が何を歌うかと物珍らしげに彼の口元を眺めて居た彼等
は新吉が最少の小節を唱い終ると、何か興奮した様子で彼らの言葉で語り合い、待て待てジャボネースその歌曲は何よりも俺らの好きな歌で、故郷の森や野でこのような一夜を明す時には、いつでも焚火のそばで合唱したもので、君がそれを知って居るのは意外な喜びださあ一緒に唱おう。と歌い出した。

彼らの力強いバスやバリトンが新吉の細いテノールをおし包んで暗黒の夜の森に吸い込まれ、又星かげをうつして夜目にもうす明るい川面にすべって行った。

荒野に黄金を求めて

今宵はいずこにい寝ん

今宵の宿はいずこ

最後の小節を歌い終る頃には新吉の目にも、この北欧の若者たちの目にも感激の涙が光って居る様に見えたが、山田丈は何か別の世界の人間の様に、唯無心に燃え盛る焚火を眺めて居るのであった。

― 終 ―

〈俳句〉

「火焰樹」抄

近作 五〇句

推薦・殿岡萩花

蝶を踏み翔たす眩しい野の一人

林 越南

霞む故郷混血海の沖え沖え

金井 青流

遺児が多くて墓穴掘のはかどらず

同

身をかわすすばやさ羨し熱帯魚

石川 芳園

春燈ちらほら女となりて戻る大都

佐藤 文六

ときどき寒波枇杷は袋のなか楽しむ

橋爪句大地

春眠の腹に嬰兒を遊ばせる

右田 春雪

密会の走り苺はつぶさずに

長谷川清水

アルバムや硝子の外に蝶現わる

池田 童夢

目に積んだ白桃明日は他人の婚

鈴木 光威

不安なる赤い風船子がつまづく

折笠あきら

嬰兒笑う夢につばめの宙がえり

林 昭治

足の裏かゆしつばめの甘え声

矢野 湖人

青い鳥さがし疲れて寒灯下

野川 子葉

ニグロ多産スイナンの朱炎えつづく

大文字大風

いつも眠っているから春塵重なる石

野口 一大

りんごむく耳底に有る異色の声

石井かほる

少年のシャツ裂けてより蝶消ゆる

鈴木 光威

革命歌葱に明りのある限り

鈴木 光威

抽斗びしやり裸木のとっぺんゆれている

同

風邪長し夜をこぼるる崖の砂

遠山 楓子

葬列が近む落葉にさわがれて

清水一角

ほほにせつぷんわらびつつん解ける天

松見いはほ

崖が見下ろす一夜の暖で萌えるデルタ

林 越南

酔えば天国抱いた枯木にゆすぶられ

同

寒波の火酒仰ぎ老体いやいやまだ

橋爪句大地

あかつきの恋の終りしかたつむり

野口 一大

流浪して父の忌知らず万愚節

石川 芳園

牛骨埋めて来た犬の鼻智恵さむし

同

野ねずみの進路断たれていとなみ澄む

同

睦み解かんともかく夏蝶みて疲る

同

持てる者はくさめをさへも大ぶりに

同

天の川半眠で読む明治の詩

林 昭治

酔うて這う軍港おぼろ虫の声

鈴木 光威

修正のなき亡母の顔天の川

同

梨かたそうで傷つきやすさ変声期

池田 童夢

こおろぎの鳴く音みすぼらしき噴水

清水 一角

秋蟬や女不惑の素顔見す

金井 清流

盲人行く舗道の炎えを白く消し

同

海の音遠く押しやり蟻働く

松見いはほ

相愛の亀にまぶしき黄落期

川久保すみ子

かたつむり銀路残して行方不明

石川 芳園

歳末のひしやげたる靴對話なし

鈴木 光威

蚤の跳躍雨の伴奏青ければ

同

料らるる白魚はるかきらめく河

池田 童夢

霊柩車ジングルベルの町崩す

林 菊江

あいびきの後の脱落春の雷

林 昭治

少しばかり絵を知り遠のく冬の海

添田 次男

こんりんざい愛語放たず甲虫

長谷川 清水

不発の銃ぶらさげて来て枇杷青し

鈴木 光威

〈俳句〉

バナナつくりの唄(50句)

間烏稻花水

移住地の竜巻縷々と大旱期

鈴蛇の頭を打ちくだきカボクロ指図

植え終えてバナナ幾万光る意志

リベイラの光ためたりバナナの芽

施肥一日ひとりの汗や川に出づ

青年の脛に露散りバナナ若し

光りては雪自在なりバナナ園

カラー咲く急潭音をしづめつつ

帽ふかく疲れしたたか虹の棒

汗の臍バナナ八方暮れ尽くす

太葱の風の蒼さよ他郷たり

棘赭きアバカシ移民狂い死す

雲消えし冬真空をバナナ咲く

風がばりバナナの迫肥驚把み

一日黙すバナナ消毒太陽見ず

葉焼けバナナ切り捨て幾日目玉乾く

蒼然と金策カノア冷雨ゆく

壁剥げて守宮眠らん刻蒼し

バナナ包編み荒れし掌よ猫抱く

カノア動くバナナ嵐を遡ぼる

禱りおるか一望水清くバナナ園

大志あり鷹の眸となりバナナ守

稲咲くや雨季のリベイラ弓なりに

爽竹桃髭剃りで澄む地平線

カノア呼ぶ月の角笛湧くごとし

バナナ園来し拳銃を切株に

バナナ樹が楯独学の豆辞典

切株に憩う噴霧機飢ほのぼの

スコールを刃に敢然とホイセ研ぐ

黒人の尻の稲妻バナナ切る

ともに耶蘇心に灯しバナナ負う

昂然とバナナ切り汝へ近づけり

スイナンやみがく胸板朱が走り

産声やいま白薔薇に滲む日あり

爽竹桃白し嬰を得て妻さやに

瞳を開けて泣かぬ嬰とおり霧の底

ごうごうと風の火焰樹父たるや

ブイノスの無電バナナを切りいそぐ（ママ）（注 ブエノスカ？）

房バナナ負い来しラバの尻光る

バナナ積み込む栈橋の雨火のごとし

秋天へ音突き抜けてバナナ船

輸出順調河馬のごと湯を溢れしむ

実樗や干して丸太のベット太し

バナナ間伐寒の荒星一梳けに

紅さして冬の雪ありバナナ煮る

虎落笛耿とカノアを没しおく

仙人掌の棘キンキンと寒波来

縁談もカノア伝えにバナナ村

寒木の瘤焚き夜逃げ移民の記事

錆を噴くクルス冲向く移民の日

〔俳句〕

毛糸編む (50句)

浦畑 艶子

少年の思慕草笛を吹き通る

風揚げて瞳澄みゆく少年工

サーカスの樂陽炎の野に届く

陽炎の野で真実は告げ難し

力耕す移民の系譜かく継ぎて

銀線を重ねでで虫睦み合う

酌の座を脱れ春愁ペンを執る

ひたすらに恋う春灯を遠ざけて

八重桜撮られつつけて彩褪せず

詩が溢れビールの泡を輝かす

ビヤガーデン彼人妻と居て酔わず

太陽へ朝顔の私語襞を解く

大股に歩す競泳の勝者なり

青芝の囲むプールの透明体

太陽を容れてプールが混み合えり

競泳のおわりても波静まらず

掌の中に燃えてつめたき螢の火

金魚にも愛語しきりに泡のぼる

時々は眼で風鈴をたしかむる

氷菓の匙あそばせついに楽しめず

人の忌が重なる雨の黒葡萄

サングラス除れば笑顔の清らかに

ひとり旅日除眼鏡をかけ通し

罪多き灯蛾聖堂に入り浸り

金粉を散らして灯蛾に死が迫る

少年の速歩夜業の灯を目指す

緑蔭や詩を生むための眼をつむる

髪洗い旅の疲れを身から抜く

むしろ囲いが密室おんな髪洗う

ひぐらしの唱和はげしく日を逝かす

辻の風自在に使い風車売る

冷房車にて媾曳の胸炎えず

旅愁とはビール呑むこと夜烏過ぐ

プールサイド夜は月光にひた濡れて

カンナ鎮か熔鉦炉より帰り来て

看りいて殺生自在の蠅打たず

いなづまに耐う浴身の眼を閉じて

生くことに惑う濃霧に閉されて

高嶺巡る霧生む谿に死を想い

犯すもの既になくなり山眠る

青年が居て毛糸編はかどらず

毛糸編みいて熱き瞳に縛られる

毛糸編み何時しか競い顔上げず

生きの身を抜ける寒夜のミシン音

いのち看る母に寒星びつしりと

冬暗し旅衣に秘めし女のもの

盾となり男生き抜く木の葉髪

猥談がはずみ焚火のよく爆ぜる

初髪を結い一切が改まる

宴果てて月の斜光に酔を吐く

〈川柳〉

四十五年の春(55句)

黒田不知火

天災と人災百姓を裸にし

人道をへし曲げて金の傀儡

組織の中に埋もれゆく個性の挽歌

百姓の特権天を恨めとて

つぎはぎの生活へ白穂の矢がささり

異端者とされてる方が正しくて

ふるさとへ帰れ帰れと星がふる

向日葵の驕らぬ心にさす光

太陽雲にかくれ人間絶壁を這う

星と花孤独の夢を明るくす

天高く誤算を積んでゆく車

温存の原爆何を夢見てる

手をふき足を拭き白に見せかける

猿智慧の最後はボタン押すだろう

金に疎外されても生きてる詩人の心

病根の深さに巨木ゆれており

腰抜けと言われて平和の味方する

詩の庭に金とは無縁な落葉ふる

ミニサイヤ君の眼僕の眼美を探す

物の芽が春をかついで詩を探す

雲の彼方に神在り地上の無神論

涯知れね雲の彼方に夢一ツ

新しい道へ秘めたる血が疼き

ひとりゆく道に味方も敵もなく

生活の傾斜へ血税のしかかり

信用の度合い利用の背負投げ

幸福の度合いをはかる金がない

百万の富へ不倖の影消えず

童心を盗心に変えて果実ほほ笑む

木枯しが心の弱みへ吹きつける

釣りあげた心の脆さを笑う金

澄みきった心へ銭は影を投げ

切り売りの特権女に生きる道

共存は空論孤独の城を守る

不公平知らず勲章光りおり

死地に入る日までは金に愚弄され

白い心の願いへ非情な鉄の壁

死ね日まで変らぬ愛の影法師

農地改革働くもののない嘆き

沈黙の歴史の中を走る汽車

断絶した夢をつぎ足す石に坐し

遠ざかる足蹠へ卑屈めく心

敗北の身を鞭打つさびしい風の音

真意酌めば太陽の如き顔となり

いつまでも処女ではおれね月の運命

星流る生の尊さ地に残し

海越えた夢の太さへ追いつけず

魂の平和を宿す里がない

この線は引けぬ心の防波堤

詩片片手に四十五年の春や春

選挙戦去りて静かに小雨降る

善政へ挺身日系という誇り

コロニアの殊玉の遺産若羽鳥

川柳 〱

郷愁の壺（三連・36句）

会田北海坊

父母の国子等には遠い虹の橋

反抗を示す或る日の子に寂し

怒らずによかった静かな夕日視る

角材を握って学徒何学ぶ

角材で無惨に砕く親の夢

修身課消えて道義にあるひずみ

骨埋める土地定まらねままだに老い

風鈴を佇ち聴いている老移民

郷愁の壺抱きしめて幾山河

辿り来た孤独の丘のあかね雲

純白のシート旅路の白昼夢

“想う園” 善意が沁みる杖を引く

寝台車消えて手術の扉は固し

一滴一滴命へ挑む輸血管

生と死の彷徨線を凝視する

饑餓の民溢れ聖地に神不在？

もう来ない月の砂漠の王子さま

興亡の砂丘果なき血のドラマ

一芸に秀で乏しい人間味

白粉を落せばピエロまた孤独

今宵また失意の酒を月に汲む

金と暇夜の傾斜へずれて行く

本心と別な偽装の夜に生く

万燈を圧して温し我が家の灯

ベルリンの癌空廊と厚き壁

黒の血沸騰自由の国にない自由

ベトナムは疲れ空しき田植唄

望郷の波音の中貝漁る

果しなく妻と素足で渚行く

岩頭の波濤に佇てば無我虚心

夕焼けが囁いているあすの幸

子に継げぬ詩情詩魂か星流る

詩の灯り消すまい暮しの片隅に

へ川柳

“石”に題す

小野蛙人

烈日に風雨に叩かれつ叫ばぬ石

蒼空の瞳に射すくまれる道の石

石の呻き地虫の讃美に消される夜

雑草に露はどこされ石が啼き

破られても砕かれても結晶残す石光り

陽の当たらない礎石が苔に飾られる

有為転変の世に疎外され石仏

浸蝕に任せて石のカタチ出来

他山の石で磨り減っちまった俺

石一つ投げて波紋の外に立ち

行く雲と

水中口十

真心にふれて握った手のぬくみ

保護色の破れて傷む風のあと

塩づけになって浮世の十字路

甲斐性がなくて聞いてる妻の愚痴

行く雲と水の流れと吾れも老い

抱いた夢夢で終って一周忌

追うまいぞ遠目こそよき虹の橋

億兆を燃やして月で何をする

祈りこめ一枚めくる初暦

年がいもなしと名づける老いの恋

神同志信じきれずに派を作り

死んでから同情ませると書いてあり

神仏南無と言う字を使い分け

死ぬ前に何故くれなんだ此の勲章

十字架が南無の六字を抱いて立ち

世 間 態

坪 井 柳 念 坊

世間態繕う手許が寒すぎる

からくりの見抜けぬ壺に賭け続け

胸襟を開けば鎧の音が洩れ

日めくりの厚さに保証のない命

誘惑の手管を見抜く年の功

授からね御利益邪念の湧く若さ

コロンブスの卵を真似た句が流行り

仁術の凱歌五臓を取り替える

政権は変れど陽の目を見ない鋏

机上では崩れね積木に賭けて見る

小鳥の譜

水野浩史

踊ったのか踊らされたのか幕が降りる

行く水の心にもなれぬ岸の影

節制を嘲う時計の刻み足

木枯に吹かれて泣きに來た酒場

魚拓にもならない雑魚で放される

生き延びた傷に軍歌の沁みる夜

電線に小鳥の譜ふるさとは村祭

酔うてなお脱れね仮面の佗しさよ

割られても岩はきれいな腹を見せ

入れ目でも優しい心が物を言い

特集

《わが住むまちⅡ断章》

猿よアララよ猪よ

風 早 南 瓜 ロンドリーナ市

北パラナ土地会社土地売人氏原さんは言った。「オマン（お前）らあのク（場所）へ入植するちゅうが、早すぎる、もう一、二年待つちよれ、そのうち道も出来るけに。」「そねんこと言うても氏原さん。今居る耕地は配耕されて一年、只一ミルの金も呉れん。このままでは野垂れ死ぢやもう一、二年も待ったら自分の土地へ行く金もなくなってしまう。遥々ブラジルまで来て、おんなじ野垂れ死するなら我が土地で…。どうしても行けんような土地を、なぜあんたは農らに売ったんか」

どうもなべて新移民は向う意気が強い。「困ったことを言うのう、もう少し待ちよつたらええに……。げにまつこと困ったのう……。仕方ない。そんならオラが何とか都合する」

その頃北パラナの汽車はコルネリオ止り、それも一週一、二便とか、ロンドリーナはそれよりもう百軒の奥だ。氏原さんは土地会社と折衝した。オウリーニョスからは会社差し廻しのカミニョンで、ムダンサの荷を運んでくれることにしてくれた。

行けど行けど森のトンネル、赤土のぬかるみ道。車の荷が木の枝にひっかかって落ちたり、水たまりに車が沁った。

リオ・シンザもランジニャも丸太作りの仮橋、車が通ればガタガタと揺れた。鉄道工事の人夫小屋がところどころにあつて、そこは必ず濃い黄色の蝶が、雲のように吹雪のように翔ち乱れていた。

夏蝶や森林深く敷く鉄路 南瓜

「河の水を見るな、水を見ればマレイタになるぞよ、見るな見るな」氏原さんにど鳴られ乍ら、シッポー・デ・マカコの太綱をみんなで手繰って、バルサはチバジーを越した。その時夕闇はすでに迫って、鳥か獣か異様の叫びが何とも心細く、それより更に二十数軒を進んで、板囲いトタン葺の土地会社現地事務所へ……。

一九三一年十月十四日の午後八時頃のことである。

事務所とは言えそこには只一家族のドイツ系一家だけであつたが、内外人をこめて最初の入植者として、歓待につとめ、その日チバジー

のバルサ守がわれわれの車に托したスルビンの二、三十キロもある奴をぶった切って、煮たり揚げたり焼いたり、喰い放題にしてくれた。然し事務所は何分にも手狭、その夜われわれに与えられた宿舎は、土地視察者用にか四、五頭の馬が飼われていた馬小屋、その馬を追出して兎も角そこえ。馬小屋に寝るとはキリスト並み、さい先よからうと笑い合った。今高級ホテルの多いロンドリーナと比べ何とも今昔の感に堪えない。

草分けの荷負うて猪の列に会う

且、その馬小屋から毎日入植地への道開けにいそしみ、墾小屋も建てどうにか念願の我が土地におさまることが出来た。現在ロンドリーナ空港となっている所である。

大体その頃はロンドリーナの名も町も影も形もなく、その市街予定地と言う所がほんの少し伐採され、それを焼いた煙がくすぶっているだけであった。

僕らの入植二、三年の後にこの市街予定地にロンドリーナの名が付けられた。

これはこの土地会社本部がロンドンにあったから、それに依るものである。

僕の一家が町住いするようになった時でも、その家の床下にパーカが巢喰って仔を育てたり、ルアを横切る鹿やアンタは常々のことで、この町ではじめての肉屋は牛などどこに居る筈もないから、猪や鹿や

獾の肉だけ売ったものである。

こんなにも山深かったロンドリーナもその後三十数年、その人口は二十万を越すとか越さぬとか、日本人は日系をふくめてその家族数は千五百と言ひ二千と言われて居る。これは市内だけのものかムニシピオをふくめてのものか、そこところは僕は知らないが、ルア・セルジッペなど軒並み日本人であり、町の隅々隅々日本人の住んで居らぬ所はない。したがってその仕事も日本人のやって居らぬ職種は棺桶屋位いのもので、其の他一切なんでもござんなれだ。

この町の特徴として百姓の町住いの多いこと誰も誰もだ。これは子弟の勉学のこともあり、又主作が珈琲だから一応人任せで時々見廻りに行く程度でよかったり、雑作にしても歩合だけ貰ってノホホンと構えり。或いは功成った余生を町暮しで楽しむ老開拓者も多いからなのであろうか。

今から七、八年前まではこの町の空は珈琲採集の季節ともなれば、それを精選する数多いマキナの埃りが舞い立って、全く息苦しい程であつた。今は埃りの出ぬ装置を市役所が命令したり、珈琲の産額も衰えてそれ程ではないが、この町が珈琲で伸びたことは争われない。それにつけても思い出すのは四十年近い昔この地にヒト握りの珈琲種もなく、僕たちは原始林の下闇をくぐって四十数軒のセルタノーポリスへ、弁当腰にてくって、その頃そこでは昌獺を極めたマラリヤのため、人々の逃げ去った草茫々の投げ捨て珈琲園から、その種を背負ひ戻って我が畑に植えたのだった。この種がもとでこのロンドリーナ附

近何百万本かの親木とはなったのであるが、もうそれらの子木孫木も老衰に近く、加えて珈琲作りも斜陽をうたわれる時代となったから、あちらこちらで少しつつは抜き捨てられて、果樹園や雑作地に変りつつあるにはあるが……。

それでその雑作と言うことなれば、珈琲園の跡は無施肥で棉ならアルケール四、五百アローバ、落花生なら三、四百俵と言うように、其の他ミリーヨ、大豆、米なんでもよく出来てテーラ・ロシヤは痩せることを知らないようだ。たとえそれが何とか産業と卑められる農産であらうとも、高度の生産のある限り、ロンドリーナの町の今後の発展にゆきずまりはあるまいと、ロンドリーナっ子は朗らかだ。只うらむらくは重工業の工場などがまだ一つもないことだけである。

製棉、製油、溶解珈琲、農薬製造やその他色々の一般工業はロンドリーナを中心に東のイビポラン、西のカムベの町まで延々三十軒の長さに亘って、どこちかとその工場が、雨後の筍と言うにふさわしい程に増えて、やがてはこの三つの町をつないでしまう勢いではある。銀行支店の数がいくら、高層ビルが何軒、どうも指を折るに面倒だ。教育や衛生設備の状態やその数やそのサービス振り、それらも克明に記さねば、我が住む町の完全紹介にはならないが、これまた中略御免蒙って、読者ご自身折あらば来遊あつて体験されたい。トドのつまりはロンドリーナもまだ田舎町だナの一語に尽きるだけかも知らないが……。

この頃町の隣接に大学都市とか言うものが設計され、その広大な敷地に何かと工事を進めつつある。今まで分散の大学各科をそこへ集

合、本格の総合とするらしいが完成は何時のことやら。

またパルケ・ネイブラガと言うがあつて、そこはパラナ農村協会の本部でもあり、広々と相当の設備を整え、年々ここで農畜産展など華やに行われ、大統領なども開会式にチョイチョイ顔を拝ませる。一頭何万コントとやらの種牛や競走馬をごろごろ並べるブラジル人に、畜産の面では及びもつかないが、農産の方は日本人のものだ。だからその農展の部はいつも日本人が牛耳る。オットこれは畜類でないものを牛耳るとはおかしいが、ハツハハハ。今月（一月）ももうすぐここでブドウ祭が行われる。イタリヤとかソラヤとか巨峰とか言われる優良品種で、出品者は皆日本人。果樹や園芸や養鶏は日本人のお家芸で、敢えてこの地に限ったことではないが、ロンドリーナの農村から日本人が手を引いたら村も町もくらやみならずとも半闇くらいになりそうな程、その勢力は逞ましい。商工の面に於てもまた正にその通り……。

これと言うのも今を去る三十何年の昔、ロンドリーナにはじめて鉄道が延び、その開通式にはこの地への先駆入植順に、その国籍人の国旗を列車の屋根に、高々と翻しながら走って来た。機関車の最前面には伯英の国旗を交差、これは無論土地はブラジルこの鉄道そのものも土地会社も英国政府お声のかりのものであったから当然そうあるべきで、それにつづく第一席は日の丸つぎに独伊葡とその他色々。余談となるが奇しくもその後の第二次大戦に敵性国人として目のかたきとされた、枢軸国人が揃いも揃ってロンドリーナ開発の急先峰とは……。それでこの日本国旗第一席と言うことと、現在の日本人の発展ぶりを見

るにつけそれは何も僕らが草分をしたからと言う自慢ではない、その後続々と入植したこの地の日本人全体の将来性をその旗が予約してくれたのではあるまいかとの感慨が僕には深い。そう言う僕自身は産を成すでもなく、世に尽すでもなく危く余喘を保って居るにすぎないが…。

当地日本人日系二世諸氏の健斗をこの旗に対しても祈ってやまない。余りにも日系とか日本人を強調したが、この地は旧称国際植民地、その名のように五族協和がその本領、いまわしい政争や弾圧や差別観念は更にないことを以て誇りとする土地柄なのである。

誰も誰もここを我が地と住みなれて離れず三十年四十年。その親密の度合いは内外人を問わず格別のものがあつて、全然異郷を感じない。

南緯二十三度少々。殆ど南回帰線上に位置して標高六百米、市街の区割は緯度経度の線に真ツ正しく、中央公園イグレージャの階段に佇てば、遠くサンパウロ州境も見える心地がして、満地これ珈琲樹、町のルア、ルアの彩りはジャカラнда、フランボイアンテ、クワレズマ、マロニエ、カツシヨ・デ・オーロ、百日紅、金香木、四季つぎつぎに花は絶えない。但し余りにも多い車のためこれらの花をのんびり眺めていては身が危い。ミニサイヤに見とれるのもまた…。

筆の赴くままにどうやら昔話や百姓話や所自慢が過ぎたようだが、住めば都、お国自慢は凡俗の常。ついでのことに赤土のポエラまで自慢して、自慢の仕上げとしたいのだが、この頃街路も殆ど全面舗装されて、あまりポエラのことを思わずに済むようになってしまった。

木々に群れし猿よアララよ今いづこ

南瓜

終り

おわびとお願い

二月末、武本編集責任者が全治二カ月余を要する負傷をした為、本号の発行が意外におくれてしまった。本年は、時日の関係で、あと一回しか発行できないと思う。それで、第十号を記念する意味で符号とし、大刷を発行したいものと考えている。既に着々準備をととのえているので、大体十月末頃発行できると思う。

＊発行するといっても先立つものは資金である。何とも会費の納入率がわるいので、文協の募金事務職員皆川氏が、休暇を利用して、せめて市内会員だけでもと納入促進に協力くださっている。是非会費納入をお急ぎくださるよう、お願いします。

編集部

(第五回) 一九六八年

火焰樹賞授賞作品

及び受賞者のことば

文学関係授賞記事は本誌上にも発表したい。今後は非お知らせ下さい。
(編)

医師の宣告 鈴木 光威

- ・ 医師の宣告・ガラスの景に耕馬あり
- ・ 馬蹄行く裸木に確答求めつつ
- ・ 裸木となり晨の一徹芯まで見す
- ・ 撃たれ鹿ひそめて芽吹き速度もつ
- ・ 撃たれ鹿半眼に澄ますバロン一つ
- ・ 牛乳に浮く苺・ちぢまる婚の距離
- ・ ふてて寝る脳天・蜘蛛の囿知恵滅ぶ
- ・ 貨車同志ぶつかり駅の枯れ迷ふ
- ・ 科斗が尾を振る振る吾が尾振り返る
- ・ 杭打って暑雲姪ます準青年
- ・ 凝視集め氷菓子とけゆく羞恥の刻
- ・ 一匹の秋刀魚の眼窩・意志を欲る
- ・ 倖とは何・落葉が不意に走り出す

- ・秘策なき蠅地球儀の青を舐む
- ・枯るる中縋帯の赤美しく
- ・歯痛に舌・遠くカニバルの音沈め
- ・返り花義歯で復職噛みしめる
- ・ただに老いず燃えぬ焚火に物申す
- ・鰯干しカラカラ笑う無の晩年
- ・五指ひらきガラスのバラと対話す嬰

○

授賞のことば 鈴木 光威

第五回火焰樹鷺が私に決定された刻「僥倖」ということばが、大きく私の脳裡を占めた。

しかし、私も人間、受賞して嬉しくないわけではない。いや望外の喜びに浸ったといったら過言だろうか。

だがこの刻、手放して喜んで乗っていた雲が大きくなるに従って、別の異様な雲が併行して大きくなっているのに気づいた。

それは“責任”という、トテツもなく大きく不気味な黒い雲であった。

茲において、私は喜びの雲に乗っていたのも束の間、いつしか、責任という黒い雲に移行されている自分を意識しなければならなかった。

従って、この度の受賞は、私の俳句における終着駅ではなく、始発

駅とすることが先輩俳人に対する礼儀と考える。

略 歴

- ・大正十二年一月、山形県大石田亀井田に生まる。
- ・昭和十一年九月渡伯、農業六カ年
- ・薬剤師となり十五カ年間、自ら薬店経営するも、昭和三十四年廃業。
- ・後、国事務器会社に入社、後、同社販売部長として現在に至る。

俳 歴

- ・幼少にして文学に興味を覚え、作詩し新聞に投稿す。
- ・渡伯後、伯父鈴木抱春に師事して 俳句を学ぶ。
- ・その後十五年ほどの空白時代を経、一九六三年、火焰樹誌創刊と期を一にして、現代俳句なるものに没入、今日に至る。

第五回「火焰樹賞」の決定をみたので、受賞者鈴木氏に以上の寄稿を請い、茲に掲載した。

編集部

特集 『この人を忘れないでください』

中田武男君

カンポス高原で早世した薄幸の作歌人

細川 末男

○死にゆきし療友（とも）を次々思いつつ眠らずあれば一番鶏鳴く

此の歌は一九五六年頃、私が末だカンポス・ド・ジョンドンより十キロも山奥のバウーと云う谷底で、家族と共に人参作りをし乍ら養生して居った頃の歌であります。一緒に日系サナトリオで療養して居った谷崎さん、吉田さん、柳さん、そして白井君や中田君や正木君たちが、次々と亡くなってしまった頃で、私も脊椎カリエスに罹り、細江遺庵氏より生命の保証はできないと言われた頃だったのであります。

「去る者は日々に疎し」とよく言われますが、亡くなった者が次第に私たちの脳裡より忘れ去られて行くことは、止むを得ない事でしよう。中田武男君といっても、当時カンポス・ド・ジョルドンの療養所に居った人たちや、俳句や短歌をやった者たちが「そう言えばひと昔前に彗星のように現れたあの君か」と、ようやく思い出す位のものでありましょう。

しかし、私にとっては六十年あまりの生涯に於いて、忘れようとしても忘れる事のできない人なのであります。

三才にして父母兄弟に伴われて渡伯し、モジアナの耕地に配耕されてその幼年時代を過し、そのあとレジストロのセッテバラスに土地を購って移り、父母は永住の地と定めたのであったが、大きい兄さん達が、「こんな処に居つては食つては行けぬ、見込はない」と言つ

て、折角建てた二階作りの家も二束三文に売り払って、バストス移住地へ行き、カスカッタ区で綿作をしたのだと言う。だから日本語の方は勿論、ボルトゲースの方も正規の勉強は殆んどして居らないのです。

十二、三才の頃、どういうきっかけだったか知らないが、戦前海興の支店長をやっていた宮腰千葉太氏の主唱で創立された。レジストロの松村俊明氏の「養生塾」へ入って日本語を勉強し、続いてこの塾の舎監というのではなく、年長者として年少者の面倒を見つつ、子供達に日本語を教えていたようです。ここの松村先生の感化が後年の彼の性格にかなりの影響があったようです。

それからサンパウロの町へ出て独立し、コレットールなどして居る裡に、無理がたたって病気になってしまった、それを押し切ってやってとうとう寝つく様になり、当時バストスより近郊のポンスセツソに移転して来ていた家族の下で療養して居たが、病気は次第に悪化して熱は一向に下らないので、カンポスの日系サナトリオへ入院する様になったのであります。

一九四八年十一月、私がアリアンサの家庭療養に見切りをつけて、カンポスの療養所へ上って行き、入院させて貰った部屋が七号室であつて、その部屋に彼はすでに一年あまり療養して居り、私は偶然にも隣

のカーマに寝かされた者でした。この病室の者は四人でしたが、一人も食堂へ出ず、カーマへご飯を運んで貰って食べて居るので、不思議に思っ て見舞にやって来た妻や坂根先生に聞いて見たところ「あの部の者は重病で見込のない人ばかりですよ」と言われたそうですが、その言葉通り、みな数年を経たぬ裡に幽冥境を異にしてしまったのであります。

私の右隣の花園氏は短歌をやっているし、窓際の笹根氏と武男君は少し病氣も快くなっていて、そのつれずれに俳句をひねり初めていた頃でした。この笹根氏は名古屋の師範を出た人でアマゾンのパレンチンスより逃げ出して来た人で、仲々の理屈屋であつたから、私たちはサナトリオ大学の教授と尊称していたが、今から考えて見ると大変な講義を承ったわけだと感謝して居るのであります。

その頃坂根の爺さん（坂根先生の父上）が囲碁を打ちにやって来て、私たちの部屋を覗いて、「君等は何を書いて居るんだ」と聞くから「俳句ですよ」

と言うと「うん発句はいい、歌は駄目だよ、カジンタンメイと言ってナ、ここで歌を作つて居つた奴等はみんな死んじやつたヨ……」と言ひ乍ら出て行つた事があつた。そんな訳で短歌をやらなかつたのではないが、その後句友達によつて出された「松籟」と言うのに「俳句を始めて」と言う一文を出し「短歌はどうしても主観になり易い、それで病氣にはよくないと思う。その点、俳句の方は客観写生で、短い十七字のうちに季題と言うものを入れて、他人の事を亦自然の事象を自分のものとして頭の中でデッチ上げ、ひねくりまわして作るので、今

の私たちのような病床にあって動けない者にとっては、黙想して時間をついやすには最良の楽しみである」と言う文章を発表した事もあった。

武男君と私とは年齢的には親と子位の差はあったが、俳句の入門も相前後していたし、当時「木蔭」や新聞などに投稿する入選率もおなじ位であったので、よい意味での競争意識も働いて、病気だと言う事を忘れてしまうほどの熱を入れる様になったのであります、又一つにはその頃俳句会のメンバーが町の方の人など入れると十三人にもなつて、毎月の、句会も仲々盛んであったためでもありましょう。

その頃正木思水君と言つて短歌に仲々熱心の人が永年療養して居つて、盛んに私達を誘いに來たのですが「歌人は短命だ」と言つて敬遠して居りました。實際、短歌をやると主観的になつてネルボーゾになり勝ちで、事實頭の良い人たちが次から次と亡くなつて行つていたので、私たちはその誘いに乗らないで対立し敬遠して居つたのであります。

あれはたしか一九五〇年ごろだったと思います。私の日本からの旧友であつた岩波菊治さんがサンパウロのお弟子さんたちを引率して、カンポスの療養所へ見舞い方々上つて來た事がありました。その時カンポスの歌友たちが私たちの俳句の仲間へも「この際にぎやかに短歌大会をするから投稿して呉れないか」と申し込んで來たのです。

「よしよし、十七字を三十一文字に引き伸しさえすればよいのだろう」と安請け合いをして投稿したのです。大会は町の方でやったので、その会場へわれわれは行かなかったが、ところが夜も眠らないで推敲に

推敲を重ねた連中がサッパリ点を稼がず、当てずっぽうに出したわれわれの仲間の方が上位点を取ってしまったて、「何だ、歌はむづかしいむづかしいと言ったって大した事はないじゃないか」とからかったのでありました。

その帰途、岩波さんたちがサナトリオへ立寄られたので「これから短歌を投稿しますから、少しご指導をお願いします」と言ったところ「新聞の投稿なら少し直して見てやれるが直接の指導は出来ません」と断られたので、当時カンボス歌会の方を指導しておられたスザノ在の早稲田大学出の酒井繁一氏にお願いする事になったわけで、これがそもそも短歌を始める様になった動機であって、もともと俳句をやつて居ったから別段むづかしいとも思わず、その上身边をそのまま歌い上げる事が出来るし、酒井先生はけんめいに添削して下さいだったので、まるで私たちの作歌生活に拍車をかける結果となつてしまったのであります。

前にも一寸言つたように、田中君はレジストロの養生塾に行つて、はじめのうちは自分が松村先生より日本語を習う目的であつたが、後には自分が入つて来る年少の子供たちに日本語を教える立場になつたようだから、日本語の方は普通の一世の方々に負けない位に読み書きが出来たのですが、その半面、ポルトゲースの方は正規の学校へは一度も行つた事がなく、そのため特に療養中は大学へ行つて居つた青年たちを動かしポルトゲースの研究会を始めたのでした。これは良い思ひつきで、テラソで三組に分れてやつて居つた頃もあつたが、長つづきはしなかつたようでした。勉強しなければならない年頃の青年たちが

沢山入院して居っても、気分が落ちつかないので、どの青年もどの青年も勉強する者は至って少なく、碁や将棋や花札やトランプで、賭けごとを知らず知らずのうちに覚えて行くのでした。

武男君はそのことを憂えて、少数の者を集めて「松の実クラブ」を結成して売店を設けたり、図書室を作ったり、雑誌を発刊したりなどして、社会の結核療法認識運動を起したりしたものでした。又彼は松村先生より音楽を教えて貰って居ったので、気分の良い時にはよく合唱したり、女子療の誰彼にマンドリンやギターを教えたりなどして居りました。

そんな事から後にはクラブの会長になり上げられたり、俳句だ歌だ音楽だと忙しく人の世話をするようになり、年寄りのオッサンたちまで喧嘩の仲裁を武男者を頼みに来る様な始末でした。

そしてみんなに好かれまた喜ばれて居ったが、家の老たちより「何のために病氣治しに行って居るのか」と注意されたことだと言うことでした。

前述のように私は家族の者たちがカンポスの山へ移って来たのと、経済上の事情から三年あまりで退院したのでした。武男君も私も俳句より次第に短歌に熱を自然に入れる様になり、気分の良い時は町へ出てサナトリオへ行き、共に短歌の方と親しんだ者だが、何よりも武男君と逢うことが話すことが楽しみで、顔を見た丈けで心と心が通じ合いい、又信じ合えて、誰にも言えぬ悩みも話し合い、慰め合ったものでありました。短歌が急に上達し短歌大会にも第一席に人選する様になると共に病氣の方は好転せず、悪化の一途を辿って衰えてよわって

行ったようでした。

一九五五年に武男君は出聖して、その年の俳句大会と短歌大会に無理を押して出席した折には、誰の眼にもそのやつれが見える程衰弱して居ったが、今思うとそれが皆さんへの挨拶がわりであつたかも知れない。それから最後に一つ丈けつけ加えておきたい事は彼があゝの療養所の前の低地へ土手を築いて池を作り、その土手の両側へは桜並木を造つて、桜の名所とする計画でした。そしてそれを新聞などへ投稿したのでしたが、院長には叱られる、療長からは否決される「そんな事を考えるよりさっさと治して帰ることだ」と言われた相です。又、時期が熟して居なかつた故もあつて実現出来なかつたが、あの時植え込んでおいたなら今頃見事な桜の名所となり、桜の花トネルが出来たであろうに、惜しい事をしたものです。彼の構想丈けはわれわれ生き残り組に課せられた義務として「桜の名所実現」に努力する事が、彼の霊を慰める唯一の道であると私は思っているのです。

○次にいくつか武男君の作つた歌を記して見ましょう。

- ・ 音信の絶えいし友が正月に鶏の丸焼きを送りくれたり
- ・ 病院に七度年を迎う身の年始のぶるが馬鹿らしくして
- ・ 恋愛に破れて去りし娘が植えしひなげしの花赤く咲き居る
- ・ はるばると旅に出で度し日もすがらうつ伏せに寝て痰吐くばかり
- ・ 癒ゆる日はすでに思はずユーカリの花散る下にギターを爪弾く
- ・ 出演を今日に控えてたまりいる痰を出しおりうつ伏せに寝て

- ・ 全快の日となり下るはいつの日ぞ高原電車雲に入りゆく
- ・ 自動車に夫と並びて帰りゆく七年の病癒えたる君は
- ・ 独り身の我にてあれば七年の長き病は悲惨とならず
- ・ 結婚をしたる幾多の後輩の幸を祈りて我病みてあり
- ・ 椰子の葉に懸る三日月日本を発つ時われは三歳なりき
- ・ 七年を病み居るわれは三度来て三度過ぎゆく友を見送る
- ・ パラナ松葉影に見ゆる別荘のガラスを君は住居として居る
- ・ 恋を知らぬ一人の我は長病みて恋人の日に血を吐いて居り
- ・ 長病みて血を吐きおれど父母の在すかぎりは生きんと思う
- ・ 姉上の贈り給えるこのシャツを身につけ再び散歩し得るや

（終）

雑記

昨秋、中南米、特にコロニアの日語普及の一助にと、約九万冊の新刊学習書籍を寄贈して、大きな話題を投げた東京都の学習研究社（学研）では、このほど、もう一步を進め、ブラジルに駐在代理人をおくことになり、当会員馬渕知世氏を任命した。こうした教育関係の仕事は、地道で、耐乏的な長期のPRを要求されるが、それだけ意義の深いものに違いない。

差当り、取扱品目は、学習誌（小、中学、高校）、辞典、事典類から、各科目別のスライド、フィルム（八く十六ミリ）、映写機などの視聴覚教材とのこと。受注品は、適時一括して、当地の太陽堂本店が輸入から配給まで扱ってくれるというからはどしどし、ご照会ありたい。馬渕氏の宛先は Rua Fernao Dias, 299. Pinheiros, S. Paulo

因に、ブラジル日本語普及会、全伯日語学校連合会、サンパウロ州立文理科大学日語講座の支援をうけている由。

批評と紹介

「ドン・ペードロ・二世ホテル」について

薮崎 正寿

この作品は群像新人賞優秀作として、すでに評価を得ているので、追随する言葉を重ねても意味はない。と思うのである。

むしろ、この作品の何処がよわく、何処が不十分かをさぐれば、なにほどこ役に立つのではないかと考えるのだ。

この作品に登場する主要人物、“ぼく” は二十五才か多くとも二十七才くらいの日本人で、ブラジルに来てからは二箇年を経過する。“ぼく” は一枚の契約書とひきかえに有金のほとんどを掠めとられたり、埒のあかない裁判所通いに明け暮れたやりきれない体験を持ち、あげ底の言葉に欺かれて移民となり、すかんぴんとなったのだと、考えている男である。

或る日、ニッポン映画常設館で、“ぼく” はコメデー映画に涙を流している若い女を見懸ける。かねて見知り越しの料亭ママの女であることから“ぼく” はことばを懸け、やがて、女のアパートに時々泊りに行く関係をむすぶ。

女の告白によると、彼女はその前日、死ぬかくごで多量の催眠薬を呷ったのだが、失敗したのである。また、千代子はかなりの額のかねを稼ぎ蓄めていて、それで、日本に連れて帰ってくれまいか、と、“ぼく” に言う。

それまで“ぼく” は喰って行くためだけの生活に日本から持って

きたものを売り尽し、底ぬけにうつろな気分で生きてきたのだが、……この女と一緒にいれば時間の経過とともに日本の、あの柔らかな土の上を踏みしめているのだろうか、と考えはじめると、その日本の奥底にある安息が泣きたいほど欲しい、と性根のところで考え詰めるようになる。が又…… いや、そうじゃない、なにかがおかしい、と素裸でうすら寒そうに窺っている女を眺めながら”ぼく”は考えるのだ。

○

殺人はこのように揺れる”ぼく”の意識の中で温められ、たくらまれて行く。

だが梗概だけをこのように辿って行く仕方はこの作品の場合あまりおもしろいものではないので、結果として行われる殺人の背景と動機、…ぼくの性格などへ照明を当てて行くことにする。作者の意図も、慥かにストーリーによりは心理におもきを置いており、作品理解にはこうすることがよいと思われるからである。

が、その前に、私にはひとつ気になっている問題がある。問題ということが大袈裟なくらい枝葉といえば枝葉にすぎないが、しかし、ここに、作者の基本的姿勢と、小説づくりの計算とが含まれてあるはずで、これの解明ができれば、作者と作品と同時に理解できそうに感じられるのだ。

もちろん、小説中の人称は第一人称ばかりにかぎられはしない。が、ここでは問題の単純化のために、深井氏は、ともかく、第一人称をえらんだ。つまり、深井氏は深井氏の如くえらんだのだ、と肯定す

る所から出発してみることにする。が、こう言ったからとて、総てがそれで片附くのではない。

小説で『私は……』と書き出すや否や、焦点が絞られて作者自身、作品中の私と重なり合うのは慥かだし、第一人称をえらぶ理由の大方もそれにあるのだが、それなら、深井富子氏の場合は、千代子の方の“アタシ”であるのが一等自然のはずである。深井氏はだが、“アタシ”でたなく“ぼく”をえらんだ。ここに作者の計算がはたらいていないはずはない。おそらく、作中の最も主要な人物に作者自身寄り添いながら、しかも或る距離を保ちつつつけたい、という二重の意図によるらしのである。

なぜ、このような二重構造的視点をえらんだかの点に就いては、討議の事項として残したい。唯……私なりに結論だけを述べると、作者の巧者な計算はそこに読み取れるにしろ、その計算は勁さを加えるためではなく、よわさをかばうためにちがいないのである。

○

“ぼく”の行為の背景と動機とに就いても幾つかの疑問符が残るのだ。

背景とは、登場人物の持つ『生活の場』ということだが、それは、えがかれていないと言っている。例えば“ぼく”は登場してくるとき、すでに、己の移民的条件に絶望し、移民であることをヤメてしまっているのだ、社会との結びつきを持っていない。さりとて、未だ日本への復帰を完了しているわけでもないのだ、“ぼく”の位置は移民としての日本人でもなく、日本の日本人でもない。恂にホテルの一

夜泊りにふさわしい存在の仕方ではない。これも、もちろん作者の計算内にちががなく、しかし、それにしても幾らかは背景らしいものも要るから時代は一九六〇年代らしくし、場所はブラジルとする。さほど必然性の感じられないブラジル語会話の挿入は、たぶん背景仕立の意図に発するものである。それは、ときにややクドイほどの状況設定となり、たとえば、いかにも南米という概念に適合し易いホテルの不備を述べ立てる件では、十三軒分（水が出なかったり、スイッチの枠が落ちたり、寝台の脚が外れたりする不備の羅列を数えたら十三力処あったのだ）を掻き集めて見せたりする。しかし、このような誇張は、リアリティを弱めるためにしか、結局の所は役立たない。

○

そして、動機にも考えなければならぬ問題がある。

私は人間の行為の動機づけが必ず単数でなければいけないなどと主張するのではない。だが、“ぼく”を殺人に駆った動機の最も大きな部分が

ぼくは彼女の皮膚にかえってきた、淡い夕焼けの名残りのような色を見ていたが、内部では死の感覚らしいものを追いつづけていた。行きついてしまうのは判りやすくぼくは帰りついた場所でのように静かになり、しんみりしていた。事実、死をみていても驚かなかったし、ぼくはむしろそれと穏やかに抱きあっていることだっただけだ。ろう。死んだ彼女は、冷えて深く沈みながら、ぼくに触られ、もう決して揺るがないしずけさのなかで、ぼくと一致していた。それはもう、

彼女ではないかもしれないが、ぼくも触れこんで消えている。

ぼくはふと予感のように、彼女は死んでもいいのだという考えをみつけていた。彼女が無であつても、世界はなにも変わらない。ぼくが世界を拒否したところで、何も生じはしないのだ。

―中略―

その時、ぼくは啓示のように、烈しく、堅く掴みかかって殺すことを想いはじめていた。彼女はあの波をおしわけてはいり、力いっぱい碎ければ、それでぼくがぼくでありたいことへの幻影も消え、ぼくは無くなり、空気みたいにあそこへ戻っていくこともできるだろう。終るときは、誰でも、はかなく消える。ちよつとした方法でもできるはずだろう。

で占められるのは疑いのないことである。そこでは“ぼく”は日本の世間の目と同じ目で“売笑婦だった”女を見、・・・自分のものでもないみじめさまで押しつけられ、いっしょくたにされ値踏みされるのは、やりきれない、と考えをのだ。が、もとよりこの作品の中で展開されてきている。“ぼく”はそんなタイプとしてではないのだ。

『ぼくは黙っていた。もう長い間、他人について想像をめぐらすことには嫌悪を感じていた。彼らは、あまりになにもかもをひっくりめて、見せかけの形でくるんでしまいたがる。』作者はずっとはじめての所で“ぼく”をこのように書いているのである。それよりもっと手前の所でも、『…なんて好い奴だ、とぼくは突然思った。事実好い奴なのかどうか、むろん、ぼくには判るはずがなかった。だいいち、好い、

などという基準じみたものなんか、信じているわけではないし、認めている気さえない』と書いているのだ。だいたい、ここに引用した箇所にかぎらず、”ぼく”の基調がそのようなように提出されてきているのだ。それで、世間の思惑などには無関心な人間の物語のつもりでいると、突然、全く別の、思惑にばかり動かされる顔が現われるので面くらわされてしまうのだ。

そのように関心と無関心、なげやりと臆病とが縋いませになっっているからこそ、血の通った人間といえるのだ、と言ったふうの小説論を、この場合にはとらない。ドストエフスキーの人物が矛盾をはらんでえがかればえがかれるほど、愈いよ全的人間に近付くと言った次元とは、これは異なるのである。

要するに、ここに露わになるのは、”ぼく”の分裂以外のものではない。たぶん、この主要人物の性格の不統一のために”ぼく”のイメージは最後まで不鮮明なのである。

この、不鮮明ということでは、文体も亦そうである。

このことから、私はカミュの異邦人が読み直したくなり、例のマリイとの件りの『……それには何の意味もないが、おそらくは君を愛してはいないだろう』というあのあたりのページを繰ってみた。そして判ったのだが、異邦人の場合は、主人公が一等正確なことばでこたえようとして、却って明瞭なことばを喪うのだが、文体は寧ろ明晰すぎるくらいなのだ。深井氏の場合とは似ても似つかないのである。ちよつと気をつけて読めば判ることだが、深井氏の語彙には、『感じ

た』とか、『気がした』とか、『何となく』とかいうふうのことは遣いが多く、文体を支えているものは論理でも思考力でもなく、たぶん、感覚の独自性なのだ。そうだ。これで落着きよく理解できそうに思える。深井氏の文体は、きつと理解するにふさわしい文体というより、感じとるためのもののなのだ。しかし、ここでも不協和音のような幾行かがはさまって、例えば

だが彼女は出てこない。あるいはまだ出てこない。ホテルの入口は、時代がかった石室の屋根裏部屋へと昇りつめていくような、あの薄汚れた細い階段ひとつしかない。ぼくは誰も出てこない、誰も入ってこない姿をみかけない階段への入口を見つめた。

○

上掲の文章にうかがえるように目に見るもの以外は信じないといった風の実証精神が現われたり、完全犯罪を確信する心的経過を、次のように描いている。

あすの朝、ぼくは、サンパウロでサントスへのオニブスに乗り継ぎ、昼すぎには、彼女のとは別の旅行社で買っておいた切符で乗船しているだろう。

ぼくが彼女の連れだということは、はじめから彼女の口を封じておいた。

ぼくがベロオリゾンテ市にきたことは誰も知らない。ホテルでも、

身分証明は彼女のだけを使って、ぼくのは見せなかったし、署名もしなかった。こうしたことだけでも、ここではポリーシアも、ぼくに気づきはしない。もし、目をむけても証拠はなにも掴めない。

たぶん、指紋を消す必要もないだろうが、念のため、触ったところは拭きとっておいてもいい。この順序は簡単だった。

○

まるで疑いぶかい保険加入者のように、まっとうすぎるほどまっとうなことば遣いでダメを押している。つまり、文体そのものも、よく一貫しているとは言いにくいのである。

○

さて、私なりに“ドン・ペードロ二世ホテル”の疑問の幾箇所かを挙げた。

当然のことながら研究会での発表者の立場に立てば、読み方は不当に意地悪な目付になりがちである。それで、平衡をとるため、というわけではないが、討議者の立場を離れた所からすこしばかり言葉を付け加えたい。

『生活の場』がえがかれなかった点にしても、そこから否定的な感想ばかりが生れるのではない。“ぼく”をそのように異国風の街路と長い長距離バスとホテルとにだけ閉じ込めたからこそ、力は主題に集中できたのかも知れず、千代子の“アタシ”ではなく、“ぼく”をえらんだからこそ、作者は手頃な自由を獲得できたのかも知れないのだ。

そして、これらはみな、作者が前以て計算した結果であるのは間違い

ない。

コロニアの書き手に往々見勝ちな無計算や遠近法の脱落やその他さまざまな無知による主題の稀薄化など、この作品からは見附け出すことができないのである。こういう作品の出現は、おどろきを以て受け入れている。それにおどろくということはすこしも恥辱ではないはずである。恥辱とは、どのような場合にもおどろかない精神にこそふさわしいので、成熟には程遠い書き手達は何にでも、まずおどろくべきなのだ。するどく、さとく、おどろく精神の中から、吾々の期待する萌芽は、たぶん、育つはずなのである。

北米の「文芸誌」

武 本 由 夫

薮 崎 正 寿

① “南加文芸”

北米カリフォルニアにある「南加文芸」社とは、早くから連絡がつき、本誌にも一度、短く紹介したことがあった。会員数は、多くないようだが、「文学」に寄せる熱意の高い人の結合体とみえる。編集主幹の加屋さんから頂く折々の文面にも、よくそれをうかがうことがで

き、恵送にあずかる「南加文芸」誌の編集ぶりにも、それがよくにじんでいる。

最近、三月十四日発行の第八号を頂いた。会員諸氏に回覧頂きたいと思う。謄写印刷ながら、紙面は鮮明で読み易い。一四二ページという大冊で、創作、論文、随筆、詩歌など、内容も豊富で、なかなか読みごたえがある。本会々員で、現在北米コーネル大学在学中の前山隆氏も「異郷に死ぬものの心について」という文章を寄せている。

編集部として、一瞥した感想を、創作について、少し述べてみる。創作五籍が掲載してある。「暑い盛り（山中真知子）」「白い舟（野本一平）」「十七文字（山本ひさえ）」「移民時代（山城正雄）」「検束（藤田晃）」。この中「移民時代」は連載第八回目であり、「検束」は長編小説「沃土の中の砂漠」の一部をなすもの、ということになっている。あとは短篇である。

それぞれ長篇小説の一部をなす二篇の作者は、相当に書き馴れた人らしく、悠々とペンを進めている。完結を待たなければ、何とも言えない。しかし、第八号に限って言えば、「検束」の方が、より文学的な成果をねらっているもののように見える。

短篇小説、三篇は、どれも軽く気が効いている。「暑い盛り」は隣家に引越して来た夫婦がたてる雑音に悩まされる話、神経質で気が弱く善良な主婦がよく書けている。「白い舟」は、二世の教授と、日本の留学女子学生とが、かもし出す知的で少々桃色ムードのお話、淡彩画のようで、少々物足りない。

「十七文字」は英文で書いたものを日本語に翻訳した小説のような感

じのもの。文学趣味の妻に対して、文学を解さない夫の抱くシット交じりの嫌悪感が書いてある。筋そのものは、何ということもないが、ユニークな表現技術を持つ作者である。

三篇ながら、密度は薄く、ずっしりとした手ごたえは感じられないが、気の効いた、軽快さに小説としての魅力がある。

ほかに、「南加詩壇回顧（外川明）」、「北米俳壇の推移（常石芝青）」という連載論文が目を引き。なかなかの労作で、北米の日系文学界に興味を持つ者にとって必読の文章であろう。

（武本生）

②「Z・Y文芸」

先日、Z文芸十号を恵送された。奥付を見ると発行は今年の七月、ほぼ十カ月経っている。三百日、迷いに迷ってやっと到着したというわけなのだろうか。局の消印が曖昧で慥かめる術はなかった。

随筆、詩、コント、川柳、その多彩なことは（コロニア文学）とよく似ている。この賑にぎしさがいいことなのかわるいことなのか、簡単には言い難いが、移民雑誌の特質の一つを見た気がした。

創作は五篇、その内二篇は長いものの一部で未だあとかなり永く続くらしい。そのように展開されるのか量り知り得べくもないが、「リベルター市盛衰記」の文章の肌目はこまかった。

「砂熟」は在米日本人として大層難しい主題だと思われるが、この、

やや巨視的方法に依ってどれほどの現実が把握でき、亦とりこぼされるか、困難さは他人事でないと痛感された。「夏の職場」女性留学生の夏期休暇中のアルバイト風俗はよく書けていると思われた。作者自身の経験に基づくのだろう、そうでなくては叶わをい叙述の厚みがあった。しかし宇津野という主要人物のかげの薄さが作品全体をよわめているようで、惜まれた。「異邦の客の子」は大正末年か昭和初期頃の移民の日本語問題を主題としていて、興味深かった。唯、女教師のミス・ニ科尔ソンの描き方がやや概念的で折角の結びの盛り上りを弱めた。たぶん、ミス・ニ科尔ソンをこのように正一に近附けて描くには、それまでの彼女の描かれ方が一貫性を具えていない。その以前で、彼女はあまりに呆っ気なく校長の片手落な処断に加担してしまっている。

「アメ呆け」この作品は、同誌十号発刊を記念して設けられた懸賞に応募した唯一篇のものだと説明されていた。

募集方法に徹底しない所があったと編集者も反省の言葉を漏らしているが、それにしても、まったく、唯の一篇だったということは、これを他人事ならず考えさせられた。作品は面白く拝見したし、日本の中間雑誌にだったら載ったって、おかしくない出来だと思った。

おわりに、同誌全体の私なりの感想を申し上げると、読み了って、一層親しさの深まったことは慥かです。今後とも緊密な交流を期待します。

(薮崎生)

第9号掲載作品選考会

座談会風に

選考委員	鈴木 悌一
同	薮崎 正寿
同	妹尾 三郎
編集部	武本 由夫

第9号は、三月末発行の予定で、準備していたが、二月末、わたしが足に負傷して、三月はじめから四月にかけて、臥床した為、五月五日、やっと選考会を済ませた。わたしはその後も、寝たり起きたりしながら、少しずつ準備を進めているというありさまである。

第9号投稿作品は、全部で18篇集まっていた。これを、今回の当番選考委員、鈴木、薮崎、妹尾、三氏間で回覧頂いた後、選考会を開いて、採用作品を決めて頂いた。

・応募作品、の媚薬（川井一）、②孤影（星野良江）③インチキ貿易商の生い立（山田義雄）、④貧乏物語（山田義雄）、⑤火酒と牛糞（石城秀節）、⑥パラナ河（務台一郎）、⑦街路（伊那宏）、⑧エスケセル・オ・パッサードス（千台一太郎）、⑨飴色の水（堀江一声）、⑩流離・第二部（三瀬喜代志）、⑪野たれ死（三瀬喜代志）、⑫失われた歳月（吾茂弘）、⑬五葉考（川井一）、⑭渦（いこま正）、⑮土曜日のリカ（醍醐麻沙夫）、⑯火取虫（川原奈美）、⑰爬虫類（高山東作）、⑱果実（福村琳）、以上18篇の中より、掲載候補作品として、あがつ

たのは、①②⑥⑦⑩⑪⑮⑯の9篇であった。そして最後に残ったのは、②⑥⑦⑪⑮⑯で、この9篇を9号の掲載作品とした。

①は作者の求めにより、差し戻し、練り直して再投稿して頂くことになった。⑩は、連載ものなので、差し戻し、完結させて再投稿して頂くことになった。⑯は題材として立派なものであるが、推敲不足が目立つので、差し戻し、再投稿して頂くことに決った。

次に選考の模様を座談会風にまとめて、載せておく。

武本 「選考会がおくれてしまつて、真に申しわけありません。候補作品の出揃ったところで、選評をお願いします。①から……、ちよつと言つておきますが、①は、選考委員の回覧に出して後、作者の川井君が、練り直すから戻してくれと言つて来たんですが、……

妹尾 「僕は、一応候補にあげていますが作者の希望なら、差し戻していいと思います。」

鈴木 「それじゃ、①は見送ることにしましょう。いいですか。」

武本 「②の“孤影”、いかがですか」

藪崎 「星野さんの作品としては、余りできとは言えないですね。この人の持ち味は出ていますが、僕としては、推すにしても、きわめて消極的です。作者が、ヒロインをつらい目にあわせたくないという、一種のナルシズムが、作品を甘くしています。もっと、突っぱねて書けば、いいものになったと思います。」

妹尾 「僕は、作者の根性を買つて推したんですが、沈潜の足りなさ、技巧の未熟さは指摘できるでしょう。」

鈴木 「星野さんの、作品傾向が、僕は好きですね。この人は、こうした傾向のものを、段々洗練されたものにして行けば、ユニークな存在になると思う。まだ、作品のきめが粗く、練りが足りないと言えるが……」

藪崎 「この安易なロマンチズムから抜け出ることですね。」

武本 「次の③と④は、同一作者のものですがいかがでしょう。いっしょに批評しては……」

藪崎 「いいでしょう。僕は、どちらも買いませんね。特に③に甚だしい作者の意識が鼻につきますね。④は、ブラジルらしい色彩のあるところは取りあげてよいと思います。」

鈴木 「ものを書く力は買えますが、結局は、作者の“じまん話”ということにおちるんじゃないですか。」

妹尾 「鼻につくところに、ちよつと別の意味で魅力があるんですが、文学的な感銘のないことがマイナスですね。」

鈴木 「こういうことも書いておきたかったのだ、という作者の意図は解るのですがね。」

藪崎 「この人は、体験を小説にしないで、ノン・フィクションで書けば、記録文学としていいものが書けるんじゃないでしょうか。」

妹尾 「その方向をおすすめしたいですね……」

武本 「次の⑤の“火酒の牛糞”にいきましょう。これは落選していますが、どうなんですか……」

藪崎 「まとまりがないですね。登場人物をもっと整理しなければ、いけません。」

鈴木 「一族繁栄めでたしめでたしの思い出話ですね。それもよいのだが、もっと、文学として高められなければ…。」

妹尾 「僕には、何も言うことがありません。入選には、まだまだ遠いということですね。」

武本 「では、⑥にいきます。これは、一応候補作としてあがっているのですが…。」

妹尾 「人物は粗けずりながら、躍如たるものがあります。僕は、素材として、こういう作品にも、コロニア文学の可能性を見出し得るものと思います。」

鈴木 「小説というよりは、“綴り方”という感じですね。僕も一応候補にはあげていますが、秘境探検談として、まずまずのできということろで…」

薮崎 「どうでしょう。小説としての欄でなく四段組みで掲載するということ、入選ということになりませんか。」

妹尾 「それならいいでしょうね。」

鈴木 「いいでしょう。だが、書き出しの、パラナ河の源泉に関するところなど不要でしょうね。」

武本 「では、そういうことで、次の⑦にいきましょう。これは、掌篇三つを合わせたものですが…」

妹尾 「『赤い月』は平均的感覚の作品ですね。次の“そして男は”

これは詩情はあるのだが無造作に過ぎます。”たそがれの中を”は月並みでしょう」

薮崎 「この作者は若手で才能のある人と思っています。しかし、こ

の三篇はみな安易ですね。一応は書いているという程度です。僕はこの作者には、もっと重量感のあるものを望みたいのです。」

鈴木 「三篇の中、“赤い月”にはたしかに作者の文学的な才能を思わせるものがあります。しかし、“そして男は”は駄作であり、“たそがれの中を”は平板に過ぎると思います。一応候補にあがっていますが、どうにか採れるのは“赤い月”と“たそがれの中を”でしょうね。」

武本 「それじゃ、“そして男は”を抜くことで掲載ということにしてください。次は⑧ですが、どうでしょう…。」

鈴木 「まだまだ稚拙ですね。」

薮崎 「そうですね。誰でも、小説は、こんなところから書きはじめるんじゃないんでしょうか、たどたどしいですね。妹尾さん、何か…。」

妹尾 「いや、何もないです。次へ行ってください。」

鈴木 「⑨は怪談ですね。前半はいいと思いますが、幽霊が出てからの後半がよくないですね。作者の努力は買えますがね」

武本 「ちよつと…、この作品は、第∞号に応募して、落選したのですが、題材に特異なものがあるので、差し戻して書き直し、再投稿して貰った作品です。」

薮崎 「これで、幽霊に対する作者の位置がはっきりしているといいたのですがね。作者が幽霊の存在を信じているのが不可です。幽霊の存在を信じている人物を書けばいいのですがね。」

妹尾 「作者が信じているので、コウトウムケイな作品になっている。

惜しいですね。」

武本 「こういうのは、文学作品として仕上げるのがむずかしいんですね。では、次の②⑩をお願いします。」

薮崎 「一応候補にあがっていますが、これは”第三部”ということなので、完成してから載、不載を決めるというのがいいと思います。が、どうでしょう。」

妹尾 「未完作品は、評価しにくいですね。」

鈴木 「僕は同一作者の⑪の方がいいと思うんですが、これも、それ程悪くはないと思います。だが、薮崎君の言うように、完成を待った方がいいでしょう…。」

武本 「それでは返送して、完結させて貰うことにしましょう。⑪はどうです。」

鈴木 「全体として、まとまっています。最初の方は物足りないが、後半にもりあがりがあつていい作品と思います。」

薮崎 「⑮番の次に、これが推せる作品ですね。」

妹尾 「話を面白くしようとしたところが、通俗に過ぎて、むしろ逆効果になっていますが、しかし、まとまっていますね。僕も⑩よりはいいと思います…。」

薮崎 「最後に、中心人物が死に別の人が中心になるのは、どうか、短所でしょうね。この人には、コロニア風の批評は言わなくていいでしょう。筋は古いようで、人間蒸発など新しいところだし、人間関係の錯綜したところを書きぬいている点はお手柄といたいですね…」

武本 「次は⑮ですが、落ちてますね。」

鈴木 「相当書き慣れた人のようですが、これは、まとまりがない作品です。間口が広すぎるようです。もっと狭く深く書けば、いい作品になるんじゃないかと思います。」

妹尾 「戦犯だけでも独立した作品になりますよ」

薮崎 「戦争体験は、おそらく作者のものでしょう、実感があります。しかし、この国での生活で、もっと生活意識の追求が欲しいですね。書ける人らしいので、次作に期待しましょう。」

鈴木 「Ⅱ⑬五葉考」はどうでした。僕は構成も古めかしく、文章も粗くて感心しなかったのですが……」

薮崎 「大時代的感覚ですね。その点、同一作者の①の方が、欠点はありませんが、むしろいいんじゃないんですか。」

妹尾 「僕、①は採ってあります。⑬は、いけませんね。丸で別人の作のようです。」

武本 「⑭は」小説」と銘うってありますが、」終戦記録」に近いものです。」

薮崎 「小説というには記録に近く、記録というには主観が強く出過ぎていて、中途半端な感じですね。」

鈴木 「ⅡウチテシヤマンⅡですね。余り主観的でない手記なら、面白い記録になるでしょうね。」

妹尾 「素材の面白さが、月日の経過に従ってよく定着しており、僕はなかなか面白いと思いました。作者が少し取り乱したところがあつて、少々気にはなつたのですが。」

薮崎 「小説というには少し無理でしょう……」

鈴木「憎悪感が露出し過ぎていますね。もっと冷静さがないと、記録としても、具合が悪いでしょう」

武本「今度は⑮にいきます。実は昨日、作者が拙宅に見えて、少々手を入れたい所があると言われたのですが、みなさんお読みになって、どうでしたか。」

薮崎「今度集まった作品の中では、最も秀れていると思いました。作者が手を入れれば、もっと良くなるでしょう。是非〇号に間にあわせて貰いたいですね。」

妹尾「この作者は、どんな材料でも書きこなす力を持っている。この作品も鋭いタッチで書かれている。勿論標準以下ではないが、模糊としたところから脱皮していないような読後感を持ちました。」

鈴木「その模糊としたところ、ジョイスの作品のように、そこが作品の、ネライかもわからない。思索と感情との流れね。ムードの盛りあげがあった。僕は、今度の作品中では、これがずば抜けていたと思う。言えば、やや街学的なところと夫婦喧嘩の場面でのバリゾウゴンは何とかならないかと……」

薮崎「思索的な人物が、まるで異った人のような夫婦喧嘩をする。そのところが、うまくつながっていないね。」

武本「昨日来た時、作者も、それを言っていました。そこの所をうまく結び合わせる書き方を工夫したと……」

薮崎「それなら、ずっとよい作品になる筈です。期待します。次は鍋でしたね。」

鈴木「この作者は書き馴れているが、馴れによりかかるといけない。」

昌平のところへ娘が逃げてくるあそこまでは、よく書けていると思うが、そこからがいけない。まるで木に竹をついだようだね。」

薮崎 「後半で作者は素材にしばらくれ過ぎているといった感じで、失敗しています。」

妹尾 「後半に手を入れる必要があるね。差し戻してはどうですか。捨てるには惜しい作品です。」

武本 「では差し戻しにしましょう。次は⑰ですが…」

鈴木 「この作者らしからぬ作品だね。どうも晦渋で読むのに苦勞した。猫男という、いやらしい男を書こうとしたのだが、気取りになっ
てしまっている。」

妹尾 「一部と二部とになっていますね。僕二部の方はいいと思ったんですが、一部の方は項き兼ねます。」

薮崎 「これまでのものとは調子もちがっていますね。」

武本 「力作のようですから、これも、手を入れて貰いましょう。では最後の⑱にいきます。」

妹尾 「淡々とした筆致で核心にむかっていて読めます。しかし、人物の交流に切実さが欠けているようですが、どうでしょう…」

薮崎 「説明が多過ぎるようです。しかし、悪いではないと思います。未完なので、何とも言えないのですが…。」

武本 「続篇が、わたしの手許まで来ています。みなさんに読んで貰うひまがなかったのですが…。」

鈴木 「同化問題が、女性の側から、しみじみと内面的に取りあげてあつて、いい作品と思いました。生々しい問題をつき放して淡々と書

いてあるのに感心しました。」

藪崎 「続篇を武本さん読んでみて、良かったら載せてください。」

鈴木 「多分、これだけ書ける人だから、続篇も悪くないでしょう。編集部にまかせましょう。」

武本 「わたくし、読んでないんですが、大きな破綻がなければ載せることにして頂きます。では、これで終わります。

○

各方面から、もっと選考会の模様を細かく落選作品の批評も載せるように、というような注文がありましたので、今回は比較的、細かく、全応募作品に対する選評を載せてみました。

― 編集部 ―

お願い

・これでも、編集部としては、一生けんめいに作っているのだが、出来上ってみれば、不満がいっぱい。読む側としても、いろいろ御不満があるに違いない。そのところは、誠意と寛容とで埋め、より良いものに改めていく努力を忘れたくないと思う。

・その意味で、会員諸氏は、編集についても、建設的な御意見を、どしどし寄せて頂きたい。” 向上進歩” の敵は、ほかではない。” 無関心” というところにある。

― 編集部 ―

《コント》

哀れな自由主義者たち

【*Historias Brejeeras* の中より】

アルトゥール・アゼヴェード（作）

富山南北（訳）

帝政の頃であった。

さる地方：その名は、差障りが生ずる、つまり、誤解をさけるために挙げないことにする…の長官であり、高名な政治家である、ドートル・フランセリーノ・ロッペス氏は、保守党（当時の与党）のおもだった人達の要請に応え、奥地の主要な場所を訪問する、大旅行を決定した。

このニュースは、当然、全地方民を感動させ、その各地区に於て、市町村議会は無論のこと、有力者、与党の人達が、この偉い宮廷の代理人を迎えるに応わしい接待の準備を行った。

ドートル・フランセリーノが最初に訪問した町では、駅に出迎えた。駅の周辺は美々しく飾られ、調子の合わない楽隊の奏する国歌の下に、花火がポンポン打ち上げられ、住民は歓呼した。その賑わいは、立派とはいえぬにしても、仰々しい騒ぎであった。

地元の名士達が全部出揃っていた。

代表者三名の、それぞれに長つたらしい歓迎の演説があり、それに対し閣下は、言葉少なに、しかも齒切れのいい挨拶をした。

駅から、長官は名士達と沢山の人に付添われて、市議会に向った。

そこで待っていたのは、閣下の胃袋に応わしい見事な晚餐会で、折りも折り、閣下の胃は、常人の如く、空腹を告げていた。

席上、長官の正面に、地区与党の頭であり、大農場主で、且つまた、今宵この偉大な人物に宿舎を提供する光栄を有するサンタナ男爵の夫人が座った。

ところで、一方年も四十才ならずで、都にいた頃は仲々のドン・ファンとの噂のあった長官は、年頃も皇子の姫に応わしい男爵夫人の色っぽい眼差にすっかりのぼせ上った。

宴会は九時に、皇帝陛下への乾杯によって、終了した。

楽隊がいたので娘達の意向で舞踊会が即席に催された。ドトール・フランセリーノは男爵夫人と組み、全く閣下らしからぬ格好で夫人の手を握りしめつつ、クフドリヤを踊った。併し、この無害な表現は、時宜を得ずそれ以上のものにはならなかった。

長官が旅の疲れを訴えたので、会はそこで中断された。名士達は、閣下を市議会と同じ広場に面した所にある男爵家に案内にたった。家の造りは低いが、町一番の立派な建物で、賓客には客間二つと寝室があてられており、いづれも豪華な調度がつらえてあり、寝台も立派だった。

主人夫妻、市会議長、判事、神父、警察署長、その他有力者が家の間取り等を説明して、閣下にこれ以上の待遇の出来ないことを詫び、いつおわるともない儀礼を重ねたのち退出した。

最後に残ったのが保守党機関紙“与論”の所有者兼編集長のピニエイロ学士であった。―閣下、何卒今日の新聞を差上る事をお許し下

さい。閣下の伝記と肖像を載せてあるので御座います。このささやかな表敬に閣下にそぐわぬところがありましたら、何分御容赦願います。

ドトール・フランセリーノは、それに感謝し、そして戸を閉めると、安堵の長い吐息を洩らした。

独りになると、いつも近くにいる筈の家僕の事を思い出した。何処にいてもものやら、多分、他の部屋で眠ってしまったのだろう。幸い、あの寝坊めが、トランクから寝間着とスリッパを出しておいてくれた。

泊り客は、靴を脱ぎ、衣服をとって、寝間着を着込むと、横になり、灯を消す前に自分の伝記を読んでみよう、と、与論を拈げた。

どうにも出来の悪い印刷の肖像を見たたん、閣下は、下腹が苦しくさしこんできて、と、間もなく、地方長官であろうと誰方であろうと免れない、或る生理行為の絶対的要求を覚えた。

彼は寝台から飛び降りると、何はともあれ必要な便器をさがし始めた。傍の物入れにも、寝台の下にも見当らない。いたるところをさがした。が、ない……

男爵、同夫人、市会議長、判事、神父、警察署長、"与論"紙編集長、その誰もが閣下が常人同様の人間であることに思いおよばなかったものとみえる。

ドトール・フランセリーノ・ロツペスは、掌を叩いて誰かを呼び、助けを求めようとしたが、思い留った。我々の教養のもたらす馬鹿々々しいジレンマにおちいったのである。つまり、その様なことを

人に打ち明けることは弱みをみせることになり、事は至って自然には相違ないのだが、為に一流官僚の体面を失い、歓迎宴で彼に与えられた神に近いイメージの土台を崩すことになるのを恐れたのである。

それに、かの地方美人、その手を握りしめて踊った、罪な魅惑的瞳の男爵夫人が何というだろう。女主人の立場から第一番にこれを知ろう、そして馬鹿げた、下品な事と思うに相違ない。

しかし事は切迫していた。帝政の高官は冷汗が出てきた。

突如、“与論”を日にすると、果して、以前に泊客が、この様な危急の場で、どんな冒険をしたものか知る由もないが、思いついた。もう一秒の逡巡もなく、ピニエイロ学士の新聞を床に拵げると、便器に代用した。

用をすませると、閣下はゆるりと立って、そっと窓を開けてみた。広場には人気もなく、静かだった。市議会の前廓の最後の灯りが消えようとしていた。町全体が眠っていた。

彼は慎重に“与論”の四隅をつかみ外へはおり投げた。そして、窓を閉めると、身体を洗い、香水をつけて横になり、新聞に掲載してある自分の伝記が読めなかったことをいかにも残念に思いつつ灯りを消した。お腹も良心も、いまはすっかり解放されて、間もなく安らかな眠りについた。

ドートル・フランセリーノ・ロッペスは目を覚ました。というより、朝、広場より聞こえて、次第に大きくなる何やらわからぬ物音に目覚めさせられてた。

耳をすますと、その不可解な人声の中より、次の様な憤慨の言葉が

聞きとれた。

―不名誉だ！

―恥知らず奴！

―今に見るがいい！

騒ぎは大きくなっていった。公序の妨害に関わる事に相違なかった。

長官は急いで衣服をつけ、窓を開けると、すさまじい歓呼に迎えられた。

広場には五百人以上の人が集っていた。

―地方長官万才！

―万才！

楽隊が国歌を奏した。

それが了ると、ピニエイロ学士が窓の近くにきて、次の様に述べた。

―閣下の御高德と英才の讃美者である大多数の市民が、本日ここに、早暁より、閣下に朝のごあいさつを致すため、楽隊を伴って参ったのでありますが、はからずも、閣下御自身、ひいては自由なる新聞に対する、おぞがましき侮辱の光景に驚かされたのであります。

―同感！ 五百人の喉が一つになって叫んだ。

―我々はその侮辱の証拠を見つけた場所、即ち、閣下の窓の下に、そのままにしておきました。というのは、閣下に、当市に於て如何なる無分別が政治的憎しみにより行われ、また、自由主義者達が如何なる事を仕出かすかに御覧になって戴きたい為であります。

―賛成！ 群衆がわめいた。

―しかし、自由主義者達です。

―その卑劣な連中のみが、閣下の尊敬すべき肖像を不浄不潔な代物で汚すことができるのです。

―同感！

―併しながら、閣下、与えられた侮辱が大きければ、それだけにその酬いも大なる事を確信下さい。

長官は次のように答えた。

―諸君、事は甚だ不可測である。……

すべてが遇然の仕業で、自由主義者達のした事ではないかも知れない。（別に）あわれな自由主義者達よ！（声高く）さりながら、侮辱が行われたとしたら匿名の侮辱であつたので、今後もこうした匿名の侮辱が生じるかも知れない……匿名の侮辱はいやしむべし！

皇帝陛下万才！

―万才！

―国の宗教万才！

―万才！

―帝国憲法万才！

―万才！

楽隊が国歌を奏した。

（終り）

『日本文代研究所』開設

六月二十日、「日本文化研究所」が開設された。所長は、本会々長の鈴木悌一氏。会后、鈴木会長への連絡は左記へ……

Rua Mario Amaral 171.

Sao Paulo Tel 70-4887.

《コント》 二篇

街 路

伊 那 宏

赤い月と 黒い娼婦 (5枚)

外へ出ると、街路は蒸し暑い夜の中に在った。

繁華時刻を過ぎた街路は、通行人もまばらで、時々忙し気な響きを置き去って車が疾走して行く。

ビルは夜空に黒く聳えていて、その間に異常に赤く熟れた月が浮いていた。

街路樹が夜の中に空しく溶け込んで、コンクリートの路に赤い月の影を朧ろに落している。

「明日は雨になるねえ」

「気違い天気さ」

「まったく、また寒くなりそうだよ」

行きちがった二人の女の交した言葉が、俺の耳に触れた。二人はよく見かける娼婦であつた。黒い肌が光つて俺の眼を捕えた。月の光りに黒い肌が光ったことが不思議であつた。

まったく、明日はまた雨になりそうがだーと、赤く濁つた月を見て俺は呟やいた。こんな晩はろくなことがありやあしないのだがーそんなことを思いをがら、ふと、俺は黒い肌の娼婦を抱いてもいいと考えた。

「黒ん坊はあかん。強烈な肌の匂いが胸につかえて、その氣も起こりやしねえよ」

いつだか、飲み屋で肩を並べた鼻の歪んだ若い日本人の言つた言葉が、俺の記憶に甦つた。その男は、商品の見本を並べるように、あらゆる人種の女のことをとくとくと話して、「よっちゃん、もう一本」と威勢をあげてから、

「日本人の女はいけねえ、ありやいけねえよ、まったく。なまじ祖国を離れたこんな異郷に居るつてえと、何かこう、近親相姦でも犯しているような錯覚がしてよ、ハハハ。だったら匂いさえ我慢すりやあ黒ん坊の方がよっぽど…… よっちゃん、何してんだよ」

フン、低級な奴！

歪んだ鼻が酒で染つて、笑うたび醜くくよじれる男の表情を眺めながら、俺はあの時反撥するように呟やいたつけな。

「夜中に、S公園の暗らがりを歩いていましたら、茂った樹の陰か

らいきなり『オジサン』おかしなアクセントの日本語で私を呼び止める女がいたのです。女の声でしたから、確かに女がいるはずでしたのに、それがどこにいるのやら、不意に呼ばれたものでしたから私も少々驚いて、きよろきよろと方々に目を向けてはみましたが、なかなか見つかりません。すると、そんな私の前に、ぬっと一人の黒人女が現われて、ニヤリと白い歯をことさら夜の中に浮かし、たどたどしい日本語で例の交渉をするのですよ。歯ばかり目立って顔の判別も出来ないような黒い女でしたがね。でも、私としたことが、そんな下司な女に興味を持てる訳がありません。ましてや、夜の色と肌の色がまったく溶け合っているなんて、不気味というより他ありません。手を振り、唇を吸う。そんな貴族的愛情表現が、黒い売女にあなた考えて見ただけでも施こせるはずないじゃありませんか、ねえ」

ロシア文学に興味がありまして、などと言って、コンヤツキグラスを両手で撫でまわしながら言った、金縁眼鏡のにやけた男のことも俺は思い出した。

「でもカン違いしてはいけません。日本人が黒人女を抱くことを嫌うのは、あなた、人種的偏見からではなく、潔癖であるからなのですよ。ええ」

金縁眼鏡は註釈をつけて、それから、ヒツヒツと卑猥な笑い方をしたっけな。

娼婦が行き去って、赤く熟れた月の光りが絡らむように俺に覆いかぶさって来る。

俺は、赤く熟れた目をじっと見つめながら、黒い娼婦を抱いてみよ

うと考えた。

「宝石にだって黒い色があるんだからな、ほら、黒い真珠、黒いダイヤモンド、エマチット。なかなか現代では得難い野性的趣向もあつてね。捨てたもんじゃあないさ」

鼻の歪んだ男と、金縁眼鏡の男に、俺はいつか言ってやろうか。

黒ずんだビルとビルの間に抱かれた赤い目から眼を外すと、俺は踵を廻して娼婦の後姿に視線を置いた。それから、確かに五コント札が二枚入っているズボンのポケットに手を突込むと、

「男イコール不潔よ」

つんと横を向いて唇を尖せた、好きな飲み屋の女の子の面影がちらつと浮いたのを気にもかけず、そのまま、ゆっくりと歩調を進めて行った。

― 終り ―

黄 昏 の 中 を

(5枚)

私と妻が、一年ぶりに娘の家を訪ねるべく聖市に着いたのは、ちょうど、西陽が落ちる頃であつた。週日の夕刻の慌しさが、どの街路にも溢れていて、それが、田舎者の私達に強い異和感を伴って迫ってくる。こんな時刻に都会へ着いたことを後悔するのは、多分、田舎者の気遅れに違いはないのだろうが、道行く人々に誰一人として知人のい

ないということは、私と妻をたまらない淋しさに陥し入れることだけ
しかなかった。どうしようもなく脹れる寂寥感に、妻が、ひっそり
と支えを求めるように私に寄り添って来て、

「街、まだ遠いの？」

娘の家を訪れたのは私と同じ回数なのに、妻は〆街の所在地も覚えて
いないのだ。このような場合、すべからく私に頼りきってしまうのだ
が、心細気に寄り添って呟やく妻から、私は、ひと夫婦の親密感を
肌感じて愛しく思う。

渡伯以来、妻はいつも私と一緒に居た。自己主張の術も知らず、何
事にも私の意に背くことがないということは、時には、私の感情を苛
立たせることもあったが、よく考えて見れば、それなればこそ夫婦間
の風波も起きないことであつたし、典型的な円満夫婦という近辺の評
判になった所以でもあろう。

そして、もつと大切なことは、私もそんな放せばどこかへ舞って行つ
てしまいそうな妻を、こよなく愛することが出来たということであ
る。

黄昏が街を包みはじめていた。

付近のアパートの暖かい灯りが、私達の胸の中に或る親しみをもつ
て投げかけてくる。繁華街のけばけかしい商業用の灯りと違って、そ
の光りには、常に人間の求める和やかな家庭の色が含まれている。

「びっくりするでしょうね」

フツツと悪戯つばく笑いながら、不意に妻が言った。

「何が？」

鵬鵠返しに私が言った。

「何も知らさないで、きつと、明子びつくりするでしょうね」

妻が、そのまま笑顔を消さず繰り返して言った。妻の眼先きに、多分、娘の家へ着いた時の光景が浮んだのだろう。

人通りの中にあるにもかかわらず、その時、妻は、私達二人だけの世界の中で無邪気に笑っているようであった。

妻の無邪気な笑いの中で、ふと、或る懐古が私の胸に浮んだ。

○

そこはかとないうれしい想像だった。着伯してしばらくの期間、私はよく妻に言ったものだ。

「日本へ帰る時は黙って行くんだ。家に着く頃は、きつと、夕飯の最中に違いない。平然と戸を開けて、今晚は……」

実際、父や母が、その時私達を見てどんな表情をするか、老えてみただけでも懐しく楽しいものであった。それは夢というよりも、当時に於ては私達の精神力を支える強い希望であった。しかし、多くの人々にとって、やはりそれは楽しい空想という形で、異国の土に消えてしまっているのだが私達も例外ではない。深淵の中へ引きずり込んで行くような哀しい現実が、そんな切ない私達の希望を、無情に断ち切ってしまったのだ。

○

「明子のびつくりする姿が眼に浮かぶわね」

石畳の道をガタガタと断え間なく自動車が過ぎて行く。妻の声が頼りなくそれに吞まれそうになる。

「マリオはもう喋べる頃ですよ、きつと、おぢいちゃん、おばあちゃんって言えるかしら。もしかしたら明子日本語教えてないかも知れないわねえ」

妻はいつでもそうなのだ。妻の胸の中は、いつもそんな身近かなもので一杯になっていることを私はよく知っていた。娘と孫の中に我身を置いてみることで、妻は今、都会の雑踏の中の孤独を忘れていないに違いない。

「この道を突き当って右に曲ったら、明子達の家さ。夕餉の仕度をしているかな。いや、もしかしたら、もう夕飯の最中かも知れんなあ」歩きながら、何となく楽しい気分が私を包みはじめていた。着伯当初の夢物語が、目的と場所こそ違え、今、それに似たような形で実現しようとしている。三十年近く抱き続けていた空想の中の幻影が、せめてもと、余年短い私と妻を郷愁の世界へ導いてくれたのだと、私は思ってみた。

〆街へ入ると、妻の足が殆んど小走りに動き出して私を抜いた。

「明子の家知ってるのか」

「ええ、もうここまで来れば」

私の投げかけた言葉は、振り向きもしない妻の浮き足と共に走って行った。

（創作）

果実

（55枚）

福村 琳

一

雨期は疾うに過ぎていた。干いた砂埃りの風の日が多くなって来ていた。この国の五月は朝夕めつきりと肌寒い日々が続いている。益枝は時計を気にしながら台所を片付けていたが、三時になると裏庭に出て、今朝の中に洗った洗濯物を取込みにかかった。風にあふられて干き切った衣類を大ざっぱに抱えながら家の中に入ると大声を出して次女の愛子と三女の美代子の名を呼んだ。「もう時間よ。風が強いから二人ともセーターの用意をしてね」と言った。愛子は中学三年で美代子は中学一年になったばかりである。母親に声をかけられた二人は部屋の中でおしやべりに熱中してクツクツと笑声を立てて如何にも面白そうに話合っているが、ポルトガル語なので益枝には娘達が一体どんなことで愉快になっているのかよく解らないのであった。渡伯して来た頃は三人の娘達は末だ小学生の子供達であつたが、この異郷の空の下で一家が苦境を切り開き始めた頃は子供達は日本語しか解らなかつた筈だった。肌を暖め合うようにしてより添っていた子供達が八年も経ってしまうと日々の会話もポルトガル語が多くなっていて、母親の益枝は置いてきぼりを喰らっているような気持になるのである。益枝の良人の達三も同じようなもので五十近い今となつてはポルトガル語

を学ぶにしても子供達の進歩にはとても追いついて行けるものではなかった。ポルトガル語を話合う時の子供達は活々としていた。感情の表現までが派手であつた。

日本語をしゃべる時は舞台の科白を棒暗記しているようにオドオドとしていた。同じ家の中に住んでいる血の通つた親子でありながら益枝には三人の娘達が今では自分の手の届かないところにいるように思えて仕方がないのである。「ねえ貴女達、せめて家の中では日本語で話しなさいな」と幾度も注意をするのだが娘達の部屋からは流れるようにポルトガル語の話声が響いている。長女の道子は未だしも日本語が解つて良かったが次女、三女の日本語は如何にもタドタドしくなつていたから益枝の不満は募る一方であつた。益枝の良人の達三はリオ市の繁華街のガレリアに小さな店を持っていて、最近はどうやら商売も軌道に乗り始めていた。朝早くから夜遅くまで仕事に熱心になつていたので落着いて家の中にいる日などは殆ど無いのであつた。達三がたまの日曜日など娘達を相手にして寛ごうと思つていても娘達はそれなりに又用事があつたりしてゆつくりと話合うことも少ないから彼女達は自然と母親と過す時間が多い。その分だけ母親に懐いているにしろブラジル人の学校に通っている娘達は何かしらブラジル人になつてしまつていくようで母親の益枝には落付かない氣持ばかりするのである。母国でも最近の若い人達は随分變つていくようだが外国にいて自分の娘達に日本的な家庭の仕附を教えこもうということは仲々に難事であつた。長女の道子は良かったが次女、三女となると未だ子供で我侭一点張りになりそうな危険があつた。朝は学校があるというのにギ

リギリに睡っているし、早く起きて自分の洗濯物ぐらいは各自にさせるか当番割にして実行させようと思っても、娘達はそれなりに口実を作って避けようとするし、食卓の後仕末の手伝いすら疎かになり勝であつた。そのくせ年頃の娘達は登校前は身繕いに熱心であり、その時間など益枝は反対に娘達の小言を貰うことが多い。「ママエ、あのハンケチ項戴」と美代子が大声を上げているので「なんですか、そんな大きな声を出して、もつと静かにおっしゃい」と益枝の言うのにも耳をかさず「ねえ、洗って置いてくれたんでしょ」と畳み返して来る。「昨日は忙しくてお母さんはお洗濯出来なかったんですよ。別のハンカチでもいいでしょう」と言えば「ノン、あれでなければ駄目なんだってば」と語尾が荒立つてくる。美代子達の仲間ではマルガリーダの花のついたハンケチが流行しているのだそうだった。髪を結んでくれと愛子が言うので益枝があわててそちらにも飛んで行き愛子の髪をなでつけてやると「下手ねえ、こんなのってないわ」と文句が始るといふ具合だ。どうしてこの娘達はこんなになつてしまったのだろうと、たまさか良人の達三にも「貴方もたまには娘達を叱って下さいな」と話しかけてはみるが「俺はいつも忙しいんだから家にいるお前こそ娘達の友人になつたつもりで教育したらいいんじゃないか」と逃げられてしまうばかりであつた。家庭にいる時間こそ、父親にとつては平和と憩いが望ましいから波立つたことなど娘達とは持ちたくないのである。と、すると娘達のこと是一切母親の益枝に降りかかつて来ることになる。隣近所のブラジル人の家庭では、大抵娘達は家事に手を出さないようだった。女中任せの家が多い。学校から帰つて来た

年頃の娘は小綺麗なドレスに着替えて男友達と家の前で話合ったりなどしている。この国では、どの学校も休日や休暇が多くて、日割の授業時間も少ないようであった。どの学生達もひどくのんびりとしているようである。時折、益枝の娘達の学友などが娘達をパーティに誘いに来ることがあった。益枝はそんな時ひどく不安な想いに駆られる。ブラジルのように気候の暑い国では、子供達も早熟を見るようであった。どの娘も十二、三才になると、もう胸や腰のあたりが一人前の女の姿になっていて、益枝の娘達などは末だ子供にしか見えなかった。日本人とブラジル人の体質の相違なのであろう。隣家の娘などは夜遅くまで家の前の植込みの傍で恋人らしい男とピツタリと身体を寄せ合って長い時間接吻を交しているのを益枝は知っていた。年頃になる長女や次女のことを思うと氣持が滅入るのであった。

長女の道子はもう二十才になっていたから年齢にして隣家の娘よりも五つも年上になっていた。高校を了えて益枝の勧めで近所のブラジル人の私塾に洋裁を習いに通い始めている。中学三年の次女の愛子は、一年ばかり前からリオ郊外の町に住んでいる日本舞踊の先生のところ土曜日毎に稽古に行っている。水水流を名乗っている、五十才半ばのその先生はブラジルに来て五年位は経っているであろうに、ポルトガル語の全然話せない婦人であった。踊りを習っているのは愛子の外に二世娘とブラジル人の娘がいた。三女の美代子は小さい時から絵が好きだったので、日本人の女の画家について水彩画の手ほどきを受けている。益枝が三人の娘達に洋裁や日本舞踊や絵を習わせているのは、一つに娘達にそれぞれの青春にふさわしい情操教育を与えた

いという念願に他ならなかった。親戚や知人の居ないこの国での生活では、すべてが単調であつた。娘達が、学校と家庭以外にそのような趣味をひろげて行くと、娘達ばかりでなく自然に益枝までが生活の枠をひろげるようになって、この頃では次女に従いて日本舞踊の稽古に行く日もあれば、三女の絵の講習会にも出掛けたりして、娘達よりも益枝自身の方が如何にも愉しそうであつた。

二

長女の道子は昼食後友人の家に行くと言つて、外出していたが四時になつても戻つて来なかつた。達三も帰りは夕方になりそうであつた。土曜日で益枝達は或るブラジル人のパーティに招待されていた。招待されていたと言つても次女の愛子が日本舞踊の先生と一緒になつて、習い覚えたばかりの「さくらさくら」を踊つて見せることになつていたのである。母国にいれば踊りの衣裳などどうにでもなるのだが、益枝は愛子の為に自分の古い日本着を取出して、染料を買つて来て臙脂色に染め上げ、美代子の絵の先生に頼んで油絵具で桜の花を衣裳に描いたものを、今日の踊りのために用意していた。愛子と美代子を促して、戸締りをして家の外に出ると、風は小止みになつていて舗道には木の葉がカサコソと音を立てている。二人の娘達は益枝の前に立つてさっさと足速に歩いて行くのだが、遅れ勝になる益枝は息を切つて歩かねばならなかつた。自動車の疾走している大通りなど、娘達は母親を置いてきぼりにして、つつつと見事に横断してしまうか

ら、こんな時益枝のみがうろうろして、その後を追って行くのであった。オニブスに乗ってやっとブラジル人の家に着くと、家の前にはいくつもの車が並んでいる。入口のポルタの前には、主人のそのブラジル人の「B」氏が客を待っていて、益枝達をにこやかな笑顔で迎えると、改めて家の中に案内してくれるのであった。その家は大きな家であった。広い芝生の庭があつて、その横の石段を登って行くと、テラスには招れた客達が三々五々に集つて談笑を交している。益枝達の方を見て笑顔を向ける人もいたが、益枝はおちおちしながら、娘達の後ばかり歩いていった。「B」氏は妻君に益枝達を紹介して又何処かへ行つたが、妻君はニコニコしながら「もう踊りの先生が先程から待っているところですよ」と言つて、みんなを別室に連れて行つてくれた。その部屋には、既に着替えの済んだ有田女史が丹念に厚化粧を整えている最中であつた。

「あーら遅いこと。皆さん心配していたところだったんですよ」と椅子から立上つて、益枝には古風な丁寧なお辞儀をするのである。有田女史は如何にも花柳界出身者らしい身のこなし方であつた。二言三言何かしゃべると、右手を口にあてがつてホホホと笑声を立てるが、六十に近いその顔は厚化粧をしても隠し掩えない皺が深く刻まれている。愛子達にでも似合いそうな美しい振袖を着て、鬘の前髪には銀色の花簪が、キラキラとゆれているのであつた。

「まあ素適な着物ですこと」と益枝がお世辞を言えば、ホッホッホと又片手で口許を掩い、「いえ困るんでございますよ。こんな処に来るとなんでしようあなた、ガリーニヤを掴んで喰べた手で私の着物にさ

わりたがる外人がいるんですもの。何しろブラジルじゃ洗い張りも出来ないでしょ」と眉をよせるのである。「さあ愛子さん早く支度を下さいな」と口調を変えると又手鏡を取って化粧の出来栄を確かめている。愛子の仲間の二世娘は夜会服用の銀ラメを日本着に仕立てて着ていたし、もう一人のブラジル人の娘はどう見ても日本着とは見えない奇妙な着物を着て、それでも彼女は嬉しそうな様子で一人でさくらさくらと歌いながら、踊りを繰返して練習しているところであった。踊る時間が来た。有田女史は三人の踊子達と一緒に、客人の集っている広間の方に行くことになったので、益枝は一層まごついて愛子の支度を整えた。日頃子供っぽい愛子が臙脂色の着物を着て化粧を施すと、驚くばかりの美しい娘姿になるのであった。「さくらさくら」の踊りは最初㊦氏が客人達に一応の説明をして、有田女史が持参したテープレコーダが回転するにつれて、一人一人のさくらの娘達が走り出して、前方にポーズを取り始めたが、ブラジル人の娘が最初自分の好きな処に位置を取ったので、後に続く者はひどくまごついて、ダラダラとくずれてしまった。気嫌の悪い表情を露骨にした有田女史が、先頭に立って踊り、上手に三人を輪にしてやると、娘達もその時になつてやつと日頃の呼吸を取戻したかのようにであった。誰の目にも有田女史の踊りは、年期の入った手の動きであり足捌きであった。三人の娘達は頼りなくのろのろしていたが、若く美しく、如何にも可憐な桜の花花であった。客人達は惜しみもなく割れるような拍子を踊子達に送った。次の曲では有田女史の「春雨」であった。この頃になつて広間の空気はダレ気味になり、客人達はそちこちで話声を作っている。

た。こういう場所での日本舞踊は、粋だとか渋味などはどうでもよいのであった。総体に華やかであれば良く、テンポの速い踊りが客人に好まれるのであった。踊子の美しさに人氣が集中するのである。日本舞踊はあくまで異国的なものであり、理解の出来ない要素を多分に持っているようであった。有耶無耶な中に「春雨」が終ると、今度は総員の「元禄花見踊り」であった。又激しい拍子の音を取戻して、賑やかな踊子達の退場であった。益枝がふと気がつく、長女の道子がいつの間にか傍に立っている。道子と連立っているのは栗色の毛をした青年であった。「ねえお母さんお友達を紹介します」と照れくさい顔をして益枝を見ているのであった。益枝は胸をドキドキさせながら、「誰、誰なの」と思わず声が上ずってくるのであった。「お友達の家で知合った人なの、ジョージと言うのよ」と道子が改めて青年を益枝に紹介すると、青年は人のよさそうな笑顔で、益枝の手を堅く握るのである。道子とジョージは仲の良い様子だった。背の高いジョージは前にかがみ込むようにして道子の一肩を抱いているし、道子も又ジョージの両手を時々握りしめている気配であった。あんなに自分達に素直な長女が、今になって自分達を裏切ってしまったようにしか益枝には思われないのである。いよいよ狼狽えるばかりであった。控室に行つて愛子の着替えを手伝つて、又広間に戻つてくると「道子姉さん何処かへ行っちゃったわ」と美代子が人だかりの中をキョロキョロ探しているところだった。その夜益枝達が帰宅すると達三は既に睡っていて益枝一人がそわそわするばかりであった。入浴を了えた愛子と美代子も部屋の中に入ってしまった。益枝は居間のソファに

座って道子の帰りを待っていた。暫くして家の前で車の止る音がしている。何やら道子と青年の話声がしているので益枝がそつと外を窺うと「じゃ又ね」と元気よく道子が青年の腕の下をくぐり抜けるようにし門の戸を押して入ってくる場所であった。青年はしばらく家の前に立っていたが、道子に片手を上げると車の中に戻って行つた。

三

リオに住んで三十年近くにもなるというミドリは、美代子に水彩画の手ほどきをしていた。娘の頃に日本画を習ったのが幸いして、東京で恋愛結婚した最初の夫のブラジル人と戦争中に離婚してから自分の手で小さな画塾を開いていた。集ってくるのは殆どブラジル人の婦人連で、たまたまアメリカ人やヨーロッパ人の入ってくることもあったが、どの婦人連も中年以上の年配であり、彼女達は料理や造花作りを習うのと同じような気持ちで、ミドリの画塾へ集って来るようであった。絵を習うという気構えそのものが、日本人のように格式張ったつもりはないから、ミドリの家はまるで街の美容院と同じように女達の賑やかなおしゃべり声に溢れていた。此処では絵を習うについても礼儀を正して指導を仰ぐなどという日本式な仕来りなど勿論見られるものではなかったし、月謝を払って絵を習うということは、払っている金額に相当した絵が作られなければならないという女達の小賢しい計算さえ含まれている場合があった。それは街のショウ・ウインドウに飾られている流行のドレスの値段があまり高いので、それらしい用布

を探し求めて来て、自分の手でなんとかして作りたいという独特の経済心理にも共通していた。彼女達の多くは、絵というものが創作という厳然とした一つの理念に立っていることさえ知っていなかったから、ミドリは教えている臨本式の日本画はこの場合便利を得ているのであった。日本から取寄せた大小の絵絹や画室に細々しく飾り立てられている種々の絵筆やその他の用具の一つ一つが、どの婦人の眼にも驚異的な美しさに映った。そして其処の壁に立てかけられているミドリの描きかけのバラの花の絵が、そのような繊細で耽美的な画道具で描かれているということを示唆して、この上もない効果を見せてさえいた。バラの花の絵は、美代子がミドリの画塾に通うようになってもう一年近くなるのに、いつまでも描きかけになっていた。「私はねえ、気が向かないと描けないのよ」とミドリは言うのだがその言葉の裏には如何にも芸術家気取りをした絵師の名人気質を真似ているようなポーズが見られた。

そのような流儀で行けば、ミドリの描くバラの花の絵は如何にも写実的でなければならぬ筈だった。

その昔、江戸の何某の描いた虎の絵が画面を抜け出して歩き出したなどという伝説など、如何にもミドリが婦人連に話しそうな物語に違いなかった。ブラジル人の夫と別居しているミドリはひどくブラジル人の男を軽蔑していた。長い間ミドリはアメリカ人やヨーロッパ人の男と交際していて今迄にも色々な噂を蒔き散らしていた。スキャンダルの好きな婦人連はミドリに絵を習いながら、ミドリの情事の噂をしたりしていた。しかしミドリ自身は噂ほどに自分を自堕落な女とは

思っていない。戦争中にミドリはブラジル人の夫に敵国者呼ばわりをされた。打擲されてそのまま家を飛出して二十数年が経っている。ブラジル人の男は嘘つきで、怠け者で、助平で、金銭にケチで、どうにも救いのない程の悪口ばかりがミドリの口から飛び出す。それというのも余程の悶着がその夫との間にあったのであろう。夫を信用出来なかったことがミドリを不幸にし、小心で人格のないその夫は其後何度もミドリを探しては会いに來たがミドリの方で逃げて廻った。夫婦の真実の愛情などというものはミドリには理解出来ていなかった。どんな愛情にしろ細波があり陰翳のあることをその時まで解っていないかったようだった。医者の娘に生れて我侭一杯に育ったミドリは東京で知り合ったブラジル人の若い医者をロマンチックな恋人としか知らず、両親の反対を押切って結婚をした。戦争が始ってブラジル人の夫はそれなりに世間への僻目が強かったものか、或いは彼自身が苛虐的な性格をも二重に持合せていたのか、若いミドリは判断に苦しむばかりであった。リオに來て六年目であった。一人で生活を始めた。ミシンを踏んで内職をした。馬鹿々々しい程の手間賃に追われて、夜昼のけじめのつかない日々を送った。齒を噛みしめて堪えたが疲れを出して病気で倒れた日々もある。娘の頃に習った日本画の手ほどきをしようと思ひ立った頃にマーフイというアメリカ人を知った。同棲した。コパカバナの海岸沿いの大きなアパートに住んでいた。今迄ミドリが住んでいた旧市街の小さな家とは相違して、すべてが近代的であり、清潔であった。女中も使っていた。窓を開けると眼の前に海が光っている。海の色は日毎に異った色あいを見せていた。風の吹く日は海は

鉛色に鈍り、空の青さのみが眼にしみた。マーフィはミドリには優しかった。日本には戦争後二年程兵隊で行っていたという。年齢にしてみればミドリとはあまり年数は違っていなかったが、三十を過ぎたマーフィはその過去に於いてどんな生活をしていたのか、ミドリには解らないことが多かった。彼は大きな商社に勤めていて、可成りの収入を持っていたが一緒に暮してみると想いがけないことなどがあつた。週に一度や二度ミドリを連れて外に一緒に出ることもあるが、彼一人で外出して遅くなつて帰ってくることもある。女中と留守番をしていると色々な人から彼に電話がかかつて来た。女中には海岸監視人のしている体格の良い男が一日置きぐらいに通つて来ていたが、女中のいない夜に、女中部屋の方で何やら人の声を聞いたミドリがそつと様子を見に行つてみると、女中部屋の中にいるのはマーフィと女中の情夫らしかった。「ねえ旦那、先に頂くものを貰わないことには、旦那の言う通りには行きませんぜ」「シート、静かにしてくれよ」何やら争うような気配がして、一瞬静かになり、やがて男の息も絶えだえのうめき声が高まってくると、ミドリは青ざめてその場を離れた。激しい動博に喘いだ。マーフィのような男はアメリカ人に限らず、ヨーロッパ人の中にも、ブラジル人の中にもいることは知っていたが思いがけないショックであつた。しかし今更になつてマーフィを非難しても始まらないだろうとミドリは思った。ミドリはマーフィが好きだつた。世の中には男として完全な性格などというものはあり得ないと思えた。女にしても同じようなものではないだろうか。人間自体が不完全なもの、不信なものとして考えられてくるのだつた。世間には立派

な人々もいるのだが不完全な人々の多いことが事実として思われてくる。人々の多くは、ただ自分をよく見せようとして努力しているだけに過ぎないのではないか。或いは又、ミドリ自身にしても、ほんとうに夫のブラジル人を愛していたものなら一時的に虐待を受けたにしろ忍耐強く女としての、夫への愛が届けられるものなら、長い目には愛の結晶が実られはしなかったか。あの頃のブラジル人の夫は医者としての、社会的な立場では敵国人を妻に持ったことについて糾弾があり、性格の弱い男には妻を打擲する以外何も無かったのかも知れない。夫婦の愛情とは一体なんのことなのか。女は水藻のように頼りないものに思えてくるのである。そんな夜は、マーフィはしつこくミドリの身体を求めて来た。

「ねえ、マーフィ、貴方はどうして私と一緒にになったの」思いがけないミドリの言葉を打ち消すような勢いでミドリにおそいかかって、唇を奪うのである。

「愛しているんだよミドリを、ほらこんなに」まるで子供のような無邪気な顔を見せて微笑んでいるマーフィを見るとミドリはマーフィがますます解らなくなってくるのだ。マーフィの肉体はパンのように柔かで白かった。疲ればてて身体を離しもせずに睡っている男の眼には、うつすらと涙がにじんでいるように見えた。女中の情夫は其後ミドリが女中を解雇しても時折やって来たがマーフィの方でもう相手にしない様子であった。

「ねえミドリさん。人生には色々なことがあります。貴女には解らないことが沢山あるでしょう。でも私が貴女を好きなのはほんとうのこ

となのです。それだけは信じて下さい」

マーフィの眼はそんな時、湖のように青く澄んでいた。ミドリの肩をそっと抱いて何度も何度も接吻を浴びせている。接吻をして感情が高まってくると、マーフィはミドリを抱いたまま荒々しく自分の身につけているものを脱ぎすてる。ミドリに身体中に接吻をしてくれと言う。赤い寝室の絨たんの上に、あお向けになっているマーフィの肉体を見ながらミドリは娼婦めいた気持ちになっている自分を感じていた。マーフィとは二年半ばかり暮した。商社の命令でマーフィがアメリカに転勤になった。ミドリは彼とそのまま別れる決心をした。「貴女はほんとうに良い人でした。どうか幸福になって下さい」 そんな事を言いながらマーフィが彼女に残して行ってくれた手切金のようなもので画塾を開くようになったのであるけれども、考えてみれば女が三十を過ぎてまともな再婚など出来る筈もなく、時々知り合う他のアメリカ人やヨーロッパ人の男達と一夜を共にすることもあった。どの男も東洋人の女のミドリの肌を愛してくれながらも渡り鳥のようにミドリから消えて行った。何かズルズルとくずれ落ちて行くような不安のみが続いて、もっと頼りになれる男は居ないものかと思った。画塾には若い男も時にはやって来た。マーフィのような男にはもう会えなかった。世の中の男は一人々々が違っていた。デコラドルなどという男にはつまらない者がいた。話相手になることはあっても男の誘惑に乗るミドリではなかった。いつの間にか男を見る眼が肥えていて判断力も確かなものになっていた。三年ばかり前に英語教師のマイケルに会った。そのまま緑が出来て今では一緒に暮すようになっていた。

ミドリはもう四十を過ぎて五十才に近い年になっている。毛髪を染める年齢になっていた。

四

道子が栗色の髪をした青年に魅かれていることは益枝にも解ったが、二十にもなる娘に異性の相手が出来るのも自然なことであつた。問題になるのは相手がどんな素性を持った青年なのかと言うことである。親の気特としては自分の娘にはブラジル人の青年より日本人の方が望ましく思われたがリオ市に住んでいる現在の環境の中ではなんとしても無理なことであつた。翌朝になって、益枝は、達三に昨夜の道子達のことを話した。達三には驚くべきことでもなかった。「いいぢやないか、恋人が出来ても。ただね、あまり夜遅くならないように注意してやることだね。間違いが起きては困るからね」「でも相手がブラジル人なのには心配なんですよ。」「馬鹿だね母さんは、此処は日本ではないんだよ。ブラジルだよ。

俺達の娘が栗色の毛をした青年を恋人に持つことだつて当然のことぢやないかね」達三はそう言いながらも「サンパウロのように日本人の多いところなら、道子だつて日本人の青年に会えるだろうにね」と視線を落すのであつた。兎も角道子はもう子供ではないのだし当分は成行を見ることにして、それでも達三は道子を部屋に呼んだ。益枝も心配気に傍に座っている。「ねえ道子お母さんが昨夜から随分心を痛めているんだが、いい人が出来たのかね」父親にそう言われると、道

子は顔を紅潮させて、キュツと唇をかみしめているのだったが顔を真直に上げた。「そうです。私前からお父さんとお母さんにお話しようと思っていたんです。ジョージが私を愛していると言うのです。結婚してくれと言っています」

「まあ、それで道子さん、貴女は結婚するつもりなんですか」と益枝が狼狽すると「それで道子はどうなんだい。結婚したいと思っているのかい」達三は父親らしく落着いたものであった。「はい結婚したいと思っています。お父さんお母さんがよろしいと言って下さるのなら」キツパリと道子が言った。父親に似て道子は意志のはっきりした性格を持っている。「そうだね。お父さんは末だその人をよく知っていないから家に連れて来なさい。ねえ、お母さんその上でよく話合ってみようぢやないか」達三は道子を信頼していた。小さい時から道子は素直で誰からも愛されて育っている。これまでも二、三の縁談がなかった訳でもないが、達三自身が益枝と恋愛結婚をしているので、娘に見合をさせるような気持ちにはならなかった。世間には恋愛結婚があり、又見合結婚がある。結婚そのものは宝クジのようなもので巧く行く場合もあるし反対な場合もある。男と女の結合は何やら神秘的でもあるが、父親としては矢張り自分達のように恋愛結婚をさせたいと思っている。この近所に洗濯屋をしている世話好きの日本人がいて道子の縁談はその日本人のsさんからちよいく持込まれていた。隣近所がブラジル人なので益枝などは日本語で自由に話合えるsさんの奥さんに会うのが楽しみで一週に一度ぐらいはsさんの家に行くことがあった。sさん夫婦にも二世の息子と娘がいて、息子はサンパウロに

行つて世帯を持っているし娘は道子ぐらいの年頃でユリコと言つた。ユリコは、はきはきした娘で日本語とポルトガル語を半々にしてしゃべっていたが益枝の見る眼ではどうもブラジル人的であつた。道子の方が如何にも日本人らしく、美しくもあつた。二人の娘は時々招んだり招べられたりして交際していたが、道子がレコードや新着の雑誌などをユリコに借すと、そのまま戻つて来た例がなかった。何か約束をしていでも、急に来られなくなつたりするのはいつもユリコの方で道子の方は待ちぼうけを喰つて不愉快になつたりしていた。洗濯屋の娘にしては服装が立派で、ユリコは道子などと違つて会う度毎に新しい衣服に包まれているし、タイプライターもテープレコーダも持っていた。驚くべきことはユリコの方が日本の映画俳優の名前などを知つていて道子の知らない流行歌を口遊んでいる。この頃ユリコはリオの造船所に就職したせいか以前のようにには姿を見せてはいない。

次の日曜日の午後、ブザーが鳴つた。待ちかまえていたように道子がドアを開けると手に花束を持ったジョージがニコニコしながら立っていた。達三はジョージを見て「いい青年だな」と思った。背が高く、好男子であつた。益枝が案じている程のことでもないのではないか、この二人は結局は結ばれて行くに違いないと思われた。時期を見て結婚させるべきだと判断した。この間の印象よりも今日のジョージには何かもつと新鮮な感じを益枝は受けていた。ジョージは小ざっぱりとしたスポーツシャツを着て髪も短く刈つている。両腕が逞しく広い胸には金色の毛が光っていた。道子の傍に腰を下すとジョージは道子の片手を取っている。愛子と美代子もかわるがわるジョージに話かけて

いるが娘達は皆ジョージに好意を向けていた。ジョージは屈託もなく声を立てて笑い娘達も合せて笑っている。笑声の上っているサーラの一隅は、何か達三にも益枝にも落込んで行けない世代の若さが匂っていて、ひどく明るかった。夫婦は顔を合せて微笑するばかりだった。その日はユリコがやって来た。珍らしく相手を連れていて日本人の青年であった。ジョージに比べて日本人の青年は口数も少く別に達三に話かけるのでもなかった。造船所の電機技師なのだとユリコが紹介していたが二人は何かヒソヒソと話合っている。達三はその日本人の青年にジョージとは何か非常に違ったものを感じた。その異質のものは達三に重苦しい負擔さえ与えるようであった。同じ日本人の血を持ちながら、達三とこの青年の間には不調和なものや遠い距離のようなものがあった。今何かを話すにしても逡巡するものが壁のように塞っているのだ。電機技師は思出したように眼鏡をズリ上げたり、サーラの置物に手をかけたりしている。益枝が茶の支度を整えてみんなを食卓に招んだ。真先に座ったのはジョージと道子で、ジョージは達三と気軽に冗談など交していたが、電機技師は益枝に二度も三度も呼ばれてもじもと席に着いているのだった。日本から来て間もないのか首を前方に傾けてはズーズーと音をたてて紅茶をすすり飲んでいる青年にユリコは驚いた表情を見せたが、愛子と美代子の何かの議論が始っていて達三が和かにそれを制した。ジョージは母親と早く死別して父親の手一つで育てられた故か益枝には母親に対するような思慕さえ見せた。兄が一人いて今は結婚しているという。それとなく育ちの良さを見せているのは父親の愛情が多分にあつたからであろうか。ジョージ

の父親は新聞記者をしていた頃は日本にも行つて来たことがあるそうだった。ジョージは今父親の経営する工場の経理を受持つている様子であつた。小さい時から日本のことが大好きで、どうしても日本人の女性と結婚したい夢を持っていたそうだった。日本語を学んだこともあり、道子と話をしている時は少しではあるが日本語が入ったりなどして達三や益枝にも愛橋と近親感を抱かさせた。

五

静謐な朝である。同じ寝台の上には寝乱れた姿でマイケルが睡りこけていた。ピジャマの前が大きく開いて、裏白になった胸毛が見える。皮膚の色は未だ艶があつて腹部のあたりなど青年のように若々しいのだが頸筋のあたり、手の甲などは如何にも老年期のものだ。もうそろそろ老人特有の斑点がマイケルの白い皮膚の上に少しつつひろがつて眼立ってくるのも遠いことではない。病氣らしい病氣も持っていないマイケルはひよつとすると心臓麻痺でも起して倒れるような男なのかも知れない。別にそれ程愛しているマイケルではないが三年も一緒に暮していると今は水底の苔のような情愛が移っている。人生には色々な緑があるものだ。と今更のようにミドリは思うのだ。寝がえりをしたマイケルがいつの間にかミドリの身体を抱いている。男に抱かれながら、私は一体誰をほんとうに愛したというのだろうか、又誰が心から私を愛したとも言うのだろうか、曲折のプリズムには多彩な光芒がゆらめいて通り、紋様の一つ一つは形骸さえ留めていないではな

いか、今はマイケルのような男でもミドリはただ優しくしてやりたいと思うのである。「いい天気よ貴方、久し振りに一緒に散歩に行ってみましようか」床の上に起き上りながら言う。マイケルは少し猫背に前かがみになりながら一服うまそうに煙草を吸っている。私はもしかしたらこの男に愛されているのかも知れない。死ぬまで一緒にいてくれるのは案外このような男なのかも知れないとミドリは思う。マイケルは英国人を両親に持ったアメリカ人だがミドリと一緒にいるまでは五回も結略したのだと言う。アメリカ人にしては背が低くて、オドオドした態度の男であつた。如何にも善良な男なのに五回目の妻のブラジル人とは巧く行かずに別れているのだつた。その女との間にはロバートと言う男の子が一人いて今でもときたまマイケルに会いに来るのであつた。少年は十六才になつていて父親によく似た笑顔を見せてミドリによくなついていた。ミドリはもとく子供には恵れていなかった。のでブラジル人の母親さえ承知してくれるものならロバートと一緒に住んでもいいなと思つてゐる。今日あたりロバートが訪れて来そうな日であつた。彼の好きなアップル・パイでも作つて置いてやろうがと思つた。

イパネマの湖水は鏡のようになめらかであつた。対岸のファベイラの山の姿がそのまま湖に映つていて、流れている雲の中では夢のような光りに包まれていた。ミドリはマイケルを見やりながら「なんでも遠くの方から見ると綺麗に。例えば貴方と私が一緒に歩いているのを知らない人が見たら、多分十年も二十年もずっと一緒に暮している夫婦としか思わないことでしょうね」と言つた。「まあ、そういうこと

だろうね。お互いに若くはないのだから、ところでミドリは一体どんな人が好きだったのだろうかね」

「そうね。私にはよく解らないわ。恋愛はしても、それはみんな火花のようなものでしょう。死ぬ時がやって来て誰かの名を呼ぶものだと聞いていたけれど、どんなことがあっても一緒にそのままいてくれる人は今は貴方だけだと思っていたところなの」　マイケルの手がそっと延びてミドリの肩に力が籠って来た。アツというまにマイケルに口を覆われていた。

ミドリ達が戻って来ると美代子が姉の道子と待っていた。道子はこれまで度々美代子と一緒にこの家に来たことがある。益枝の心づかいなのであろう桃の一箱を手土産に携えていた。「私もうすぐ結婚しますのよ」道子の弾んだ明るい声であった。彼女達が帰ってからミドリは桃の箱を開いてみた。道子の恋愛は益枝からも幾度も話を聞いていた。あれから半年以上の月日が経って、いよいよ結婚することになったのであろう。お芽出たい話であった。箱の中から桃を一つ一つ取出してみた。どの桃も丁寧に紙に包まれていて色あいのよいスベスベした肌をしていた。ロバートがやって来た。マイケルの嬉しそうな声が響いている。「ミドリ、桃ぢゃないか、ほんとうにおいしそうだね」

「ええ、丁度良いところに来たって訳ね。今洗って来てあげるわ」ミドリがそう言うまに、ロバートは桃を一つ手に取り上げて「このままがおいしいよ」ふつりとロバートの白い歯ならびの中で小さな音を立てた。「日本の桃、もつとおいしかったわ」　ミドリはその時、この国に移植された桃木が長い年月を経て、美しい果実を実らせていな

らも、事実はこの国の暑い風土の中では矢張り日本の桃の実のように
は熟し切れないのではないかと思った。確かな原型はあってもそれは
異ったものであった。そしてそれは如何にも自然に思えてくるのであ
る。

六

暑い日々が続いていた。じりじりと照りつける真夏の陽ざしの下で
は、何も彼もが熱気をおびて、耐え切れないような喘ぎを見せてい
た。海岸という海岸は夥しい人出が続いている。暦の上では師走で
あった。何年もブラジルにいても、新年を迎えるのだという実感が伴
わないのは、小さい時に雪を見て正月を過ぎて来た故であろうか。

道子はウルカのジョージのアパートに招れて来ていた。ジョージの
父は不在であったが、この近所に住むジョージの兄が妻と赤ん坊をつ
れてやって来ていた。金髪の女は派手に化粧をして、道子を見る眼に
は射るような陰があり、話をしていると皮肉めいたことを言う時が
あって、道子は好きになれなかったが、ジョージの兄は柔和な男だっ
た。赤ん坊は女中任せで、ヨチヨチ歩いては大騒ぎをしている。夫婦
はやがて二人だけで出掛けて行った。風が少しもなく蒸すような暑さ
だった。クリスマス・ツリーの赤い玉までが息苦しく見えてくる。赤
ん坊を抱いて女中も何処かに行ってしまうと、「ねえ道子、僕達も出
ようよ」とジョージが言い、二人は外に出た。海の色はもう既に昏く、
灰色の雲の切れ目には、サモンピンクの空が少し見え、そこから流れ
るような光りが海面に落ちているのが見えた。海岸の通りを道子は

ジョージに手を握られて歩いていたが、彼の大きな手はじつとりと汗ばんでいる。毛深い彼の身体に触れたりすると、彼の皮膚は潤うように湿っていて、そのくせひどく暖かった。並木はアメントエイラの葉が赤く彩って舗道に落ちていた。砂浜にはもう既に人ばかりが見え、イルマンジャーに花束をささげる人々が集って来ている。マクンバを踊る人々は裾のひろがった白い衣服を着て、右往左往していたが、見物人ともマクンベイロとも区別のつかない人出が、ぎっしりと砂浜を埋めるようになると、あたりはすっかり暗くなって、砂の上には数知れなくローソクの灯がゆらめき、歌声と打楽器の音が夜の海に響いて行くのであった。イルマンジャーはその海の向うから、白い泡波をけたてて今にも姿を見せようとするのか。道子は何か神秘的な暗示を見るような気持ちで黒い海の間を見やるのだった。ジョージと二人で砂の上に立っていると仕合せな思いがこみあがって来た。父も母も今ではジョージを好いているし、ジョージの父も喜んでいてくれた。結婚はあと一カ月ばかり先に決定していた。若い女の心は、そのことに震えて怯えもしたが、痺れるような幸福感にうつすらと包まれて行くのである。盛り上るように、喚声が上がリ、踊り狂う人々の姿が影絵のように砂の上にゆれた。白い衣服の人だかりは、何度も道子にぶつかりそうになった。靴の中に砂が入り、歩きずらくなって立止ると、又人が寄って来て、腰のあたりに触ったと、ジョージの怒声を聴き、物凄い勢いで彼の手が道子を引張った。「向うに行こうよ、こんな混雑では何をされるか判らない」

砂浜を横切って岩石のゴロゴロしている地帯に辿り着くと、人だかり

はやつと少くなつたようだ。しかし、其処には幾組の人影が見えた。海岸の騒ぎを背景にして抱擁している男女だった。ジョージの足は其処で吸い込まれるように立止つて、道子の顔を見た。婚約をして半年になり、結婚式はあと二ヶ月後になっている。道子が視線を向けると、ジョージの右手が肩にかかり強い力で抱かれた。今夜のジョージは一層に情熱的であつた。息づかいが激しくなり、岩影にくずれるように座ると、彼の左手は躊躇うように道子の胸をまさぐっている。ジョージの唇が重つて、うつとりとした陶醉があつた。イルマンジャの愛の祝福は二人にも訪れて来るようだった。道子の眼には遠い夜空の彼方の星がまたたいて見えた。ジョージの喘ぐような白い手が道子の手を握つた。そのまま彼の軀の上に置いた。そこには既にどうにもならない程に熟し切つた、彼のものが息づいていて、彼女の手の甲に部厚く触れてくるのである。それは未知のものであり、禁断の実だった。道子の手が震えて押し返すようにその位置をずれると、又彼の手が追つて来て、そこへ又導いて行つた。それを男は欲しているのだつた。そうすることによつてジョージは尚も大膽になろうとしていた。熟し切つたものが熱く触れようとし、道子の手は羽根のようにひらめいていたが、その時岸向うのボタフオゴの海岸から花火が鳴つた。新しい年を迎える音が、次々と天空を高く割つて鳴り響くのである。

ジョージは道子を知る前から女友達はいつも持つていた。それは恋人であつたり、情事の相手でもあつたが、ほんとうに心から愛していた訳でもなかつた。小さい時に母に死なれたので母親の愛情には飢えていた。女中の中にはジョージを愛しんで育ててくれた者もいて、十

二、三才頃には女中に可愛がられた場句、性欲の対象にさえなった。ジョージの父は家庭では良い父であり、不自由のない生活であった。兄のカルロスも弟思いであり、ジョージも又兄を好いていた。大学を先に卒えたカルロスが結婚して、同じアパートに住んでいた。娘のルイザは美しい女で、カルロスが二カ月も北米に出張すると、ジョージはルイザに誘われて情交を重ねていた。その頃はジョージはルイザを軽蔑さえしていたのだが、一。ジョージの部屋に忍びこんでくるのはルイザだった。眠っていたジョージの肉体を犯すのである。精神的に愛情一つ持てないのに、ジョージの肉体だけが別の生物のように燃えていたものだった。カルロスが帰って来て、間もなく彼等は近所のアパートに移って行ったので、それからはルイザに会うことも少なくなった。しかし、カルロスが仕事で不在になる日は今でも度々あった。道子と婚約をするようになり、本心から道子を愛しているが、ルイザとの肉体関係は続いていた。カルロスは淡白で人の好い男だったから、妻のルイザを猜疑にすることはなくあった。ジョージが道子と婚約をするようになり、ルイザは道子にも会っていた。日本人の道子は何時会ってもルイザに微笑を見せ、慎ましい態度をくずさなかった。真直に長い黒髪は清潔そうに、その肩にたれて、服装は地味なものだが、趣味のよいものだった。何を話しても道子は言葉数が少く、ルイザのように我を通して自己を主張するのとは違っていた。日本人の女は神秘的に見え、それだから男は魅かれるのだろうとルイザに思えたのである。約束を進んで交すのもジョージらしかったし、何処へ行くにしても道子はジョージの言うままに同伴して行くようであつ

た。自分の意志というものをあまり見せず、いつも影のように、ひっそりとジョージに寄りそっている。異質の女の姿を見るとルイザはむらむらと嫉妬の心がわいて、そんな日はジョージの軀が余計に欲しくなつて来るのだつた。ジョージにぴったりと寄り添っている、あの扁平な顔をした、仮面のような表情を見せる日本人の女が、心底から憎々しく思われてならないのである。干いたようなカルロスの肉体とは異つて、ジョージの軀は暖くいつも潤っていた。同じ兄弟でありながらも、ジョージはつやつやとした桃色の肌をして、湿った軀からはいい匂いがしていた。ルイザはジョージと始めて情交を持った夜のことを、よく思出すことがあつた。カルロスが出張して一週間にもなり、眼れない夜であつた。本を探して夫の部屋に入つて行くと、ジョージがソファに瞑っていた。両股の上に、刺激的な形が見え、その上に男の指の動いて絡むのが、見覚えがありわななくようにルイザの手がその部分に触れて行つたのだが。手はその時からジョージを犯すようになった。

七

有田さんはポルトガル語を話せなかつたので外へ出る時はいつも夫の亀吉を通訳にして歩いていた。日本では和服ばかり着ていたので、彼女のドレス姿は如何にも板に着かないように見える。一帳羅のドレスは白いレースで着物の裾のように足許にたなびいていたし、足袋の感覚で履いているらしい白い靴下も、幼女のそれのようにソックスで

あつた。よちよちと身体をゆすりながら内股に歩いて行くのである。何時の場合にも先頭に行くのはきんであり、一まわり背の低い亀吉がその後から従いて行くのだった。亀吉は〆町で養鶏業を営んでいるが、今では先妻との間の二人の息子が成人して、営業を任せるようになったから、五年前に日本に帰った時に再婚したきんとは別所帯を持っているようなものであつた。

同じ家に住んでいながら二人の息子は日本語を話さないので、きんにはまるで隣家のブラジル人と同じ人種に思えたし、最初の頃は広い台所に入って一生懸命に家族達の食事作りに励んだものだが、きんの作る料理は二人の息子の嗜好などに合う筈もなく、きんも又、卵と鶏とフエイジョンなどというギタギタした喰物がどうも気に入らなく、今ではきんだけが日本製の小鍋をかかえてはコトコトと何かを煮炊して、亀吉と二人だけで彼等の部屋で食事をするから、何んとなく妙な具合になっている。掃除一つするにしてもきんは自分の部屋だけを綺麗にしているので、息子達もきんになつくような気持ちにはならないし、三味線などという楽器も陳腐な音色にしか聴えて来ないのである。その三味線の音がきんの部屋から流れて来る日は、鶏舎の鶏がコケコッコウと合の手を入れて風流どころではなかった。太陽がカンカンと熱く、風一つ吹いて来ない部屋ではきんだけが莫蔭を敷いてじつと座って居り、玉のような汗を流してフーフーしていた。風呂好きのきんだったがこの家に住むようになって鼻を曲げたのは、ドラム罐の日本風呂だった。流し場などある筈もなく、煮しめたような古タオルがぶら下っている浴室は、タイル張りどころか、年中ジトジトと湿り

切っているような土間だった。亀吉がやっとサンパウロから買込んだブリキ製の日本風呂でも、きんには面白くなく、雨の降る日などはそぞろ郷愁がわいて来て、「ああ、日本の暮しの方がどんなに良かったか知れやしない」と深い深い溜息ばかりがついて出るのであった。

きんの好きな昆布にしろわかめにしろリオの日本人の店では高価なものであったし、第一に不愉快になってくるのはその店の二世らしい男だった。見るからに生意気そうな口を利き、客には愛想笑い一つ見せず、「有難うございます」を言うのでもなかった。そういうことは、きんの踊りの弟子達にも言えることで、行儀作法のやかましい花柳界出のきんの眼には、どの娘も凶々しく見えるばかりなのである。月謝を払うにしても、きんの眼の前でパラパラと紙幣を算え、封筒に入れて貰ったことなどはないのである。そうして盆、正月の届物一つないのも寥しい思いがした。

イザベル区にある軍関係の大きなクラブでは「日本の夜」というパーティを一夜催すことになっていた。そのクラブから誘いがあつて、きんは亀吉と朝早く町を出て、クラブに来てみたのであった。クラブでは予算の都合で無料出演してほしいという注文である。そういうことは今になって驚くこともなかったが、出演する以上は会場の下見をしなければならなかった。きん達がそのクラブに着いて見ると、予算の無い話など、信じられそうにもない立派なクラブだった。パーティの開かれるという広間には大きな舞台があつて、今しもスペイン舞踊団の踊子達が汗だらけになって練習しているところだった。係員がきんをスペイン舞踊の教師に紹介すると「あ、日本舞踊ね」と

手を交わしつつも敵意に満ちたような眼を、きんに見せてスタスタと舞台に去って行くのである。スペイン舞踊団は「日本の夜」のパーティのある同じ夜に、屋上のガーデン・パーティに出演するのだそうだった。スペイン人の踊りは、きんが見ると、キャラキャラとして賑やかなものだった。その闊連なものは、きんがこれまで踊りつづけて来たものとは方向を逆に行っているように見えた。日本舞踊の一つ一つの振りには、思いを見せ、愁いを暗示させ、喜びを匂わせようとする微かなものを期待させているのに、西洋の踊りは何も彼もさらけ出して、吐き出しているようなものだった。さらけ出すことによって、より以上の誇張があり、そのことによって踊りを形成しているような感覚があった。きんは娘の頃に東京にいて、全盛時代の崔承喜の踊りを見たことがあった。その踊りは朝鮮舞踊とか西洋舞踊などというものを卓越して、それは既に崔承喜そのものの踊りであった。踊りには饒舌や媚びがなく、踊りのエッセンスが、黒幕一つの背景の中で、閃めいているような感じだった。それはまるで夜空に咲き開く花火のように鮮烈であり、激しい感動をあのとときのきんに強く残していた。磨ぎ澄まされた美形とは、あの踊りに当嵌まるものであると思った。きんが踊りを始めてから四十年近くになっていた。今になってみると、歳月のみが虚しく経ぎ去って行ったもののようにしか思えないのである。

ミドリは「日本の夜」の会場装飾の相談を受けていた。日本人の少ないリオの社会では、日本人の画家として古いのはミドリぐらいのものであったから、そのような仕事は当然のようにミドリのところに来

るのである。その相談を持って来たのはクラブのデコラードルをしている若い男だった。以前に、ミドリの画塾にも来たことがあって顔見知りであった。その男を通して「日本の夜」の計画をしているサアジャントのフランシスコに会うようになった。フランシスコは見るからに精力的な感じがして、黒い髪をぴたりと磨き上げたようになでつけている男だった。その男達が会場装飾の相談で何度もミドリの家に足を運んで来るようになると、流石にマイケルに気が引けたりした。

八

白い砂浜の上に、赤いピーチ・パラソルを立て流行の大きなサンングラスをかけて、ルイザは一時間も其処でじっとしていた。小麦色に焼けた彼女の両肢が、パラソルの影の中でくの字をみせ、すんなりといひ形をしていた。若い美しい女は煩い程に、男達に興味を持たれるのを充分に意識して、満足と誇りにも似た微笑さえ見せていた。この海岸は土曜、日曜でもないのにいつも蟻のように人が群れていて、若い男達など、どんな生活をしているのか毎日のように顔を見せ合う数も多かった。顔に覚えが出来始めると、どちらからともなく声をかけるようになり、砂の上に並んでしまう男女達が沢山いた。男も女も、砂浜では金持と貧乏人の区別がつかなく、妻帯者なのか独身者なのかも判らなかった。此処では誰もが自由な演技者なのかも知れなかった。海岸は、彼等にとってはスポット・ライトを浴びた舞台であった。彼等の肉体は晴れがましく競い合ってさえいて、白日の下では羞恥やた

じろぎさえ見られないのである。建築技師のカルロスが出勤してしま
うと、夫が夜帰って来るまでルイザは女中を三人も持っていたから一
日中退屈ばかりしていた。赤ん坊は生んでみると煩しいことばかり
で、女中任せにしているし、美容院や裁縫師のところへ行くのが彼女
の用事らしいもので、親しい女友達と、招んだり招かれたりすること
もあるが、何から何まで面倒くさくなってしまう日もあった。ビー
チ・パラソルの傍に人影が止った。「遅いのね」とルイザは少し大き
な声を出したが、表情が急に清々として来た。女の横にジョージの
ショーツ一枚の裸身が横たわり、黒いサングラスの顔が不機嫌そうに
こちらを見た。

「ねえ、怒っているの」

「うん、困るんだ。君みたいな妻君は。一体カルロスが君を愛して
いるのだろうか」

「そんなこと、どうでもいいことぢやない。少くとも私と貴方がこ
うして会っている限りは」

ルイザの片足が、そつとジョージの身体を突いた。

そしてくるりと男に背を向けたが、圧倒されるような女体のおもみが
瞬時、男の肩に触れて行つた。又ルイザがこちらにくるりと向きを変
えた。笑っている女の顔が近づいて見え、女の右手が砂の上に落ち
た。

「僕達もう直ぐ結婚するんじゃないか」

「そういうことだったわ。でも末だ一週間があるわ。貴方だってほ
んとうに私が好きでなかったら此処に来る筈がなかったのぢやない」

青いサングラスの中で女が又笑っている。

「ね。今日だけ私につき合って頂戴。それとも厭だっけ言うの」

男の軀の一部がその時、異様に甘く、昂っているのを男自身が知っていた。女の手の指は砂の上でサンビスタのような科を作って、その前で小刻みに踊っていたのだ。女の唇が半分開いたまま男の顔の真下で止っている。女は充実したもの、完全なものを希っていた。ルイザは、カルロスと愛し合って結婚したが、いつも満されないものを感じてばかりいる。結婚生活はもつと豊富なもの、絢爛たるものと想っていた。男も女もお互いの貧しさに傷つき合い。惰性のみが廻転している時、魔法の鏡は自分だけを良く見せたり、遠くにあるものや離れているものを華麗に飾り立てて見せているようだった。

「日本の夜」の企画では、最初スペイン舞踊団が東洋的なテーマを踊ることになっていたのだが、ミドリがこれを知ってからフランシスコに有田さんの日本舞踊を組むように勧めたものだった。これまでもミドリはテレビなどで、支那人とも日本人とも判別のつかない奇妙な服装の、あくどいばかりの日本の男女の姿を見ていた。フランシスコにしてみればミドリの意見に従った方が良かったし便利でもあった。スペイン舞踊の教師は可成りの経歴を持っていた男だったが、ブラジルに来て間がなく、無料出演をするのは彼の宣伝の為だったから何かにつけて無理な注文が多かった。それに聊か年増女でもあったが日本人の女を知っていないフランシスコにはミドリが魅力的に見え、企画が進行して行く毎に日本人の女としてのミドリに密かな機会を待つようになっ行って行った。本質的には女はどのような場合でも女なのだが、

見た目には異質のものであり、異質であるということは尚更に興味以上の欲望をそそるものかも知れなかった。ミドリは「日本の夜」の仕事でフランススコと一緒に進めていたが、思いがけない程の労力の要ることが多かった。ミドリのデッサンした朱色の大鳥居や大鼓橋は完成するまでに何度も足を運んで、大工達に指示しなければならなかったし、会場を飾る背景の出来具合も、思うままにならず、ミドリ自身の手で修正しなければならなかった。このような時、フランススコはいつも甲斐々々しく彼女の傍で手伝ってくれたりした。背景の桜の花が、ミドリの手で描き直されて、ようやく桜の花らしく仕上がったのは、パーティを明日に控えての真夜中近くだった。デコラードルや他の使用人達は疾うに居なく、広間にはミドリとフランススコだけが残っていた。夜食を彼と一緒に取った。疲れていたのもので彼の車に乗って送って貰うことにした。車の中ではミドリはうとうとしていた。イパネマの湖のほとりに入ると、フランススコが車を止めた。ミドリの顔をのぞくようにして気分が悪いのかときいた。湖の夜霧が対岸の山の灯影を消していた。フランススコの手がのびて、ミドリの顔をやさしく包んで、アツというまに接吻された。「いけません」という声が出たが、身体中が痺れて行くようだった。男の腕がミドリを抱きかかえようとした時、マイケルの悲しそうな顔が浮んで来て、ミドリはあわててフランススコを拒んだのだ。彼は笑って、ウインクをしている。ミドリの家は近くだった。マイケルは既に眠っていた。相変わらずピジャマの前が大きくはだけで、白い胸毛が見える。ミドリはたった今接吻して別れたフランススコの端麗な顔や、逞しい彼の肉体を思っ

た。男の肉体は生々しく、鮮やかに思出されてくる。女の感情は昂ぶり、身体中が火照って来るようだった。情事というものは、いくら重ねても際限のないものに思えた。世の中には悟りを開いたような人もいるけれども、ほんとうに悟りは開けるものなのだろうか。ミドリのように子供を生まなかった女は、東洋人としても男達から若く見られていて、今でさえも言いよって来る男が絶えなかったが、今更に心を燃やすようなことでもないと思うばかりだった。疲れていて、眠れぬままに寝返りを打つと鏡の向うに四十女の顔が映っていた。マイケルがうつすらと眼を開いて、ミドリを確かめるように見るとその肩を抱いた。そして安心したように又眠り始めている。

九

益枝は道子とジョージの結婚式が一週間後に迫って、その準備に忙しい思いをしていた。ジョージの父親からも親切な連絡が何時もあつて、流石に工場を経営している実業家らしい細かな気配りさえ感じられるのである。「日本の夜」のパーアイでは愛子が有田女史達と又踊ることになっていたので、今日は達三も入れて一家が珍しく揃って外出することになった。道子はこの頃、ひどく綺麗になっていた。髪型を変えたり、新しいドレスを着ると一層に美しくなつて、益枝をびっくりさせた。みんなが揃って家の外に出ると、空模様が怪しく思われて、益枝があわてて雨具などを取りに引返したりした。「日本の夜」の会場はきらびやかだった。赤い大きな提燈が二つ入口に飾つてあ

り、右手の広間はミドリの画塾の作品展示会にもなっていた。もう人出が増えていて、益枝達が会場に入って行くと、受付の傍には濃い紫地に小花を配した優雅なばかりの小紋に、青磁色の帯をきりりとしたミドリが晴れがましく立っていて、有田女史の顔も其処に見られた

マイケルがミドリの指図のままに展示会場の作品にカードらしいものをピンで止めて歩いたりしていた。ジョージが父やカルロス夫妻と並んでいて、道子を見つけると紅潮した顔で近づいて来た。ユリ子が母親と一緒に現われていたが、ユリ子は造船所の青年とは最近歩かないようだった。日本人の青年と手を組んで入ってくるブラジル人の娘もいて、日本着を上手に着こなしているのが人目を引いていた。軍楽隊の「君ヶ代」の曲が高らかに演奏され、会場の空気が一瞬、緊張したかと思われると、日本大使の一行が万雷の拍手に迎えられて入って来るのだった。その夜の有田女史の踊りは優美なものだった。一年前に〆氏の家で踊った人とは思えない程に、あでやかな舞台姿を見せて会場の人気をさらっていたし、愛子達の「さくら、さくら」はミドリの苦心した背景の中から、まるで花精のように浮び上って、慣れた手つきで舞台せましとばかり輪を描いて行くのである。すべてが快調に流れていた。サージャント・フランシスコの気嫌の良い顔がミドリの肩を叩いた。軍服姿の彼は一段と見映えがして、血色のいい顔色は如何にも精悍な感じだった。「一緒にバーに行きませんか。いいでしょうミドリさん」と言っている。先程まで傍にいたマイケルは息子のロバートが来て、送って行くのだと言っていたから、ミドリはフランシスコと人波を分けて三階に登って行った。その時、劈くばかりの

雷鳴が響いて、間を置いて激しい雨音が聞えてくるのであった。フランシスコの手に力が加わり「とうとう降って采ましたね。私が又送って行きましょうか」と言い「ミドリさん。今日はとても綺麗です」握っていたミドリの手を両手に包んでまじまじとミドリを見るのである。女の心はふるえて、甘くせつなく躊躇うように男の眼をそつと見たが、雨音が急に強くなり、屋上のガーデン・パーティーから逃げるように人々の降りて来るのが見え、スペイン舞踊団の踊子達が濡れた衣裳から水滴をしたたらせて、バーの前を通っていった。階下の大広間の「日本の夜」はバイレに移ったらしく、賑やかなサンバ曲が流れて来た。ルイザはジョージを探していた。ジョージの父親がバイレの始る前にどうしても家に帰ると言い出したので、カルロスがルイザを置いて、車を運転して行ったのだ。ジョージとは今日の午後、海岸で密かに会っていた。言い寄って行ったルイザを打ち捨てるように立上つて、訣別を言ったジョージに、ルイザは心から未練を抱いていたのだった。驕慢な女心は予想だになかった男の裏切りに、ひどく自尊心を傷つけられながらも、尚も男をもう一度捕えようと躍起になっていた。ジョージの姿は見当らなく、道子の家族の姿さえ消えていた。カルロスの戻って来るまでには一時間はかかるだろうと思った。何か苛立たしく、自分で言出して居残ったことさえ悔まれて来た。バーを探して階段を登り始めた時、濡れねずみの踊子達が大広間に降りて来る場所だった。更衣室はその近くらしかった。大きな硝子を通してバーが見え、着物姿の年配の女がルイザの眼に映った。女は愉しそうに軍服の男と立話をしているが、相手の男の横顔には微かな見覚えが

あった。コパカバナの海岸の白い砂の上で知り合っていた。名前をな
んと言ったろうかと咄嗟に考えながら二人の方に近づいて行った。ル
イザの背後から青白い稲妻が光った。

雷雨は、ほしいままに荒れ狂っていたが、やがて少しつつ遠のいて
行った。小降りになった窓の外をぼんやりと眺めながら、ミドリは先
程からマイケルを待っていた。先程の若い女の出現には聊か感情を損
ねたが、あの女とはしたなく争うような真似もしたくなかった。寧ろ
ミドリの方から、あつさりと身を軋すべきだった。男の請うような眼
を意識することはこの場のミドリの自尊心に或る種の満足さえ与え
た。流れには、いつも潮があるのだった。潮時を知ることが、いつの
場合にも大事なことだった。窓の向うから、やっとマイケルの姿が見
えて来た。ロバートを母親の処に置いて来た彼の表情には複雑な陰り
さえ見えるのだったが、ミドリを見つけて立止ったマイケルは明るく
笑っている。連立って会場を出て、車を拾った。濡れた舗道には街の
灯が光っている。車がマラカナンの近くにさしかかると、十字路のと
ころに大変な人だかりがしていた。ぐしゃぐしゃに潰れた小型車が、
人だかりの中にチラリ見え、救急車のサイレンの音が近づいている。

十

日曜の午后だった。季節は五目だった。海から吹いてくる風が、心
地よく肌身を感じられて、ジョージの父ジョゼはうつらうつらと安楽
椅子によりかかっていた。長いこと、そうじつとしてしていると、昔のこ

とや、ついこの間のことが切れぎれに思出されて来るのだった。女中がコーヒーを漉しているいい匂いがして、ふと眼を開いたが、其処の壁には最近買ったばかりの「バラの花」の絵がかけられている。若い頃は絵が好きで、絵筆を取ったこともあったが、事業を始めるようになってからはそんな暇すらなくなっている。プラスチック加工業が思いの外に成功して工場は次々に拡張されて資本も増え、会社としては大きなものになっていた。二人の息子の中、最近結婚したジョージが仕事を切り廻すようになっていて、ジョゼは少しつつ楽になって来ていた。嫁の道子もジョゼには好ましく、想ったよりジョージはいい妻を迎えたものだと思つた。同じ嫁でもカルロスの方は運がなかったと思つた。カルロスの妻のルイザは美しかったが、多情な女だった。「バラの花」の絵はジョージが結婚する少し前に「日本の夜」の展示会で買い求めたものである。その絵は格別に秀れた絵とは思われなかったが、なんとなく心あたたまる雰囲気があつて、赤い花は何か、あの夜の交通事故で死亡したルイザの面影をしのばせた。

カルロスがルイザを置いて出張旅行をすることが屢々あつた夜、ルイザは舅のジョゼとも情交を持ち始めていた。ジョゼがカルロスにアパートを買い与えたのも、ルイザがジョージとも関係を持つていることに気がついたからだつた。苦々しい思いの底には意外にも自分の見苦しい嫉妬の心まで自覚しなければならなかつたのだ。ルイザは色々な男を愛し、燃えるように生きて、赤い花びらのようにくずれて落た。あの雨の夜、ルイザと一緒に死んだ軍服の男はカルロスにもジョゼにも心当りのない男だつた。雨に濡れて、男の顔は鮮血にまみれて

醜く砕けていたが、ルイザはまるで眠っているように死んでいた。
花のように美しかった。

カルロスの子供を呼んでいる声が聞えて来た。

― 完 ―

田宮虎彦氏を囲んで

― 第三八回文学研究会 ―

コロニア文学会では、折から来伯中の田宮虎彦氏をかこみ、座談会形式による文学研究会を催した。

- ・日時、六九年四月十七日午後八時。
- ・場所、日本文化センター、小会議室。
- ・出席者、約四十名。

約二時間半にわたって、文学に関する質問と応答がおこなわれ、得るところが多かった。次に、田宮氏が、質問に答えて、述べられたことの中、おもなるものの要約を掲げておく。

・田宮虎彦著、『足摺岬』について人生に対する絶望感から逃れた
い、という願望を持つとき、東洋人の場合、“自殺”ということの外
に、仏教でいう“西方浄土”に行く、という考え方があつた。つまり、
何処か遠い処へ行って救われたいという願ひを持つ。

足摺岬は実に辺鄙なところで、人間社会から隔絶したところである。あの小説の主人公はこの“遠い所”へ行って、絶望から救われたいと願った。これが、テーマである。

・なぜ小説を書くか

小説を書くのは、人間が生きていくということ、人生の意義を追求するためである。作品の中で、自問自答を重ね、それを、多くの読者に問いかけ、答えて貰う。こうして人間存在の価値を明らかにしていく、という目的を持っている。

小説は、面白ければよい、というものではない。面白いことも必要だが、読者に時間を空費させるだけのものではならない。読むことによって、生きることの意味を考えさせられるところがなければならない。

・短歌、俳句は第二芸術か

短歌と俳句も、本質的な意味からいえば、第二芸術ではない。しかし、一首あるいは一句の中に、何の発掘もなく、生の追求がなければ、第二芸術といわれても仕方があるまい。作者が全身全霊を傾けて、ひとに訴えるものを蔵しているとき、それは、形式が短くとも立派な文学である。

・小説の題名が持つ役割

小説の題名は、短詩型文学の持つ目的に似たものを持っている。題名は、その小説のすべてを代表するものであるから、おろそかにはできない。小説家は題名の決定に苦心するものである。

・青春小説について

青春文学には、二つの種類がある。比較的若年の頃創作を志した作家には、青春時代を過ごしながら、その体験を土台として書いた小説がある。そうした小説には、若々しく澁刺としたところ、生々しいところに価値がある。いまひとつ、比較的晩年に、青春時代を回想し、その中から書くべきものを選び出して創作した青春小説がある。これは、作者の人生観なり、社会観なりによって、料理された小説で、その料理の仕方に魅力のあるものである。

○

田宮虎彦氏略歴

- ・明治四十四年八月十四日生
 - ・兵庫県
 - ・昭和十一年、東大国文科卒
 - ・新聞、雑誌の記者を経て教職につく
- 傍ら創作に志し、武田麟太郎、丹羽文雄に師事する。

・「日暦」「人民文庫」の同人となり、歴史小説、私小説を発表する。
・「絵本」により、毎日出版文化賞を受賞。
・「霧の中」「落城」「菊坂」
「異端の子」「足摺岬」「愛のかたみ」
などが、よく知られている。特に「愛のかたみ」は出版当時、ベスト・セラーにのぼり、多くの人に愛読された。
・日本文芸家協会、日本ペンクラブの会員として、創作活動が続けている。

― 編集部 ―

コロニア・文学行事

第六回『火焰樹』全伯大会

一九六九年一月十二日、火焰樹社、

サンパウロ新聞社共催のもとに、サ新社サロンで開催され、来賓として、サンパウロ総領事館縫村領事、ブラジル文協理事佐藤常蔵、コロニア文学会武本由夫、サンパウロ市議会小篠、野田両市議の各氏出席、全伯各地から八十名の俳人が参加、賑やかに句筵を敷いた。

・兼題「雑吟」 五六七句

・席題「短夜」「蚊遣り」 一七八句

・出席者、約八十名

「兼題」高点句

一位 18点 池田 悠居

・賛辞いっぱい母の日コンニャク膨れます

二位 18点 林 春美

・病院の 寒さは瓶の胎児より

三位 15点

・父と枯木・静かな嵐待つ如く

兼題高得点者

一位39点〓池田悠居、二位34点〓林春美、三位30点〓殿岡萩花、四位29点〓浜津一枝、五位23点〓大内田浮生。

○

「席題」高点句

一位 31点 殿岡 萩花

・どこかでサンバ、短夜嬰の乳作らねば

二位 21点 房前 風知

・短夜の 又も 顔出す 鳩時計

三位 20点 林 越南

・蚊遣香病まねは妻は憩われず

席題高得点者

一位48点Ⅱ殿岡萩花、二位31点Ⅱ林越南、三位31点Ⅱ鈴木光威、四位27点Ⅱ房前風知、五位27点Ⅱ池田童夢。

○

全伯の近代俳句系俳人の糾合を期待する「火焰樹」社は、一九六九年二月、鈴木光威編集第三八号を発行、さかんな句作活動を展開している。

(黄)

コロニア文芸誌・紹介

月刊俳誌「新泉」

地方で発行される文学関係誌を紹介したい。記事をお送りください。

(編)

サンパウロ市の一角ピニエイロスから、「新泉」という月刊俳誌が熱心に発行されている。謄写印刷、本文二十ページの小冊子であるが、市内の近代俳句系作者、マリリアのスバル句会、緑光会、ガルサの白鷺句会などとも連絡をとり、俳句研究に精進を重ねている。

創刊は一九六五年一月、平野秋穂、赤木春洋、野口九十九、松本安生、寺田昭瀨、佐藤魚拓の六名によって第一号が発行された。そして一九六九年五月現在第五三号を発行、その間にだんだん会員もふえ、金子薫風を代表に立てて、増々盛大している。現在会員は二十名。作風は、旧に執せず、新をてらわず、中道を守って、地道な研鑽を続けている

次に、第五三号から、会員作品高点句を掲げておく。

○ 九十九

・今朝の秋少年笑わぬ喪主となる

○ 鯉 城

・秋桜空は無疵のまま暮れる

○ 薫 風

・コスモスや板張校舎反りたがる

○ 洋 月

・コスモスの庭に食後の椅子移す

—◇—

『新泉』発行所宛名・松本安生

・Rua Martin Carrasco 96

Pinheiros S. Paulo

「コロニア文学」

作品募集

▽左によつて、本会員より、作品を募集します。

- 一、小説、の百枚内外、②二十枚内外、③翻訳物六十枚以内。
- 二、評論、(文学、美術、学術、社会、教育その他、三十枚内外。
- 三、随筆、紀行、記録、二十枚内外。
- 四、韻文、①詩、訳詩、一人二篇以内、
②短歌、十首以内、③俳句、十句以内、④川柳、十句以内。
- 五、短文、(生活文、地方通信) 五枚内外。
- 六、特別募集、①私の終戦、②コロノ時代の思い出、③わがムダンサ物語、④わが住む町(村)を語る。⑤この人を忘れないでください
(人物論)

以上いずれも二十枚内外。

応募規定

- 一、必ず原稿用紙を使ってください。

原稿末尾に本名、連絡先を明記してください。

- 二、第一〇号掲載作品、選考委員、矢島健介、弘中千賀子、尾関興之助

- 三、原稿〆切 第10号、一九六九年八月末

第二号、一九六九年一〇月末

- 四、送稿宛先、コロニア文学会

• Colonia Bungaku-Kai.

Rua Sao Joaquim, 381.

Sao Paulo .

「ロロニア文学会」

新入会員名等 (ABC順)

一九六八年十一月～一九六九年六月

A 網岡通史、阿形純一郎、上利新吉、

C 長たかお、地村春幸、

E 遠藤邦夫、

F 福岡吉治、 福原力、

G 具志堅古政、五艘晋、郷原重登、

I 五百沢武史

K 北原寒三、小池正、木村要一郎、

木戸実造、加藤邦松、石代俊作

M 牧山弘、真木研一、丸山順一、

森正敏、村上正治、松本竜一、

O 大野カズ、沖本磯満、小倉信吉、

S 鹿内忠五郎、斉藤秀男、須田潤子、

柴田豊治

T 武井貢、富田蜂春、武智美見、

田辺弘義、

N 内川定雄、

Y 米倉照夫、四本久子、山下朴生、

第十号記念号発行について

コロニア六十年の歴史を刻んで、はじめて現われた「コロニア文学会」も、創立四年目をむかえた。機関誌「コロニア文学」も、第十号に達する。これまでの歩みをふりかえってみるに、コロニア文化基盤の薄さ、弱さを反映して、まことに遅々たる足運びであった。しかし、芽生えたものは伸びていかなばならない。さまざまな困難を排除して、根気よく押し進めていきたいものである。思えば、第十号にたどりつくことができたのも、会員諸氏の温い支援のたまものであり、中央委員は更に熱意を燃やして、その厚情に応えたいものと思う。

次号の第十号は、記念号として、増刷増頁をおこない、作品特集と共に、これまでの歩みを検討してみたいと思う。

そして、第十一号より新たな気持で、はつらつと踏み出す積りである。

六月の「文学研究会」で、多数会員出席のうえ、特集号編集内容を、次のようにきめ、さっそく準備にとりかかっている。

・小説陣は、これまでのパ紙文学賞、農協文学賞の入賞者に顔を揃えて執筆して頂く。

・多数会員に次のようなアンケートを求める。

①愛読書名（日本、外国）

②、コロニア文学への意見、

・コロニア文学の在り方についての座談会、

㊥グループ＝批評者側 ㊦グループ＝執筆者側、

・第九号までの内容批判

①小説＝宮尾進、②詩＝米沢幹夫、③短歌＝井本惇、④俳句＝未定、⑤川柳＝安藤魔門、⑥随筆＝八巻培夫、

・その他は、第九号までの一般、また特別募集原稿、

後記

☆四月発行予定の本号が、このように遅刊して申し訳ない。発行準備中、わたしが、二月末全治二カ月を要する負傷をして臥床したことも原因の一つである。五月中頃から、大急ぎで取りかかったが、印刷の都合もあって、この始末である。

☆次号からは、何とか遅刊を取り戻したいと努力している。会員諸氏のかわらぬ御支援を乞う。

☆今度、内山卓人氏が仕事の余暇に、毎日午後から、本会の仕事を手伝いくださっている。午前武本、午後内山が勤務するので、事務所は終日開いており、今後は来訪の会員に迷惑をかけることも少なくなると思う。

（武本）

コロニア文学第九号

発行一九六九年七月

(会員へ無料配布)

編集人コロニア文学会編集委員会

代表 鈴木 悌一

発行所 サンパウロ市 サン・ジョアキン街三八一番

日本文化センター内コロニア文学会

Gremio Literario “Colonia”

Rua Sao Joaquim, 381. Sao Paulo

Tel. 278-5519

印刷所 パウリスタ印刷株式会社

オスカル・シントラ・ゴルジーニョ街四六番